英雄と呼ばれる者

セ・ヴァスチャン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
英雄と呼ばれる者

【Ｎコード】
Ｎ１８３４Ｘ

【作者名】
セ・ヴァスチャン

【あらすじ】
カース世界を救った６人の英雄のが存在する世界の話。

主人公は１人のドワーフ族の者に拾われ森で生活していた。ある時そこへ拾い親の知人と言う人がたずねに来る。その知人は主人公を見て・・。

過激な性描写や、残酷な描写が出ますのでご注意ください。

出来るだけストーリー、登場キャラの関わりを重視していく予定です。

初の投稿でしてお見苦しい所ばかりだとは思いますが、よろしくお願いします。

『二章　強欲編』スタートしました。

歴史（前書き）

初の投稿になります。
文章で読みにくい所ばかりだとは思いますが、
よろしくお願いします。

歴史

そこはカースと呼ばれる世界。

ある時《邪なる者》がカース世界南の辺境に現れたことにより魔物が生まれ、人々各種族の生活が脅かされ数多くの人が亡くなった。

もちろん各国では兵を集めて南からやって来る魔物達の討伐を行ったが、南の辺境にいる《邪なる者》が存在している限り魔物がいなくなることもなく、自国に来た数多くの魔物に押されるばかりで南の辺境に進軍できずにいた。

《邪なる者》が《邪神》と呼ばれるようになったころ世界の神である《カース神》より６人、各国で力ある者に神託が降りた。

その６人は《カース神》より刻印を身に受け常人ならざる力で自国に来た魔物を殲滅し、各国と同盟を結び南の辺境にいる《邪神》に反撃の狼煙を上げ、ついには《邪神》までたどり着いた。

《カース神》より刻印を身に受けた６人は力を合わせ《邪神》に瀕死のキズを与えたが、今一歩の所で《邪神》は次元に歪みを作りこの世界から逃げていった。

このカース世界から倒せはしなかったが、《邪神》を追い払ったことで世界の人々は大いに喜び、刻印を受けた６人はその偉大なる大挙を成し遂げたことからこう呼ばれることとなった。

・・・【英雄】・・・

。。。と

それぞれの英雄には称号が有り、【英雄】の人物が亡くなれば新たにその力を継承する者が現れ、未来に起こり得る《災厄》に世界は備えていた。

そして【英雄】の持つ称号は・・・

剣神とまで言われ、剣を一振りすれば山をも切るとされる【英雄】

《セイバー》

その堅牢は城壁とまで言われ、反撃の一撃は暴風を巻き起こすとされる【英雄】

《ランサー》

滅弓と言われ、尽きることのない矢で数多な敵を殲滅するとされる【英雄】

《アーチャー》

狂王と言われ、理性を無くし殺戮の限りを尽くすとされる【英雄】

《バーサーカー》

古代の魔法使いと言われ、星をも降らすとされる【英雄】

《ウィザード》

聖女と言われ、神の加護を持ち聖なる力を与えるとされる【英雄】

《セーラ》

いつしか【英雄】とはカース世界のシステムとして組み込まれるようになっていった。

そして世界はまだ魔物の姿が見えるものの、一次平穏な日常を手にいれた。

しかしそれは《邪神》というカース世界共通の敵がいなくなっただけで、人々の欲に駆られた争いは亡くならなかった・・・。

歴史（後書き）

読んでいただいてありがとうございます。
暇つぶしが理由なので不定期掲載になります。
あまり期待なさらずお待ち下さいｍ（＿＿）ｍ

始まり（前書き）

開いて頂いてありがとうございます。

始まり

《邪神》討伐から２００年後・・・

人口約３千人のナイル街の冒険者ギルドのカウンター前に１人の冒険者がいた。

「はいっと、今回の討伐依頼の証拠アイテムね。」

そう言いながら冒険者はギルドのカウンターにいたギルド員のドナに討伐した魔物の部位の入ったレザーバッグとギルドカードを差し出した。

ドナは２０代半の男性で身長１７０ｃｍくらい、体格はこんな所で働いている訳だから筋肉がないわけではないはずだがスッキリした体型だ。

そして短く切りそろえた茶色の髪を全体的に後ろに流している。一番のインパクトはこの笑顔！と言っても営業なら笑顔は大事か。

「お疲れ様です。先にギルドカードを確認致します。Ｃランク
カリス・ステイン様ですね。
２日前に受けた依頼なのに、もう討伐したなんてさすがですね！それでは今回の討伐依頼部位アイテムを確認しますので、少々お待ちください。」

そう言ってドナはカウンターの奥にある幅広い机に皮袋を持って移動して、奥に居た肩部で切りそろえられた金髪のスレンダーな女性役員を呼んで、２人でアイテムを取り出し確認し始めた。

今回の討伐依頼はナイル街から東にあるナイリス山まで行く道中にグリズリーの家族が出没しだし、ナイリス山にあるナイリス村から日用品を仕入れにこれなくて困っているのでグリズリーの討伐をして欲しいとのことだった。

グリズリーは熊の様な魔物で、大体全長２m、大きいモノになると３mもあり、前足の爪が３０ｃmほどあるのが特徴だ。１匹くらいなら村人達でもタイマツの火や、斧を用いなんとか追い払うことはできるが、今回は何処から流れてきたのか５匹もの数のグリズリーが集団で行動していたのでギルドに討伐依頼がきたようだ。

・・・と、カリスが依頼内容を思い返している間にアイテムの確認を終えたドナが、カウンターまで戻ってきた。

「はい、お待たせしました。部位アイテム確認が終わりました。グリズリーの前足１匹につき２本が６セットですね。１匹分多い様ですが？」

「ああ、５匹討伐後の帰り道で１匹いたんでついでに倒しておいたんだ。」

「そうでしたか。それでは追加の１匹分に関しては少ないですが、ギルド側から追加報酬を出せていただきます。この追加報酬には爪の買い取り金も含まれます。それと他に取ってこられたグリズリーの生肉と毛皮ですが、こちらで買い取らせていただいてもよろしい

でしょうか？」

「それで頼むよ。」

「ありがとうございます。先にギルドカードの更新が終わりましたので、お返しします。それとCランククエストを3回熟されましたので、残り17回Cランククエストを熟されますとBランク試験を受けることが可能になります。カリス様なら直ぐかと思いますが、がんばってください。では討伐報酬の30万コインの銀貨30枚と追加報酬として5万コインの銀貨5枚になります。そして生肉この量でしたら2万コインの銀貨2枚と、毛皮グリズリー6匹分を7万コインの銀貨7枚が引き取りさせて頂くことで良いでしょいか？」

（やはり生肉を持ってきたのは正解だったなぁ。自分で焼いて食べるより金にしてどっかで料理食べた方がうまいだろうし・・・。）

カリスはそう思い、金額に満足したので、

「それでよろしく。」

「では合計で44万コインになります。ご確認下さい。それとレザーバッグもお返しします。」

カリスはドナより報酬であるコインを受け取り、枚数を数えていった。

「ん～～っと・・・。うん間違いないね。ありがと！」

数えたコインを懐から取り出したレザーSバッグ（レザーショートバッグ）にいれる。

ちなみにドナから返ってきたレザーバッグだが、これはギルドが販売している魔道具のバッグで、バッグの取り出し口より小さいものなら重量で２００ｋｇまで入る品物だ。しかもどれだけ入れても重さは２ｋｇくらいまでしかならない優れもの。

又、レザーＳバッグも同じ様に魔道具のバッグで、こちらは重量で２０ｋｇまで物を入れることができる。主にこちらは小物入れだな。中でポケットのようにいくつかに分かれているので財布も兼ねてる。こちらも重さはどれだけ入れても２００ｇくらいまでしかならない。

「こちらこそありがとうございました。いやはやＣランクになったばかりなのに６匹ものグリズリーを倒してくるなんて早くもベテランですね！普通ならＢランクになれるくらいの実力が無ければ１人では難しいですから。」

「ははっ、ありがと。まぁ遠くから狙撃で先制できたから１人でもなんとかなったんだ。それにしても、お金が無くなりそうだったからこのタイミングで数十万コイン稼げる依頼が有ってよかった。これでしばらくは金を気にしなくてすむよ。」

この依頼前はこの街でやっかいになっている宿で後１泊するくらいの金額しかなかったので、まさに助かったわけだ。まぁ依頼を選り好みしていたというのもあるけれど・・・。

ドナの目線は身長大体１７５ｃｍあるカリスの短めで銀色の髪である頭から、多少釣り上がりぎみな目を通りマッチョではないが引き締まった体、腰まで行った所で（カウンターで足が隠れているので）俺の目に戻り首を少しかしげながら、

「狙撃・・ですか。」

どう見てもカリスの装備は、紺の旅人の服に各部皮のプロテクターと腰の後ろにショートソードを1本、柄を右に横にして着けているだけだからそういう反応も当然だ。

「色々とやりようはあるから。」

そうあやふやにごまかすカリス。

「そうでしたか。それは投擲技術もすばらしいですね。」

納得したかは不明だがドナは笑顔でそう言った。

（まぁ大丈夫だろう・・・。変に本当のこと言ったらえらいことになりそうだし、勝手に納得してくれたかな。）

そうカリスは解釈し、依頼の清算も終わったので今日は宿屋に戻ることにした。

「それじゃあドナさん、今日は戻って休むね。」

「はい、お疲れ様でした。またよろしくお願いします。」

そう言ってドナはギルドから出て行く俺に頭を下げた。

「ふ～。これでしばらく宿と食事代には困らないな。」

そう言いつつ穏やかな気分で腕を太陽が傾き出している空に伸ばしながら、街中の出店などで賑わう道を人の流れにそってカリスは歩

いて行った。

始まり（後書き）

第１話は主人公の簡単な紹介という形にしました。

普通の紹介ではつまらないかと思い、変わった形にしてみましたが、ムリクリすぎて分かりにくくなったような・・・。

自分で文章を書いてみると、表現力というのがどれほど難しいかと思い知らされます。

他の方の小説を読んで、頭を柔らかくしたいと思います。

第１話を読んで下さりありがとうございました。

ｍ（＿＿）ｍ

今後もよろしくお願いします。

１１／１

文章所々修正しています。内容自体は変わっていません。

第1話（前書き）

開いて頂きありがとうございます。

第1話

《カース神》がかつて《邪神》からカース世界の崩壊を防ぐために創られ、今では世界のシステムになった【英雄】。

そして継承・・・。

人々は継承すれば自分も【英雄】になれるではないかと考えた。

確かにその通りである。

しかし、継承する条件がハッキリしておらず、曖昧だった為いろんな噂がながれた。

例えば、

「現在の【英雄】をたおせば継承される。」

「【英雄】に認められれば継承される。」

「現在の【英雄】が亡くなった時に世界の誰かが自動的に継承される。」

「聖女と呼ばれる《セーラ》を通して《カース神》にお祈りする。」

などなど、多々あった。

しまいにはその噂を鵜呑みにして現在の英雄に闘いを挑む者や、弟子入りを申込む者が続出した。

しかし英雄のほとんどが何処かしらの国や組織に属している為門前払いされ、今では一部を除いておとなしくなった。

継承が隠されているわけでは無くその証拠に、アルストロメリア王国に所属している【英雄】剣神と呼ばれた《セイバー》はすでに、継承を3回行っており、国民の前で《継承の儀》というものを披露している。

その様な騒動があり幾許かの時が流れ・・・

「すー・・・はー・・・」

青々と生い茂る森中、木々の間１mほどな高さの乱雑に生えた草の陰に気配を殺したカリスは手元の弓に矢を掛けながら、息を潜めて身を隠し前方に目を向けていた。

この時のカリスの容姿は長く伸びた銀髪を後ろで革紐を使い結わいており、ポニーテールにしている。

顔は整っておりまだ幼さが有るモノの、釣り上がり気味な目が《男の子》では無く、《男》と思わせる雰囲気を出している。

空の綺麗な紅色の夕焼けも段々黒色に染まってきている頃。

カリスの１２ｍほど離れた前方に茶色の毛皮でよく肥えた２匹のウサギがいたので、今晩の夕食になってもらおうと狙っているのだ。

２匹の肥えたウサギは頭を左右に振りながら耳をピクピクさせて周りを警戒している。

小動物は特に警戒心は強く気配に敏感だが、それでもカリスは２匹の肥えたウサギに気配を悟られずに隠れていた。

カリスは森の中で暮らしていた狩人に拾われてから今年で１４年になる。

拾われた当時は赤ん坊だったらしく記憶にない。

拾ってくれた人はなんだか背が低くいのにガッシリとした体格でヒゲもじゃの爺ちゃんだった。

？　？　？　？　？　？　？　？　？　？

カリスを拾って育てた者の名はダンソン。

ダンソンはカリスが物心つき始めたころになってから、狩に連れて行く様になった。

もちろんまだカリスは何かができる訳では無かったが、ダンソンは森の雰囲気や動物の気配などを体感させる為だ。

カリスは周りの木の実や小動物に興味がでたらしく、森の中を駆けずり廻って遊んでいた。

小動物を捕まえようとした時に気づかれ逃げられていたが、来る日もなんとか気づかれずに捕まえようとコソコソと追いかけていた。

その日はリスを捕まえようと、小さな池の有る近くで、リスが登って木の実を食べている隣の木の影に身を隠していた。

リスは木の実を食べ終わると両の前足で顔を忙しなく掻いた後水を求めてか、木の影に隠れているカリスに気づかぬまま木から降りて池に向かって行った。

カリスはリスが池に向かおうとしているのを視ながら直ぐにでも捕まえに出れる様体勢を整え、池の前に着いたリスが周りをキョロキョロと見た後水を飲み始めた瞬間、

シュッ！！

と、数歩かけると音で気づかれるので一度のジャンプでリスに飛び掛かった。俗に言うスライディングで。

そして見事にスライディングした後！！

「ちょっ！どわっ！」

ドボン！！

見事に頭から池に突っ込んだ・・・

池の周りは湿っていて滑りやすくなっていたのである。

しかし直ぐにカリスは池から顔を出し、両手で掴んでいるモノを上に上げて、

「とったどおぉぉぉ！！」

つい、自慢げに叫んだ！

カリスはずぶ濡れのままダンソンの所に走って行き、

「爺ちゃん！リス！リス捕まえたよ！」

しゃがんでキノコを採取していたダンソンは、カリスが声を出して走って近づいて来た方に立ちながら顔を向けた瞬間目を見開き、

ドンッ！！

「はぅっっ・・。」

ドサッ

カリスの容姿を見た瞬間ダンソンはカリスの腹に向けて、流れる様な正拳突きをきめていた。

「あっ！すまんカリス！そんな姿だったからビックリして魔物かと思ったんじゃ！」

カリスの容姿は池に落ちたことで泥だらけであり、身体中水草が絡まっている状態だった。

そして正拳突きをくらった際、リスにも逃げられてしまい災難である。

「う・うう・・爺ちゃんひどい・・。」

カリスは半べそで腹を両手でさすりつつ、なんとか復活した。

「すまん、すまん。・・・しかしカリスよ、復活するの早いな。根性あるのぅ。」

「・・・。」

取り合えず森の中にある小屋に戻って井戸の水で身体中の泥などの汚れを落とし、着替えた時には空が薄暗くなっていた。

ダンソンは先に小屋に入り、魔力の込められたランプで明かりを付けて今日とった食材を整理した。

ランプには魔力が込められており、スイッチを押すと明かりが付くようになっていて一般の家庭でも使われている代物である。

中に込められた魔力が無くなれば明かりは付かなくなるが、魔力をある程度使える人なら込めることができるのだ。

ちなみにダンソンも魔力をある程度使えるので問題ない。

カリスはダンソンと夕食の用意をしながら昼間のことを話していた。

「なんと！素手でリスを捕まえられたのか！」

ダンソンはキノコがたくさん入った鍋の中をかき回すてを止めて、目を見開き驚きの顔をカリスに向けた。

それから左手を下顎に当てながら少し思案した後、

「うーん・・。よし！カリスよ、明日から剣と弓の使い方をおしえよう！そこまで気配を隠せるなら直ぐ狩りも出来るようになるじゃろ。」

そう言い次の日から武器の使い方を学び、狩りの仕方を教わっていった。

そのおかげで、１２才のころにはウルフ５匹くらいの群れなら狩れる様になっていた。

？　？　？　？　？　？　？　？　？　？　？

しかし育ての親、ダンソンはもういない。

寿命だ、とダンソン本人の談。

亡くなる間際にダンソンはカリスに自分が死んでもこのままここで暮らしてもいいし、森の外に出て生活するのもいいかもしれない。生きる為に必要なことは教えたのだから。と、言っていた。

実際ダンソンが亡くなって半年過ぎるがカリスは森の中で生活していた。

カリスは仕留めた2羽のウサギを左手にぶら下げ右手にナイフを持ち、背中にウサギを仕留めるのに使用した弓を背負いながら暗くなった森の中を小屋に向かって歩いていた。

「ん？・・何か嫌な気配が。」

今まで感じた事のない気配に気づき、カリスは足を止めて周囲の様子を伺った。

すると遠くの方から大きな何かがこちらに向かって走ってくる音がした。

第1話（後書き）

読んで頂いてありがとうございます。m（＿＿）m

次回もよろしくお願いします。

第2話（前書き）

開いて頂きありがとうございます。

今回の話は濡れ場があるのでご注意ください。

第2話

カリスはすかさず近くの木の影に身を隠したが、相手はすでにこちらを捕捉していたのか隠れた木に走って来て、勢いのままタックルしてきた。

ドォーンッ！！バキバキッ！！

「なっ！ぐっ！？」

そのタックルで木は折れ、カリスも衝撃で背中を強打して吹っ飛び５ｍほど転がった。

「うっ・・。ごほっごほっ。なんだってんだ・・？」

そう言って背中の痛みを堪えながら上半身を起こしてタックルしてきたモノに目を向けた。

「グオオォォォ！！」

それは全長３ｍも有ろうかと思われるレッドグリズリーだった。

レッドグリズリーは普通のグリズリーより少し大きめで赤茶色の毛並みをしており、力は同じくらいだが瞬発力が高い魔物である。

（なんでこんな所に！？）

レッドグリズリーは吼て前足の爪を振り回しながらカリスに襲いか

かった。

「うわっ！やっぱ来るのかよ！」

カリスは慌てて横に飛んで回避し、起き上がりながら全力で反対方向へ走るが、打ち付けた体の痛みで早く走れず。

「グオアッ！！」

ブォンッ　　ドンッ！

バキィ！

後ろから獰猛に迫られ振りかぶったレッドグリズリーの左前足に、カリスは左腕側からモロに喰らい右方向にまたもや吹っ飛ばされた。

「がはっ！くぅ・・。腕がっ。」

カリスはあちこちから血をながし、倒れ府したままあらぬ方へ曲がった腕を抱えて朦朧と意識がなりながら身体を痙攣させていた。

そこへ、トドメとばかりにレッドグリズリーは右前足をあげ・・・。

（ちくっしょう・・ここで・・・俺は死ぬのかよ・・・。爺ちゃんに今まで育ててもらったことの恩の整理もまだ答えは出ていないのに・・・！）

意識が遠のきそうになりながらもカリスは、レッドグリズリーを血で紅く染まった視界でにらむ。

カリスに向かって爪で刺す様に振り下ろした。

次の瞬間

ヒュッ！！

バチンッッ！！

カリスの耳に空気を切る音がしたと思ったら辺り一面光に包まれた。

それは一瞬の事だったのか、光か消えて周りが見える様になると、目の前にクレーターができており、さっきまで居たはずのレッドグリズリーが消えていた。

「ぇ・・・？なに・・が・・。」

「ちゃんと生きてるわね。間に合った様でよかったわ。」

倒れたまま呆然としていたカリスは周りに気配を感じないのに、発っせられた女性の声を聞きながら意識を失った・・・。

？　？　？　？　？　？　？　？　？

エリア・ステインはもう既に太陽の沈んだ空の下森の中を小走りに移動していた。

「予定より遅れてしまったわね。明るい内に着きたかったのだけれど・・・。」

エリアは短めな髪の為外見からは目立つ左右に伸びた耳を弄りながらそう洩らした。

ダンソンは息災かしら。とか思いつつ足を進めていると、進行方向より斜め左側から魔物の気配を感じ取った。

「距離はまだ遠いけれど、ん・・・。誰かに向かってる？」

最初は魔物がダンソンに向かっているのを感知したかと思ったが、ダンソンとは別人である事に気がつき、

「ダンソン以外の人がこの森に？珍しわね。」

普通ならあまり気にし無いのだがダンソンが住む森という事もあり、エリアは気配を世界に溶け込ませながら魔物と人がいるであろう方向へ走った。

この時のことをエリアは、虫の知らせを聴いたのでは無いかと思っ

ている。後の事を考えると必然ですらあった。

その場所にたどり着き魔物と人を確認した瞬間目を見開き、

（まさか！あの子は！）

エリアは悟った。

自分がこの森に来た訳を。

（あの子が私の・・・。）

私がダンソンに会いに来たのって・・・。と、思案していたが、人間の子がレッドグリズリーに吹き飛ばされて次の瞬間にも右前足で殺されそうになっているのに　ハッとなり、

瞬時に左手を地面と水平に前へ出し

右手を左手先を軸に後ろに引き絞り

動作と同時に１ｍ５０ｃｍほどの弓を出現させ

右手の弦を離す瞬間矢状の光輝く稲妻を生み出し射た

ヒュッ！

バチンッッ！！

その間わずか０．２秒という神がかった動きだった。

稲妻が当たった瞬間レッドグリズリーは地面にクレーターを残して消滅した。

（ふぅ、間一髪ね・・）

「ぇ・・・?なに・・が・・。」

人間の子は意識はあるが、直ぐにでも気を失いそうである。

「ちゃんと生きてるわね。間に合った様でよかったわ。」

そう言った途端人間の子は気を失った。

エリアは弓を消してそばに移動し、膝を着きながら人間の子の容態を確認しはじめた。

「これはちょっとまずいわね・・・。左手腕が折れているだけじゃなく肋骨や内臓までダメージが・・。」

まだ息はあるが、瀕死の傷を受けてしまっている。

「けれどこの子は絶対死なせる訳にはいかない。確か最後の1個のアレが有ったはず・・。」

そう言いながらレザーSバッグの中を引っ掻き回し、目当ての小瓶を取り出した。中にはどろっとした薄緑色に発光している液体が入っている。

この小瓶に入っている液体、エリクサーと呼ばれる秘薬である。エリクサーは生きてさえいればどんな傷でも病でも治すことができると伝えられている。しかし効果はすごいが実物が出回ることは滅多になく、もし売りに出されてもそこら辺の国家予算並の額が付くと言われている。

「気を失なっていてこのまま飲ませるのは無理か。」

さすがにこれを使うのに溢して無駄にしました、では目も当てられない。

エリアは少し思案した後人間の子の上半身をそっと抱き起こし、エリクサーの小瓶を自分の口に付けて液体を口に含み、口移しを実行した。

「ん・・んん・・。」

相手方は気を失っている為舌で口を開いてやり、自分の口から舌を伝い相手の口へ流し込んだ。

その後はエリクサーを飲み込むまで口どおしを付けたままジッとし、全て飲み込んだのを舌で確認してから銀色の糸を引きつつ口を離した。

口を離してから直ぐに人間の身体は修復をはじめ、みるみる内に回復していった。

「う・・うん・・・。」

そして人間の子はゆっくりと目を・・・。

？　？　？　？　？　？　？　？　？　？

カリスは身体中に優しく暖かなモノが流れて行くのを感じ、その流れにみを任せていた。

「う・・うん・・・。」

暖かなモノの流れが終り、身体が楽になったことで感覚が戻ったのか自分が誰かに抱き起こされていることに気がついた。

そしてカリスは目を開けたら・・・。

目の前に絶世の美女がいた。

美女は開口1番、こう言った。

「ご馳走様　♪」

「・・・ぇ？」

第2話（後書き）

読んで下さってありがとうございます。

なんだかんだで一区切りするとこまでストーリーは思い浮かんだのでソコソコなペースで更新できそうです。

ただ表現力が追いつくかどうかは別ですが・・・。

次回もよろしくお願いしますm（＿＿）m

第3話（前書き）

開いていただきありがとうございます。

誤字等あるかもしれませんがよろしくお願い致します。

第3話

目の前の美女が何か言った気がしたが、カリスは美女に魅入っていて何と言ったのか聞き逃した。

「もう大丈夫だと思うのだけど、痛い所は無い？」

「えっと、・・・うん大丈夫、むしろ以前より身体の調子は良くなってる・・？」

さっきまで瀕死の怪我をしていたのに全快している自分の身体を確認しながらカリスは驚いていた。

この女性が助けてくれた様だけど、どうやったらここまで全快するのだろうかと思いつつ、女性の方に目を向けた。

見た感じ２０才半ばくらいに見えるこの女性はベリーショートな長さの髪で色は薄い黄金色だ。キリッとした金色の目が星の光を反射して輝いて見える。そして左右の耳が横に伸びていた。

「それじゃ立てるわね。それと私の名はエリアよ。エリア・ステイン。」

カリスはエリアに促されるまま立ち上がることで、エリアの全体をみた。

身長は今のカリスと同じくらいなので１６０ｃｍほど。胸の高さはそこそこあり、腰や腕、足に余分な肉が付いていないので、胸はその分大きく感じる。

格好は旅のしやすそうな無駄の無い布製の服に、皮の鎧を気持ち程度に身につけており、動くことを前提としている装備だ。

「俺の名前はカリス。助けてくれてありがとう。本当に助かった。」

カリスは頭を下げながらお礼を言った。

「いいわよ。こっちにも事情があったし。この森にいるってことはダンソンの知り合いでしょ？」

「っっ！！」

「そんなに驚かなくてもいいわよ。私はダンソンの古い知り合いで、近くまで来たから会いに来たの。」

「そう・・爺ちゃんに・・・。」

「爺ちゃん？ふふっそうね、彼は見た目からしておじいちゃんよね！」

カリスのダンソンに対しての呼名がツボにハマったのか手を口元に持ち上げて笑い出した。しかし直ぐにカリスのしんみりとした様子に気付き

「どうしたの？そういえば森の中にダンソンの気配がないけれど、どこかでかけてる？」

「・・・いや、とりあえず小屋に行こう。爺ちゃんの知り合いなら

その方がいい。」

少し思案した後、考えるのを振り払う様にカリスは左右に頭を振るりながら答えた。

「そう？まぁいいわ。それなら行きましょう。」

「ちょっと待って。さっき獲ったウサギ拾って来るから。」

そう言いカリスは最初に襲われた場所に行ってウサギ2羽を回収し、ナイフと弓も持ってないことに気付き周りを探したら最初に飛ばされた方向のもう少し先に落ちていた。

「弓は折れちゃったか・・仕方ない。ナイフはまだ使えるな。」

カリスがションボリしながらため息をつき壊れた弓とナイフを回収している姿を後ろで、エリアは何かをガマンするかの如くプルプル震えながら見つめていた！

（なにこの子！可愛すぎる！ギュッと抱きしめたい！普通ならこんな事絶対思わないのになんで・・？もしかしてカリスが私の・・・だから？）

エリアがそんなことを自分を見て思っていたとは知らず、

「お待たせ。じゃ行こう。」

そう言って2人は夜の森の中を歩き出した。

エリアはずっと何かを考えてる様子で、カリスの横を付いて歩いて

おり、話しかけずらかったのかカリスはそんなエリアの様子に首を傾げつつダンソンのことをどう説明するか考えていた。

「着いた。エリアこっちにきて。」

そう言ってカリスは2羽のウサギと壊れた弓を玄関先に置いてから、小屋の横へ移動した。

そこには高さ膝くらいの土山があり、その前には小さな花が植えられていた。

それを見てエリアはダンソンが何処に行ったのかを悟った。

「爺ちゃんは半年くらい前に亡くなった。自分では寿命だって・・。」

カリスはしゃがんで墓の前に咲いている花を撫でながら説明した。

「そう・・・。」

(ならやはりダンソンが私をここへ呼んだのね。それなら私も与えられた最後の使命を果たしましょう。)

エリアはしゃがんでいるカリスの後ろから頭を優しく抱きしめて、

「ありがとう・・カリス。彼の最期を看取ってくれて。彼も心穏やかに眠れたと思う・・。」

そう言ってカリスの頭をを撫でた後エリアは立ち上がり、

「さて！ご飯にしましょう。私もお腹空いたし、いつまでもこうしてられないからね。」

カリスも立ち上がり、自分の身体がかなり汚れているのに今更ながら気がつき、井戸に行って服を脱ぎ身体中の汚れを落とした。

ちなみにカリスは女性という存在を話には聞いていたが、会うのは初めてでありカリスは気にしてなかったが、エリアが此方を興味津々に見ていたは余談である。

身体を洗って服も着替えてサッパリした後、ウサギと小屋に取り置きしていたもので料理をし、２人で食べ終わるころ、これまでのことをカリスに質問しながらエリアは考えていた。

これからのことを。

そしてカリスが食べ終り水をのみ始めた時、エリアは考えていた事がまとまって答えが出たのか

１人で納得して頷き

徐に立ち上がって

満面な笑みで言い放った！

「決めたわ！カリス、これからは私のことは姉と呼びなさい！」

「ぶはっ？」

見事にカリスは水を吹き出した。

エリアの満面な笑みに見惚れていたのだが、直ぐにそんなことを吹き飛ばす爆弾が投下された！

「ちょっ！、げほっげほっ！」

「なによ。気にいらなかった？なんならお姉様でも良いわよ。むしろそっちのｈ「ちょっと待って！なんでいきなりそうなるのさ！」」

「だってダンソンをあんな親しく呼んでるんだもの。それなら私を姉と呼ぶのは当たり前のことよ！」

「言い切った！」

「そういう訳だから、今日からよろしくね　♪」

「何を！」

「今日からここに住むって事！ちなみに私の弟に拒否権はありません。」

最後はキリッと言い放った。

「いや、まぁ・・、住むのは良いんだけど・・あれ?良い・・のか?それでエｒ「お姉ちゃん」・・・。」

エリアは笑顔で煥発入れずに突っ込んだ。

カリスは脂汗を出しながら、

「エ「お姉ちゃん」・・・姉さん・・此処に住むのは良いんだけど、なにするの?こんな事いうのもなんだけれど何も無い所だよ?」

その問いにエリアは笑顔から真面目な顔でカリスの目をジッと見て

「あるわよ。貴方がいるわ。」

そう言われた瞬間カリスはハッっとした。

「此処で一緒に暮らしてあなたを鍛えてあげる。
立派な大人になれるようにね。レッドグリズリーなんかにやられる様ではこの先、生きて行くのは不可能よ。」

（そう、育てるのよ！私好みの大人になれるように！）

レッドグリズリーなど倒せなくても街や村でなら生きていけるのだがエリアの内心など露知らず、カリスは一瞬身体中を電気が流れたかの様に震えた。（感極まって）

「姉さん・・。よろしくお願いします。」

カリスも立ち上がってエリアに向かい頭を下げながら下げた。

「うふふ　敬語は無しでいきましょう。堅苦しいのは苦手なのよ。

「あ、うん、わかった。」

そう言ってエリアが前に出した手をカリスも手を前にだして握った。

「さてと！ソロソロ寝ましょう。あ、その前に身体を拭きたいからタオルかしてもらえる？」

寝室に移動しながらエリアはカリスに振り返って言った。

「わかった。タオルと井戸から水を汲んでくるよ。」

そう言ってカリスは桶を持って外にでていった。

水を入れた桶とタオルを寝室に運ぶと、

「ありがとう。それと背中自分じゃうまく拭けないから拭いてくれる？」

カリスの見ている前でエリアは服を脱ぎ、背中を向けた。

「あ、ああ、うんわかった。」

カリスはエリアの裸体に見惚れながら返事をしてタオルに水を染み込ませてからしぼり、エリスの背中を壊れモノを扱うように拭いていった。

「ん。ありがと。そうね、前も拭いてもらおうかしら。」

悪戯を思いついたような微笑みを浮かべて言った。

「前は自分自身で拭けるんじゃ・・。」

「まぁ良いじゃない。減るモノでもなしに。それともなに?みるに耐えない?」

「いや、すごく綺麗だけど・・。」

「ふふっ。じゃあお願いね!」

何故かすごく良い笑顔でお願いされた。

カリスは女の人ってこういうモノなのかと見当違いな事を考えながらエリスの身体の前も拭き始めた。

「柔らかい・・。」

「ん・・・そうよ。だからやさしくね?」

「この左胸の・・絵?」

「これは刻印。私の存在意義が詰められたモノよ。」

「ふぅん・・。カッコイイね。」

「そう?ふふっ♪」

そうしてカリスは刻印のことはそんなに気にせずエリアの身体を首から胸、腕、腹、足と拭いてく。

「ありがとう。サッパリしたわ。」

（気持ちよかったし♪）

などと思いつつエリアは服を着た。

「それじゃあ、そっちのベッド使える様にしたから、そっち使ってね。」

そうエリアに言ってランプの灯りを消して自分のベッドに入った。

もぞもぞ

しばらくすると、カリスのベッドにエリアが潜りこんできた。

「なにしてんの・・？」

「あ～、うーんと・・、ちょとね・・。」

カリスがエリアに問いかけるとエリアはさっきまでの明るさは消え、落ち込みぎみに苦笑した。

（ああ、自分は半年前だったけれど姉さんが知ったのは今日だったんだよな・・。）

友人の死、その悲しみが読み取れたのでカリスは頷き返した。

「・・・ありがとう。カリス。」

そう言いエリスは涙目になっているのを見られない様にカリスの頭をを胸に抱きしめ、頭に顔をおしつけて泣いた。

カリスはエリアの柔らかな胸に頭を包まれながら身体を預けそのまま眠りについた。

第3話（後書き）

読んで頂きありがとうございます。

１０／５
身体を拭くところで大事なモノが抜けていたので修正しました。

次回もよろしくお願い致します。ｍ（＿＿）ｍ

第４話（前書き）

開いていただきありがとうございます。

第4話

日の出と共にカリスはエリアの胸に抱きしめられた状態で目をさました。

「ん、あれ・・。なんか足まで抱きしめてきてるんだけど・・。」

「ん・・んん。ふぁ・・お早うカリス。」

カリスの呟やいた時の動きでエリアも目を覚まし、挨拶する。

「お早う姉さん。・・これはくっ付き過ぎじゃない？」

「あ～。私近くに何かあると寝ている間に抱きしめちゃうのよ。」

とか言いながらカリスの頭を改めてギュッと胸に抱き寄せ幸せそうなエリア。

（こんなに心許せることが来るなんてこの森に入る頃までの私には考えられないわ！）

そう思いこの至福の今をエリアは堪能した。

「んん、ほろほろほひほうよ。（そろそろ起きようよ。）」

エリアの胸に抱かれたままカリスは言った。エリアは少し名残惜しそうにしながら、

「そうね・・。それしゃあご飯の準備しましょうか！」

そうしてカリスはやっと開放された。

簡単な雑煮の様なモノを作り朝食を済ませてからこれからの予定をエリアは話し始めた。

「カリスは此処で狩りしながら生活していた訳だし、気配は消せるんでしょう？」

「ああ、この森で狩りするくらいにはね。」

「ならばまずは気のコントロールからやりましょう。気配を消すのもコントロールの１つだから練習すれば出来る様になるわ。」

「気？あー、気配の気ってこと？」

「そう。人は皆が持っているモノで生命エネルギーとも言えるモノね。」

「気配を消す以外に出来る事なんてあるの？」

「むしろ気配を消すだなんてコントロールの基礎のほんの１部でし

かないわ。普段より気を身体中に纏わせれば強靭な身体になるし、足や手に集中すれば走る速度や攻撃力も段違いになるもの。」

「そんなことが・・・。ホントに?」

「もちろんよ!私もコントロールできるし、生きて行く上では絶対に便利になるわ。」

「へぇ〜・・。爺ちゃんからは何も聞いて無いけど森の外では皆そんなすごい事ができるんだ。あれ?だから爺ちゃんは森の中で暮らしてたのかな?」

カリスはしきりに感心しながら呟やく。その言葉にエリアは目線を有らぬ方へやり、

「え?え〜っと、・・・そう!そうなのよ!だから気をコントロール出来ないと森の外では生きて行け無いわ!!」

ホントはそんな事は無く、気のコントロールなど街や村で生活するくらいの人はまずできないし必要がない。ましてや各国内で気配を消すや気迫を出す以上の事ができる騎士や兵など本格的に使える人は、とある国において1人2人居れば良い方である。

しかしカリスが素直に話しを聞いているのでこれ幸いとエリアは言い切った。

(その方が教える理由が分かりやすくていいしね!)

「わかった。じゃあその気のコントロールをできる様になるよ、姉さん。」

「そう！その勢よ！シッカリ鍛えてあげるからね！」

カリスは素直に返事をし、先ずは気のコントロールの修行から始まった。

やる事を決めた2人は外に出て庭先で向かい合う姿勢で立っている。

「気配を消す事ができるという事は、逆に気配を出す事ができるわ。その気は身体中に有るモノなのだから、頭の先から足の先までを意識して気の流れを感じるの。分かるかしら？」

「うーん・・・。話の内容は何と無く理解できるんだけど・・・。流れとか言われてもどんな感じなのかが分からないなぁ。」

困惑しながら答えるカリス。

「そうねぇ、・・あ、そうだ。それなら体感させましょう！基本こういうやり方しないのだけれど、私の方からカリスに気を流すわね。それを感じとるの。」

そういってカリスの右手を取るエリア。

「流すわね。感じて・・・どう？」

「・・・あ、右手がなんだか何かに包まれている感じがする。ふわふわした優しい空気みたい。」

「ふふっ、そう！じゃあ全身に流すわよ。」

エリアは照れ臭そうに嬉しそうに笑顔で言いながらカリスに気を流していった。

気はその人がその時その時で性質を変える。悲しい時は弱々しく、怒っている時は刺々しく、となれば、優しく包まれる気はどういうモノかというのは自ずとしれよう。

「ん、全身が暖かくて気持ちいい。」

「良いわ。その気が流れている感じを忘れないように覚えてね。」

しばらく気を流した後エリアは手を離す。

「後はさっき言った様にやれば、そのうちできるようになるわ。という事でこれから毎日瞑想ね♪」

「わかった。やってみる。」

さっきまで流れていた気の余韻を確かめる様に手を閉じたり開いたりしながらカリスは返事をした。

毎日気をエリアに流してもらい、瞑想して自分の中の気の流れを確認するカリス。

「いつも常に身体の動きに気を配りなさい。人は生きている限り気を無意識に使っているモノなのだから。」

イメージをエリアに助言してもらいつつ、朝か昼過ぎまでは瞑想して、昼からは身体の動きを頭の先から足の先まで意識して森の中を駆けずり回った。これは体力をつける為である。

そんな日が続き・・・。

・・・3ヶ月後。

「そう！その感じよ！」

カリスは自分の気の流れを感じ取れる様になった。

「そこまでできたら今の状態を維持するだけで身体はかなり軽く動けるはず。ちょっと森の中を走って来なさいな。」

カリスは身体の一部一部を確認した後、森へ走り出した。

「身体がすごく軽い・・・。あ、これならもしかして・・。」

そういってカリスは近くの木の枝に向かってジャンプした。

３mほどあった高さをモノともせずに枝に着地し、そのまま枝から枝に飛び移り森の中を走り回った。

「ははっ！身体が自分のじゃないみたいだ！！いつまでも走れそうだ！」

しかし３０分ほど森の中を走り回ったカリスは小屋の鶏に帰って来てぶっ倒れた。

「か・・身体が・・。」

「あははははっ！気を使って走ったんだもの！消費気力はいつもより多いのは当たり前よ！」

「・・・。」

倒れたままの姿を見てエリアは大笑いした。

「仕方ないわね。ベッドまで連れて行ってあげる♪」

とうとう気の流れも感じ取り、カリスの成長が嬉しかったエリアはカリスをお姫さま抱っこして小屋のベッドまで運んで行った。

ベッドに下ろした時にはすでに眠っていたのでエリアは、

「お疲れ様・・。あなたの修行はこれからが本番なのだから・・ん、

チュッ。」

優しく頭を撫でながら呟やいた後、カリスの唇にキスをして暫らく暖かな眼差しで見つめていた。

傍から見れば聖母のように感じるほどに愛が込められていた。

第４話（後書き）

読んで頂きありがとうございました。

次回もよろしくお願い致します。ｍ（＿＿）ｍ

第5話（前書き）

開いていただきありがとうございます。

第5話

「さて！気の流れも掴めたことだし今日からは気のコントロールを覚えることと、持久力を上げるわよ！」

エリアは笑顔で庭に立つカリスに言った。

「コントロールに関しては手や足に意識をして他の部位より多めに気を流していけばいいわ。後はその流れの滑らかさね。最初はうまくできないからゆっくり気を流していって、確実に行うことを心がけてね。持久力の方は気を全身に流して今まで同様瞑想をしてもらうわ。なんだかんだでこの瞑想でも気のコントロールの補助くらいにはなるから真面目にね！」

「わかった。一歩一歩ってことだね。」

「そういうこと。気のコントロールの基礎の基礎よ。これをしなければ更なる上達はできないわ。」

そういって今日も今日とてカリスの修行が始まった。

3ヶ月が過ぎたころ、いつものように瞑想をしていると、

「グオオォォォ！！」

「・・・なに？」

「あー・・またレッドグリズリーが入ってきたみたいね。」

「入ってきた？」

「そう、カリスは気づいて無かったみたいだけど、この森はダンソンが魔法具で結界を貼っているのよ。
前回入って来たときもそうなのだけど、その結界が弱まってきているのね。」

「結界？全然わからなかった・・。」

「まぁだからこの森は魔物は弱いモノしか居なかった訳。ダンソンは魔法具の製作に関しては天才だったからね。」

「そうだったんだ・・。爺ちゃん・・。」

カリスは少ししんみりしていたが、

「ともかく、レッドグリズリーを倒しに行きましょう？今の貴方なら昔みたいにはならないと思うわ。」

「え！俺が戦うの？」

エリアの言葉に驚き慌てるカリス。

「大丈夫大丈夫♪骨は拾って上げるわ！」

「・・・じゃあ行こう。」

釈然としないまま瞑想を中断し、エリアとカリスは吼え声の聞こえた森の中へ走り出した。２人で気配を消して進み、エリアの合図でレッドグリズリーから約５０メートルほど離れた位置で止まった。

「ん、３匹いるわね。それじゃあお手並み拝見♪」

「行って来る・・。」

少し強張った顔をしたカリスは左手にナイフを持って気配を消たまま、レッドグリズリーの方へ足を進めた。

（３匹か・・それなら何か牽制できるものを。ん・・この石でいいや）

カリスは森の中にある拳大の石を１個持ち、先へ進む。するとレッドグリズリーが鹿を狩り、３匹で群がっているのが視界に入った。

（距離は・・２０ｍくらい。よし、ここからなら！）

身体の気を腕、腰、足に集中して流し込み、思いっきり振りかぶってレッドグリズリーの頭に狙って投げつけた。

（うぉりゃっ！！）

ビュンッ！！

バキャンッ！！

「・・・・・え？」

かなりの勢いで飛んでいった石はレッドグリズリー1匹の頭に当たった瞬間その頭が弾け飛んだ！頭をなくした1匹はそのまま後ろに倒れ、

「グオオォォォォ！！」

カリスはその結果に呆然としたが残りの2匹がこちらに気づき雄叫びを上げたことにハッとし、直ぐ右手にナイフを移動して2匹のレッドグリズリーに疾走した。

近い方に居た1匹が鋭い爪のある右前足を右から左へ振るってきた

のをスライディングして避け、その腕をナイフで切りつけた。

（見える！見えるぞ！）

ザシュッ！！

切りつけられた腕は見事に断裂して空を舞った。

「ガッッルガァァァ！！」

腕を切られて雄叫びを上げているレッドグリズリーをそのまま放置してその奥から突進しようとしているもう1匹にスライディング状態から立ち上がり、勢いのまま素早くジャンプしてレッドグリズリーの上と飛び越え後ろに回りこむと首元を切りつけた。

首を切られたレッドグリズリーは大地に倒れて暴れまわっているが、こちらはもう動けないだろうと瞬時に判断し、腕を切ったレッドグリズリーに向かおうとしたらナイフがもうぼろぼろになっているのに気が付いた。もう使い物にならないのならばとカリスはナイフをまだこちらに怒り狂った目線を送って突進しようとしているレッドグリズリーの頭に向かってナイフを投擲した。

「グガァ！」

レッドグリズリーは残った方の左腕で頭を庇い、ナイフは腕にささったが、それで視界が逸れている内にカリスは足に気を流して疾走しレッドグリズリーの胸に勢いの乗った飛び蹴りをかました。

「ゴフゥッ！！」

そんな声を出し胸を蹴られたレッドグリズリーは５ｍほど吹っ飛び転がった後、ピクピクと痙攣してから動かなくなる。蹴った胸は陥没していた。それを確認してから首を切ったレッドグリズリーの方を見るとこちらも既に事切れていた。

「ふぅ・・。何とかなった。・・それにしても自分の力がこれほどまでに上がってるなんて・・。」

パチパチパチ

カリスが戦闘後の余韻に浸っていると後ろから手を叩く音が聞こえてきたので、そちらを振りかえるとそこには満足そうな笑顔で手を叩くエリアがゆっくりと歩いて来た。

「ふふっお疲れ様！初の戦闘にしてもなかなかいい動きだったわ。」

そう言ってエリアはカリスを褒てくれる。

「ありがとう。なんだか相手の動きがスロモーションに、というより自分の思考が早くなったのかいつもとは違う世界で動いている感じだったんだ。」

まだ戦闘の余韻に浸かっているカリスは心ここにあらずといった感じで返事した。

「そうね。気をコントロールするとそれだけ世界が広がるということよ。」

「世界が広がる・・か。」

そうしてレッドグリズリーの討伐は幕を下ろした。

次の日。毎度お馴染み小屋の庭でエリアは次の修行の内容を説明した。

「レッドグリズリーも倒せるくらいになった訳だし、今日からは私と鬼ごっこよ！！」

バーーーーン！！

という効果音が付きそうな勢いで言い放った！

「へ？・・姉さん遊ぶｎ「トゥ！（チョップ！）」あ痛！・・なにするのさ。」

いきなりチョップをかましてきたエリアに、打たれたオデコをさすりながら涙目でにらむカリス。

「修行よ！今日からは狩りを想定した模擬戦ね。レッドグリズリー倒せるならここで相手のできる魔物なんて居ないでしょうし。結界内にいつ入ってくるかもわからないのを待つ必要も無いわ。」

そう言ってエリアは改めて説明を始めた。

「ようは私とカリスが戦う。お分かり?但し、受けと攻めは1日交代。受けの日は逃げること・防ぐこと・避けることのみで攻撃しちゃダメ。攻撃の日はまぁそのままの通りね。狩りを想定して行うこと。」

「実戦的にかぁ。面白そうだな!」

「うふふっ、そうでしょ?時間は朝から夕方まで。その間におなか減ったら適当に森の中にあるもの取って食べること。その間も攻撃有り。基本休憩無しよ。それじゃあ今日は私が攻めで行くわね♪」

(ふっふふっふふふふっ。今までじっと見ているのと指示するだけだったから身体がうずいているのよね!さぁってどうやって攻めようかしら♪)

「ああ、どんと来い!」

そうカリスはやる気マンマンだったが、エリアのこの満面の笑みの裏にあるものを読み取れていればこんなにやる気はなかっただろう・・・。

第5話（後書き）

読んで頂きありがとうございます。

エリアは元々こんなに深く作品に入れる予定はなかったのですが、なんだかメインヒロインみたいな感じになっている気がした今日この頃・・・。メインヒロインは別にちゃんと出る予定です。継承編終わったらですが。

次回もよろしくお願い致します。ｍ（＿＿）ｍ

１１／１５

一部レッドグリズリーが何故かレッドウルフになっていたので修正しました。

第6話（前書き）

開いていただきありがとうございます。

第6話

ヒュンッ！！

ドゴォン！！

「ギャー！！ちょっ！！やばいって！！」

カリスが避けた場所に飛んできた石があたって全長２ｍほどのクレーターができた。もちろんエリアが投げた物である。

タタタッ

「ハッ！！」

ブンッ！

バキッ！！ベキベキベキッ！！ドォーン・・・

そこにエリアが走ってきて回し蹴りを放ったがカリスも何とかジャンプして避けた。・・のはいいが、蹴りの気圧でエリアの足先にあった木が触れても無いのに折れて倒れる。

「ちょっと！！姉さんやりすぎだよっ！」

涙目になりながらカリスの講義に、

「いいわぁ・・その表情！ふふっふふふふっ！！さぁもっとよ！もっとお逃げなさい！！」

全くもってエリアは聞いちゃいなかった。愕然として、

「やばい・・！！このままじゃヤられる！！っと！！」

カリスは呟きながらもエリアが投げてきた石を避け、木の枝に飛び移って逃げ回った。

1時間後・・

「姉さん・・。もう・・ダ・・メ・・。」

カリスはヘロヘロになり大地に倒れ伏していた。

「もう終わりぃ？無駄な動きが多すぎるからもたないのよ。必要な分だけ動きなさい！！」

姉さんってもしかしてS？とか思いながら倒れたままカリスはエリアの助言を聞くしかできなかった。仕方ないわね。という風には肩をすくませて見せてエリアは近くの木に座って寄りかかる。

「動けないんじゃしょうがないから、1時間休憩したらまた再開ね♪」

「・・・はい・・。」

笑顔で言う姉の姿にカリスはあきらめて返事をした。

そんなことが夕方まで続き小屋に帰って夕食を食べた後、食器を片してからエリアはカリスに今日の反省会を行った。

「気の流れは通常時は最低限にして、必要なときに多く流すのが効率のいい使い方よ。例えば走るときは足に流すわね。手を使うときには手。これと同じで身体全体に常に流していたら直ぐばててしまうわ。」

「そう言われても・・・攻撃が当たったときの事を思うとついね・・。」

頭の後ろを掻き困惑した表情でカリスは言う。

「それはしっかり攻撃を感じとって見極めるしかないわ。その練習でもあるんだから。」

様は慣れよ慣れ。そう言ってカリスを諭す。

「はぁ・・うん。わかった、なんとかがんばってみるよ。」

「あ、それと攻撃を受ける場合でも例えば腕でガードするとすれば、腕だけに気を流せばその分節約できるし、ガード自体も強力なものになるから。これは明日見せてあげる。」

そんなこんなで夜も更けたので、それじゃあもう寝ましょう。とエリアは言って寝室に行くのだった。

しばらくたった日。

「あ　そういえばそろそろ爺ちゃんの命日くらいだ。」

朝起きて朝食を2人で食べてるときにカリスは思い出して口にした。

「あら？・・・そう。それじゃあ今日は午前中は小屋の掃除して午後は狩りに行きましょう。おいしい物をいっぱい食べて笑って過ごしてダンソンに私たちは元気にしてる！って見せてあげないとね！」

少ししんみりした様子を見せたが直ぐに気持ちを切り替えてエリアは元気を出すつもりでカリスに言う。

「後半はなんとなくわかるけど、前半の掃除・・？」

何を言うのかとカリスは首を捻って聞き返す。

「だってカリスのことだからダンソンの私物とかそのままにしてるでしょ？それを一度片付けましょう。こういうのは気持ちを切り替える為にも必要なのよ。」

大事なんだから。という風にエリアは言った。

「そっか、そうだよね。じゃあ今日の予定はそんな感じで。」

そして始まった大掃除。ついでにいろんなところも掃除しようということでなんだかんだで昼過ぎまでかかってしまった。しかし掃除中にある物が出てきて

「あ！カリスちょっと来て！いいものがあったわ。」

カリスが寝室をベッドを移動したりして掃除しているとエリアの呼ぶ声がして、物置になっている部屋に足を運んだ。

「どうしたの姉さん？」

部屋を覗き込んだカリスに、

「これよこれ！多分この森に使われている結界と同じものだわ。きっと今使っているやつが弱くなったら使うつもりだったんじゃ無いかしら。」

そう言って人の頭ほどの大きさのある丸っこい何かを見せてくるエリア。

「これって玄関の上に付いてるやつと同じやつだね・・。あれが結界の元だったのか。」

「ねぇねぇ、これ使ってもいいわよね？今使っている結界も弱っているんだし。」

「そうだね。せっかくあるんだから交換しちゃおう。」

そしてエリアから丸っこいものを受け取って椅子も持って玄関まで行き、あーでもないこーでもないと言いながらなんとか交換した。

「これでよしっと。この外したのはもういらないよね？」

「ええ、いらない物の中に入れておきましょう。一応弱ってるといってもまだ効果はあるんだけどね。」

そう言っていらない物の１つにされた丸っこいもの・・・。

「効果はどれくらいの時間持つのかな。」

「う～ん。ダンソンのことだから数年ってことは無いわね。多分２～３００年は持つんじゃないかしら？」

そういいながら２人は掃除に戻って行った。

掃除の次は狩りである。狩りでは肉、それと途中で野菜として使えるもの、キノコ、果物を取り、夕方には小屋に戻りご飯の用意をしておいしい夕食を２人で楽しんだ。

その夜・・

「ねぇカリス。今日は一緒に寝ましょう。」

身体を拭き終わったエリアはベッドに入ったカリスに言った。

「ん・・。わかった。入って。」

そう言ってベッドの半分を開けてエリアを招き入れ、カリスはそのままいつかと同じように抱きしめられた。

「姉さん・・。」

それでもエリアがしんみりしているようだったのでされるがまま、やさしい匂いに包まれながらカリスは眠ることにした。

（ダンソン・・カリスは立派に成長しているわ。貴方が育てた未来の柱が。きっと良い大人になる、ううん育てるから。・・・・私好みｎゲフンゲフンッ）

あれこれと思いつつ夜は更けていき、２人は抱き合ったまま眠りに落ちた。

それからは今までと同じように修行の日々が過ぎて行き、３年と１０ヶ月の月日が流れた。

第6話（後書き）

読んで頂きありがとうございます。

次回もよろしくお願い致します。m（＿＿）m

第7話（前書き）

開いていただいてありがとうございます。

この話の中盤から次話の最後までは世界の説明になります。

第7話

「せぃやっ！」

ブンッ！ドンッ！

カリスの蹴りをエリアは腕でガードしてその衝撃の勢いを利用し、後方へ飛んだ。瞬時にカリスは追跡して右手に持っているナイフで連続的に斬撃と突きを放つ。ナイフにはカリスの気が流れ込んでおり、この状態なら岩をも楽々切れるほどになっている。エリアは触れることはまずいと察し、なんとか避けていく。エリアは右足に気を流し大地を一度強く踏んづけた。

ドンッ！！轟ッッ！！

その衝撃によりエリアは後方に飛び上がり森の中へと姿を消す。カリスはその衝撃により後方へ吹っ飛ばされた。直ぐに体制を立て直して気配を検索するがすでにエリアは気配を隠しており、一度息を吐いて仕切り直しかと気持ちを整理した。１０ヶ月経ちカリスの身長も１７０ｃｍにまで伸びており、体つきも段々と大人のものになってきた。精神的にも成長したのか大分落ち着きを持つようになり、冷静な判断をできるようになったと見受けられる。

あれから来る日もエリアと鬼ごっこをするがまだ一度も一撃を与えてはいない。しかし最初のうちは全ての攻撃が避けられていたのに対し、今ではところどころで防御させているので多少はましになったのではないかと自負している。受けの場合も1時間でへばってい

た時期もあったが今では一日へばらず付いていけている。まぁ多少なりともエリアは手加減しているとは思っているが。それでも格段の進歩だ。又、2、3日に1回は夜闇の中で行うようになった。エリア曰く

「夜は特に目は使いにくくなるから気配察知のいい修行になる。」

だそうな。夕方になり今日の修行が終わって小屋に戻り、何時も通り井戸で身体の汚れを流して夕食の準備をして2人で食べた。その時に何時もの反省会が行われる。

「だいぶ私についていけるようになったわね。いい成果だわ。」

本当にうれしそうな笑顔でエリアは言うが、

「でもまだまだ姉さんは余裕みたいじゃないか。何とか数回に1回は追い詰められるようになりたいけれど・・。」

「うふふっ、今の状態でもかなり進歩しているのよ?喜ぶことこそすれ、落ち込むことなんて全くないわ!」

(今のカリスと1体1でいい勝負できる人なんて100人も居ないんじゃないかしら?それに私は規格外だから現状で追い詰められることなんてありえないしねぇ。)

そんなことを内心思いつつカリスをやんわりとエリアは褒める。エリアはこの成長スピードに驚異的なものを感じつつも、これならば大丈夫そうだと満足していた。師匠が優秀だからだとか自分で自分のことも褒めつつ・・。

「そこでなのだけど、そろそろカリスは外の世界のことを知るべきだと思うの。」

夕食が食べ終わって一息ついたところでエリアは今後の修行のことを話し始めた。

「森の外ってこと？あ、俺森の外に行くんだ？」

などという発言を聞いて今まで何の為に修行していたのかとエリアはため息を付いて呆れつつ、

「当たり前じゃないの！その為の修行でしょうに。・・・とりあえずまずは世界の知識ね。色んな国のことは自分で回って実際に見て知る方が意味があるから省くとして、常識的なことを明日から教えるから午前中は勉強よ。午後は修行ね。修行の方は今までとは変えて受け・攻めに分かれず普通に模擬戦形式をとるわ。範囲は森そのものなのは一緒。いいわね？」

「ん、わかった。それはそれで楽しみだなぁ。」

今まで外のことなど気にしなかったのでいろいろと知ることができるのは楽しみだった。それからしばらく話し合った後、そろそろ寝ましょうとエリアが言って寝室へ向かった。

そして次の日から勉強会がはじまった・・が。

「ちょっと！字が読めないってどういうことよ！それじゃあ書くこ

ともできないじゃない！」

勉強会を始めて直ぐ、地図やらなにやらレザーバッグから出して説明しようとしたエリアはカリスが字を読めないことを知って声を上げた。

「いや・・爺ちゃんからは狩りとか料理とかそういうのしか習わなかったし・・。」

「く・・ダンソン～～～～～！！！」

困った風に言うカリスにエリアは今は居ないダンソンに対して雄叫びを上げた・・・。ということでまずは文字の読み書きからはじまったのである。出鼻を挫かれた感じでエリアはガックリとした。

そして1週間ちょい掛けて一通り覚えさせ、ゆっくりではあるが読み書きができるようになったところで後は慣れも必要と、世界の常識を教え始めた。

「いい？お金の単位はコイン。それで石貨・青銅貨・銅貨・銀貨・金貨そして白金貨があるわ。それぞれの額は

小石貨1枚　1コイン
石貨1枚　10コイン
青銅貨1枚　100コイン
銅貨1枚　1000コイン
銀貨1枚　10000コイン
金貨1枚　100000コイン
白金貨1枚　1000000コイン

ってなっているわ。これがそのコインよ。」

そう言ってテーブルの上にレザーＳバッグから各コインを取り出して順に並べて見せるエリア。それを見てコクコクと頷きながら話を聞くカリス。白金貨なんて額が大きすぎて使い道がないのだけど。エリアは付け加えた。

「大体よく使うのは銀貨までね。白金貨なんかは貴族とか国が管理するお金として用いられるのが常よ。お店で１食食べるのにかかるお金は店によっても異なるけど１千コインあればお釣りがでるくらいかな。それと宿屋。旅人とかが泊まる宿ね。そういうところは普通の村とかであれば６千コイン前後で泊まれるけれど、いいところの宿だと１万コイン以上場所によっては１０万コイン以上かかるところもあるわね。」

まぁセキュリティーもあるから安ければ良い訳ではないのだけど。そう言ってエリアは一度話しを区切った。

「ふうん。この小屋にはお金なんて置いてないからなぁ。それでそのお金ってどうやって手に入れるの？もしかして作る・・？」

「ふふっ、自分で作ってはいけないわ。兵士にしょっ引かれるわよ。村や街の人はお店を開いたりしてお客から稼ぐのだけど、私たちは冒険者ギルドってところに登録して依頼をこなして報酬としてお金をもらうの。他には獣や魔物の毛皮とかを取ってきて売ったりね。ギルドの依頼っていうのはあれね、何でも屋みたいなものよ。狼がでるから退治してくれとか魔物を討伐してほしいとかが結構主流だけど、薬草や野菜の採取から街の庭掃除なんかもあるんだから。でも登録には年齢規制があって１２才からというのがあるの。まぁカリスはもう直ぐ１５才だから特に問題ないけれど。これはあくまで

最低限の信用を得る為の年齢とされているの。これは貴族や王族の社交界デビューの年にちなんで決めているらしいのだけどまぁ、お偉いさんがうんたらかんたら話あったのでしょうね。あまり気にしなくても良いわ。」

一気にしゃべって喉が渇いたのかテーブルに置いていた水の入ったコップを手に持ち、コクコクと飲むエリア。それを感心しながらカリスは目を向けていた。

「あとはそうねぇ・・依頼を受ける為のランクがあるわね。さすがに戦いの［た］の字も知らない人が魔物の討伐の依頼なんか受けたら大変なことになるから、依頼ごとにランク付けして、そのランクを所持していればそのクエストを受けられるようにしているの。ランクはF・E・D・C・B・A・S・SSの8個のランクがあるわね。F～Dは採取とか街の雑用の依頼が主ね。Dから討伐の依頼が少しあって、C～Aは討伐とか旅の護衛の依頼とかよ。もちろん採取とかもあるわ。危険な場所にあるものを採ってくるとかね。S・SSになると国が関与した依頼になってくるの。これは実力は言わずもながら、信用という意味でもね。依頼を数こなせばランクは上がるのだけど、DからCへ上がるときには討伐試験があるわ。Dまでは雑用の依頼が多いけれど、雑用だけでCまで上げちゃうとCランクの依頼で危険な目にあう可能性が高いから討伐依頼をこなせるかどうかが大事なのよね。」

エリアから渡された紙とペンを使って聞いたことをメモしながら自分の中でも内容をまとめた。

「あ、ということは姉さんもギルドに登録してるんでしょ？ランクはどのランクになるの？」

「私？そうねぇ・・A以上とだけ言っておくわ！」

胸を張ってどう？すごいでしょう？という感じでエリアは言った。

「へぇ～そうなんだ。じゃあ俺もそこｎ「ちょっと！少しは驚きなさいよ！」・・いや、ランクのすごさとかよくわからないし。」

普通に聞き流されたエリアはズビシッ！と右手人差し指でカリスを指し、突っ込みを入れた。

「まぁいいわ・・。カリスには後でギルドに登録してある程度までランクを上げてもらいましょう。討伐依頼が受けれるくらいにはね。」

「ん、わかった。」

そう返事したところでエリアはそうだそうだと徐にレザーＳバッグに手を突っ込んで金色の枠をしたクリーム色のカードを取り出した。そのカードがギルドで登録したときの認証カードなんだそうで、名前・ランク・こなした依頼などなどが記録される物らしい。材質は力を入れれば多少は曲がるが結構な強度を持つモノみたいだ。

そんなこんなで勉強会は終了し、午後の模擬戦を行った。

第7話（後書き）

読んでいただいてありがとうございます。

次回もよろしくお願い致します。

第8話（前書き）

開いていただきありがとうございます。

今回も引き続き世界説明になっています。内容的にも他の方々が書かれるモノとも同じ感じなので面倒な方は飛ばして下さっても大丈夫です。

第8話

「本日の勉強会の内容はこの世界の人々についてよ。」

今日も今日とて勉強会が始まった。文字の読み書きも慣れてきてカリス的にこの勉強会は楽しみになっている。

「まずは種族から

人間族
エルフ族
エルフィン族
ドワーフ族
獣人族
竜人族

それと例外として魔族が主な種族ね。」

「そんなにいろんな種族があるんだ?俺は人間族でいいのかな?」

初めて聞く種族の話に感心しながらどの種族にも会ってみたいと思いつつカリスは言う。

「そうね。カリスは人間族、ヒューマンと呼ばれることもあるわね。そして私はエルフ族。エルフは耳がこうなっているのが特徴よ。」

そう言って自分の耳をクニクニ触って主張しながら説明するエリア。

「え。姉さんてエルフなんだ!初めてみt「ちょっと!毎日見てる

でしょ！！」・・あ～、エルフとしてってこと。姉さんの耳は変わった個性だなって思ってたから。」

驚いて言った事にさっそく突っ込まれるがなんとか誤魔化す。

「それでエルフ族にはもう1つ、ダークエルフと言うのも居るわ。こちらは肌が黒いのが特徴で他はエルフと見た目が変わらないわ。ただ数が少ないのと、エルフに比べて少し冷酷なところがあるの。周りからは警戒されがちだけど彼彼女らも同じ［人］だというのを覚えておいてね。ちゃんと善悪の心は持ってるんだから。」

少し寂しそうに説明するエリアに分かったと真剣に返事して、続きを促すカリス。

「いいわ。次はエルフィン族。この種族は昔にエルフ族から別れた種族と言われていて、エルフ族に見た目が似ているのとエルフ族とは仲が良いの。基本的に他種族同士で仲良くすることは少なくてね。その中では昔話があるせいか、うまくいっているわ。ちなみに、エルフ族とエルフィン族の容姿以外の特徴としては［動］か［静］かってとこね。エルフ族は弓やナイフなどの武器を使って狩りをしながら暮らすけれど、エルフィン族は精霊魔法を主に使って暮らすの。エルフ族も魔法を使わない訳ではないのだけれど身体を動かす方が性に合っているんでしょうね。」

あ～そうだろうなぁ。とカリスはエリアを見ながら納得する。

「そしてドワーフ族。これはダンソンがそうよ。身長が１４０ｃｍくらいしかなく、筋肉質な人が大体ね。手先が器用で物を作るのが得意な種族でもあるの。それから情に厚いわね。ダンソンと一緒に暮らしていたのなら判るでしょう?とても親身になってくれるわ。」

「爺ちゃんはドワーフ族かぁ。みじかに他の種族の人が居たなんて全然知らなかった。」

背が低かったのは種族の特徴だったのかと納得しつつ、自分は人間族でよかったとかちょっと失礼な事を思いながら頷くカリス。

「獣人族は犬・猫・狼や狸などの人型なものね。彼・彼女らは動物の耳や尻尾を生やしていて、身体能力が高い人が多いのよ。獣人族は主従関係が結構はっきりしてるから人によっては懐かれたりするの。」

「それは見てみたいかも。なんか和みそうだ。」

じゃれて来る動物達を想像した。

「・・何想像したか何と無く判るけど、あまり失礼な事しちゃだめなんだからね？」

こくこく頷きカリスは肯定した。

「竜人族は身体が所々鱗で覆われていてかなり頑丈なのと、背中に竜の翼を生やしているの。彼彼女らはかなりプライドが高く、強さが何よりの意思表示と言う考え方をしてる人がほとんどね。関わる時には相手のプライドを刺激しない様に気をつけなさい。それだけで最悪戦争になるわ。でも逆にこちらを認めてくれればその時はとことん力になってくれる存在でもあるの。それを忘れないでね。」

最後に魔族だけど，この種族は希少種だから滅多にみないから自分で探してみなさい。となんだか略された気もするがそう締めくくら

れた。

「あー、そうそう、言い忘れてたわ。各種族ごとの寿命だけどこれがまたかなり差がでるのよ。

人間族　　８０才
エルフ族　　８００才
エルフィン族　８００才
ドワーフ族　　４００才
獣人族　　２００才
竜人族　　５００才
魔族　　１０００才

だいたいこんな感じね。人間族が一番短いけどその分人口が一番多いわ。」

「うわ・・そんなに他の種族は生きるんだ。爺ちゃんが死ぬ時に、寿命って言ってたけどそうなると４００才くらいだったのかぁ。」

驚きながらカリスはダンソンが実際どれくらいの年なのかを想像する。

「確か３８０才くらいだったと思うわ。私と会った時が１７０才くらいだったから。」

「え！そんなに前からの知り合いだったの？じゃあ姉さんて今何ｓ「乙女の年齢を詮索するものでは無いわよ！！」・・・はい・・ごめんなさい・・。」

カリスの言葉に殺気の篭った目で見ながらクギをさす。カリス曰く、あれは本気でヤる目だった・・・。とのこと。

勉強会を始めて早1ヶ月・・

その日の夕食後テーブルに向かい合って座っている。この一ヶ月で世間のことを一通り学んだカリスは森の外の世界に多大な興味を持つようになった。エリアとしてもいい傾向にあると思っている。この勉強会でエリアがもっとも気をつけたのは物事に偏見を持たせないことだ。そうしなければやはり実際に体験した際、どちらかに偏った思考、答えを持ってしまうと考えたからである。これからカリスは旅をすることになるが、できるだけ在りのままの世界を見て、感じてほしいのだ。そうしなければ役目を果たすことは難しいだろうから。

「ってことで明日は街の冒険者ギルドに行って登録しましょう。大体のことは教えた訳だし、大丈夫ね？」

「うん。一通り頭に入ってるから何とかなると思う。何か必要なモノとかある？武器とか。」

カリスの質問に必要なモノはギルドカード作るときに少しばかりお金がかかるが、最初の依頼では雑用しかないので武器は要らない。とエリアは答え、まぁ討伐依頼になっても武器無くてもカリスなら十分対処できるとの事。今使っているくらいのナイフなら安いが、しっかりとした武器は日常品の物とは桁が1個も2個も変わるほどなので、最初は買わない。というのがメインの理由だったりする。

「それとカリス。彼方の髪はいろいろと動くときとかに邪魔になるから明日ギルドに行く前に短く切ってあげる。身だしなみも人様と接するのなら大事にしないとね！
ということで明日の午前中は髪切で午後に冒険者ギルドよ！」

エリアは気合を入れて言い放った。

第8話（後書き）

読んで頂きありがとうございます。

次回からまた先に進みます。

次回もよろしくお願い致します。m（＿＿）m

第9話（前書き）

開いていただきありがとうございます。

第9話

「こんな感じでどうかしら？なかなかの出来だと思うのだけど。」

そう言ってカリスの顔の前に鏡を出した。今日は朝食を食べてから2人は外に出てカリスの髪を切っていた。カリスは上半身裸になり椅子の上に座ってジッとしている。その周りを移動しながらエリアが小さなナイフで髪を切り整えていた。

カリスは今まで伸びていた髪をポニーテールにしていたが、今後邪魔だろうということで切ることになったのだ。今ではエリアと同じくらいの短さまでバッサリ切って、見た目からしてもかなりサッパリしている。

「ん、姉さんとお揃いだね。」

「ふふっカリスもこれくらいが似合うのよ！」

（ああ！やっぱりすごくいいわね・・。せっかく整った顔しているのだから髪型とかも整えてあげればもう私の好みのドストライクｎ「ありがとう姉さん。頭も軽くなったしかなり楽かも。」・・っといけない本音が。）

カリスのお礼に吹っ飛んでいた意識を方向修正して、どう致しまして。とエリアは目の前にある短くなった髪の頭を抱きしめて微笑みを浮かべながら言った。

その後は井戸の水で頭を流し、頭を拭いて乾かした後、服を着て簡単に出かける準備をする。カリスの格好はいつも通り皮で出来た服

にズボン。それとブーツみたいな靴をはいている。そして左の腰の後ろにはナイフが納められている鞘を取り付けた。エリアの格好も似たようなものだがこれにところどころ皮の軽鎧で補強されている。

準備が終わったところで、では行きましょうか。とエリアはカリスを連れて森の東へ向かった。森を抜けて近くの村まで歩くと6時間かかってしまうとの事で、2人は走って行く。2人が走れば1時間ほどで着けるだろう。

「いやぁ森を出るなんて初めてだからすごく楽しみだよ。どんな人達が居るのかも気になるし。」

胸の高鳴りを感じながらその気持ちさえも楽しむかのようにカリスは言う。横でエリアは微笑みながら、そうね。きっと驚くことばかりかもね。と同意しながら進む。

しばらく進んだ後、森の木の密集も落ち着きだしたところで空気の層のようなものが在った。この層が結界だと言うエリア。人や魔物とか外的要因はこの層に入ると意識を操作され、真っ直ぐは進めなくなりいつの間にか引き返してしまうそうだ。

「この結界を外側から内側に通り抜けるには気のエネルギーを身体全身に強く流し込めば結界の影響を受けなで通り抜けられるの。」

だから森の外に出る前に気のコントロールを覚えてもらったわけ。そうエリアは言う。カリスは感心しながら頷き、結界から出た。

その後少し進むと直ぐに道が見えた。道幅は3mほどで馬車が1台通れる位の幅。道は北と南に伸びており、南の遠くの方に小さく街の周壁が見えた。案外近くに在ったんだ。とカリスは言うが、普通

の人が歩いては半日かかる距離なのだ。そしてそのまま街の近くまで道を走り、街の入り口が見えた辺りで速度を下げて歩いて行く。速度を下げたことにカリスは首を傾げつつエリアに倣う。

この街はムールの街と言い大陸の西側の隅の方にあるらしい。人口は2千人ほど住んでおり、周りは3mほどはあるレンガの壁で覆われていて、出入り口に見張りが2人。1人が外を向き、もう1人が中を向いている。

エリアは見張りの場所まで行き、レザーSバッグからギルドカードを出して見せ、エリアは自分の弟子と旅をしていることを伝えるとスムーズに街の中に入れてくれた。ギルドカードは任意で内容を表示することが出来るものなので、今回はランクを表示せずに見せた。大騒ぎになると困るし。とエリアは内心ため息つく。

「ギルドカードが身分証明になっているから登録しておくと何かと便利なの。逆に犯罪を犯すとお尋ね者になるけれどね。」

だから旅する人はギルドに登録するのかと納得するカリス。冒険者ギルドは小さい村には無いそうだ。あまり人も居ないし立ち寄らないと言うことらしい。そういう村で何かあった場合は近くのギルドの在る村、街まで行って依頼するんだとか。そんな説明を聞きながら街の中へ入る2人。

カリスは街の中に入り道行く人々を見て感動した。こんなにも多くの人が世の中には居るのかと。街人は大体が人間族であり、ちらほらとエルフ族とドワーフ族を見かける。人間8エルフ1ドワーフ1くらいの割合だ。他の種族は今のところ見当たらない。

「うわ・・こんなに人居るんだ。なんか酔いそうだよ。」

「うふふっ。この街は小さい方だから大きい街になんか行ったらカリスは倒れちゃいそうね！最初は早速ギルドへ行くわよ。」

そんなやりとりをしつつ石で綺麗に均されている通りを歩いていく。カリスは常に左右に目を向けきょろきょろとしている。それを見てエリアは目を細めて微笑みながら見つめていた。周りでは転々とだが屋台なんかも出ていて食べ物のおいしそうな匂いが漂っているのだ。

あっちへふらふらこっちへふらふらしているカリスだが、人通りのある中で無駄に身体能力を発揮して全く人にぶつからない。そんなカリスを連れて1つの建物までやってきた。看板には冒険者ギルドマークである鷹が羽ばたいている絵が書いてある。そのままエリアは建物の中へ入って行った。

カリスは後ろを付いて建物の中に入る。建物の中は左にカウンターがありその奥には係りの人が何人か居る。

中央は丸いテーブルが4つほど置かれてそのテーブルの周りに椅子が各4つずつあってここで相談したり、軽食を取ったり出来るようだ。まぁ実際にそうしている人が居るからそうなのだと思っただけなのだが。と、そこに冒険者っぽい格好をした女性の猫の獣人族が人間族の女性の冒険者っぽい人と椅子に座って話ししている。カリスはちらちらと獣人族の女性の頭にある耳とお尻から生えている尻尾に目が行った。

そして入って正面の壁には一面に大きなボードがかかっており、多くの紙が貼り付けられていた。

ここで依頼を選んで受けれるようだ。エリアとカリスが入ったとき

に店内でくつろいでいた人たちが目を向けてきたが皆それだけであまり気にしてはいない。そのままエリアはカリスを連れてカウンターの前まで移動した。

「こんにちわ。彼の登録をお願いできるかしら。」

「いらっしゃいませ。新規での登録ですね。それではこちらの紙に名前と種族をご記入ください。」

エリアはカウンター前に居る２０代前半の女性役員へ丁寧に挨拶してから用件を言い、登録用の用紙を出してもらう。女性役員はサラっとした肩下まで伸ばした艶の有る黒髪で、少しきつめの印象を与える目つきで、目の色はブラウンだ。身長は１６５ｃｍくらいで体系は人並みだ。

エリアはカリスに用紙を渡し記入させた。名前の欄を記入しようとした時にエリアは名前の後にステインとつける様に言う。後々役に立つからだそうだ。記入した用紙を役員の人に、「お願いします。」と用紙を差し出す。

役員の人は笑顔で、「少々お待ちください」と返答して受け取った。役員の人から見れば冒険者になろうとしている人の中でも実に礼儀正しく感じ、好感が持てたのだ。きつめの印象を与える目だが、笑顔になるとすごく優しそうな印象にかわるギャップがこの女性のチャームポイントだろうか。

役員の人はカリスに用紙を書いてもらっている間に奥の棚の中から取り出して来た新しいギルドカードをカウンター横に置いてある魔道具の箱に入れて、受け取った用紙を見ながら入力していく。数分で作業が終わったのか魔道具の箱からカードを取り出し、小さなナイフを渡されカリスに血をカードに垂らすように言われた。ナイフ

には刃に蒼色の文様が刻まれている。エリアの方に顔を向けると頷かれたので渡されたナイフを使い、数滴血をカードに垂らす。

このナイフは契約に使われるものらしく、ナイフでつけた傷で流れた血は所有者認証に使えるのだとか。
詳しくは理解できなかったがそのようなものだと思い聞き流した。

「これでカリス・ステイン様の登録は完了しました。お疲れ様です。申し遅れましたが私はサクラと申します。よろしくお願いします。ギルドに付いての内容はご存知でしょうか。」

「大丈夫よ大体は説明してあるから。わからないことが出てきたら聞きに来るわ。」

「はい。それではカードをどうぞ。無くさないようにお願いします。無くされると再発行時にお金がかかってしまいますのでご注意下さい。ギルド登録料として銅貨5枚頂きます。」

そうしてサクラからギルドカードを受け取るカリス。エリアはコインをサクラに渡す。カードをどこにしまおうかと悩んでいると、レザーSバッグを買いましょうとエリアに言われサクラに伝えてレザーSバッグを買うことにした。

「ありがとうございます。料金は銀貨2枚になります。・・。はい、結構です。」

エリアはサクラにレザーSバッグからコインを取り出し渡す。カリスがお金のことを気にしたが、遊んで暮らせるくらいはあるから気にしないで。と言われた。どうしても気になるなら稼いで返しなさい、とも。その言葉に納得した後、エリアから渡されたレザーSバ

ッグにギルドカードを入れる。

「それじゃあこれから依頼受けようか。Ｆランクの依頼だから雑用系ばかりだけど、依頼を受けることに慣れるためには丁度いいからね。ＦからＥにランクを上げるには同ランクの依頼２０個受ける必要があるけれど。これはランクを上げる為のシステムじゃなくて、依頼を消化する為のシステムだから数が多いのは仕方ないのよ。」

そう話しながら依頼ボードまで移動してＦランクの依頼を眺め始めた。と、そこで後ろから声がかかった。

「ちょっといいかにゃ？」

第9話（後書き）

読んでいただきありがとうございました。

次回もよろしくお願い致します。m（＿＿）m

第１０話（前書き）

開いていただきありがとうございます。

第１０話

後ろから声をかけられ2人が振り返るとそこには椅子に座って他の人とさっきまで話しをしていた猫の獣人族の女性がいた。

彼女の見た目は２０才ほどで身長１６０ｃｍ程度、短めの長さの黄金色の髪に同色の猫耳、先端はチョコンと気持ち程度白くなっている。好奇心に満ちた目は金色だ。お尻には細長い尻尾があり、白と黄金色の縞々で毛先が綺麗で良く手入れしているのだろう。獣人族も長生きなので見た目では実年齢は判らない。

胸とお尻はふっくらとしているが全体的に引き締まった体型をしており、腕、お腹周り、足は露出させていて動きやすさ重要視している装備になっている。胸周り、腰周りは皮の鎧の軽装だ。パッと見た目は皮のビキニの水着のようにも見える。つけている部分も遊びは無く、ぴっちりしている。露出している背中も毛が生えており、一見長い髪が背中を隠しているようにも見えた。腰には左右に1本ずつ大き目のナイフを下げている。

「そこの男の子さっき新規で登録してたみたいにゃけど、ホントにホントに新規さん？」

耳をピクピク動かしながら聞いてくる猫の獣人。カリスは良くわからなかったので首を傾げつつ、そう。と返事をする。

「それにしては隙がにゃさすぎるからちょっと興味が出て声をかけさせてもらったの。」

「そう？あまり意識はしてないんだけど。」

どうなんだろう。とエリアに顔を向けて答える。

「ちょっと篭って修行させててね。そろそろギルドで依頼こなさせようと思って今日は来たのよ。」

「そうにゃんだ。でもどんにゃ修行したらその年でそこまで腕を上げれるのか不思議にゃ。おっとこれは失礼。まだにゃのってなかったにゃ。アタシはタマ。ランクはB。後ろのパートナーはDランクで、名はシーリー、人間族。彼女のランクを上げるのに依頼を何するかこっちは話し合ってたにゃ。」

名を名乗られたので礼儀としてエリアとカリスの2人も名を名乗り挨拶する。シーリーの見た目も20才、カリスと同じくらいの身長なので170cmほど。こちらはブラウンの髪を後ろでまとめてポニーテールにしており、目も色はブラウンで堅実そうな雰囲気を出していた。装備は皮の鎧を着込み、左の腰にショートソード、背中にバックラーを背負っている。7割がた皮の鎧で覆われていて、頭、手は露出させているが、間接部は服の生地が見えている装備だ。

タマの語尾ににゃんにゃんとついているのでそれを聞いたカリスは心の中で感動していた。それを見て仕方ないわね。と言った風にエリアはタマと話すことにした。

「Dランクとなると簡単な討伐依頼をやっていくのかしら。こっちはこの子の初依頼をこなそうと思ってね。雑用系ばかりだけど、何かをこなすってことを覚えられるし。」

「うーん見た感じ実力的にはCランク以上に見えるけどこんな子もいるんだにゃ。初依頼がんばるにゃ」

また後で、と言ってD・Cランクの依頼の欄へ向かって行った。離れていった2人のシーリーの方はタマに、あの子そんなに強いようには見えないけど・・とか言っていた。エリアとカリスも依頼欄へ向き直る。

「なんか感動しちゃった。いろんな人と話したくなるね。」

「ふふっ。これから多くの人と話せるわよ。」

そう話つつ依頼欄に目を通す。Fランクの内容は街中に限られており庭の草取りや道の掃除、屋根の修理などがある。Eランクは街の外にある森で薬草や野菜の採取だ。街の見回りというのも有った。

「最初はどれも似たようなものね。数こなすには時間のかからないものを受けるのがいいから、突発的な依頼を受けましょう。依頼は1つずつしか受けれないし。」

じゃあ屋根の修理の依頼で。そう言って依頼書をボードから取ってカウンターへ持っていく。これお願いします。とカリスはギルド役員のサクラに依頼書をギルドカードと共に差し出す。

「はい屋根の修理依頼ですね。報酬は銅貨5枚になります。よろしいですか?それでは受理しましたのでこの建物まで行ってください。よろしくお願いします。」

そう言って棚から必要な地図と受理したギルドカードを受け取って、依頼主の家に向かった。家は2階建てでいろんな野菜や果物を売っている店だ。

「こんにちわ。ギルドに依頼された屋根の修理をしに来ました。」

「いらっしゃい。ああ、屋根の修理できてくれたんだね。ちょっと待っておくれ。アンタ、アンタ！」

「呼んだか？どうしたんだい。ああ、依頼を受けてくれた人たちか。必要なモノは用意してあるから頼む。こっちは店の方が忙しくて手がまわらなかったんだ。それに2階だから危なくてね。」

店員に声をかけるとこの店のお上さんだった。奥に居る店主を呼んでもらい、直す屋根の部分の説明を受ける。
2人は見せ裏へ行き必要なモノを持ってはしごを使い、屋上へ上がった。

「んーっと、ああこれか。んじゃ直ぐ始めよう。」

穴の開いている場所を見つけ、早速修理を始めた。確かに屋根は斜めになっているが、エリアとカリスは特に問題なく修理をこなして行った。1箇所穴あきと2箇所の崩れがあったのでその部分を補強してあげて作業は終了させる。そのまま飛び降りて店主に声をかけ、修理箇所を確認してもらった。店主も満足したようで依頼書にサインをもらいギルドへ戻る。

ギルドの建物に入り、カウンターにいるサクラへ依頼書とギルドカードを提出、これで初の依頼を完了した。ギルドカードと依頼料の銅貨5枚を受け取る

「お疲れ様です。初の依頼でしたけれど終えるのが早かったですね。とてもスムーズにいったみたいで良かったです。」

と、笑顔でサクラはカリスへ声をかける。それに、ありがとう。と答えてエリアと話し合い2つ目の依頼を受けることにしたので再度依頼ボードの場所に移動した。

「1時間くらいで終わったね。これくらい早く終わるなら一日3個くらいはこなせそう。」

「そうね。それくらいを1日の目標にしましょうか。午後から依頼受けだしてもそれくらいの数を夕方までにこなせるわね。」

1日のノルマを話しながら次の依頼を決める。次は庭の草取りにした。依頼料は銅貨2枚だったがFの依頼は大体銅貨5枚前後のものが多いのであまり金額は気にしなくても良さそうである。お金稼ぐならランクを上げた方が早い。

そうして庭の草取りの依頼もこなし初日はいろいろ説明も聞いていて日も傾いてきたので今日は帰ることにした。また街から森の小屋まで走って帰ったが、途中にいた動物を狩ったりキノコを採ったりして夕食の食材確保をした。

「F・Eランクの依頼は今日みたいな感じね。それほど難しくなかったでしょ。この調子でどんどんこなせるわね。」

小屋に帰って夕食を食べながら今日のことを話す2人。カリスは今まで人と接する機会が極端に少なかったので、ギルド役員や依頼主と話できることが楽しくて仕方なかったようだ。それをエリアは微笑みながら見守った。

次の日から午前中は修行の模擬戦。午後は街まで走っていって依頼を3個こなすといった日が続いた。４日経過し、お金が銅貨２０枚

超えたので銀貨にして2枚エリアにレザーSバッグ代としてコインを渡した。
その後も邪魔な木を切る、粗大ごみの移動、街中での宅配など依頼を受けていき、初の依頼から1週間でギルドランクがEへと上がった。

「おめでとうございます。それではギルドカードを更新しますので少々お待ち下さい。」

ギルド役員のサクラはカリスからギルドカードを受け取ってEランク登録をする。今回も数分で終わってギルドカードを戻してもらう。

「1週間で20件もの依頼を処理して頂いてこちらとしましてもとても助かりました。Fランクはランクこそ低いものの街の中でのことなので他のランクと比べても依頼の数が多いんです。依頼料のコインも少ないことから依頼を受けてくれる人が少ないんですよね。」

そう言って感謝を示すサクラ。確かに依頼をこなせばランクが上がる。そうすると上のランクをこなし始めるので、新規の人が来ないとFランクの依頼を好き好んで受ける人は稀なのである。それを聞いて、たまになら受ける様にしようかな。とカリスは思った。

「依頼者からも対応が早くて助かったと感謝の言葉が届いています。重ね重ねありがとうございます。」

「街の役にもたてたのならよかった。やっぱり喜んでもらえると依頼のやりがいもあるし。」

そういうカリスの隣でうんうん、と頷くエリア。カリスの言葉に満足しているようだ。そこへ依頼が終わってか、ギルドへタマ達が入

ってきた。Eランクへ上がったことを伝えるとさすがに上がるのが早い、と言われ、おめでとうと祝福してくれた。パートナーのシーリーも依頼を順調にこなしており、後数日すればCランク試験を受けれるとの事だ。今日はもう帰ると伝えてエリアとカリスは森の小屋へ帰ることにした。

第１０話（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

次回もよろしくお願い致します。ｍ（＿＿）ｍ

第１１話（前書き）

開いていただきありがとうございます。

今回の話は良い区切り場所が無かったので短めになっています。

第１１話

「あ、発見。あちこちにバラけてるけど比較的見つけやすいね。」

そう言ってカリスはしゃがんで足元に生えている目当ての薬草を採り集める。今日は午前中にエリアと模擬戦をして午後はムールの街まで足を運び、Ｅランクの依頼を受けている。内容は医療で使う指定する薬草を３つを１束として、２０束採ってくるモノだ。

気をコントロールすることを習得してから何かと探し物が便利になっている。場の雰囲気で、あ、ここにありそう。と覗くと本当にそこに有ったりするのだ。

薬草は街を南に出たところにある街道添いの森に生えている。ちなみにここら辺で西にいってもカリスが住んでいる場所の結界の範囲には入ってないので問題無くだれでも森に入れるとエリアは言っていた。

ギルドで説明を受けたとき、役員のサクラからその結界の話も出た。街の北西側の森は結界が張ってあり奥までは入れないと。街での認識ではその結界は変わったドワーフの里がある為に結界があるとのこと。昔ちょくちょくドワーフを見かけたそうだ。

何で変わっているかというと、ドワーフ族の冒険者が気になって入ろうとしたが、入ることは出来ず。閉鎖的な里なのだと結論づけたらしい。カリスは説明を聞いて納得し、２人は街の南向かった。

街の南門のところでタマ達の２人に会った。これからワーウルフという魔物を討伐しに行くそうだ。ワーウルフは南側の森に生息して

いるウルフと同じくらいで全長１ｍ全高６０ｃｍほど。ウルフより素早しっこい。団体になるとＤランクの冒険者では対処が出来ずにＣランクへと上がる。まぁタマがいるから大丈夫なのだろう。カリスは薬草の採取依頼を受けたことを告げ、がんばって！とカリスは言い門を出て別れたのだ。

南の街道を真っ直ぐ行くといくつもの山があり、そちらは街や村が近くにないので魔物も強いものが生息している。カリスが住んでいる森に現れたレッドグリズリーもそこにいるそうな。山の中にはストライダーと呼ばれるドラゴン種の下位の魔物で、羽が短く飛ばないのが特徴なのがいるが、いるがこれらはこちらから刺激しなければ比較的おとなしいらしく脅威にはなっていない。山中で生活するのを好むらしい。

ともかく、カリスはぶらぶらと周囲に意識を向けて採取の依頼をしているのだ。最後の１束分取れたところで獣が２匹こちらに走ってくる気配がした。ワーウルフが２匹こちらに向かってきているようだ。

「あら。街の直ぐ近くに来るなんて珍しいわね。きっとタマ達が取りこぼしたのかも。」

そう結論つけるエリア。それを聞きながら遭遇したら倒せば良いと特に気負いもせずカリスは思い、実際にこちらに走ってくる勢いのまま襲ってきたので、素早く蹴りを２発放ち２匹の首の骨を折り倒す。少ししてタマとシーリーが駆けつけてくるが追っていたはずのワーウルフ２匹が既に事切れているのを見てタマはすまなそうな、シーリーは驚きの表情を見せた。

「ごめんにゃ数が多くて２匹ほどに逃げられたのにゃ。」

耳をペタンと伏せて頭を下げ謝罪するタマ。シーリーは特に何も言わなかった。エリアは気にしないで、カリスが倒したし特に問題ない。と伝えるとシーリーは驚きで目を見開きカリスを見た。

「そうだったにゃ。ごめんにゃカリス。」

カリスも大丈夫大丈夫と手を振って答えるが、シーリーはそんなカリスに本当に貴方が倒したの？と聞いてきた。その問いに対しあっけらかんと、そうだ。と答えたことでシーリーは黙ってしまった。

シーリーはカリスはまだ採取などの雑用しか出来ないと決め付けている為に、一緒にいたエリアが倒したのではないかと疑っているのだ。それが本当なら悔しいので嫉妬している分でもある訳だが。第一ワーウルフ2匹がこちらに向かってから自分達が到着したまで大した時間差は無かったはずである。もし本当に倒したのがカリスなら一瞬で仕留めたその腕前は一流である。ここに着いたときにはもうワーウルフは事切れていたのだから。

そんなこんなをカリスに目を向けて考えていたシーリーだが、

「シーリー。どちらが倒したにゃんてどうでもいいにゃ。2人に迷惑をかけたのだからそれを謝ることが大事にゃことにゃ。」

「そう・・ね。迷惑かけたわ。」

タマの言葉にしぶしぶながら謝罪を入れるシーリー。シーリーとしては街の外にいるのだからそんな危険は当たり前だと思っていたが、タマが言うなら仕方ない。という感じがモロに出ている。

「重ね重ねごめんにゃ。とりあえずこっちの討伐は終わったから証拠部位を採りにいくけど、どうかにゃ？依頼完了報告が終わったらご飯でもご一緒しにゃいかにゃ？」

お詫びに。とタマは付け加え、エリアとしてはシーリーの態度が気に入らなかったが、カリスがタマと話したそうに好奇な目を向けていたのでその話を受けることにした。

「・・・いいわ。こちらも依頼の数は採ったところだしそれじゃあ先にギルドに戻って待ってるわね。」

そう言ってカリス達は一度別れた。ギルドまで戻り、カウンターにいるサクラへ依頼用紙と採取した薬草の束を渡す。お疲れ様でした。とサクラは言いながら受け取り、依頼完了の手続きをしてくれた。

お金もそこそこ溜まったのでレザーバッグを買う。銀貨5枚でそれを買ったことで今の手持ちは銀貨1枚も無くなったが、必要なものだと割り切っている。

依頼ボードで他にどんな依頼があるか見ながら時間をつぶしていると、タマ達2人が戻ってきた。タマはこちらに手を振りながらカウンターまで行って依頼完了の手続きをする。

「お待たせ。あちこちで倒したから部位採りに時間がかかってしまって申し訳なかったにゃ。ご飯食べるお店はこちらで決めていいかにゃ？ギルドから出て直ぐのところのにある『お肉プラス亭』ってお店がおいしいにゃ。」

名前からして猫の獣人が好物なお肉のお店を指定してカリス達を連れてギルドから出るタマ。よほどそこのご飯が好きなのだろう。目

が獲物を捕らえる目だ。カリス達も特に異論は無いので夕日の紅い空の下タマに付いて行く。

第１１話（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

ちょっと前に活動報告機能を使い始めました。自分自身、他の方の活動報告なんて見たことも無いので見なくても構いません。もし気が向いたら目を通してみてください。

次回もよろしくお願い致します。ｍ（＿＿）ｍ

第１２話（前書き）

開いていただきありがとうございます。

第１２話

お店に入り、空いているテーブルの座席に座る４人。満員とまでは混んではいないが半数近くの席は埋まっている。しばらくすると店員の男性が注文を聞きに来た。タマとシーリーは麦酒を頼み、カリスとエリアは果実の絞ったジュースを頼んだ。タマからお酒も勧められたがエリアがこれから帰るのに移動するからお酒は飲まない、と出来るだけやんわり断る。食べ物はお勧めの肉料理を４人前とサラダを３人前頼み、店員はカウンターの方へ向かい、直ぐにお酒とジュースを持ってくる。

「改めて今日は迷惑かけたにゃ。そのお詫びとして今日は奢らせて貰うからいっぱい食べて！それとアタシたちの出会いに・・乾杯！」

そうして肉料理とサラダが運ばれてきてタマは肉料理にかぶりついた。サラダに全く目が向いてないのでサラダを３人前にしたのはきっと自分は野菜を食べ無いからだろう。他の３人は肉料理とサラダを小皿にとって食べ始めた。

「あ、おいしい！濃い目の味付けになってて体動かした後には丁度良いね。それと量も多いし。」

そう言ってバクバクとタマに負けずに食べるカリス。エリアとシーリーは落ち着いてサラダから食べている。料理の感想を話しつつ半分食べたところで狩りの話になった。

「ワーウルフの討伐してたようだけど、２人はシーリーさんのランクを上げる依頼をしていたんだよね？その討伐対象をタマさんが倒しても問題ないの？」

カリスは昼間疑問に思っていたことを聞いてみた。それについてはタマとシーリーさんはＰＴ（パーティー）を組んでいるそうで、ＰＴで依頼を受けたそうだ。
それだとＰＴ内の一番上のランクの依頼が受けれるという利点があるとのこと。これは討伐慣れをさせるためにも結構行われていることでもあるんだとか。
逆にそっちもＰＴ組んでるのではないか？と聞かれたが特にそういうのはしていないと答え、エリアがカリスの経験の為にやらせていることだからできるだけ本人だけに任せている。と言った。
それに対しシーリーが少し不機嫌そうに一緒にいるなら同じことではないかと言ってくるが、エリアは実際自分は手伝ってはいないし、もし影で手伝っていたとしたらカリスが後々苦労することになるからそんなことはするつもりはない。と言い切る。

それを聞いてシーリーが自分の状況のことを言われているように感じ怒りながらちょっと席をはずす。と言って立ち上がり離れていった。

「すまにゃいにゃ。シーリーはちょっとプライドが高くて視野が狭いところがあるから・・。」

「いいわよ。こういう言い方させてもらったのもあの子の為になるでしょう。逆にこれが理解できないんじゃこの先やって行けないんじゃないかしら。」

タマの謝罪に対し、ちょっときつめにエリアはどうでも良いわ、と言う風に答える。カリスは言いがかりのようなことを言われていたが怒るではなくなんでそんなに他人のことを気にしているのかと首をかしげていた。自分としてはちょっと気になった質問をしただけ

だったのだけど、と思いながら。

「うーん・・。シーリーは今日でDランクの依頼は満了で次Cランク試験にゃのだけど、エリアの言うとおりちょっとアタシ的にも厳しいかと思ってるのにゃ。今日の討伐も数が11匹と多かったけれどアタシがいるし実際こなせないことではにゃかったのだけど、シーリーは1匹をやっとのことで隙を突いて倒しただけだったから。」

「ん?ワーウルフって苦戦するような魔物でもないよね?」

タマの話を聞いて、エリアから気のコントロールできないと生きていけないと聞いているカリスは不思議に思っていた。タマやシーリーが気をコントロールをしているように見えないのを訝しく思いつつ。

「それは彼方達から見たらそうにゃのかもしれないけれど・・。1匹だけならともかく、あれほどの数を相手にするとにゃると連携をとられて囲まれて大変にゃ。」

そうなのかなぁ、と思いつつ、ふーん。と呟く。エリアは特に気にせずお肉を食べていた。話が途切れたところで、タマを見ていたカリスはウズウズと欲望が沸き上がってきた。先ほどからピョコピョコ動いているタマの猫耳が気になって仕方がないのだ。

「ねぇタマさんホントにちょっとでいいんだけどその耳触らせてもらえないかな。」

できれば、いやほんのちょとでも!と言いつつお願いするカリス。エリアなんかは何言ってるのこの子みたいな目を向けている。多分興味を持っているのは判っていたが実際に触らせてくれなんていう

とは思ってなかったのかもしれない。

「にゃ、アタシの耳が気になるのかにゃ?そういえば初めてカリス達がギルドに来たときもチラチラ見てたみたいだけど、アタシの耳を見てたんだ。」

今日はお詫びでもあるし、といいつつ許可するタマ。が・・・。カリスはドッキドキワックワクでタマの耳に手を出し、心底傷付けない様丁寧に、優しく、と手に気のコントロールしてナデ始めたのがいけなかった。

サワッっと耳の後ろの毛波を確認するようになでた瞬間

「ふにゃっ!!」

とタマは声を上げて硬直してしまった。

そのままさわさわと耳の毛をなでるように愛でていると

「にゃふ・・ふぁぁ・・ん・・にぁぁぁ・・。」

と、顔を赤くし、目トロンと潤ませながら、ものすんごく甘々な声で鳴き始めた。涎が今にも垂れそうである。

「っちょっとそこまでにしておきなさい!!!」

それを見たエリアはすかさず止めに入ることになった。カリスが触るのをやめると

「も・・もっとぉ。」

とカリスに甘えてきたが、直ぐにハッと意識が戻り、涎が垂れていないか、じゅるり。と確認した。

「にゃ・・にゃんだか夢の世界に旅立った気分だったにゃ。」

と言いながら今だにトロンとした目でカリスを見つめるタマ。それにエリアはやりすぎ！とカリスを嗜めていた。

しばらく3人でどこの宿に泊まっている、とか明日はどうするとかペットは飼うつもりは無いかとか、熱心にタマが聴いてくるのをごまかし半分で流していると（最後の方は目が本気だった）、大分冷静になったシーリーが戻ってきた。シーリーはタマの様子がさっきと違うことに戸惑ったがお酒を追加し、またお肉を食べ始める。ちょっとやけ食いが入っていたのはご愛嬌だ。

そんなこんなで食事も終わり、店を出て分かれることにした。最後までタマの目はこちらを狙っているような目をしていたがとりあえず無視しておいた。

「獣人の人ってすごくかわいいね。耳もフサフサで気持ちよかったし。」

帰りながら言うカリスにエリアは、それは私への当てつけ！？と珍しく機嫌を損ねてカリスは首を縮こまらせた。その後姉さんもすごくかわいいって言ってもなかなか機嫌を直してもらえずエリアが口を開くことなく小屋に着き、寝る準備をしてそのまま寝ることになった。

カリスはどうしたものか、明日になれば機嫌は直るか、とか考えつ

つベッドの中で目を閉じていたが、わざわざ気配を消してもぞもぞと布団の中にエリアが入ってきてガバッとカリスに抱きついてきた。

「まったくカリスは・・。ああいうことを他人にするものじゃないのよ?耳が触りたいなら私の耳をいくらでも触らせてあげるんだから!・・それとも私の耳は触りたくない?。」

ギュッと抱きしめられたカリスは嫉妬したような声のエリアに少しびっくりして反応できずにいたら、後半は不安な声で問われてしまった。

「そんなことないよ!姉さんの耳も綺麗ですごくかわいいよ。」

そう言って横に伸びている綺麗な耳にタマに触ったのと同じように優しく、丁寧に触り、撫で、クニクニした。

「あっ・・ふぁ・・はふ・・。」

真っ赤な顔で目をトロンとさせながらエリアは甘々な声を出して気持ち良さそうにしている。その夜、カリスは触り心地のいいエリアの耳を心行くまで愛で、堪能した。エリアもまんざらでもなさそうであった。

第１２話（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

次回もよろしくお願い致します。

第１３話（前書き）

開いていただきありがとうございます。

第１３話

次の日エリアはカリスより先に目を覚ました。昨夜の幸せな時間を思い出したのか顔が赤く、目元もトロンとしている。

（ああ私のカリス・・。あんなに素晴らしいテクニックを覚えるなんてなんてイケナイ子なのかしら！このまま成長したら獣人族全てをペットにしてしまいそうで怖いわ・・。いえ・・獣人族に限らずエルフ族の未来も危ういわね。これは何かしらの対応策を考えなければ。）

自分も夢心地を味わったからかエルフ族の心配もしながらも体は正直なのかカリスをギュッと抱きしめる。ああ幸せ・・。とか言いつつカリスの匂いをエリアは胸いっぱい吸い込むのだった。

カリスが目を覚まし何事も無く開放するエリア。とりあえず朝食をとって午前中の模擬戦をこなしてからムール街へと向かった。

「模擬戦してても気の流れのタイミングについてくるようになったわね。初めは攻撃から防御に入る際に気の流れが遅れて雑だったけれど、流れに無駄がなくなってきたわ。」

森を出て街までの道のりで2人は模擬戦の話をしている。鬼ごっこの時は攻撃のみ。防御のみで気の流れも集中しやすかった様だが、模擬戦になってから攻撃中に直ぐ攻撃した箇所ではないところに気を流して防御しなくてはいけなくなったりで瞬間的な気のコントロールが甘かった。それもここ最近ではエリアの攻防についていける位にはなったのだ。

「うん、段々とね。だってしっかり防がないと痛いし。」

さすがにエリアの攻撃は淀みが無いので。気のコントロールが間に合わないと防御してもかなり痛い。出来れば全部避けたいところなのだがそれをさせてもくれないのである。そうやって話している間に最近では顔見知りになった門番へ軽く手を上げて挨拶しながらギルドカードを見せ、ムール街の中へ入っていった。

そのまま冒険者ギルドまで歩いていき中へ入ると、タマが中央に並んだテーブルの座椅子に1人で腰掛けていた。周りにシーリーの姿は無い。挨拶ながら近づいてシーリーはどうしたのか聞くと、Cランクの第1試験を奥でやっているそうだ。

Cランクの試験は第1・第2試験とあり、まず第1試験ではBランク以上のギルド役員の人がその人の実力を実際に模擬戦形式、または技の確認をする。これは担当になる役員の人が受講者の実力に不安と感じた時は実際に模擬戦をしてどれくらい出来るか見るのだが、見て直ぐわかるくらい実力のある受講者は技を見せてもらうだけで終わる。それに合格すると第2試験としてCランクの依頼をギルド側から提示され、基本1人でそれをこなす事になる。その時第1試験を担当した役員も同行する。何かあったときに対処できる為と、不正が無いか確認する為だ。

Cランクからは討伐の依頼が多くてこういうシステムにしているが、その一番の理由はCランクの依頼が多少なりともこなせるくらいの実力がないと死に至るので、実力が有ってのランクになる。Dランクの討伐依頼がこなせる程度の実力では話にならないのだ。実力が足りずにCランクになってから強くなろうとしても未来は無いのである。

「依頼数は足りているけど、それに実力がちょっと追いついてにゃいから残念だけど今回はダメだと思うんだにゃ。」

ＰＴ仲間にしてはあっさりしている様に感じて質問すると、タマは個人的にＣランクになる為に手伝ってほしいと依頼されたらしい。元々タマは旅をしていてここで路金を稼ぐ為に依頼を受けていたそうだがその時に声をかけられたとか。実力のことも助言はしていたのだが、依頼の数をこなすのが優先、とシーリーは言っていてタマの助言にそこまで耳を傾けなかったと言う。

「とりあえずシーリー側の依頼内容ということでそれにしたがって手伝ってたのだけど、これはアタシには判りきった結果なんだにゃ。」

そうなのかと。頷きながら聞くカリス。タマはそんなカリスに結構お熱な視線を向けているが、カリスはなんだかかわいいなぁと思って見ているのだった。ちなみにエリアはその話の内容はどうでもよさそうに聞き流している。

そうやって3人で椅子に座り話していると、訓練所からシーリーと試験官と思われるギルド役員の男性が戻ってきた。シーリーが悔しそうに顔を歪ませて下を向いているところを見ると、すでに不合格の結果を受けているのかもしれない。その後カウンターで少し話ししてからシーリーはこちらに歩いてきた。

「まったくやってられないわ。どうしてＣランクの依頼をこなしてた私が不合格にならないといけないのよ。」

そういうシーリーにタマはため息を付きつつも依頼の結果より実際の実力をつけなければＣランクには上げれないと根気良く説明する。

カリスが思うにタマは結構面倒見がいいのかもしれない。シーリーが自分勝手なことを言っているように感じ、そう思った。

「Cランクの依頼をこなしていたんだから実力なんてそれでわかりそうなものなのに。きっとあの試験官の見る目が無いのよ。ちゃんとした人なら合格していたわ。」

そんなことを言い、タマの言葉を聞いていない。シーリーはタマにまたCランクの依頼を受けましょうと言うが、タマは断った。

「ちょっと、Cランクになるまでが依頼内容だったでしょ！それなら付き合ってもらわないと！」

「それは違うにゃ。Cランクになれるまでの依頼数をこなす、と言うのが依頼内容だったにゃ。それに最初にも、途中でも、昨日も、依頼の数だけでなく腕も上げにゃければダメだと言ったはずにゃ。それを聞かず数だけこなしていたのはシーリー自身。アタシが受けた依頼はここまでにゃ。」

シーリーの荒げた声にキッパリと断りを入れる。面倒見は良いが、けして甘くは無い。まぁCランク以上の冒険者となれば、そうしなければ自分自身すら守れなくなる場合も出てくるのでタマはしっかりとした冒険者なのだろう。

「・・わかった。もういいわ・・！」

拳を握り締めて身体をフルフル震わせ、悔しい顔をさせながらシーリーはそう言ってギルドを出て行った。タマはため息を付きつつ、一度突き放すのもあの子の為にゃ。と呟く。

「それはそうとしばらくカリスについて行ってもいいかにゃ？もちろん手伝いするわけじゃにゃくて、依頼こなすところ見学させてほしいにゃ。」

「え、いいk「ダメね。それに採取とかそういう依頼ばかりだかりだもの。見ても面白くはないでしょう？」・・・あー・・。」

カリスが了承しようとしたが、エリアが即座に却下した。まぁタマの目がさっきからずっとカリスを捕らえていることに多少危機感を持っているのだろう。（主に貞操と言う意味で）

「俺としては他の種族の人と話する機会が増える訳だし嬉しいんだけど、ダメかな？姉さん。」

「・・・はぁ。私としては反対なのだけど、仕方ないわね。けれどタマ、付いて来るのはいいけれど何かを要求されても聞かないからね。」

カリスの様子をみて、他意は無いだろうと思い直し溜め息を付きつつタマに了承する。

「ありがとにゃ！邪魔しないから暫らくよろしくにゃ！」

と、目を輝かせながらタマは喜んでカリスの手を取ってブンブン上下に振った。それを見てエリアが溜め息をついたのは誰も責められないだろう。

第１３話（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

次回もよろしくお願い致します。

第１４話（前書き）

開いていただきありがとうございます。

第１４話

タマが着いて来ることになって、さっそく依頼を受けた。本日の依頼はボロ屋の解体作業だ。

街の一角で古くなった建物を崩し、新しく建て直すから解体に人手が欲しいそうだ。さっそく現場に３人で向かい、責任者に話しかける。作業自体は今日から始まった様だ。３人ほどが建物の周りを先に片付けている。

「こんにちは。ギルドの解体依頼を受けて来たカリスです。」

「おっと、もう来てくれたのか。助かるよ。俺は今回の責任者を任されているトルトだ。よろしく。手伝いは３人かい？」

カリスが現場で指揮をしていた人に声をかけ、互いに名をなのった。トルトは３０才くらいで、身長１８０はありそうだ。頭はスキンヘッドにしているが、目元は優しげなので威圧感はない。カリスらが３人で来たことから３人で手伝ってくれると思ったらしい。

「いえ、依頼を受けたのは自分だけで２人は付き添いです。」

カリスがそう訂正したところトルトは残念そうにしたが、依頼を受けて来てくれたことを思い出し、丁度これから解体作業で明日の夕方位までに終わらせる、と説明するトルト。建物自体は一階建て天井部屋のある建物なのだそうだ。

とりあえず５人でやると聞いた時にカリスはエリアに、サクッと終わらせちゃ不味いのか小声で相談したところ、好きにやってみなさ

い。と言われたのでトルトに提案してみる。

「解体するのを早く終わらせられると思うので任せて欲しいのですが、どうでしょうか？」

それを聞いたトルトは何を言ってるんだとカリスをみるが、仮にも彼は冒険者だ。思案した後、本当に出来るのかと真面目に聞いた。カリスは解体するのに何か気をつけることがあるか確認し、中の物は全て移動済みだから全部崩すだけと返事をもらったので、皆には離れてもらいカリスは建物へ近づいていった。

皆がどうやって解体するのか見守っている中、カリスは腰の後ろに取り付けているナイフを右手に持った。そのままナイフに気を流し近くにある柱の根元をスっと横に斬りつける。

それを見たトルト達作業員はそんなもんでは斬れないだろうと訝しみながら見ているが、タマはカリスのやったことに驚愕した。タマにはあれだけの動作で周りに衝撃を与えることすらせず、倒れもせずに柱が斬れたのが分かったのだ。

その後は柱の上側もジャンプして斬りつける。他の柱も同様に斬っていった。もちろん建物の中の柱も。その後カリスは最初の柱に戻りナイフをしまってから柱に手を付ける。身体に気を流して一気に押した。

「破っ！！」

ドンッ！！ドドドドドッッ！

外側の柱が内側に吹っ飛び、吹っ飛んだ柱が中の柱に当たりその勢

いでみるみる内に建物は崩れていく。かなりの土埃が舞い、段々と土埃が晴れていくとそこには瓦礫の山が出来ていた。

作業員とタマは目をむいて惚けていた。エリアは満足そうに微笑んでいる。

「こんな感じで良かったですか？」

振り返ったカリスはトルトへ声をかけるが、トルトは目の前で起きた事が信じられなかった様で目ん玉が飛び出そうな顔をして放心したまま気づかなかった。その様子にカリスは困っていたが、タマが放心状態から1番に回復して声を出した。

「す・・すごすぎにゃ。どうやったらこうなるのにゃ！柱を斬ったのも神業だったのにゃ！」

タマは興奮しすぎて耳と尻尾がピンッと立たせながらその場でピョンピョン飛び跳ねている。

「た・・・たまげた。まさかナイフとその身1つで家一軒一瞬で解体しちまうなんて・・・！」

再度カリスはこれでいいか聞き直し、トルトからOKをもらう。これなら明日の午前中には瓦礫の片付けも含めて終わりそうだ、とのこと。かなり早く解体が終わったので、夕方までカリスは瓦礫の片付けをした。

「いやはや今日はえらいモノを見せてもらったよ。魔法とかならともかくナイフ1つでだもんなぁ。それに重い瓦礫も軽々持ち上げるし、瓦礫の片付けの方も今日中に終わってしまった。ありがとうカ

リス君。こんなに早く終わるとは思ってもみなかったよ。」

トルトは感謝の気持ちを込めてカリスにお礼を言った。報酬は多めに出そう、と付け加えて。

「いえ、お役にたてて良かったです。次の機会もありましたらよろしくお願いします。」

カリスも丁寧に挨拶し、ギルドへ戻ろうとした。・・・が。

「カリス今の技教えるにゃ！どうやったのか知りたいにゃ！」

タマが目を輝かせ、カリスに飛び掛る勢いで詰め寄って言って来た。

「タァマァ。」

ガシッ！

「フギャ！」

カリスに詰め寄ったタマへ、エリアが即座に首根っこを引っつかんで止めた。変な声を出したと言うことはそれだけ痛かったのかもしれない。

「最初に言ったこと、もう忘れてしまったのかしら?そんな猫にはお仕置きしないとイケナイわよねぇ?」

「べ、別にカリスの邪魔はしてないにゃ！依頼はもう終わっているにゃ！」

顔は笑っているが超大真面目に殺気の篭った目で言うエリアに、タマは必死に言い訳する。

「何かを要求してもこちらは聞かないって言ったはずよね・・？」

「ヒャニャッッ！！」

脂汗ダラダラでエリアから目を逸らし、何とか逃げれないか頭をフル回転させるが、

「とりあえず・・・。言葉で判らないようだし、お仕置きね♪」

「にゃっ！ちょっ、ちょっと待つにゃ！！アタシが悪かったにゃ！！エリア話聞くにゃ！ちょっまっ・・・ニャッッー！！」

「カリス貴方は先にギルドに戻ってなさい。私も猫の躾が終わったら戻るから。いいわね。」

カリスが2人のやり取りに呆けているうちに、あれよあれよと話は進みいつしか2人はいなくなった。

カリスはギルドに戻り、カウンターに居るサクラの所へ行き、今日の依頼書を渡した。

「お疲れ様です。あら、お戻りは1人ですか？エリアさんとタマさんの姿が見えませんが。」

一緒に行動していた2人が見当たらないのでサクラはカリスに聞いた。その問いに、猫の躾だそうです・・。とだけ答えて依頼完了の手続きをしてもらう。依頼書の方にトルトが報酬大目にするサインを書いてくれたので、サクラより1．5倍の報酬を受け取って依頼は完了した。

その後、背後のテーブル席で身体中に包帯やら何やらで怪我の治療をした後のある、うな垂れている女性の下へカウンターで果実ジュースを2個買ってカリスは歩き出した。

第１４話（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

続き書いてたらエラーで消えた・・一話分消えて書き直しってつらいですね・・。

次回もよろしくお願い致します。ｍ（＿＿）ｍ

第１５話（前書き）

読んでいただきありがとうございます。

第15話

ジュースを2個持ってカリスは傷を負った部分の治療跡のある、うな垂れている女性のテーブルに歩いていき椅子に座った。そしてそのままジュースを女性の前に差し出す。

「・・何よ。笑いにでも来たの？」

カリスが席に着いたことで、女性、シーリーは暗い顔を上げてカリスに言う。しかしカリスは真面目な顔で首を横に振るだけで答えは返さなかった。

「無様よね・・あれだけ自分で虚勢張っておきながら一人じゃこの様なんだもの。笑いたければ笑えばいいじゃない！」

何も言わないカリスにシーリーは八つ当たり気味に叫ぶ。しかしカリスはジッとシーリーを見ていた。カリスにはシーリーが心で泣いている。と判っていたから笑うことなんて一切出来ないと思っていたし、彼女は周りに馬鹿にされないように自分なりにがんばろうとしていたのだろう。と考えていた。

実際そのカリスの考えは当たっていた。女性の冒険者は男性に比べて少ない。人間族ならなおさらである。各種族の中でも力は弱い方の人間族であり、その中でも女性は男性に平均的な力は劣りがちなのは仕方の無いことである。しかしシーリーはそのことを理由に冒険者になると決めた時周りから馬鹿にされた。だからこそ、見返してやろうとランクを上げようと必死だったのだ。

カリスは必死になっている理由は知らない。しかし人生をかけて必

死にがんばっている彼女を笑うことなんて、馬鹿にすることは出来ない。

「シーリーさんはがんばってるよ。俺から見てもすごくがんばっているように見える。でもそれだけに周りからの視線を気にしすぎちゃってると思うんだ。もっと肩の力を抜けたらって思うんだけど、難しいかな・・？」

あまりこういうことには慣れていないカリス。それでも折角知り合えた人が落ち込んでいるのは見ていられなかった。

「貴方はいいわよ・・。師匠もいるし、腕もあるもの！私なんて全部自分だけで・・！」

「確かに姉さんが戦い方を教えてくれた。でもそれでも、がんばらなければ誰が居ても居なくても強さは得られないよね？姉さんは最初から居ていろいろと教えてくれたわけじゃない。ここ2年くらい前からだもの。それまでは俺も自己流だったんだ。

だからシーリーさん、

まだランクの低い俺だけど
ＰＴ（パーティー）組んでもらえないかな？」

「え・・！、それは・・・。それに彼方にはエリアが居るじゃない。腕だってタマが認めるほどなんだから。」

シーリーはそんなこと言われるとは思っておらず頭の中がパニクッていた。

「姉さんは本当に付き添いなんだ。腕も確かにシーリーさんよりは俺の方が上だと思う。でも俺さ、ずっと今まで森の中で生活してて、その森から出たのちょっと前が初めてだったんだ。だから世間のことなんて姉さんに聞いた話の事くらいの知識しか持ってないんだ。だから先輩として依頼を受けながら色々と教えてほしい。ダメかな？シーリーさん。」

シーリーにカリス側にもＰＴを組むメリットがあるからと思ってもらえるように話す。

「もちろんずっとじゃなくて構わない。俺の方の目標もこの街でＣランクまで上げることだから、それまでを期間にＰＴ組んでもらいたいんだ。その間はシーリーさんの稽古も付き合うからさ。」

「そんなの・・・・・。」

そう言って黙ってしまうシーリー。それでもカリスは根気良く目を見て、目線を逸らさずにジッと待った。

「・・・いいわ。ＰＴ組んであげる。・・・ありがとう。」

シーリーは少し涙を目元に貯めながら、カリスの申し出を受けることにした。最後の言葉は小さかったがカリスには届いたようで、優しく微笑まれた。それを見てシーリーは顔を赤らめてそっぽを向いた。

今までシーリーにＰＴを誘ってくれる人も、対等に向き合ってくれる人も居なかったのでカリスと話をし、自分の存在を認めてくれることを言ってくれて心が救われたように感じたシーリーだった。

「それと・・さん付けはいらない。これからＰＴメンバーなんだから。」

「ん。わかったシーリー。よろしくね。」

「・・よろしくカリス。」

そう言ってカリスは右手を出し、握手を求め、シーリーも恥ずかしながらも右手を出して握り合った。

とその時、

バンッッ！！

「話は聞かせてもらったわカリス！！！」

ギルドの建物の扉を勢い良く開けて部屋の中全体に響くほどの大声を出しながら入ってきたのはカリスの姉ことエリアだった・・。

エリアはそのまますごい勢いでカリスに迫ったかと思うとタックル気味に抱きついた。

「ああ・・・。カリス。いつのまにここまで成長するなんて！！さすが私のカリスだわ！！」

抱擁したままの状態で瞳を潤ませつつカリスにほお擦りするエリア。

「わっ、姉さんいきなりどうしたのさ！ちょ、皆見てるって！」

「周りのことなんてどうでもいいわ！私のかわいいカリスがこんなにも成長したのよ！これを喜ばずにいられますか！！」

そう言っていつまでもエリアは離そうとしなかった。

「あ、それとシーリー？」

「はっはい！」

カリスを抱擁したままエリアは真顔で真剣な声を出してシーリーに

話をする。

「カリスの決めたことだからＰＴ組むのは構わないけれど、カリスに手を出したら・・・判ってるわね？」

「姉さん大げさだって。シーリーとはＰＴ組む仲間になったんだからｒ「カリスは黙って！」・・はい。」

目を凄めてシーリーに言うエリアにカリスがやんわりと言うが、途中で遮られた。

シーリーは顔を青くして背中に嫌な汗を流しながらなんとか、判ってます・・。と搾り出すように返事をする。

「カリスも2人きりで暗いところとかに連れて行かれないように注意しなさい。」

食べられちゃうんだからね！とエリアは言うが

（あなたじゃないんだからそんなことはしません！・・・多分）

とシーリーは心の中で突っ込みを入れていた。

その後、シーリーは怪我人の為、カリスがギルドランクＤになるまではお休みすることにして、カリスがＤランクになったら一緒に行動することで話はまとまった。

話に一区切り付き、カウンターでエリアの分のジュースも買って３人で飲んでた時にカリスは一人足りないことに気が付き、

「あれ、タマさんは？」

「ああ、躾が終わったから眠らせてあげたわ♪」

笑顔で言うエリアにカリスは、あれ？宿でやってたのかな？と思いつつエリアがスッキリとした笑顔で話を切り上げたので納得しちゃうカリスだった。なぜかシーリーは寒くは無いはずなのに、青い顔してブルブル震えていた。

その夜ムール街の警備兵が深夜巡回をしている時に、とある木の前を通りかかると木の枝から何かが紐に縛られてぶら下がっているのを見つけるのだが、それはまた別のお話・・・。

第１５話（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

次回もよろしくお願い致します。ｍ（＿＿）ｍ

第16話（前書き）

開いていただきありがとうございます。

予定通り、本日2話目の投稿になります。

第16話

ムール街の警備兵が巡回時、木に吊るされているモノを見つけている時間。

カリスは寝る前にベッドの上で胡座を組み瞑想しながら考え事をしていた。今までと同じ様に鍛錬するだけでは姉さんには追いつけない、と。

今までの経験の差がかなり大きい為に、気のコントロールで劣るのは仕方ないが、明らかに威力の違いがある。瞬間的な一撃とかなら気のコントロール不足で威力が出ないと言うのはあるが。

そう考えた場合、一撃の威力を上げるにはどうすればいいのか・・・。気のコントロールをして、攻撃する部分に多くの気を流せば威力は上がる。それは分かりきったことだ。ならいつもはどの位の気を流しているかをカリスは自問した。

姉さんからの攻撃の際は、来ることがわかってから防ぐ部分に当たるまでの時間で流せるだけ流している。逆に攻撃の際は、攻撃を仕掛けてから姉さんに当たるまでの時間に流せるだけ攻撃する部分に気を流している。

となるとやはり気のコントロールの速さで威力の差が変わる・・・もちろん上限はあるが。

ならもし、時間を気にせず拳に流せるだけ流したらどうか？

そう考えた所で、瞑想を中断して右手拳に気を流しはじめる。そん

なカリスの様子をエリアは自分のベッドの上で黙って見ている。

身体中の気をできるだけ流した所で右ストレートを軽く出して様子をみると、ここまで流せれば姉さんと同等くらいの威力かと目星を付ける。

しかしここまで流し込み、拳に気を溜めるにはまだ時間がかかりすぎてしまっている。今流した分の威力はなんとか出したい所なんだけど、と考えているとエリアが助言してきた。

「力は一ヶ所に圧縮・凝縮すればするほど増すわよ。」

カリスはエリアの方を向くと、エリアは優しく微笑んでこちらを見ていた。

試しに拳に集まり大きくなっている気を小さくなる様に凝縮させてみた。するとカリスは自分の拳の密度が恐ろしいほどに濃くなっているのが分かった。恐らく凝縮せずただ気を溜めただけなのと、溜めて凝縮させた場合では軽くみても倍以上の違いがあると、カリスは感じた。

だかこの気を凝縮させる技はかなり難しいのか、数秒しただけでカリスは汗だくになっていた。

ふぅ・・・。と溜め息を付きつつ気のコントロールを解除する。今流した気の量は普通の状態で流せるだけ拳に流したモノだ。それなのに今までの全力の威力をすでに凌駕していたと思う。となると気を最高までに高めて一ヶ所に集め、凝縮したら・・・どれだけのモノになるのだろうか。そしてそれを指先や剣先でやったら・・・。

その様にあれこれ色々と考えて、出来ることが分かり一段とやる気を出すカリスだった。

なんだかんだで、気のコントロールをもっと早くしないとダメだと結論だしつつ。助言をくれたエリアにお礼を言おうと顔を向けたがすでに寝ている様なので、小さな声で姉さんありがとう。とだけ伝える。

カリスは井戸水を湿らせたタオルで、かいた汗を拭いて眠りについた。

エリアはカリスのお礼に口元をほころばせていた。

第１６話（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

次回もよろしくお願い致します。ｍ（＿＿）ｍ

第17話（前書き）

開いていただきありがとうございます。

第17話

シーリーとPT（パーティー）を組むことになった翌日。午前中では昨夜考えていたことを、エリアからやってみなさい。と言われた為、実際に気を高め右拳に流して凝縮させてみた。出来たモノを見ると想像以上に強力なことが分かった。エリアもそれを見て満面の笑みで頷いている。が、しかし10秒くらいしたところで気の制御が出来なくなり凝縮が解除された。

消耗が激しいようだ。しかも凝縮し終わるまでにも10秒ほどかかってしまっている。現状では溜めが必要ということになるので、戦闘での導入は難しいだろう。エリアが言うには精進あるのみ、だそうだ。本日は模擬戦は行わず、気のコントロールにて実技をしつつ話し合う。午後になり、カリスとエリアはギルドへ向かった。

カリスは昨日の段階でEランクの依頼は13個こなしており、残り7個でDランクへ上がれる。1日に早くて2個づつこなしたとして4日かかる。しかしシーリーは休みが必要なのでそこまで急いでこなすことは無いだろうと考えていた。ちなみに1日になぜ早くて2個なのかというと、Fランクの依頼よりEランクの依頼の方が時間がかかりやすいモノが多いからだ。

ギルドの扉を開けて入るとテーブル席にはシーリーが座っており、カリス達に気が付くと立ち上がってこちらへ来た。

「こんにちわ。いつも午後から来てるって聞いたから来るのを待ってたわ。1人で宿に居てもつまらないしね。」

そう挨拶する。つまるつまらない以前の問題だと思って怪我の容態

を聞くと、動けないほどじゃないからここに居ても宿に居ても同じだとか。昨日の別れ際でもカリスが感じたことだが、シーリーの雰囲気は随分と変わった。刺々しさが無くなって柔らかくなった様だ。今も笑顔で話ししている。カリスはその変化にうれしく思い、ＰＴに誘ってよかったと満足していた。

３人で話しているとギルドの扉を開けてタマが入ってきた。カリスが挨拶して声をかける。タマはカリスを見て笑顔になるが、隣に居るエリアに気が付き、そのまま固まってしまった。

「ちょっとタマさん大丈夫・・？姉さんだってもう気にしてないからいつも通りで大丈夫だよ？」

そう言ってカリスはタマを気遣うが、動き出したタマはちょっぴり震えながらエリアから隠れるようにカリスの陰へと移動した。震えているタマがすごくかわいく、年上に感じなかった為に大丈夫大丈夫と言い聞かせてカリスはタマの頭を優しく撫でた。

「ふにゃあ・・ふぁ・・。うう・・。カリスは優しいにゃ・・。」

その気持ちよさに目をトロンとさせつつ涙を流しながらカリスの胸で泣き始めてしまった。相当昨日のことが恐ろしかったのだろう・・・。エリアも、まったくしょうがないわねぇ・・と溜息付きながら肩をすくめた。

いつの間にか泣き止み、持ちよさそうにカリスの胸にほお擦りしているタマにエリアは冷たい目を向けていたが、そこへシーリーがタマへすまなそうに声をかけた。

「タマ・・その・・昨日はごめんなさい。その前もだけどあなたが

助言していたことをまったく聞かなかったことも含めて謝罪するわ。」

「にゃ！シーリー・・あれ？雰囲気が変わったかにゃ？何があったにゃ？」

シーリーの声でハッと我に返りカリスの胸から離れてシーリーを見たタマは、雰囲気が変わった彼女を不思議そうに見ていた。

「昨日あなたがえっと・・躾？されている時にカリスが声かけてくれて親身になって相談に乗ってくれたの。それで私にＰＴを誘ってくれたのよ。今直ぐＰＴ組むわけじゃなくて、彼がＤランクになってからになるのだけど、一緒にＰＴすることになったの。」

頬を染めつつ話すシーリーに話を聞いていたタマは次第に目を見開き驚きの表情になっていった。ちなみにシーリーの中での昨日のやり取りは、かなりの美談になっているようだ。カリスに向ける目が恋する乙女である。カリスは苦笑して聞いていたが。話しを聞き終えたタマは直ぐにカリスへ向き直り叫んだ！

「ずるいにゃ！シーリーだけＰＴに誘うにゃんて！！アタシもＰＴ組みたいのに！こうなったらカリスはアタシのご主ｚ「・・タマ？」ヒニャッッ！！・・・ナンデモナイニャ。」

タマが暴走し出したが、エリアの冷えた殺気の入った声を聞き、暴走は沈静化した。タマは冷や汗ダラダラである。そんなタマの頭をカリスは撫でてあげて、タマに謝罪するのであった。

そんなこんなで一段落したところ今日の依頼を受けて仕事をこなし、１週間後晴れてカリスはギルドＤランクに上がったのだった。その

間午前中は気の凝縮の練習ももちろん行い、精進を重ねた。

カリスがDランクになってシーリーも怪我が癒えてきたので、今日から一緒に依頼を受けて行動することになる。が・・本日はあいにくの雨の為、ギルドに集まった面々は依頼を受けるのはやめて、シーリーの鍛錬をすることになった。結果的にはシーリーの実力、動きが見れるのでカリスとしても丁度良かった。もちろんカリスとエリアは午前中雨の中模擬戦を実施している。

４人でギルドの訓練所へ移動してカリスとシーリーは軽く手合わせをする。訓練所の広さは小さな体育館程度はある。もちろん天井はそこまで高くは無いが。訓練所には他にもトレーニングする人がちらほら見受けられた。カリス達同様手合わせしている人も。

「っはぁっはぁっ・・ふぅ。カリスはすごいわね。全然息が切れる様子もないし、動きも滑らかだもの。」

シーリーは訓練所においてある７０ｃｍの長さの木剣を右手に、左手はバックラーを手にしてカリスと対時している。激しく動いたのか肩で息をしていた。カリスの方はナイフ形の木剣を使い落ち着いてシーリーの前に立ち、動きを観察している。

「とりあえずここで一息入れるにゃ。シーリーの動きについてカリ

スも大体判ったと思うし。」

「ん。そうしようか。シーリーもいいよね？」

タマが休憩を提案してそれにカリスも賛成する。カリス達は壁際に歩いていき、腰を下ろすことにした。休憩がてらカリスはシーリーの動きについて気が付いたことを述べていく。

「シーリーはバックラーを構えているからだろうけど、剣を腕だけで振ってしまっているんだ。確かに防御しながら攻撃できるのは便利なのだけど、攻撃の時に盾に意識を割きすぎて攻撃が中途半端に、防御時は攻撃を狙いすぎて中途半端に、てな具合になってるんだよね。攻撃か防御の1つづつやっていった方がいいかな。」

「中途半端か・・。自分としては攻撃と防御両方出来て良いと思ってるんだが。」

カリスの言葉に落ち込みながら自分の考えを言うシーリー。

「うん。両立できるとそれはなかなかのモノになると思うよ。でも今は二つ出来ることがあることが動きを翻弄してしまっている感じかな？だから攻撃・防御、1つづつ習得して行こうよ。」

「そっか、そうだな。いきなり両立して、なんて欲張りのやることだったな。有難うカリス。」

カリスのフォローで考えを改めて笑顔になって返す。そんな2人のやり取りをエリアは微笑みながら頷き見守っていた。エリアとしては2人が仲良くしているのはアレだが、カリスの成長がうれしいのだ。

そうしてシーリーの鍛錬の方向性を決めて、動きをカリスとタマで色々と指導した。タマの教え方はさすがはBランク、すごく丁寧に教えており、シーリーも理解しやすかったようで、終止頷いていた。シーリーは2人に教えてもらった動き、身体の使い方を覚える為、後半は手合わせせずに同じ動きを何度も繰り返す。それを見ながらタマとカリスが話しを始めた。

「それにしてもカリスの動きはすごかったにゃ。あんなに無駄なく滑らかに動くにゃんて。戦ったらアタシでも負ける気がするにゃ。」

「ん～。どうかなぁ、タマさんは獣人族で身体能力は人間族よりも高いんでしょ?それにまだタマさんの気をコントロールしてるところ見てないし、そうしたら俺なんかが勝てるとは思えないけれど。」

カリスの言葉を聞いていたタマは後半の部分を聞いたところでピタッと固まった。それに気が付きカリスは、タマさん?と声をかける。それを隣で聞いていたエリアは額に嫌な汗を流しながらちょっと離れつつ壁に目を向けた。

「い、今気を流すって言ったにゃ?もしかして、カリスは気のコントロールが出来る・・?」

「え?うん、姉さんに教えてもらったから。それに皆出来るって聞いてたから何とか覚えなきゃって思って。」

「にゃっ!!にゃんだってぇ!!!」

カリスの言葉にタマの上げた声が訓練所に響き渡った。

第17話（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

次回もよろしくお願い致します。m（＿＿）m

第１８話（前書き）

開いていただきありがとうございます。

第１８話

カリスの返答を聞いて猫耳と尻尾をピンッと立たせながら、バッ！！っと勢い良くエリアに顔を向けるタマ。それを見てカリスは頭飛んじゃうんじゃないかと心配したほどだ。その声にびっくりしてシーリーも動きを止めて、こちらに目を向けてきた。

他に鍛錬している人もタマの声に反応してこちらに目を向ける。それに気が付き声の大きさを落としてエリアに聞いた。

「エ・・エリア・・さん?ど、どういうことかにゃ。皆氣を使えるという発言もそうにゃけど、カリスに教えたというのは・・。」

それってもちろんエリアさんも使えると言うことに・・。と言うタマの顔は強張っていた。いつのまにかエリアを、さん付けで呼んでいる。

「氣?気のコントロールの事?」

タマの言葉に知らない言葉がでてきたのでカリスは聞いてみた。

「そうにゃ。気をコントロールすることを氣を使う、と言われているにゃ。」

「・・あー、そんなこともあった・・かな?」

「はっきりするにゃ!是非聞きたいにゃ!」

そっぽを向いているエリアはなんとも言い切れない返事をするがそ

れに痺れを切らしたタマが声を荒上げた。

「そんな大きな声を出さなくても聞こえてるわ。まったく・・そう、私もカリスも氣を習得しているわ。といってもカリスはまだ修行中の身だけれど。それでもなかなかのモノにはなっているわね。」

それを聞いてタマは目が飛び出る思いだった。その話に付いていけなかったシーリーが入ってきた。

「氣？それってすごいの？」

「すごいってものじゃないにゃ！それが出来る人が世界に何人いるのかと・・【英雄】ならばいざ知らず、ギルドランクのAランクでも触り程度に使える人がわずかばかりいるだけにゃ。しかも使える人は皆Aランクのトップクラスにゃ。Sランクでやっとそこそこ使えるという人がいるくらいにゃのに・・！エリア・・さんってもしかしてSランク以上にゃのかにゃ・・？」

「まぁ否定はしないわ。ランクは教えないけれど。それに、さん付けなんてしなくていいの！そんなつまらないことする必要ないんだから。それにランクなんてあくまでギルドの依頼を受けるためのランクに過ぎないもの。そんなもので人を判断しようという考え自体が気に入らないわ。」

ちょっとふて腐れつつタマの言うことに返事した。

「それは悪かったにゃ・・。それにしても、獣人族でも獣氣を使える人は鬼神と呼ばれるほどにゃのに・・。驚きだにゃ・・。」

「そんなに飛び抜けているものなのね・・。なんだか想像できない

わ。」

タマとエリアの話を聞いて肩をすくめるシーリー。突拍子のないことで理解するのをあきらめた様だ。カリスはタマの言った【英雄】ってなんだろうと首を捻っている。

「アタシは風魔法での身体強化が使えるから、通常時よりは格段に強くにゃれるけど、それでも気のコントロールを習得した人にキズ付けられるとは到底思えにゃいにゃ。」

魔法はそれしか使えないけれど、と付け足しながらタマはカリスとエリアを交互に見ていた。その目が次第に潤みだし、

「やはりカリスは大物だったにゃ・・。アタシの目に狂いはなかったのにゃ・・。」

とカリスに目を留めてジッと見つめながら言い出した。

「ありがとうタマさん。それにしてもタマさん魔法使えるんだね。俺魔法のことは全然知らないから羨ましいな。その・・見せてもらうことってできないかな?」

カリスはタマにお礼をいいつつタマが魔法を使えるという部分に食いついた。

「ん～、いいけどここだと危にゃいから後日依頼する時に見せてあげるにゃ。」

カリスのお願いにタマは快く引き受けた。その後もシーリーは動きの確認をして夕方になり、４人で『お肉プラス亭』へ足を運んだ。

全員で1つのテーブルに着き、定員にメニューの注文を終えてから、カリスは昼間の話で聞きたかった続きを質問した。

「タマさん魔法の事聞いてもいいかな?俺と姉さんは魔法使わないし、どういうモノかよく分からなくて。魔力で発動する、ってことしか聞いてなくてね。」

「いいけど、エリア説明してにゃいにゃ?」

カリスの質問にタマは不思議そうに首を傾げた。

「そういえば説明して無かったかしら?まぁ私たちには必要無いモノだから忘れてたのね。」

あっけらかんと答えるエリアに溜め息混じりにタマは説明を始めた。

「それはどうかと思うのにゃけど・・・、まぁいいにゃ。魔法には『人魔法』と『精霊魔法』と『神霊魔法』の3つがあるにゃ。

『人魔法』
人の誰しもが必ず持っている魔力、マニャ(マナ)とも呼ばれるモノを用いて世界に干渉する魔法にゃ。
この魔法で火を出したり風を出したりなど、他にも物を強化したりできるにゃ。
けれどその強さは個人の魔力に左右されるの。
主に、人間族、竜人族、魔族、が使うにゃ。
他の種族も使えるのだけど、使うことは滅多にないにゃ。

『精霊魔法』

人が持っている魔力で世界にいる精霊に干渉する魔法にゃ。この魔法はその場所にいる精霊の多さで強弱が変わるのにゃ。できる事は自然界にある事象なら大体はする事ができるにゃ。人魔法との違いは人の魔力が低くても精霊に干渉出来れば威力は精霊次第ににゃることかにゃ。逆に言うと、精霊を認識できず干渉できないと使えないにゃ。

主に、エルフ族、エルフィン族、獣人族、微弱ながらドワーフ族だにゃ。エルフ族は自分で身体動かした方が早いからか滅多に使わないにゃ。他の種族で精霊を認識できる人は稀にゃのにゃ。

『神霊魔法』

この魔法はちょっと特殊で自分の魔力を神力へ変えて聖なる力を神から借り受けるのにゃ。治療、浄化、強化ができるにゃ。魔力を神力に変えるにはカース神の加護が無いとできないにゃ。そしてカース神の加護を受けるには【英雄】が1人、《セーラ》様の祈りが必要なのにゃ。

結果的に《セーラ》様の居る『セラフィス聖教会』の人しか基本的に使えないにゃ。」

「魔法には3つあるんだね。それに俺が使えるとしたら人魔法になるのかぁ。」

タマの話を聞いて自分も覚えられるのでは無いかとワクワクするカリス。が、しかし

「カリス、貴方はまだ魔法を気にする時期では無いわ。勿論、魔法自体の知識は役に経つから知るのは賛成よ。でも覚える必要は無い。」

エリアは2人の話に割り込む感じでカリスに言い放つ。

「ちょっとエリア！魔法を覚えるかどうかはカリスの自由にゃ！！貴方が決める事ではないにゃ！！」

エリアの暴言にも近い言い様にタマは怒って怒鳴った。カリスやシーリーはその声に驚いていた。

「いいえ、これは身内での大事な事なの。部外者にどうのこうの言われたくないわね。」

エリアは冷静にかつ、冷たさすら出してタマに言った。

「タマさんも姉さんも落ち着いて！俺としては姉さんの言う通りにしようと思ってるから。タマさんありがとう。気にしてくれて。２人に喧嘩はして欲しくないから。」

直ぐにカリスは間に入り、仲裁をした。

「あ・・。ごめんにゃ、カリス。」

「全く・・。タマ、早とちりすぎよ。カリスに一生魔法を覚えさせない訳ではないのよ。ただ、今は先に覚えなければいけない事があるからそれを優先させるだけ。わかった？それと知識としては賛成と言ったでしょう。敵対したモノが魔法を使う場合だってあるんだし。そういう時に対処できる様にはしないといけないしね。」

「ううう・・。そうだったのかにゃ。てっきりエリアがカリスを独占する為に言っているのだとばかｒ「なんですって！タマ・・。そこに直りなさい！！」しまったにゃ！つい本音が！」

そんなやりとりをする2人を苦笑しながらカリスとシーリーはお肉料理に手をつけるのだった。

第１８話（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

次回もよろしくお願い致します。ｍ（＿＿）ｍ

第１９話（前書き）

開いて頂きありがとうございます。

第19話

「それじゃあ改めて魔法の説明するにゃ。『人魔法』と『精霊魔法』には、火・水・土・木・風・雷・光・闇の8属性と、『精霊魔法』のみ他に1つ特殊な属性があるらしいにゃ。で、属性には相性があって、火属性が得意ににゃる人は水属性が不得手に、土属性が得意ににゃる人は風属性が不得手になるにゃ。その逆もしかりにゃ。光と闇も対象にゃ。

それで逆に相性がいい属性もあるにゃ。水・風・雷と火・土・木かにゃ。光と闇は別々で個人差があるかにゃ。大抵は得意な属性とそれに相性がいい属性を覚えるのにゃ。光属性は得意でなくても暗いところでは役に立つから灯りを生み出すくらいは覚える人が多いかにゃ。火属性でもそれは代用できるけど。後はあくまで基本的にゃ属性同士の相性であって、使う人との相性が別にあるにゃ。風が得意でも水はダメだったりにゃ。例外として【英雄】が1人《ウィザード》様はその2つの魔法全てが使えるとされているにゃ。

『神霊魔法』には聖の属性だにゃ。この1つのみにゃ。聖教会の関係者しか使う人はいにゃいから。必然的に使える人数は少にゃいにゃ。一応ところどころに聖教会の建物はあるからそういう所に1人は居る感じかにゃ。聖教会は基本的に各国からは独立して動いているけれど、カース神信仰にゃから、各国と手を取り合っているのにゃ。ムール街にも小さいにゃがら教会はあるし、1人加護を受けている人がいるにゃ。」

「そんなに属性ってあるんだ。やっぱりそれらもタマさんが使う風魔法のように戦闘で使われるの？」

「そうだにゃ。日常で便利にゃ魔法は一般的に使われているけれど、

どの魔法も武器として使えばかにゃりの強さににゃるにゃ。だからこそ魔法は危険でもあるのにゃ。街中の喧嘩にゃんかで使われた日には死人が出る可能性もあるからにゃ。そういう場合はかにゃり厳しい罰が待っているにゃ。」

「そうなんだ。確かにただの言い争いから魔法使っての嫌がらせとかになったら困るもんね。シーリーは魔法使えるの？」

「私？私は少しだけ火が使えるわ。と言っても戦闘に使えるほどじゃないから日常的に使うだけだけどね。」

「となると、魔法使えるようになるのって結構難しい・・？」

「んー、魔法との相性もあるし、後は創造力しだいかにゃ。イメージが大事にゃのだけど精神的なものにゃから鍛えるのが難しいといったところかにゃ。そこで登場するのが魔道具にゃ。道具に魔力が込められていて、一般生活でも使われてるにゃ。このお店にあるランプもそうにゃし。こうやって魔法が使えない人でも、皆魔力はあるから魔道具の発動はできるのにゃ。」

なるほど、と頷きながら納得するカリス。会話の中で知らないものがあったのを思い出し、聞いてみることにした。

「有難うタマさん。一通りのことは頭に入ったと思う。それとさっき話に出てきた【英雄】ってなんなの？」

カリスの質問にそれも知らにゃかったか、と思いエリアに一度目を向ける。エリアはカリスの発言時に耳をピクッと動かしたが誰も気づかなかった。エリアも何も言わないのでタマは簡単な説明を始める。

「【英雄】は今から２００年前に存在したとされる《邪神》を倒す為にカース神から・・・」

そんなこんなで説明していくタマとそれを熱心に聞くカリス。タマはカリスのその態度が気に入ってノリノリで説明していくのだった。

「・・・各【英雄】は国が抱えていたり国の王だったり、ある区域の守り主だったりとその所在は大体わかっているのにゃけど、《アーチャー》様だけは旅をしているらしくてどこに居るか分かってにゃいにゃ。」

あれこれと話ながらご飯を食べ終わるころには雨は上がっていた。２人と別れてカリスとエリアは森の小屋まで帰るために街の門へと向かっていた。その途中カリスはこちらを優しげに見ているエリアに気づき、

「どうしたの姉さん？何か気になることでも？」

「ううん。なんでもないわ。ただ・・・カリスも成長したなって思って。」

「それもこれも姉さんのおかげだよ。いろいろと教えてくれたし。今もこうして隣に居てくれるから。」

カリスの言葉に頷きながらエリアは思案していた。

（魔法や【英雄】のことを知るのはまだ早い気がしたけれど、それでも仲間も得たりどんどん成長していく。そろそろ良い頃合ね・・。後はＣランクになるまで経験を詰めれば。）

そうして夜は更けていった。

「シーリーそっち行ったよ！！」

その合図にシーリーは内心緊張しながら武器を構え直した。瞬間目の前に1匹のウルフが木々の間から走ってきた勢いのまま噛み付こうと襲ってくる。

「くっ、はぁっ！！」

その攻撃をシーリーは横に避けて、避けた力を反動に右手に持つ剣を身体のバネを使って目の前を通過するウルフへ切りつけた。その攻撃はウルフの腹を下から斬ることになり、フラフラと歩いた後、ウルフは倒れてピクピクしている。

「ん、お疲れ様シーリー。動物なら気負いせずに狩れるようになったね。」

「ああ、ありがとうカリス。ウルフとかなら3～4匹くらいまでなら問題なく狩れそうだ。」

ウルフが飛び出してきた方向からカリスは歩いて来て声をかけた。最近は午前中のエリアとの模擬戦をやめてシーリーの鍛錬に付き合うようにしている。その分エリアとの模擬戦は夜。夜戦をすることになった。

タマに魔法の事を教えてもらった次の日には鹿狩りの依頼をしたのだが、その時タマに風の魔法を身体にまとわせての戦闘を見せてもらった。元々の身体能力の高い獣人族だったが、風の力を使ったタマはそれこそ疾風のごとく動きを見せた。

タマ曰く、簡単に言えば全ての行動に追い風を付けているのだとか。それと風に包まれている状態なので、普通に射られた矢とかなら風が逸らしてくれるらしい。

カリスの見立てでは、自分が氣をまとった状態と同じくらいのスピードであると判断した。そこに集中した氣の使い方をすればその上をいける、とも。逆に言えば魔法で強化されれば氣を使うのと同じ動きができるということでもある。その点で言えば魔法の効果がどれだけすごいかが判る。それを言ってみると、

「ふふん、ありがとにゃ。しかも氣を使える人がこうやって魔法も使うともっとすごいことになるにゃ。まぁ氣を使えるのは大体Sランク以上だから問題はにゃいけども。」

タマは褒められて自慢げに胸を張りながら言ったものだった。タマの風魔法を見て一番驚いていたのはシーリーである。彼女はタマとPTを組んでいたが、その間に一度も魔法を使わなかったからだ。それをシーリーが聞いたところ、そうそう使うものではないし、ここら辺では使う必要も無い。とのことだった。

ただ、この風魔法は速度を上げられるが、力までは上がってはいない。威力は上がってもあくまで風で速度が上がった分の威力だとのこと。まぁ、風をまとっているので吹き飛ばす効果も多少なりともあるそうだが。となると氣を使っている人には幾分もダメージは与えられないだろうとカリスは考えている。魔法も使い方によってはもっと変わったやり方があるのだろうが。後はその人の魔力と精神力によるらしい。

本日カリスとシーリーの受けた依頼、ウルフ5匹を討伐したので部位を剥ぎ取り、それを観察していたタマとエリアを伴って街へ戻る。今回5匹中3匹はシーリーが倒した。最初の鹿を狩る依頼では動きがぎこちなかったが、午前中の鍛錬をするうちに動きも滑らかになって、やれることが判ってきたのか心にゆとりも出来たようだ。

ちなみに夕方にはいつも4人でご飯を食べるようになったが、その後分かれてからもシーリーは1人宿の庭先で剣を振っていた。カリスの荷物にはなりたく無いと思っていたし、カリスに良いところを見せたいと考えていた為だ。その成果もあって自分の思い通りに身体が動くようになってきている。

今のシーリーならワーウルフ1匹や2匹なら正面からやっても倒せるのじゃないだろうか。前は隙を突いてなんとか1匹倒した程度だったが。そんな話をしながらギルドまで戻っていった。

第１９話（後書き）

読んで頂きありがとうございます。

次回もよろしくお願い致します。ｍ（＿＿）ｍ

第２０話（前書き）

開いて頂きありがとうございます。

第２０話

ギルドに戻り依頼完了手続きを行い、ギルドのテーブル席に座って明日は試しにワーウルフを狩りに行ってみないかと４人で話し合っていると依頼を見ていた１人が話しかけてきた。

「おいおい、４人でワーウルフかよ。あんなの１人で狩れなきゃ上へは上がれないぜ？って、おまえら女・子供の集まりかよ。」

カリス達が顔を向けると今までこの街では見かけ無かった冒険者が３人いた。

声をかけてきたのはカリスから見て左にいる、肩まで有る黒髪ブラウンの目の男。１８０ｃｍほどの身長に紺のプレートアーマーを着こなし、背中にバスターソードを背おっている。人間族だ。

真ん中の人は１７０ｃｍほどの身長で背中まである金髪に目の色も金色の男。皮の鎧を着こなし、背中には弓と矢を背おい、腰に大きめのナイフを装備している。こちらは長く伸びた耳が見えるのでエルフ族だろう。

最後の１人は１７０くらいの身長で、頭から足まで濃い赤い色のくすんだローブを着ていて顔は見えない。

「まぁね。アタシ達はまだ冒険者ににゃって間もにゃいから。４人で仲良く上げていくにゃ。」

バカにする様な言い方にシーリーが顔を強張らせて突っかかろうとした所で、タマが先に声をだした。

「ふん、獣人族か。そんなPTには勿体無いな。あんたウチのPTにこないか？いろいろ教えてやるぜ？」

そう言ってエルフの男以外の2人が嫌味っぽく笑う。しかしエルフの男はエリアの方を見て首を傾げていた。何処かで見た様な・・と。

「俺達は皆Bランクだし、稼ぎも良いしな。」

「結構にゃ。アタシはあんた達よりカリス達と楽しくやって行くにゃ。」

そう言ってカリスの方を向くタマ。釣られて顔を向けるプレート男はカリスを見て鼻で笑いながら、

「ふん、こんなガキの何処が良いんだか。まぁいい。俺らはこの街に来たばかりだしな。気が変わったら声かけに来な。歓迎するぜ。それとこの街の近くにストライダーが生息しているはずだか、知っているか？」

カリスがバカにされた事でまたもシーリーが何か言おうとしたが、タマがそれを止めて先に言う。

「この街より南にある山脈に居るらしいにゃ。・・まさか討伐するにゃ？」

「ああ、あいつら竜族なのにBランクってことだからな。腕試しにもなるし、倒せれば俺たちの名も上がる。」

「やめとくにゃ。こちらから手を出さなければ害はにゃいのに、わ

ざわざ狩る必要はにゃいにゃ。」

「そんな考えだからいつまでもワーウルフ程度でウダウダするんだよ。もっと上を見なきゃな！」

プレート男はタマの言葉は聞かず笑い飛ばした。ローブ男も一緒に笑っていた。

「ほっときなさい。どうせ負けて帰ってくるか、そのまま死ぬかの2択なんだから。」

「なんだと・・・！」

エリアか付き合ってられない、と言うニュアンスを含んだ発言に笑っていたプレート男は目を釣り上げた。

「ちょっとエリア・・・。折角波風立たにゃい様にしてたのに・・・はぁ。」

タマはエリアの発言でいままでのアタシの苦労は・・・。と、呟きつつ溜め息をついた。

エリアの名前が出た時、エリアを見ながら首を捻っていたエルフ男はエリアの名前を繰り返し頭の中で反芻し、何かを思い出したのか目が飛びださんばかりに見開いて驚きを露わにした。

「ち、ちょっと待ってくれ。そこの女性はまさk・・・ヒッ！！いや、なんでも無い・・。」

エルフ男のことを片隅で様子見していたエリアは、エルフ男がこち

らの事を感づいて言って欲しく無いことを言おうとした為、エルフ男にだけ伝わるような物凄い殺気を目に込めて睨みつけた。その殺気を受けたエルフ男は直ぐに言うのを中断して、目をそらせた。熱く無いのに汗をかいて、顔色も真っ青だ。エリアが殺気を放った瞬間カリスも感じ取り、ピクッと身体が反応していた。

「おいおいどうしたんだよ。って顔色悪いぞ大丈夫か？」

途中で言うのを中断した仲間に顔を向けるが、仲間の顔色が悪くてプレート男は心配した。

「あ・・ああ。大丈夫だ・・・。とりあえず今日はもう宿に行こう。準備とかは明日になりそうだし・・。」

「まぁいい。それじゃあ、おまえらも精々がんばんな。」

エルフ男を訝しげにみてから、プレート男達3人はギルドから出て行った。

「なんかすごい人だったね。話についていけなかった。」

そういえば名前聞かなかったなと思いながら、3人を見送ってカリスは深呼吸した。タマとエリアは溜め息を付き、シーリーはカリスがバカにされた事をぶつぶつ言っている。

「それにしてもさっきはすごい殺気だったね。どうしたの？姉さん。」

エルフ男に向けた殺気に気付いたカリスはきいてみた。タマもエリアが何かをしたのだろうと気がついたので猫耳をピクピクさせなが

ら聞く。少し嫌そうにそっぽを向きながら、嫌なこと言われそうだったから止めただけ。とエリアは答えた。

ここにいつまで居ても無意味なので、４人はご飯食べに『お肉プラス亭』へ足を運んだ。

「なんなのよ、あいつら！知りもしないでバカにするなんて！」

シーリーはテーブルに料理が運ばれて来てもまだ怒りが冷めなかった。しかしご飯は美味しく頂きたいので、その為にもシーリーに気持ちを落ち着かせるようカリスは言う。

「シーリー、怒ってくれるのは嬉しいよ。ありがとう。だけど俺はあまり気にしないから落ち着こう？折角のご飯なんだしさ。気分良く食べよ。その方が美味しいだろうし。」

「あ・・ええ、そうね・・。ごめんなさい、ちょっと頭に血が登ってたわ。」

シーリーの返事に首を横に振って答えるカリス。タマとエリアは我関せずと運ばれてきた料理にパク付いている。

「それで明日の話なんだけど、ワーウルフを狩りに行こうかと思ってるんだけどどうかな？一度タマさんにＰＴに入ってもらうことでＣランクの依頼を受ける様にしてさ。」

「そうにゃぁ。そろそろシーリーにワーウルフを相手させるのも良いかもしれないにゃ。シーリーやってみるかにゃ？」

カリスの提案をタマは賛成する。シーリーも、カリスとタマがそう

言うなら頑張ってみる。と、返事した。

「あの3人はストライダーだっけ？討伐大丈夫かなぁ。見た感じすっごく不安だったんだけど。」

昼間のことを思い出してカリスは話題に出した。

「彼らじゃまず無理ね。Bランク指定になっている魔物だれれど、此方からは手を出さなければ危険は少ないと考えられているからなのよ。強さで言ったら仮にも竜族、当然Aランクだもの。たかがBランク3人で数十匹相手になんかできないわね。彼らの技量も微妙だったし。カリスを貶した時点で死確定よね。」

最後は本音が漏れながら言うエリア。むしろ生きて帰って来たら私が殺すと、言いそうだ。そんなエリアを見たタマとシーリーは少し引いていた。カリスは苦笑している。

「まさか最後に漏れた本音が理由で焚きつけたんじゃにゃいでしょうにゃ。」

ジト目をエリアに向けてタマは言ってみた。が、エリアは何も言わず肯定していた。

「まぁいいにゃ。それも冒険者としての自己責任だにゃ。」

諦めた様に溜め息を付きつつタマはそう締めくくった。

明日の予定やら昼間の3人やらの話をしながら夕食を食べ、今日は解散になった。

その夜、森の小屋の寝室にてカリスとエリアは夜の模擬戦を終えてベッドに横になっている。横になってしばらくしてからエリアは静かに口を開いた。

「・・・聞かないの？」

「・・・うん。必要になれば話てくれるんでしょう？」

「ええ・・・、必ず。」

「なら待つ。きっと姉さんの判断は正しいと思うから・・・。」

「ん・・、ありがとう・・・カリス。」

そうして今宵も更けていく・・・。

第２０話（後書き）

読んで頂きありがとうございます。

次回もよろしくお願い致します。ｍ（＿＿）ｍ

第２１話（前書き）

開いて頂きありがとうございます。

第21話

翌朝、いつもは小屋で朝食をとるのだが今日はギルドで出している軽食を食べてみようと言うことになり2人は準備してムール街へ向かった。

「シーリーも大分落ち着いてきたし、今日のワーウルフ討伐の内容によってはCランク試験合格できる技量になりそうだね。」

森から出て街まで近づいて移動速度を落としたところでエリアに話しかけた。

「そうね。まぁ本人もしっかり周りの意見聞ける様になったし、心配はしていないわ。けれど直ぐにはCランク試験を受けなおすって事はしなさそうねぇ。」

「え？そうなのかな。あー、まぁ一緒のPT（パーティー）だから一緒にCランクになれるとうれしいけど。」

「分かってるじゃない。きっと彼女もそう考えてるわね。」

そうなのかぁ。と、言いながら街の門から入り、ギルドへ向かった。ギルドカウンターで軽食と果実ジュースを2人分頼み、中央のテーブル席に向かう。軽食のメニューは野菜や肉をスライスしたパンで挟んだサンドイッチだ。2人でゆっくりパクついていると、ギルドの入り口と扉が開いてタマとシーリーが入ってきてお互いに、おはよう。と挨拶をする。

「ギルドで朝食とるなんて珍しいわね。何かあったの？」

シーリーが珍しい光景を見たと言う風にサンドイッチを食べている2人に聞く。それにカリスは、ただの気分転換だと答えた。基本カリス達の朝食は野菜やキノコのスープ、気が向いた時は動物を1匹狩ってきて野菜も入れるがメニュー自体が似たり寄ったりになるのだ。それなので街でパンとかを食べられるのは正直ありがたい。

「そうだにゃ。特に朝なら焼きたてのパンが食べられるから、それも良いかもしれにゃいにゃ。」

そういうタマ達2人は街の宿に住んでいるので頼めばいつでも食べられるのだろうが。今度朝食も一緒したいとシーリーが申し出たので機会があれば、ということになった。朝食が終わり、午前中の日課になったシーリーの鍛錬に付き合う。

鍛錬が終わってギルドで軽食を4人で食べた後、タマにもPTに入ってもらいワーウルフの討伐依頼を受けることにした。依頼内容は3匹以上の討伐。1匹増えるごとにその分報酬は割り増しだ。3匹以上とされているのは、ただ単にワーウルフが1匹単独で行動していることなんて滅多にないので、討伐の際は3匹からとしている。

ワーウルフはCランクの中でも狩りやすい魔物だ。グリズリーだとCランクの中でも上位に入る。魔物の討伐自体がCランクからとなっているので、魔物の強さに幅も広いのだ。シーリー1人でもなんとかグリズリーを追い返すことは出来るだろうが、相手が本気になったら太刀打ちはできないだろう。

討伐依頼を受けて4人は南の森へ移動する。森を探索してワーウルフを2匹見つけた。既に向こうもこちらに気づいているようで警戒している。そして少しはなれたところにもワーウルフが3匹ほど居

るのが気配でカリスは分かった。

「それじゃあシーリー、やってみようか。」

シーリーの頷きを見て、カリスは気配を消して大回りでワーウルフの左側へと移動する。今回の討伐はあくまでシーリーの狩りがメインだ。その為カリスはワーウルフの隙を作ることはしても倒すことはしない、と決めていた。

シーリーの方はまっすぐ近づいていき、内心ドキドキさせながらワーウルフと対時する。ワーウルフが警戒してうなり声を上げていたが、シーリーが剣で威嚇すると直ぐに2匹同時に飛び掛ってきた。しかしその瞬間にカリスは気配を出して出現することでワーウルフに驚きと気をそらさせる。ワーウルフの動きが少なからず鈍ったところをシーリーは身体を右へずらして避け、直ぐに右手の剣で切りつけた。

剣はワーウルフの後ろ足を切り落とし、1匹目は痛みとバランスを崩して倒れる。倒れたことを音で認識しながらもう1匹の方へ突っ込んだ。もう1匹はシーリーの方が今は危険と判断したのかそのまま迎撃を仕掛けたが、左手に持つバックラーで牙での攻撃を正面から受け止めるのではなく、逸らして隙が出来たワーウルフの胴を斬り付ける。そのまま腕の返す力で首へ攻撃することで2匹目は倒れた。

そうしてから1匹目がオタオタ起き上がって来たので首元を斬りつけて命を絶つ。絶ったところで奥に待機していたワーウルフ3匹が襲い掛かった。2匹同時、1匹時間差でだ。シーリーは気を抜く事は無かったが、走ってきた勢いのまま襲ってきたその速さについていけず、転がるようにしてなんとか2匹を避けた。しかしその後の

1匹が転がったシーリーの上に乗って来ようとしたので、とっさにバックラーでなんとか防ぐ。その間通り過ぎた2匹にはカリスが威嚇して足止めさせた。

シーリーは剣を前に突き出して牽制し、ワーウルフが後退した所を素早く立ち上がった。ワーウルフは走り、勢いのあるジャンプで首元に喰らいつこうとしてきたところをシーリーは素早くしゃがみ込む。

そしてバックラーを水平気味に頭の前に出してワーウルフをバックラーの上で滑らせる様にして回避する。

バックラーの真上にワーウルフがきた所で、立ち上がる勢いを使ってワーウルフを押し上げる。ワーウルフがそのまま空中でバランスを崩し、地面に叩きつけられたところをシーリーは剣で斬りつけた。

残り2匹になり、カリスは牽制をやめて後ろに下がる。それと入れ替わりにシーリーが前へ出た。

前に出た勢いのまま疾走するシーリー。ワーウルフは左右に別れたので迷わず右のワーウルフへ斬りつけるが、避けられた。反撃が来るのと同時にバックラーを前にして体当たりをかますと、カウンター気味にダメージを与えた様でバランスを崩した為素早く斬りつけ1匹倒す。

1匹倒れたところでもう1匹に後ろから足のふくらはぎを噛まれた。

「あああっっ!!っこの!!」

噛まれたことでシーリーが声を上げるが、そのまま身体を捻じって剣を首に斬りつける。しかし直ぐワーウルフは足を離し後退した。

「シーリーいける？」

「っく・・・、ええ。やらせて。」

冷静なカリスの声に返事をして、気持ちを切り替える。ワーウルフは左右にジャンプしながらシーリーに向かって行く。そのまま再度足を狙って来た為、剣を前に出すが、ワーウルフはその剣を牙で咥えることで防ぎ頭を勢いよく振る。

その強さに足の怪我で踏ん張りが効かずシーリーは剣を離してしまった。しかし剣を持っていかれた勢いを使ってバックラーを前に出し、ワーウルフに向かって倒れこむことで頭を強打させる。

もつれる様に倒れるが直ぐに上半身を起こしてバックラーで頭を殴り、動きが鈍くなったところで立ち上がり噛まれた足を引きずりながら飛ばされた剣を拾って来てとどめを刺した。

「っはぁっはぁ・・ふぅ。なんとか・・倒せた・・。」

「お疲れ様。足見せて。」

最後の1匹を倒したところで気が抜けたのかシーリーは座り込んでしまった。かなり神経をスリ削ったようで、かなりの量の汗をかいている。カリスは直ぐにシーリーの足を見て容態を確認した。

「ん、血管の方は大丈夫か。骨にも異常は無さそうかな、これなら悪い事態にはならないと思う。戻って治療しよう。っとその前に部位取らないとか。」

そう言ってワーウルフの部位を剥ぎ取る。キズはそこまで深い傷ではなかったのでカリスは安心した。シーリーは立とうとするが、足の怪我と極度の緊張感からの開放で足に力が入らず立てなかったのでカリスはシーリーに背中を向けておぶさる様にいう。シーリーは顔を赤くして遠慮したが、カリスは足の筋肉をそのままでは傷めるからと心配して強引にだが背負った。シーリーは遠慮しながらも背負われた状態になったため諦めてどこかうれしそうにカリスの首に腕をまわした。

「お疲れにゃ。シーリー足の具合は・・・大丈夫みたいにゃ・・。」

背負ってもらって嬉しそうにしているシーリーを見てタマはそこまで酷い傷でもないのかと判断した。

「とりあえず街へ戻りましょう。治療も早い方が良いし。ゆっくりするのはそれからね。」

そう言い、エリアが先導して街へと戻ることにした。

街へ戻る道中のこと・・。

「ね・・ねぇカリス。私かなり汗掻いてるから、に・・臭ってない？」

シーリーは多くの汗を掻いていることが気になって仕方が無かった。

「ううん。そんなこと無いよ。全然そんなこと無い。シーリーお疲

れ様。途中で手出したくなったところもあるけど、1人で倒せたね。おめでとう。」

「うん・・。ありがとうカリス。あなたが見ていてくれたから・・・。」

シーリーの言葉の最後は声が小さくて聞こえなかったが、とても安堵していることが伺えた。その時シーリーはカリスの背で少し泣いた。最後まで見守っていてくれたことのうれしさと、今こうして背負ってくれている優しさに向けて。

第２１話（後書き）

読んで頂きありがとうございます。

最近気温の温度差が激しく体調崩しました。

皆さんも風邪対策忘れずに、気をつけて下さい。

次回もよろしくお願い致します。ｍ（＿＿）ｍ

第２２話（前書き）

開いて頂きありがとうございます。

第22話

シーリーを背負ってギルドに戻った。テーブル席にシーリーを座らせ2人に見ていてもらい、カウンターにいるサクラへ依頼完了の手続きをお願いする。

「お疲れ様です。シーリー様は怪我された様に見受けられますが、大丈夫ですか？」

シーリーを見て心配そうにするサクラ。足の怪我だけでなく、全身擦り傷になっているので心配されても仕方が無い。

「ああ、傷自体はそんなに酷くは無いから大丈夫。かなり激しく動いたから体力の方が消耗している感じだから。」

カリスと会話しながらサクラは手続きをしていく。

「はい、終わりました。今日はもうゆっくり休ませて上げて下さい。女性なんですから。」

「分かってる。ありがとう。」

手続きを終えてカリスは3人の下へ移動する。

「終わったよ。あとは医者に見てもらって、ご飯食べずに解散しようと思うけどどう？」

「そうだにゃ。シーリーあちこち汚れているのと傷だらけにゃし、アタシが医師の元へ連れて行くにゃ。」

「うん、お願いねタマさん。シーリーとりあえず数日はゆっくり休んで。きつければ値が張るようだけどポーション買うのも手だから。」

「ええ、そうするわ。今日は有難う、最後は迷惑かけちゃったけれど自分の力でワーウルフを倒せたのはかなりの進歩だものね。」

最後に有難う。ともう一度言い、タマはシーリーに肩を貸して立ち上がろうとした。そこへ昨日居た3人の冒険者がギルドへ入ってきた。

「思った以上にろくなものがなかったなぁ。・・お？なんだい怪我したのか。昨日言っていたワーウルフ討伐か？４人居るのにそんな怪我するなんてどうなんだよ。」

こちらに気づくなりシーリーの容態を見て直ぐに突っかかってくるプレート男。さすがにカリスもそれは言いすぎじゃないかと思い、プレート男の前に出る。

「おいおい怒ったのか？ワーウルフ程度で苦戦するようなやつらが活きのいいこった。まさか、どうにかなるとか思ってないよな？」

明らかに馬鹿にした物言いを目元をニヤ付かせて言ってくる。カリス的にもこいつを倒すのは簡単だが怪我をさせてしまってはよろしくないだろう、と思い。目に氣を集中してプレート男を睨みつけた。

「な・・なんだ？なんだその目は。俺らと本気でやるっていうのか？」

カリスの目を見ていたプレート男は背筋に悪寒を感じて弱腰になりながら、何で悪寒を感じたのか分からぬまま去勢を張る。

「おい、その辺にしておけ。明日には南の山に行くのだから今余計な体力は使う必要ないだろう。」

カリスとプレート男の間に緊張感が張り詰めていたが、エルフ男が間に入ってプレート男を押し止めた。

「ッチ！・・ふんっ、命拾いしたなガキ。俺らは忙しいから今は相手してやる時間は無いんでな。」

行くぞ。そういいギルドから出て行くプレート男とローブ男。エルフ男は2人に付いていていかず、こちらに頭を下げた。

「すまない。嫌な思いをさせてしまっているな。こっちは明日南の山にストライダーを倒しに行く。まぁ山まで1日かかるから向こうで狩る時間も入れると3～4日行くことになるな。比較的大人しい竜族らしいから倒すのも何とかなると思っているが。」

「そっちの事情なんてどうでもいいわ。どうせ勝てやしないんだから。あなた達は竜族というものを甘く見すぎている。」

そう言ってエリアはエルフ男に冷たい目線を送る。エルフ男はその視線にたじろぐが、気を取り直して、そう言われても今更やめるつもりにもなれん。と言ってカリス達に頭を下げてギルドを出て行った。

タマとシーリーは医師の元へ向かう為に別れて、カリスとエリアは小屋に帰る道中動物を狩り夕食のおかずをゲットしつつ森の中を進む。

森の中唐突にエリアは話し出す。

「ねぇ、カリス。Cランクまで上がったら貴方に試練を与えるわ。ギルドとかとは関係ない、私からの試練を。貴方にはこれからしなければならない事があるのだけれど、それをする為に必要なモノ。私が貴方の傍に今まで居た理由でもあるものよ。」

「・・うん。そんな感じはしていた。でも家族なのは別物だよね？」

「もちろんよ！貴方は大事な私の家族なんだから。それだけは変わらないわ。」

そう言って森の中でエリアは優しくカリスへ微笑みを向けた。

「受けるよ。姉さんの期待にこたえて見せるから。」

「ええ、信じているわ。」

2人は小屋に帰り、夕食を食べてから夜の鍛錬を始める。最近は氣の凝縮も滑らかにできるようになってきた。但し、全力で氣を一箇所に集めての凝縮にはまだまだ時間はかかる。あくまで通常時に流し、集中した氣を凝縮させることだけだが。それだけでも凝縮させないときの全力を凌駕する。

氣の流れを確認した後、エリアとの模擬戦を始める。さすがにエリアも氣を凝縮させることも可能な様で、カリスが氣を凝縮した攻撃を仕掛けた場合はしっかり防ぐ時に氣を凝縮させて防いでいる。エリアであっても氣を凝縮した攻撃は普通に防ぐのではダメージをくらうらしい。

といっても氣を凝縮させての攻撃を毎回出来るわけでもないので、出来るだけ隙を突いた時にのみ、避けられないタイミングで放てる時のみに使用している。そうすれば腕もしくは足を使って防がなければならないからだ。

この氣の凝縮は氣の使い方の中では応用技らしく、氣を使える人の中でも一握りなんだとか。コントロール自体がやはり難しいようだ。

ちなみにカリスは試しに足へ氣を集めて凝縮させ、地を蹴って走ったらえらいことになった。地面が轟音を上げて爆砕し、足で地を蹴る毎にドデカイクレーターを量産してしまった。しかもその速度は、タマの風の精霊魔法を使っての動きが一般人の動きに感じるほどである。

確かにかなりの効果があるのは分かったのだが、走るごとにクレーターを生産するのでは街中や街道では使用することはまず無理と判断。使用する時は周りを気にしなくてはいけないので使用する場所を選ぶ技となった。

他にも全身の氣そのものを凝縮もしてみたのだが、こちらもかなりの身体強化をみせた。が、一ヶ所を凝縮するのとはまた違い凝縮させる部分が多い分、氣力の消耗が激しすぎて2~3秒で力尽きてしまった。

エリアが言うには全身凝縮の技は氣を使う人にとって最終目標らしい。エリア自体全身凝縮の維持できる時間は1分そこそこと言っていた。まぁそれでも素晴らしい持続時間なのだが。

「南の山に生息しているのもそうだけど、基本竜族には氣を用いらないとダメージは与えられないわ。竜族は元から竜氣を持っているから普通の攻撃ではその防御力を突破できないのよ。魔法もそう。ある一定以上の攻撃で無いとダメージは通らないでしょうね。これは竜人族にも言えるの。まぁコントロールできている者は少ないんだけどね。常に纏っている状態なのは変わらない。」

もし氣を使える者を使えない者がダメージを与えようとするのなら、相手の氣を封じることが出来れば可能。そしてその逆も然り。そう最後に付け足してエリアは言う。

「そっか・・。氣を使えないようにすればダメージは与えられるんだ。それはこっちも気を付けないとね。」

「ええ、相手の力を封じたり弱めたりする魔法具や魔法も少なからずあるから。そういう時に技量が求められるから慢心してはダメよ。」

「ん、気をつける。」

そうして今夜の鍛錬は終わり、２人は掻いた汗を拭いて寝ることにした。

第２２話（後書き）

読んで頂きありがとうございます。

アクセス件数等見たら毎日５００人くらいの方々が読んでくれてるみたいで嬉しい限りです。ありがとうございます。

次回もよろしくお願い致します。ｍ（＿＿）ｍ

第２３話（前書き）

開いて頂きありがとうございます。

第２３話

ワーウルフ討伐依頼を終えた次の日、朝食を摂っている時エリアは今日の予定を言った。

「今日は休憩がてら気分転換も兼ねて散歩しましょう。最近ずっと鍛錬と依頼受けることばかりだったし。」

と、そうして今日は街中を散歩することになった。カリス達は森を抜けて街へと向かう。３０歳くらいのガタイの良い男性門番の顔馴染みになった人にカリスは挨拶をした。

「おはよう。今日もご苦労様。」

「やぁ、どうだいカリス君調子の方は。街中では君が受ける依頼は直ぐこなすから助かると話題に上がることもあるようだが。」

「そうなの？いつも通りこなしているだけで実感は無いんだけど。まぁ依頼で困った事態にはなったこと無いからスムーズに行っているだけだと思う。」

「ははっ、それは結構なことだ。依頼は大半が冒険者が受けるからな。問題なんていくらでも出るのが普通なのさ。討伐依頼もそうなんだが街中の依頼だって体力がなければこなせないモノも有るし。それで問題が起こってないのであれば、それは君が優秀だってことだよ。」

「ありがとう。これからもがんばるよ。依頼した人が喜んでくれると俺もうれしいしね。」

門番の人が褒めてくれたので、カリスも笑顔でお礼を言う。それを見て門番は満足そうに頷いた。基本冒険者は慢心しやすい。依頼をしてやっているのだから、という考えの人は冒険者全体の４割は居るだろう。確かに依頼の中には命がけで臨まなければならないモノも少なくは無い。だからといって依頼者へ上から目線でモノを言われれば依頼者も気持ちの良いものではないだろう。次からは依頼したくなくなるかもしれない。そうなればギルドへの依頼が減り、冒険者の受ける依頼も減って最終的には自分に返ってくるのだがそれを考えることの無い人は多い。

あくまで依頼者が居てのギルドであり、ギルドあっての冒険者でもあるのだ。そうでなければ冒険者はお金を稼ぐ手段がなくなっていくだろう。次第に腕の無い冒険者は冒険出来なくなる可能性も高い。

「今日は依頼受けないで街を散歩する予定なんだ。」

「ほほぅ。そうだな。たまには生き抜きも必要だ。しっかし綺麗なお姉さんとデートなんて羨ましい限りだな！」

そう言って笑いながらカリスの肩をバシバシ叩く門番。門番の話にまんざらでもないようにエリアは微笑みながら頷いていた。

それじゃあ。そう言って門番との話を切、街中へと足を進めるが、そこでエリアがカリスの腕に自分の腕を絡ませた。

「さっきの門番の人の言葉ではないけれど、たまにはこういうのもいいでしょう？」

エリアの言葉にカリスも微笑み腕を組む。ノンビリ２人で歩き出す。

周りの出店を除き、お肉の串焼きが売っていたので2本買って食べ歩きをした。野菜や果物の売っている店の前を通ったところで店員から声がかかった。

「おや、カリス君じゃないか。なんだいデート中かい？」

前回屋根の修理依頼で知り合った八百屋のおばさんだ。若いっていいねぇ、という発言をしながら奥にいるダンナを呼んだ。

「やぁ、元気にしてるかい。君が修理してくれたところはなかなか良い出来で全然雨漏りも再度崩れるってことも無く助かってるよ。前々回依頼を受けてくれた人がやった時は全然持たなくてねぇ。」

そう笑いながらダンナは頭を掻いた。カリスはそう言ってくれると助かります。と言って微笑む。

「隣に居るエルフのお姉さん。カリス君はなかなかの人材だから手放したらもったいないぞ！」

そう言ってダンナはエリアに顔を向ける。もちろん分かっている、とエリアは言ってカリスの腕をギュっと抱き寄せた。

「ははは、私が言わんでもさすがに分かっているか。また何かあったらお願いするよ。ほらこれを持って行きなさい。」

2人で食べなさい。そう言って梨を一個くれた。ダンナと別れてから梨を半分にし、エリアと分けて食べる。そのまま一度ギルドへ寄ることにして進む。ギルドに入ると何人かが依頼ボードを見ていたり、中央のテーブル席で朝食として軽食を食べている人がちらほら見受けられた。

このカース世界には、中央に有るセイラル大陸、その右に位置するバルシア大陸、南の辺境と呼ばれるユグル大陸がある。それ以外には個々の島々があるのだが、このムール街がある場所もセイラル大陸に面する島の１つである。

セイラル大陸に面している国がアルストロメリア王国の為、この島も領土の１つとしているが、各森には昔から結界が張られているところがあり、人間族の多いアルストロメリア王国の中でも他種族の住む区域という概念が強い場所なので、開拓はしていないそうだ。

ムール街は他の街に比べて一段と小さく、周りは森と山に囲まれている。ここら辺には特にコレ！というものが無いので旅人の足はまばらだ。そうなると盗賊・野盗なんかが出そうな気もするが、森の一部は結界により入れないし、結界以外のところには魔物も多い。しまいには南の山脈には竜族のストライダーが生息しているので盗賊とかも居ない。街を治める貴族もいるが、権力などに取り付かれず皆と助け合って暮らしているのだ。

周りが広大な森の為、食べ物には事欠かない。ちょくちょく冒険者に護衛されて商人も馬車で物資を売りにくる。戦争などの争いごとには無縁の街なのだ。しかしたまに来る旅人や商人が来やすいように、はたまた街を集団で襲われないように、定期的にギルドから魔物の討伐依頼を出す。それらをこなすのはＣランクＢランクの冒険者になるわけだが、それでもやはり街中の依頼の方が圧倒的に多く

なるのだ。その為ここにはランクの高い冒険者はあまり来ない。逆に言えばこれから冒険者を始めるには丁度良いとも言えた。突発的な危険が少ないからだ。

カウンターで待機しているサクラに挨拶し、ギルドの依頼状況を聞いてみる。

「おはようございます。依頼状況ですか？そうですね。最近は食材を仕入れる依頼が増えてますね。それなので他の冒険者の方も動物や魔物を狩ってその肉を売りに来る方もいますし。もちろん肉屋にも家畜がいるわけですが、違う肉をたまに扱うことで店の雰囲気を変えたい、という感じではないでしょうか。」

そうなんだ、それはタマさんが喜びそうだなぁ。とか考えながらカリスは聞く。

「そうそうトルトさんから伝言がありました。もし時間が空いたなら手伝いに来てほしい。とのことです。もちろん依頼としてですが。」

気に入られたようですね。と付け加えて微笑むサクラ。

「ははっ、前崩した所に建物建てるから手伝ってほしいとかそんな感じかな？」

はい。と返事を返された。それに午後顔を見せてみる。と答えてギ

ルドを後にする。

「この街って皆穏やかで過ごしやすいね。大騒動とかも無いし。」

「そうね。どこの町もコレくらいなら住みやすくていいのだけど。カリス。この街の雰囲気もしっかり覚えておきなさい。こういう街はめったに無いから。」

「そっか・・。うん、忘れないよ。」

2人で会話しながら街を歩いていると肉屋の前でタマを見かけた。何しているのかと足を向けると、店のお肉を見て目を輝かせている。

「タマさん・・お腹すいてるの？」

「じゅるり・・。にゃ！カリスとエリアじゃにゃいか。いやいや、お腹すいているとかそういうのじゃにゃいんだけど。にゃんかお肉見ると気分が良くにゃるのにゃ！特にこのお肉が美味しそうでもう・・にゃは～。」

「タマ・・食い意地張りすぎよ。それでも貴女は女の子なんだから。」

そうエリアは嗜めるが、タマは目を離せずにいる。

タマも２０才以上のはずだが、エリアからすればまだまだ女の子なのだろう。

「エリアそれはそうだけれど、アタシは花より肉にゃ！」

コレだけは譲れない！というような気迫を出して言う。エリアは溜

息を吐きながら、まぁタマだものね・・。と諦めた。

「タマさんご飯でも食べに行く？」

お肉でもいいよ。と言ったらすかさず、行くにゃ！！とこちらにキラキラとした目を向けて返事した。

「さっきお腹すいてるわけじゃないって言ってたような・・。」

そんなエリアの呟きは聞こえない、とばかりにタマはスルーした。

第２３話（後書き）

読んで頂きありがとうございます。

今回世界の大陸の事をおおまかに説明してますが、かなり適当なので後で変更するかもしれませんのであしからす。

次回もよろしくお願い致します。ｍ（＿＿）ｍ

第２４話（前書き）

開いて頂きありがとうございます。

感想ありがとうございます。

第２４話

行き付けのお店『お肉プラス亭』へ足を運ぶ。まだ昼前なので客足は少ない様だ。

「にゃ～。カリスからお肉の誘いがあるにゃんて今日はにゃんて素敵な日にゃんだろう・・。」

「タマさん大げさだって。仲間なんだからご飯くらい誘うよ。」

「にゃ！エリア聞いた?！これはもうアタシをペットと認めてくｒ「おだまり化け猫！」む！にゃんて言い様にゃ！・・・ふふん、さては嫉妬にゃ。アタシがペットとして認められそうだからって嫉妬はよくにゃいにゃ。」

「なに言ってるの。あなたなんて愛玩動物にはならないわ。哀玩動物が関の山よ。」

「にゃんですって!?失敬なこと言うもんじゃないにゃ！」

ニャゥー！っと威嚇するタマ。苦笑しながらもカリスは止めに入る。

「まぁまぁ、タマさんも姉さんも俺は好きだから。それにこれからご飯食べるんだし。仲良くしよう?」

何とか２人に抑えてもらい、声をかけづらそうにしている店員を呼んだ。

「本日は限定肉としてグリズリーのお肉が入荷しています。いかが

でしょうか？」

「それにするにゃ！」

店員の話を聞くとタマは即答した。なんでもグリズリーの肉はCランク以上の冒険者じゃないと狩れないのと、肉屋になかなか肉が出回らないので仕入れが困難なのだそうだ。ということで、グリズリーのお肉料理とサラダ、果実ジュースを頼んだ。

店員は一度カウンターへ下がると直ぐに果実ジュースを持ってくる。カリスはグリズリーの肉を食べたこと無かったのでタマに美味しいのか聞いてみた。

「あれは家畜のお肉とは別物にゃ。野生のものしかいないから当然にゃんだけど、身がしまってて食べ応えがあるのにゃ！」

そう豪語するタマ。カリスもその話を聞いてコレは期待できそうだ、とワクワクしてお肉が来るのを待った。それはそうとシーリーはどうしているのかとタマに聞く。

「シーリーは宿で静かに休んでるにゃ。さすがに怪我したところが足だから動き回ることもにゃくベッドの上だにゃ。一応医者に見てもらって薬草も塗ってもらったから直りは早いと思うにゃ。」

それなら大丈夫かとカリスは安心する。あれこれと3人で話しているとお肉料理が運ばれてきた。

「待ってたにゃ！早速食べるにゃ！」

そう言ってタマはお肉にかぶりつく。

「ウマーーー！！」

タマは目をキラキラさせて、むしろ涙さえ流して叫んだ！タマの周りはお花畑になっているようにも見えた。カリスとエリアも続いて食べ始める。

「うん、コレは美味しい。タマさんが豪語するのも分かるね。」

そう言って納得しながら味わって食べる。エリアも特に何も言わないが美味しそうにパクパク食べていた。丁度昼ごろになったのかお店に他の客も増えてきている。他の客もグリズリーのお肉が珍しいのか頼んでいるようだ。

「カリスと一緒にこんな美味しいお肉を食べられるなんて幸せにゃ。今までにこんにゃに幸せにゃことがあっただろうか・・・。いやっ！にゃいにゃ！」

何やら1人の世界に入って幸せそうにお肉をパクつくタマ。

「きっとコレはカリスが餌付けしてくれているのにゃ・・。自分のペットににゃってほしいというアプローチに違いにゃいにゃ・・。」

幸せそうにそう言いながら最後に残ったお肉に手を伸ばすが、しかし・・・。エリアがササっと最後のお肉を取って食べてしまった！！

「にゃぁぁぁぁぁ！！エリアにゃにしちゃってるにゃ！！アタシの大事にゃ最後のお肉にゃ！！」

タマの悲鳴がビッグバンの如くお店に轟いた。

「別にタマのと決まっていないでしょう。食べるのが遅いのが悪いのよ。」

「くぅ～。それは違うにゃ！カリスもアタシの為にとって置いてくれていたのにゃ！！（断定）」

「まったく・・。ならまた頼めばいいじゃないの。」

そうエリアに言われしぶしぶ店員にグリズリーのお肉をおかわりするが、店員は申し訳無さそうに本日のグリズリーのお肉は売り切れましたと言われ・・。

「にゃ・・にゃんだって・・？」

天国から地獄に落とされたかのような呆然自失なタマ。そこに追い討ちをかけるようにエリアは言う。

「あら、それならしょうがないわね。まぁ最後のお肉はちゃんと美味しく頂けたし良いとしましょう？」

タマにニヤリっと笑いかける。なんかをブツブツ言っていたタマはエリアの発言を聞いて徐に勢い良く立ち上がり、テーブルをバン！っと叩いた。

「もう我慢ならないにゃ！！エリア！あなたに決闘を申し込むにゃ！」

他のお客がいる中大声で叫んだ。エリアは冷たい目で見返し、

「・・・いいわ。その決闘受けましょう。何で決める?試あ・・・死合?それとも殺し合い?」

そんな物騒なことを言うエリアだが、お肉の恨みに燃えているタマはエリアの気迫に負けず睨み返す。

そんな2人を見てこのままじゃどちらか怪我しそうだと思い、何か無いか考えた。そういえば午後はトルトさんの所に行こうとしてたっけ。と思い出し、それならばトルトさんのところにお願いしてみようと決める。そのことを2人に言うと、カリスがそういうなら・・。ってことで、トルトのところで勝負をすることになった。

食事を終えて料金を払い『お肉プラス亭』を後にする3人。当然の如くエリアはカリスと腕を組んで歩き出した訳だが、それを見たタマがまたもや声を上げた。

「ちょっと!にゃんて羨まs・・・じゃない、くっつき過ぎだにゃ!」

「あら、だって今日はカリスとのデートだもの。コレぐらい普通でしょ?それとも何、嫉妬?発情しているの?」

「にゃ・・にゃんだとぉぉ〜〜。」

フギャー!っとまたまたタマは威嚇しだした。耳や尻尾がピンッと立って怒ってます、とアピールしているが顔を赤くして目をウルませている。

「なら勝負に賭けしましょう。その方が盛り上がるでしょう?」

「いいにゃ!受けて立つにゃ!アタシが勝ったらカリスのペットに

してもらうにゃ！」

何ドサクサにまぎれてカリスを奪おうとしているんだか、とエリアはぶつぶつ言うが、

「ふん、まぁいいわ。それなら私が勝ったらあなたを私の哀玩動物にでもしてあげる。」

「ぐ・・ぐぬぬぬぬぅ～。」

「あら、怖気づいたの？あなたの気持ちってその程度だったのね。やはりそんなんじゃあなたはカリスの傍にいる必要は無いわ。」

「それでいいにゃ！アタシが勝てばいいだけにゃんだから！」

ちょっとヤケになりながらタマは言い放った。その影でエリアはニタリ、と口元を歪ませた。

（フフフ、私とカリスの理想郷の為にもこれは勝ってタマをゲットしないとね・・・。）

なんて内心ほくそえみながら・・・。

建設現場へ行くと、今は土台の地盤を固めているようだ。これから骨組みに使われる木材も少しずつ運ばれている。責任者のトルトを探してカリスは声をかけた。

「こんにちわトルトさん。」

「やぁ！良く来てくれたカリス。ギルドで話を聞いて来てくれたの

かい？」

カリスの声に作業員へ指示を出していたトルトはこちらへ手を上げて返事をした。

「ええ、指名してくれたようで。」

「はは、君の働きっぷりはすごいものがあったからね。是非依頼したかったんだ。」

「ありがとうございます。実は今日は俺じゃなくて、こちらに居る2人が手伝います。」

その言葉にトルトは意外そうにカリスの後ろに居る女性2人を見た。

「ん、そうなのかい？出来ればカリスに手伝ってもらいたいのだが。」

カリスの働きぶりを知っているトルトからすれば他の人は劣るだろうとトルトは考えている。

「後ろの2人も冒険者で俺より断然優秀ですから問題は無いと思いますよ。」

「んまぁ、君がそういうなら大丈夫なのだろう。よし、じゃあ今家の骨組みになる木材を運んでいるところだからお願いしようか。」

「あ、ちょっといいですか・・・。」

そう言ってタマとエリアの事情を話し、勝負をすることを伝える。

それを聞いたトルトは面白そうにニヤリ、と笑った。

第２４話（後書き）

読んで頂きありがとうございます。

次回もよろしくお願い致します。ｍ（＿＿）ｍ

第２５話（前書き）

開いて頂きありがとうございます。

第２５話

「それなら丁度良い。今言った木材をどちらが多く運べるかを競ってみてはどうかな？柱一本男２人じゃないと運べないから時間もかかる。今日使うので残り運んで来るのは５０本だ。それなら勝敗も分かりやすいだろう。」

カリスは２人に顔を向け、良いかを確認する。２人とも頷いたのでトルトにそれでお願いします。と言った。

「それじゃあ作業員を１人づつ付けるか。」

「必要にゃいにゃ。１人で十分にゃ。まぁエリアがほしいというにゃらそっちは自由にゃけど？」

挑発的にタマは言う。が、エリアもいらないわ。っと断った。

「おいおい１本最低５０ｋｇはあるんだぞ？１人じゃ持てんだろうに。引きずるのはこまるぞ。」

「問題ないわ。私もカリスと同じことができるし、こっちの猫も仮にも獣人族。力は人１倍あるでしょうから。」

「そ・・そうか。じゃあ本当にいいんだな？それと傷つけてもらっては困るから運ぶ際は１本づつ運ぶように。木材を置いているのは南門の傍の木材屋だ。そこまで取りに行ってくれ。」

「分かったにゃ。・・むっふっふっふっ、エリアの負け顔が目に浮かぶにゃ。」

そう言って目を光らせ、こんな街中で風の精霊魔法を発動するタマ。
マジである。

「こんなところで魔法を使うなんて・・。街の人を吹き飛ばすつもり？」

あきれながらエリアは言うが、タマはコレは決闘だにゃ！！と言って開き直っている。

「それじゃあ始めようか。姉さん、タマさんいいね？」

スタート！！　そうカリスが宣言したところで2人の姿はかっ消えた。

その日街中のある区間では暴風が吹き荒れ街人が何人も飛ばされる、そして街中の道には爆発が起こりいくつものクレーターが作られる、という現象が発生した。

「くぅ・・。氣を使うのは卑怯にゃ！通り道がクレーターになってるじゃにゃいか！街を壊す気かにゃ！！」

「そういうあなたこそ精霊魔法の余波で人を吹き飛ばしてるじゃない！！他人を怪我させる気！？」

そう言い合いながらも一般の人には認識しずらい速度で木材を運ぶ2人。エリアは氣を使って地面を蹴っている訳で、蹴った部分が小規模の爆発を起こしクレーターが出来ている。タマは自分を纏っている魔法の余波を周囲に撒き散らし道の通行人を吹き飛ばしていた。

「こ・・これはえらいことを許可してしまったかもしれん・・。」

すごく後悔そうに呟くトルトをカリスは見て苦笑した。

「すみません。本人同士を戦わせる訳には行かなかったもので・・。」

「ああ・・いいさ。仕方ない・・。」

警備兵になんて言うか・・・。そう言って諦めたのかトルトは溜息を付いた。

木材を半分運んだところでさすがにその騒動を聞きつけた警備員が3人やってきた

「な、なんだこれは!道が穴だらけではないか!ひとまず街人を避難させよう。」

「ああ、そうだn・・お、おい!なんかくるぞ!!」

そう言った警備兵の声で残りの２人もそちらを見る。はっきりとは見えないが、長い柱のような物を担いだ何かがすごい勢いでこっちに近づいてくる。

「なんだあれは！・・やばい！避けるんだ！！」そう言って警備兵は転がる様に道の端に避ける。その横をすさまじいスピードで何かが爆発するような騒音と暴風を撒き散らしながら通り過ぎた。

「クソッ！なんだってんだ！おい！応援を呼んで来い！俺達はひとまずあれを止めなければ！」

「ああ、分かった！無茶するなよ！」

そう言って警備兵の１人が何かが来た方へ走り出した。

「あれを止めるのに生身のままではまずい！魔法を使うぞ！・・・・・大地よ！！」

そう言って詠唱をして魔力を練り、残った２人は地面に手を付いて魔法を唱える。その瞬間地面から高さ２ｍ、厚さ５０ｃｍ、幅は道幅より少し狭い程度の土の壁が競りあがった。しばらくすると先ほどよりさらに勢いを増した何かがこちらに向かって来た。

「そこの、止まれえぇぇぇぇ！！！」

そう壁の横から叫ぶ警備兵２人。が、しかし

「「じゃま・・・よ（にゃぁぁぁぁ）！！！」」

そう言ってものすごい勢いで暴風を撒き散らして走ってくるタマは勢いのままタックルを、道を爆砕しながら走るエリアは氣を込めた一撃の拳を壁に放って警備兵ごと吹き飛ばす！！

「ちょっ、ぐぁぁぁぁ！！」

横の店内へと警備兵2人は吹き飛ばされた。

そして応援を呼ぶ為に走っていた警備兵も追いつかれ、

「な、なん・・・うあぁぁぁ！！」

背中からタマの暴風に当てられて吹き飛ばされていった。

「ふふん、やるわねタマ。勝負はこれからよ！」

「当たり前だにゃ！」

そう言って二人はニヤリ、と口元を歪めた。と、ここでタマは脳裏にあることを閃いた。この風を使ってエリアを妨害しよう・・・と。

早速タマは精霊魔法を発動してエリアの足へ纏わり付かせる。自分に使った物は追い風だが、エリアに使った魔法は逆の向かい風だ。

「！！・・・何？まさか、タマ！！」

「ふふん、そこでゆっくりしているといいにゃ！この勝負勝たせてもらうにゃ！」

「卑怯なことを！妨害なんて！」

「妨害をしてはいけないなんてルールは決めてにゃいにゃ。」

エリアの荒げる声を聞きながらニマニマとほくそえむタマ。ここで氣凝縮させたらそれこそ街を壊してしまうから使えない。エリアはとっさに周囲を見渡して目的の物が無いかを確認する。少し先の店に目的の物が売っているのを発見しニヤリ、嫌らしい笑みを浮かべて直ぐにそれを店員に言って購入する。店員さんもこの状況を作り出している張本人から、いきなり品物を売ってくれと言われてかなり怯えていた。

購入した物を手に持って、すぐさまタマを追う。

「タマ！謝るなら今のうちよ！」

そうこちらに向かってくるタマに言うが、何のことか知らないにゃ！と言ってそのまま走り去った。

（良い度胸じゃない・・。いいわ、それじゃあ奥の手を使うしか無いわね。謝るチャンスはもう無いのよ！）

心の中でエリアは呟き、木材を担いで折り返す。そのまま走り、建設現場に近づいて来た所でタマがこちらに走ってくる。エリアへ勝

ち誇った目を向けて口元をにやけさせている。

と、タマの走ってくるで有ろう位置へ先ほど購入した秘密兵器、手で握りつぶして砕いたマタタビの粉を振りまいた。

「にゃ！ワップッ！！にゃんにゃ！？・・・ふぁ・・・。」

その中に突っ込んだタマはマタタビを風でまき散らされたが幾ばくかはタマ自身にもかかり、しだいに目元を潤ませ、足元が怪しくなった。

そのうちにエリアは木材を置きに行って折り返す。

「ふふん、タマ！！マタタビの中に自ら飛び込むなんて余裕あるわね！」

「にゃ・・にゃんてことを～～。」

タマに追いついたエリアはしっかり挑発して追い抜かしていく。タマも走ろうとするのだが、あっちへふらふらこっちへふらふらと足元がおぼつかず顔を真っ赤にしてなんとか進もうとしている。しかしながらマタタビ酔いしたタマは既に走る余力をもってはいなかった・・。

第２５話（後書き）

読んで頂きありがとうございます。

次回もよろしくお願い致します。ｍ（＿＿）ｍ

第２６話（前書き）

開いて頂きありがとうございます。

第２６話

「ずるいにゃ！！ヒック・・・マタタビを使うにゃんて！・・・ヒック。」

「あら、そうなの？お店で見かけた物が良い香りだったから気分転換に振りまいただけだったのだけど。」

「にゃ、にゃにを～・・・ヒック。」

最終的にマタタビ酔いで走れなくなって負けることになったタマは顔を真っ赤にしてまだ酔いの覚めない状態でエリアに抗議していた。

「だいたい、あなたが私に魔法で妨害するからじゃないの。しかも直接よ。私は回りにマタタビ撒いただけだもの。そこに自分からタマが突っ込んで行っただけ。」

ほら、どっちが悪いか分かるでしょう？そう言ってエリアは肩をすくめた。

「俺からすればどっちもどっちなんだけどね・・。だから途中経過は省いて結果として姉さんの勝ちってことにさせてもらうよ。ごめんね？タマさん。」

「そ・・そんにゃぁ～」

カリスが下した勝敗に涙ながらに落ち込むタマ。まぁ自業自得である。

「うふふふふ。さて、タマ。始める前になんて言ったかは覚えているわよね？」

そんなタマにエリアは嫌らしさ爆発の満面の笑みを浮かべて問いかける。

「え、えーっと。にゃ、にゃにか言ってたっけかにゃ？酔っててあまり覚えてにゃ・・い・・・n。」

タマはなんとか誤魔化そうとしていたが、次第に氷点下を下回るエリアの視線、殺気を感じ取り尻すぼみになっていった。

「・・・良い度胸ね。とりあえず、約束は約束よ。あなたは今この瞬間から私の哀玩動物に決定！契約させてもらうわ。」

「にゃ！ちょっと待つにゃ！！契約なんて一言m」

「だまらっしゃい！獣人族がペットになると言ったらそれは契約以外の何物でもないでしょう！！」

タマの発言を途中で遮り、ズビシ！！と人差し指でタマを指差すエリア。

「往生際が悪いわよ。それが獣人族の誇り？一度言ったことを反語にしてご主人様に逆らう・・・と？」

その言葉にタマは耳をたたんで尻尾もだらりとたらせ、プルプルと震えていた。

「う・・うう分かったにゃ・・。言うとおりにするにゃ・・。も、

申し訳ありませんでした・・ご主人様・・。」

「ふふん。分かればいいのよ、分かれば。」

そう言って満足そうに胸を逸らすエリア。逆にタマは涙を流しながらうなだれていた。

「タ・・タマさん?そんなに落ち込まなくても・・。きっと姉さんも変なことはしないから大丈夫だよ。」

「うう・・カリスは契約のことを知らにゃいのにゃ・・。一度契約しちゃうとその人には絶対に逆らえないのにゃ。あんにゃことやこんにゃことまでしにゃければいけにゃいにゃ。」

「ちょっと・・。私を何だと思ってるのよ。まぁいいわ。さっさとやるわよ。」

そう言ってエリアは自分の人差し指を歯で少し切って血を出し、タマの口元へ持っていく。タマはしぶしぶながら指から出ている血をペロッとなめて自分の体内エネルギーに刻み込む。その瞬間、タマが淡く発光しだした。

「ちょっ、にゃ!!あわわわぁぁぁぁぁぁ!!」

契約主であるエリアからタマへ膨大な量のエネルギーが流れたのだ。獣人族は契約を交わすと、交わした者同士で生命ラインが繋がり獣人側へエネルギーを流すことが出来るのだ。

「これでＯＫね。カリスちょっと来なさい。」

初めての契約により戸惑いと驚きのあるタマの元にカリスも呼ぶ。

「これでタマは私の眷属になったわ。そこでだけど、カリスあなたもタマと契約しなさい。」

「にゃ！にゃに言い出ｓ「あなたは黙ってなさい！」・・・はいにゃ。」

タマがびっくりして発言するがそれを一括して黙らせる。

「タマは今後いろいろと手を貸してもらうことになるし。それに獣人と契約というのも１つの経験よ。やっておいて損は無いわ。」

「ん・・。俺はいいけど、タマさん大丈夫？」

その言葉にタマは呆けていたが、ハッとして、是非お願いにゃ！と耳をピンッと立たせ、尻尾をブンブンふりながら返事をした。目もキラキラと輝いている。カリスも人差し指の先を切って血を出し、タマの口元へ近づけた。

タマは口元に来たカリスの指と血をジッと考え深げに見ていると、一気に人差し指の付け根までそれはもう、パクっと頂いた。しかも口に入れた人差し指をチュウチュウすったり舐めたりして目をトロンっとさせている。

「ちょっと！！調子に乗りすぎ！！」

そう言ってエリアはタマの首根っこを引っつかんでカリスから引き離した。

「にゃ！もうちょっとだけ！」

「もう十分でしょうが！私の血を舐めたときとはえらい違いね・・。」

そんなタマの態度に呆れるエリアだった。その後またまたタマの身体か淡く発光してカリスとの契約も完了。

「これでＯＫっと。二重契約だから一人一人の干渉は半々になるけど、私達には絶対になるから問題は無いわね。」

「ふふん、甘いにゃエリア！！カリスと契約した今、他の事はどうでもいいｎ」

「ほほぅ・・どの口がそのようなことを言っているのかしら？」

「ヒニャッ！！ひゃめふにゃ！！」

エリアにホッペを左右に引き伸ばされて変な声を上げるしかタマにはできなかった。

「ウォッホン！！いや・・まぁ珍しい物をみせてもらったが・・とりあえず木材の移動有難う。コレ報酬な。それとこの紙をギルドに持っていってくれ。正式な依頼完了の手続きもしてくれるはずだ。」

そう言ってカリスに報酬コインとサインの入った手紙を渡すトルト。すっかり傍観者になっていた。

「ありがとうございます。・・・街中は大変なことになってますが・・。」

「そうなんだよなぁ・・。何とかそっちでも謝っといてくれねぇか。」

「ええ、もちろんです。こちらでやったことですから。それではこれで失礼します。」

「ああ、ありがとう。また何かあったらよろしくな。」

街は壊さない程度に・・。と言ってトルトは手を振った。

「姉さん、タマさんギルドへ行こう。街のことも謝らないといけないし。」

未だにタマのホッペを抓ってじゃれているエリアとタマに声をかける。

「全く無駄な体力使わせないでくれる？ペットの癖に。」

「にゃ！言いがかりにゃ！主人ならもっとペットに優しくするにゃ！」

契約とかしてもなんだかんだで関係の変わらない2人だなぁ、と思いつつカリスは後ろの2人が来るのを待ってギルドに向かった。

「で、犯人はあなたたちだった・・・と。」

「はい・・。ごめんなさい。」

そう言ってカリスはギルド内のカウンターの反対側で頭痛を抑えている様な姿勢のサクラに頭を下げる。

「まぁ、こうして言いに来てくれたからいいです。軽度の怪我人はでましたけど酷いことにはならなかったので・・。ただ、街へのダメージが大きすぎます！本当に何してくれてるんですか！道はボコボコにするわ回りのお店の品物は吹き飛ぶわでどれだけの被害になったと思ってるんですか！」

「ごめんなさい。」

もう平謝りするしか無いカリス。そんなカリスの後ろでエリアは悪びれも無く、

「別にカリスが謝ることは無いわ。やったのはこの猫なんだから。ほら、しっかり謝りなさい！」

エリアの話の前半を頷いて肯定していたタマだが後半の話を聞くと目を見開いた。

「ちょっ！何人に罪を擦り付けてるにゃ！エリアだって共犯だにゃ！」

「何を言っているの？人に罪を？あなたがいつ人になったというのよ。ペットはペットらしく主人の命令に従えばいいの！」

「にゃぁぁぁ！！ずるいにゃ！カリス！エリアがいじめるにゃ！」

そう言ってカリスに助けを求めるタマ。

「まぁまぁ、姉さんも落ち着いて。とりあえずサクラさんの方にどうするか聞かないと。」

困惑顔でサクラに振る。

「まったくあなたたちは・・。街の被害、各お店の被害をあわせて１００万コインほど支払って頂きます。もしそれが払えないのでしたら、明日より１００万コイン分の仕事を無償でして頂きますのであしからず。」

「ひゃ・・１００万コイン・・。そんなに？」

膨大な額にカリスは声に出して言った。

「もちろんです。そのお金で街の修理と各お店にでた被害の品々を買い取る形になります。これは決定事項です。」

「仕方ないわね。タマ、お金払いなさい。」

「ちょっ！！だからにゃんでアタシばっか！！いや・・いわにゃくてもいいにゃ・・。でもアタシもそこまでお金無いにゃ。今あるお金で５０万コイン。」

「はぁ・・。使えないペット・・。「だから酷いにゃ！！」まぁいいわ。残りの５０万コインは私から出す。タマこれは貸しね。」

「ふにゃぁぁぁぁ！カリスゥ、アタシもうだめにゃああ！！」

非情なエリアのその言葉でとうとうタマはカリスに泣きついてしまった。そんなタマの頭をよしよし、と言いながら撫でた。内心かわいいなぁとか思いつつ。

「じゃあサクラさん、これでお願いします。ご迷惑をおかけしてすみませんでした。」

カリスは2人から受け取ったお金をサクラに渡しながら、誠意を込めて頭を下げた。

「・・・なぜか納得しづらいのですが、はい確かに受け取りました。タマさんとエリアさん、ギルドのブラックリストに載せていただきますので以後注意してくださいね！」

サクラの言葉にエリアははいはい、とタマは不幸だにゃ！と返事をした。

「タマのせいで仕事したのにお金も減るし散々ね。」

そんな言葉をエリアが吐くが、タマはカリスに抱きついて泣いたままうなだれていた。

第２６話（後書き）

読んで頂きありがとうございます。

次回もよろしくお願い致します。ｍ（＿＿）ｍ

第２７話（前書き）

開いて頂きありがとうございます。

第27話

ギルドで騒動について謝った後、シーリーのお見舞いの為に八百屋で果物を買って宿に向かうことにした。
タマは今カリスの腕に抱き付き未だに泣いている。
ちなみにエリアもカリスの反対側の腕を自分の腕に絡ませて、俗に言う両手に花状態だ。片方泣いているが・・。

「果物も買ったしシーリーの宿に行こう。タマさんゆっくりでいいからね。」

そう優しくタマに話しかけて足を進める。タマは泣いていることもあってカリスにベッタリだ。
エリアはそんなことはお構いなしですまし顔。

宿に着いて、カウンターにいる男性の店員にシーリーの客と伝えるが、両腕に女性（片方泣）を連れているカリスを訝しげに見てくる。が、泣いているタマを見ていつもシーリーと一緒にいる人と思い出してくれて2階にあるシーリーの部屋まで案内してくれた。

「シーリー、カリスだけど入っても良い？」

扉をノックしてから声をかける、すると中からあわてた様なゴソゴソとする物音がした後、

「カ・・カリス？良いわよ。入って。」

返事を貰って扉を開けた。部屋の中は6畳半ほどだろうか、扉の正面には窓があって店の前の道が見えるようだ。

左壁に面してベッドが置かれており、その上にシーリーは上半身を起こした姿勢で迎えてくれた。左の壁には小さな四角い机と椅子が置いてあり、机の上には華を飾った花瓶が置いてある。剣と盾はベッドの横にかけてあった。いつでも手に取れる様にだろう。

「様子見に来たよ。はい、これお土産」

そう言って果物の入ったバスケットを掲げてみせる。中身はリンゴとバナナだ。

「あ・・ありがとう、来てくれて。ってどうしたのタマ？」

カリスにお礼を言いつつタマがカリスの腕に抱きつき泣いているのに気がついて聞く。

タマが直ぐに返事できないでいたようなので、姉さんと喧嘩したんだ。とカリスが答えた。

シーリー的にはいつもの事と思ったのか溜息付いて安心したようだ。

「怪我の方も安静にしていれば大丈夫そうかな？」

ちょっとナイフ借りる。と言ってエリアとタマを腕から優しく離した後、椅子に座ってリンゴの皮を剥き始める。

エリアはスッと腕を離した後机にお尻を乗せて座ったが、タマは直ぐに座ったカリスの腰にお腹側からしゃがんで抱きしめた。

「っとタマさん気をつけてね。ナイフ使ってるから。」

そんなカリスにベッタリなタマを見たシーリーは何か他にあったのではと思い、聞いてみることにした。

「なんだかタマさん、いつも以上にカリスに甘えているように見えるんだけど何かあったの？」

それにカリスが自分と姉さん2人と契約したことを話した。急にそんな話になってシーリーも驚いた。

いつの間にそんな仲になったのかと。それなので昼間のことを話す。

それを聞いていたシーリーは最初は驚いていたが途中から呆れ顔になって最後には溜息すら吐いていた。

「なんだか自業自得ね。まぁタマも念願かなってよかったじゃない。カリスのペットにもなれたんだし。」

「カリスだけが良かったのにゃ！」

タマもしっかり話は聞いていたらしくカリスに抱きついたまま声を出す。

そんなタマに皮を剥いてカットしたリンゴを皆に配ってから頭を撫でてあげた。

そのままタマの頭を撫でてあげつつ話を続ける。

「まぁ自業自得というところではそうだね。でも契約云々はともかく、言いたいことを言い合える仲っていいよね。本当の仲間みたいで。」

「んー・・。そうかもしれないな。それが、私の望んだ世界なんだ。本当にカリス達に出会えてよかった。有難う。」

カリスの話を聞いていたシーリーは幸せそうにお礼をいう。カリス

はシーリーを笑顔で見つめ、エリアは微笑みながら窓の外に目線をやっていた。ちなみにタマは・・・。

「ふにぁ・・んんぁ、ふぁん・・。」

シーリーの話なんて聞いておらず、カリスに撫でられているうちに気持ちよさそうに目をトロン、とさせて可愛く鳴いていた。

「それじゃあ、そろそろ行くね。」

あまり動き回らない様に、と言い残して立ち上がる。エリアとタマも倣って立つ。

「ええ、ありがとう。」

そう言って部屋から出る3人をシーリーは見送った。

3人はカリスを真ん中にして腕を組み街中を歩く。タマは機嫌が良くなったようで幸せそうな笑顔でカリスの腕を組んでいる。

「そろそろ帰ろうかと思うんだけど、タマさんどうする?」

「付いていk「却下。」なんでにゃ!ペットににゃったんだから付いて行くのが普通にゃ。」

当然の如くついて行こうとしたタマだか、素早くエリアに却下された。

「付いて来たって寝る場所とか無いわよ。」

「カリスと同じベッドでいいｎ「さ、帰りましょうカリス。」だから待つにゃ！」

「全く・・・。貴方荷物や宿契約やらあるでしょう。だから今日は宿に戻りなさいと言ってるの！」

「ううん、分かったにゃ。カリスまた明日にゃ。」

そう言ってタマは名残惜しそうにカリスから離れて自分の宿へと向かって行った。

「姉さん、タマに厳しくない？なんだか可哀想だよ。」

「カリスの言いたい事もわかるけど、獣人族が自分の気に入った人と契約した場合、テンション上がり過ぎて調子に乗って騒動を起こすのよ。だから今のうちにしっかり躾が必要なわけ。」

異性だと特にね、覚えておきなさい。そうエリアは言った。

確かに否定できないかも・・。と呟きつつカリスは頷いた。

カリスとエリアの２人は小屋に帰ってから夕食をとり、夜の鍛錬へと移る。

「夜の戦闘も慣れてきているから今日はちょっと変わったことをしてみましょうか。」

そう言ってエリアが取り出したのは黒く細長い布。エリアはカリスの後ろに回って目を隠すように頭に巻く。

「もしかして目隠しして戦うの？」

「そう！一度は体験しておくともしもの時の為に便利よ。戦闘では何が起こるか分からないからね。
氣を使って全ての感覚を駆使して感じ取りなさい。
人だけでなく、周囲の木・動物・草花、生あるものは気を持っているのだから。
その微弱なものまで掴めれば言うこと無いわね。」

そうカリスに教授し、まずは森の中を歩かせる。

「ん、移動する分には問題無いかも。でも戦闘となると認識が追いつかなさそうだ。」

「目を使っている時と、今の差があなたの目の使用量よ。それはあなただけでなく世界中の人々全てが大体そんな感じなのよ。ということは目はかなりの弱点になる。目を使えなくすれば認識が困難になるのだから。目を頼るな、とは言わないわ。目で見ることだけに拘らないようにしなさい。
そうね・・1つの例えで言えば、獣人族の中には鼻が聞く人もいるわ。そういう人は目で認識しなくても匂いで周りを認識できる。これも1つの方法ね。使える物は使った方が自分の為よ。」

まぁ自分に合わなければ無理やり使う必要は無いけれど。そうエリアは言う。

「ん、了解。いろいろ試してみるよ。」

エリアから話を聞いたカリスは氣をフル活用して周囲を認識して木の枝に飛び乗ったり走り回ったりした。

2時間ほど走り回って慣れてきたのか最初の内は緊張して動きが硬かったが、段々動きも柔らかくなり周りが見えているのではないかと思うようになった。

「すごいね。目だけじゃなくて氣で周囲を認識するとこんなにも森の中は生命で溢れているのかと驚かされるよ。」

「ふふっそうでしょう？この世はこんなにも生で溢れているの。私達はその内の1つでしかないのよ。世界は自分だけじゃない、沢山のモノが生きてるんだから。」

カリスが多くの生命を認識したことに喜びを見せるエリア。
大きな力を持ち、使う者ならば知っておかなければ道を間違えかねない大事なことだ。
当たり前とも言えることだが、それを知らない人、知っていても理解・認識していない人が多すぎる。
これからのカリスにきっと必要になることだろう。

「それじゃあ慣れてきたところで軽めに模擬戦しましょうか。」

軽めにね。そう言ってエリアとカリスは向かい合って手合わせを始めた。

今日も綺麗な満月が夜空に浮かび、可憐に踊る2人を照らしていた。

第２７話（後書き）

読んで頂きありがとうございます。

次回もよろしくお願い致します。ｍ（＿＿）ｍ

第２８話（前書き）

開いて頂きありがとうございます。

この話辺りから継承編、終盤に向かって走り出します。

と言っても後１０話くらい続きますが・・。

第２８話

「ん・・んん。」

日の出と共に眠りから覚めたカリスはまだ目を閉じたままベッドの上で横になっていた。

なんだか柔らかくて暖かい、いい香りのする何かが腕の中にあり、ついつい気持ち良くて抱きしめている。

半分寝ぼけながら目を開けると、目の前にはエリアの幸せそうな寝顔があった。お互いの鼻が付きそうな距離である。

カリスはその顔をぼーっと眺めていた。

（やはり姉さんは綺麗だ。しかも寝顔は可愛い。）

と、思っていたら、いきなりエリアの顔が近づき、チュッと啄む様にキスされた。

「ふふっありがと、カリス。」

すごく嬉しそうな笑顔でお礼を言うエリア。どうやら思っていた事が最後の方声に出ていたようだ。

「ん、おはよう姉さん。いつこっちのベッドに入ってきてたの？全然気がつかなかった。」

その問いに、カリスの寝息が聞こえてからすぐよ。と答えてもう一

度啄むキスをカリスにしてから起き上がった。

「さ、ご飯の用意をしましょう。」

2人は取り置きしている干し肉でスープを作り、朝食を済ませ、午前中は昨夜のおさらいをした。

あまり苦戦する事もなく、軽く手合わせ程度ならエリアと出来るほどの腕前だ。これならタマとならいい勝負になるかもしれない。と思い、エリアはほくそ笑んだ。

2時間ほど目隠ししての手合せを行い、その後は氣の凝縮の鍛錬を行った。

昼は街で食べる事にして、2人は森をでる。

街の門番と他愛ない話をしてから通してもらう。すると直ぐにタマがこちらに走って来てカリスに飛び付いた。

「遅いにゃ！もっと早く来てほしかったにゃ。」

昨日から待ち遠しかった様で、タマはカリスに甘えた。

「タマさんごめんね。でもいつも通りだと思うんだけど。」

頬ずりすらしそうなタマに頭を撫でて上げながら謝る。

「契約したんだから、さん付けはしにゃくていいにゃ。それに普通は契約したら一時も離れずいるモノにゃ！」

そういいながらも気持ち良さそうに撫でられている。

「それにしてもよく俺たちが来るの分かったね。」

「ふふんっ、それは愛の成せる技ｎ・・」

「そんな分けないでしょ。契約したら相手がどこにいるか大体分かるようになるのよ。」

そんなに離れていなければね。とタマの言葉に溜め息をつきながら言う。

「お昼まだだから食べに行くわ。一応シーリーにも声かけてみましょう。まだなら一緒に食べた方が美味しいものね。」

と言うことでシーリーを誘ったところまだ食べてない様なので、４人で宿の１階にある食堂で食べることにした。

タマが『お肉プラス亭』がいいにゃ、とボソッと言ったがエリアにチョップされて黙った。

薬草のおかげか、傷自体は塞がったシーリーはまだ少し筋肉に突っ張る感じがするとのことで、カリスが手を貸して１階へ下りる。

「もう少ししたら痛みも引くと思うから、また依頼を受けれると思う。」

シーリーとしても早く治して依頼をこなしたそうだ。それを見たカリスは微笑んだ。

他愛ない話をしながらご飯を食終えて、シーリーの部屋まで戻った。

「少し契約したことでタマと話があるから席外すわね。」

そう言いタマを連れて行こうとするエリアにタマが抗議した。

「にゃ！アタシはカリスから離れたく無いにゃ！」

しかし相手はエリアである。嫌がるタマの首根っこ掴まえて引きずっていった。

「行っちゃったわね。・・・ねぇ、カリス。あまり2人きりになれないし丁度いいから言うわ。私に声掛けてくれてありがとう。PTに誘ってもらえたこと本当に感謝してるの。近い内にCランクになれそうだし、自分が夢に見た大事な仲間も出来た。感謝しきれないほどね・・・。」

シーリーは今までのことを振り返り、改めてカリスにお礼を言う。

「うん、俺も声を掛けてよかったよ。一緒に依頼をこなして気持ちを分かち合える大事な仲間ができて。こちらこそありがとう、シーリー。」

シーリーは顔を赤らめながらコクンっと頷いた。

「あ、あの・・Cランクになったらその後はどうするの？予定とかある？」

「俺さ、今姉さんに鍛錬してもらってるんだけど、Cランクに上げるのもその1つなんだ。最終的には旅に出て、世界を知ることなん

だけど。ランクが上がったら俺の実力を確認して旅に出る事になると思う。」

「そ・・そうなんだ。もしね、もし私も・・・。いえ、何でもないわ・・。」

カリスの話を聞いてから目を潤ませながら俯き、小さな声でシーリーは呟く。自分も一緒に行きたいと思いながら・・。

カリスはそんなシーリーを見て、すごく儚く今にも壊れてしまうのではないかと思い、ベッドに腰掛けているシーリーを抱きしめた。

「っっ！」

「シーリー、俺は帰って来るよ。大事な仲間と家族がいるこの場所に。世界を周るわけだからすごく時間もかかるけれど、帰って来るから。」

その間姉さんとタマをお願いね。そうカリスは言った。シーリーは涙を流しながらカリスにしがみつく。
暫くしてから少し離れて顔を見つめ合い、目を閉じてゆっくりとお互いの唇を重ね合わせた。

「お待たせ、まったくタマが聞き分けが悪くて時間がかかったわ。」

「人のせいにするのは良くにゃいにゃ！」

エリアとタマは部屋に戻るなり言い合いを始めた。それを見てカリスとシーリーはお互いの顔を見て笑あった。

「む、にゃんだかカリスとシーリーの仲が良くにゃっている気がするにゃ。」

2人の態度を見てタマは言う。シーリーの目元が赤くなっているのを見て大体のことを察してカリスへ視線を向けるエリア。その視線を受けて照れくさそうにするカリスを確認し、エリアも満足そうに頷いた。

それからは4人で夕方までゆっくり過ごし、カリスら3人はシーリーと別れて外へ出た。

と、カリスは南の方角が嫌に騒がしく感じ、南へ顔を向けるが目に映るのはムールの街並だけだ。

「カリスも気付いたようね。南の山脈の方が騒がしいわ。」

カリスの行動を見てエリアは言う。

「南の山脈でにゃにかあったということ?」

「そうでしょうね。大体想像できるけれど。大方あの冒険者3人が竜族を怒らせたのでしょう。」

「竜族が怒ったとして分かるものにゃのかにゃ?」

「1匹2匹怒る程度なら気にも止めないし、気づかないでしょう。

でも今は山に居る竜族全てが怒りを抱いているように感じるわね。」

「そ、それってかなりやばくないかにゃ？」

「異常なのは確かよ。その怒りがこの街に来るかは分からないから何とも言えないけれど。」

「あの３人の冒険者が関わってるにゃら危険な気もするにゃ。」

エリアの話に不安がるタマ。カリスはジッと南の方を見ていた。

「一応ギルドに話をしてみよう。それとタマ、万が一の事もあるしシーリーの事お願いできる？」

「うう、今日こそはカリスと一緒に居られると思ったのに・・。」

うな垂れるタマの頭を撫でながらもう一度、お願い。と言って、頷いてもらう。

「それじゃあ姉さん、ギルドに向かおう。」

カリスとエリアはタマを残し、ギルドに足を進めた。

ギルドに着き、カウンターに居るサクラへ声をかけ、南の山脈で気付いたことを報告する。

「今すぐどうこうって訳では無いけれど、警戒くらいはしておいた方がいいでしょうね。」

「南の山ですか・・・。分かりました。一応ギルドマスターへ話しを上げて見ます。誰かしら様子を見に行かせなくてはいけませんね。情報ありがとうございます。」

サクラはお礼を言って頭を下げた後、他のギルド役員にカウンターを任せて奥へ向かって行った。

「それじゃあ私たちは他にやる事も無いし帰りましょう。」

エリアはそう言って歩き出した。

「静まらないね。」

夜になり、2人で夕食を食べた後、カリスは瞑想をしていたが、南のざわめきが気になりポツリと呟いた。

「そうね、とりあえずは様子見よ。こっちから出向いて行って逆に相手を煽る事にもなりかねないもの。」

「うん・・。明日にならないと何とも言えないか。」

もしかしたら明日は忙しくなるかもしれないと考え、今夜は瞑想のみを行って、寝床についた。

第２８話（後書き）

読んで頂きありがとうございます。

次回もよろしくお願い致します。ｍ（＿＿）ｍ

第２９話（前書き）

開いて頂きありがとうございます。

第２９話

夜明け前にカリスは目を覚ました。

「起きたわね、カリス。南の騒がしさが昨日より明らかに近づいて来ているわ。」

先に目を覚ましていたエリアがカリスが起きたのを確認して話しかけてきた。カリスも南の騒がしさに気がついて目を覚ましたのだ。

「これは直ぐ向かった方が良いね。用意する。」

直ぐに起き上がって着替え始める。ナイフを腰の後ろに付けて２人は小屋をでた。

「間に合うといいけど・・。」

「先行しているのもいるかもしれないけれど、本隊が来る前にはこちらが先に着けると思うわ。」

２人は森の中を疾風の如く走りながら話す。

気配からして１０や２０と言う数ではないだろう、とエリアは考えているが、たかが冒険者３人でこんな事になるほどの何を起こしたのか疑問を感じている。

急いで街に向かうと着く頃には朝日が丁度出始めた。北門には避難して来る人でごった返している。

そのまま北へ行く人も少なくない。隣街まで避難するのだろう。

避難して来た人に大声で誘導の指示している警備兵がいるのでそちらに向かう。指示しているのは顔馴染みの門番だ。

「状況はどうなってますか？」

「ああ、カリス君か！南からストライダーが団体で来ているらしい。事前に避難勧告がでている状況だが、もういつ来てもおかしくない。君達は街中での誘導を手伝って貰いたいんだがいいか？」

「分かりました。中に仲間もいるので直ぐ行きます！」

門番の話しを聞いて直ぐに街へ入る。まずはタマとシーリー2人との合流をする為に宿へ向かった。

「タマ、シーリー！」

2人が丁度宿からでて来たので合流する。シーリーの足の怪我は歩ける位には回復しているようだ。

「ゴルォォォォ！！！」

合流した直後、南門の方から雄叫びが聞こえてくる。ついにストライダーが街まで来てしまったようだ。

「タマ、シーリーを北門までお願い！俺と姉さんは南に向かって逃げ遅れた人の避難誘導と、ストライダーの足止めしに行く！」

「わかったにゃ！カリス達も気をつけて！」

「待って！危険よカリス！あなたも避難しないと！」

カリスの指示に素直にタマは頷くが、シーリーはカリスが心配で呼び止める。

「シーリー、カリス達なら大丈夫にゃ！ストライダーに負けない実力があるから！」

「で、でも！」

「早く北門へ行きなさい。カリスは私が見てるから大丈夫。」

「・・・わかった。絶対無理はしないでね！」

タマの言葉でも不安が拭いきれないシーリーだが、エリアにも言われて逡巡しながらうなずいた。

「行くわよカリス。」

エリアの声に頷いて、カリスとエリアは南門へ向かって走って行った。

「クソっ！魔法が効かない！」

「ダメだ剣でもキズ付かん！」

北門では冒険者が８人ほどで五匹のストライダーを相手にしているが、全くダメージを与えられないでいた。

「このっ！ぐっ、あああぁぁぁ！！」

再度剣で攻撃を仕掛けた冒険者がカウンター気味に吹き飛ばさた。

「おい、大丈夫か！」

他の冒険者が声を掛けるが、起き上がれずにいる。肋骨かどこか骨を折ったようだ。

「これじゃあ足止めにもなんねーよ！」

こちらの攻撃は効かず、向こうからの攻撃は致命傷になるなど話にならない。

冒険者達が引くか耐えるか悩んでいると、後ろから何かが勢い良く自分たちを抜かして前へでて行った。

「はっ！」

ドゥ！！！

カリスはストライダーを囲っている冒険者を勢い良く抜かして、その勢いを使った飛び蹴りを一番近くにいた1匹に喰らわせた。

ストライダーは全長3m高さ1．7mほどで話に聞いていたように、竜としての翼はかなり小さく申し訳程度に背中に生えている。

飛び蹴りを喰らった1匹は10mほど吹っ飛びビクビク痙攣している。

「土魔法が使える者、今すぐ足止めようの壁を作りなさい！高さは2mあれば良いから厚めな壁を！」

到着したエリアは直ぐ様周りの冒険者に指示を出した。

「お、おい何だよあんたら！いきなr」

「グダグダ言ってないでさっさとやりなさい！」

戸惑う周りの冒険者達に問答無用で言い放つエリア。その力有る叱咤により冒険者の内3人がストライダーを囲む様に土の壁を作って行く。

それによりストライダーを一時的だが街の奥へとは行かさないようにする。

彼らの相手を倒そうという発想自体が間違っているのだ。

この場合は相手の動きを封じることが大事になる。特大な火力を持つ、または氣を使うかしなければ倒せないのだから。

「まだ5匹だけのようね。カリス！丁度良いわ、あなたが残り４匹仕留めなさい。」

「ん、わかった。やってみる。」

次が来るから素早くね。そう会話する2人に冒険者が声をかけてきた。

「1人でなんか無茶だ！何考えている！」

「あなた達はそこで見てなさい。邪魔しないようにね。」

エリアの冒険者達を馬鹿にした様なモノ言いに腹を立てた冒険者が抗議しようとしたが、カリスが動きだして周りの冒険者達は目を見張った。

カリスは腰から大きめな使い慣れたナイフを右手に持ち、次の瞬間その場から消えた。

素早くストライダーの横を通り過ぎ様に氣を流したナイフで首元を切って行く。

ストライダーはカリスの動きについていけず、右往左往していたが１０秒ほどでカタがついてしまった。

カリスとしては、最初の蹴りの時の手応えでストライダーが氣を纏っているのは分かったが、コントロールしているわけではなく、ただそこにあるだけと理解した。

この程度なら、しっかりと氣を溜めたナイフで斬れると思ったのだ。

実際斬って見た感じ、抵抗はあったが、氣を流さないナイフで動物

の肉を斬るのと同じ程度だった。

「なっ、何したんだ？」

「ご苦労様、戦ってみた感じどうだった？」

冒険者を無視してエリアはカリスと話し始める。

「反応が思ったより鈍いのと鈍足だからどうとでもなるかな。それと確かに硬いんだけど、ただあるだけって感じだったからしっかり溜めれば斬れる。」

カリスの言葉に満足して頷くエリア。周りの冒険者が無視するな、と騒いでいるがエリアは顔も向けなかった。

「うわ！すごいじゃないかお前ら！まさか５匹も倒すなんて！」

「い、いや俺達は・・・。」

すると北側からこちらに冒険者が１人走って来てストライダー５匹の亡骸をみて驚き、この場にいる顔馴染みなのだろう冒険者に話かける。

しかし周りの冒険者は魔法で壁を作っただけで他には何も出来なかったため、言いよどんだ。

「もうじき団体さんがご到着ね。４０・・５０匹くらいか。」

冒険者達の話をスルーしてエリアが言う。その数に周りの冒険者達は顔を引きつらせた。

「ちょっ、そんな数相手になんて出来るか！北へ撤退しよう！」

「ならところどころに壁を作って置きなさい。打ち漏らしがあっても出来るだけ壁で妨害できるように。私達が足止めするわ。」

またも冒険者達が抗議するが、エリアはさっきカリスが殺ったことを言い、黙らせる。

後から来た1人の冒険者はカリス1人で殺ったという話を信じられないようで驚いていた。

「クソっ、じゃあ任せるぞ！いいんだな?!」

冒険者はやけくそ気味に叫んだことにカリスが頷いた後、倒れた冒険者を担いで9人とも北門へ向かった。

「結構な数だね。門の外で相手する?」

「いえ、折角壁も作ってもらったし中で相手しましょう。その方が敵も動きが制限されるはずよ。」

カリスの問いにエリアは答えて場所を確認する。

しばらくすると南の方から何十匹ものストライダーが押しかけてきた。

数が多いこともあり、すでに南門周辺にまで地響きが起きていた。

第２９話（後書き）

読んで頂きありがとうございます。

次回もよろしくお願い致します。ｍ（＿＿）ｍ

第３０話（前書き）

開いて頂きありがとうございます。

第３０話

カリスとエリアは牽制・挑発の意味を込めて、土魔法で壁を作った際にこぼれた石を拾って氣を溜めた後、ストライダーの先頭へ投げる。
特に狙いを付けなくても真っ直ぐ投げればはずすことも無いほどの数だ。

「ゴルォォォ！！！！」

石の一撃を喰らったストライダーは姿勢を崩し、後ろのストライダーに押されて倒れたり、巻き添えにしたりしている。
攻撃が来ていることを認識してか、雄叫びを上げながら南門へ襲い掛かってきた。

カリスとエリスは南門から入ってきたストライダーに素早く近寄り首元を掻っ斬っていく。
横を走り抜けすれ違い様に、スライディングして下を通り過ぎる間に、ジャンプして背中に乗って、相手に認識できない速度で次々に屠っていった。

２人が２０匹ほど倒したところで、南門がストライダーの突進の勢いで崩壊し、より多くの数が一気になだれ込んできた。

雪崩れ込んだ瞬間にエリアは氣を凝縮した左拳を地面に叩きつけて、その衝撃により南門を崩壊させて来たストライダーの群れを一気に吹き飛ばす。
ダメージは少ないが、吹き飛ばされたことで多くのモノが倒れたり、ひっくり返ったりしてバランスを崩したのでその隙に２人は次々に

しとめて行く。

エリアが放った衝撃を喰らわず生き残った数が１０匹になるころにはエリアとカリスも落ち着いて対処して、残りを仕留める。

「数匹外壁から回り込んだわね・・まぁあちらはタマに任せましょう。」

周りの気配を確認して言うエリア。そこへギルド役員がこちらの様子を確認しに来た。

「はぁっはぁっ、な!、こ・・これは・・・。あなたたちが・・?」

夥しい数のストライダーの亡骸が散らばっているのを見て顔を青くしなが問うギルド役員

「ええ、一通り片付けたわ。北側の様子はどう?」

「は、はい!向こうはあらかた避難完了しました。街人を集めてその周りを冒険者や警備兵でしっかり護衛しています。」

「それなら大丈夫かしら。それで今回の件は実際何が原因かわかった?」

「ええ、それが、・・・。」

「何よ、もったいぶる事でもないでしょう?」

ギルド役員が話した内容はこうだ。

南の山脈が騒がしいと情報が入ってから南に偵察に行った役員は、

ボロボロになって南から走ってくるエルフ男に会った。
そのエルフはしきりに逃げろ！と言っていたが、なんとか落ち着かせて話を聞くと、彼らは3人でストライダー討伐に行き、ストライダーの様子を伺っていたところ卵を3個見つけたそうだ。
そこで彼らは考えた。なんせ竜の卵である。帰って特定の場所に売ればかなりの金額になるのだ。

早速卵を奪って一度引き換えそうとしたがその時上空から雄叫びを上げながらデカイ影が襲って来たとのこと。
3人のうち2人はなんとか避けたが1人は攻撃を喰らいそのまま亡き者になったが、生き残った2人は死ぬ気で来た道を逃げたようだ。
当然持っていた竜の卵を投げ捨てて。

しかしそれがいけなかった。竜の卵は山の崖から落ちて行き割れてしまった。空から襲って来た影は空を劈くような雄叫びをあげて襲い掛かってきた。
一緒にいたもう1人の冒険者が先に襲われ、何度かの攻撃を防いだが、直ぐにデカイ一撃を喰らって吹っ飛んだ。
が、直ぐに何とかボロボロになりながらも起き上がり、デカイ影がそちらに注意を取られている隙にエルフ男は風魔法を使って逃げ出した。

しかし、デカイ影が雄叫びを上げてから周りのストライダーが一斉に怒りだし、襲い始めてきた。
それをなんとか振り切ってここまで逃げてきたらしい。

「その話を聞いて考えられるのはその卵の親は襲って来たデカイ影よね・・。そしてあの山脈で大きく、空を飛べる竜といったら・・・。」

「・・・はい、ランクS指定のワイバーンかと思われます。」

ギルド役員は唇を震わせながら答える。そんな話について行けなかったカリスが、ワイバーンについて尋ねた。

「ワイバーンはストライダーの進化、成長した姿よ。大きさは2倍になって翼も伸びる。もちろん空を飛ぶ為にね。飛竜の一種よ。ストライダーの時とは違って口に魔力を溜めて火の玉を吐いてくるの。それと防御力も一気に上がるわ。接近戦ができるなら何とかなるのだけれど、空に飛んでいるのが問題ね。こちらの攻撃は届かないのにワイバーンは火の玉で攻撃してくるんですもの。もちろん威力もそれなりよ。ここら辺の家なら一撃で数家もってかれるわね。」

「空か・・投擲とかもダメ？」

「さすがにね・・・ただの剣や矢では氣を使っていても難しいところよ。良くて牽制くらいじゃないかしら。」

距離があるし下から上に、だから。そんな話をしていると空からストライダーとは異なる雄叫びが周囲を振るわせた。

少し時間を遡る。

街の北門の所まで避難した街人達は元の半数くらいの人数になって

いる。残りの人数はさらに北へと避難したのだ。この場所に残っている者は年寄りや、この街に店を構えている人達だ。避難民の周りは冒険者と警備兵が警戒に当たっている。その中にタマとシーリーの姿があった。

「あの2人大丈夫かしら・・。」

シーリーは2人が心配で不安な表情をしながらタマに話しかける。

「大丈夫にゃ！2人ともアタシ達では想像も出来ないくらい強いはずにゃから。逆にあの2人で何とかならなければこの街はもうダメだと思うにゃ。」

後半は声を小さくして回りに聞こえないように話すタマ。
それでもシーリーは不安の全てを拭い去ることは出来なかった。

「・・・街までストライダーが来たようにゃ。南門辺りが騒がしくなったにゃ。」

「っ！！カリス・・。」

タマは耳をピクピク動かして音を探った。この北側は今のところ安全だが、カリス達の打ちもらしがあるかもしれない。と思い警戒するタマ。
しばらくすると街の外壁を回りこんで走ってくる重い足音がいくつは聞こえてきた。

「ストライダーが何匹か外壁を回りこんで来るにゃ！！！」

「「「！！！」」」

タマの声を聞いて周りの冒険者達に緊張が走り、皆顔色を強張らせる。警戒していると外壁の左側から3匹のストライダーがこっちへ走ってくるのが確認できた。

「土魔法が使える人は壁を！攻撃より足止めを優先するにゃ！」

そう言ってタマは魔法で風を纏って真っ先に3匹へ向かい、素早い動きでストライダーを翻弄する。

そのうちに他の冒険者が魔法で壁を作っていった。最初から作らなかったのは自分達の動きが制限されてしまうのを恐れた為だ。

タマは右へ左へと移動して一箇所にとどまることなく動き回る。手持ちのナイフで攻撃もしてみたが、契約して基本的な氣力が上がっているはずなのに軽いキズしか付けられない。

（やはりこのままではダメージを与えられにゃいにゃ・・。やはりあれをするしか・・・。）

タマには秘策があった。獣人族は契約した場合契約主から力を借りれるのだ。そして契約主の強さによって獣人族の一握りは《覚醒》することが出来る。

覚醒すると速度や力が跳ね上がるのだ。実際には氣が一気に上昇する状態だ。エリアに連れられて2人きりで話しをした限り、確実に《覚醒》できる。

しかし氣をコントロールできる様になるわけではないので制御はできないから常に全開の状態になり、消費も激しい。

一度の覚醒後は丸1日力は入らなくなるだろう。

そして闘争本能もＭＡＸになってしまい、周りの人まで危険にさら

されるのだ。特に初回の《覚醒》だと余計に本能に抗えない可能性が高い。

タマが動き回りつつ逡巡していると、周りで構えていた冒険者は埒が明かないと思ったのか魔法で作った土の壁の隙間から入ってきてストライダーに攻撃をしかけた。

「炎よ踊れ！！」

ドフンッごぉぉぉぉ！！

（！、いけにゃい！）

冒険者が放った火の魔法は豪快にストライダーの一匹を包んだが、炎を蹴散らして魔法を放った冒険者へストライダーが襲い掛かった。

「ゴルォォァァァ！！！」

「何！効かないのｋ・・・うあああああ！！ごふっ！」

襲われた冒険者は魔法が全く効かなかったことで戸惑っていた為反応が遅れ、ストライダーのタックルをまともに受けて魔法で作った壁との間に挟まれた。

挟まれた冒険者は夥しいほど口から血を吐き倒れる。内蔵を潰されたようだ。

「くっっ！周りは手を出してはダメにゃ！中途半端な攻撃は相手を煽ることしかできにゃいにゃ！」

「じゃあどうするんだよ！このままじゃ何にもならねーだろ！」

タマの言葉を聞いた冒険者達は武器を構えながらストライダーに目を向ける。

（仕方にゃいにゃ・・。）

「全員この場所からはにゃれるにゃ！！大技を使う！！」

覚醒することを決意するタマ。その大技が効くかは分からないが、今のままではどちらにしろ倒せないのでその指示に従って回りの冒険者達は離れて行く。

そのうちの２人が怪我した冒険者を抱えながら。が、シーリーだけはタマが心配でまだ下がらない。

「タマ！私も手伝うから！」

「いらにゃいにゃ！周りを巻き込んじゃうからシーリーもはにゃれるにゃ！！」

「っ！！・・・わ、わかったわ。死なないでよ！！」

お前では役に立たない、と暗に言われて悔しそうにするシーリーはしぶしぶ壁の外側へ下がる。

（それじゃあ・・・行くにゃ！）

「にゃあああぁぁぁぁおおおおおおおお！！！！！！」

タマはストライダーから少し距離をおくと、天に向かって大地を震わすほどの雄叫びを上げた。

第３０話（後書き）

読んで頂きありがとうございます。

次回もよろしくお願い致します。ｍ（＿＿）ｍ

第３１話（前書き）

開いて頂きありがとうございます。

第３１話

その瞬間タマの周りに黄色い暴風が吹き荒れる。発生源は・・タマ。
タマの獣氣が一気に上昇したことで大気に影響を与えているのだ。
タマの容姿も変わった。身長が１７０ｃｍまで伸び、胸とお尻も大きく大人の女性の体系に、目は元々人間に近い猫目だったが、より動物の猫目に、手・足の爪も２０ｃｍほどまでに伸びて鋭利な刃物のようだ。
その姿は美しくもあり、畏怖を感じさせるものでもあった。

《覚醒》が終わると暴風は収まり、タマの周囲には黄色い獣氣が立ち込めている。
風によって動きが取れなかったストライダー達はタマを強敵と見て雄叫びを上げながら襲い掛かった。
それを見たタマは口元に獰猛な笑みを浮かべてストライダーを正面から迎え撃つ。

１匹目が頭から突進してきたのを左の片手だけで受け止めて、右手の爪で相手の首を下から刺し貫く。
抵抗はあったが、さっきまでのナイフでは軽い切り傷しか付かない状態に比べればかなり容易にできた。
氣がフルスロットルの状態だからだろう。首元を爪で刺し貫かれた１匹は目を見開いて暴れたが、タマは右手を一気に右へ振り、首を掻っ斬る。
首を切られた１匹が倒れるのを確認せず真上に飛ぶ。

横から噛み付いてきた２匹目を難なく空中へ避けて背中に着地と同時に上から首元を爪で斬りつけた。
直ぐに背中から飛び降り、体当たりしてくる３匹目を正面から受け

止める。
さすがに威力があるようで、タマの足は地面の上に足の跡を残しながら後方に１ｍほど下がって止まる。

体当たりして隙だらけになったところを上空へ蹴り上げて２ｍほど浮いて落ちてきたところを右腕で串刺しにした。
刺されたまま上に抱え上げられたストライダーはビクンビクン暴れていたが、次第にその動きも弱くなり、事切れた。

「ま・・まさか《覚醒》・・・？あいつ《覚醒》したのか？！」

離れて見ていた冒険者の１人が気づいて声を上げる。それを聞いた他の人たちも騒ぎ始めた。
シーリーはその騒ぎを無視し、直ぐにタマの元へ走り出すが、土の壁を抜ける際に他の冒険者に抑えられる。

「待て！暴走する可能性があるから様子を見るんだ！。」

「っっ、離しなさい！タマはそんなことしないわ！」

その声を聞いたのか、串刺しにしていたストライダーを放り投げてタマはシーリー達に目を向けた。

「くっ、やばいって！良いからこっちにこい！」

「嫌っ！！タマ！！！」

が、タマはシーリー達のやり取りに目を向けていると急に消えた。
いや、見えない速度で移動し、シーリー達を吹き飛ばした。
シーリーを抑えようとしていた冒険者がシーリーを襲って居るよう

にタマには見えたのだ。
この時のタマには大事な仲間のことは覚えていたが、闘争本能に飲まれていた。

「きゃっ！！」

「うわっ！！っぐ！！！」

タマはシーリーを抑えようとしていた倒れている冒険者の上に左足を置いて逃げられなくし、右腕を振り下ろそうとした。

「ダメ！！タマ！！！」

（お願いやめて！！目をさまして！！）

それに気づいたシーリーは急いで起き上がり、タマの背後から抱きつく。
しかしタマはシーリーをうっとおしいとばかりに振り下ろそうとしていた手でシーリーを吹き飛ばした。

「あっ！！！ぐぅぅ」

シーリーはタマの手をまともにくらってしまって土の壁に叩きつけられた。叩きつけられたシーリーは口から血を吐き、腹と胸を抱えながら倒れこんだ。

「タ・・タマ・・。もう終わったから・・・。もう大丈夫だから・・。元に・・・」

そこでシーリーは意識が途切れた。

「あ・・・あああ・・にゃあああああああ！！！！」

それを見ていたタマは自分がしたことに気づき、目を見開いて声を上げた。
しかしその後体中の獣氣が抜け、タマもその場所で意識を失い倒れ伏した。

周りの冒険者は呆けたようにジッとしていたが、ハッと気がつきタマとシーリーの元に走っていった。

「お・・おい！クソっ！叩きつけられて内臓と肋骨をやられている！！誰か神官呼んで来い！！急がないと死んじまうぞ！」

「わ・・わかった！直ぐに呼んでくる！！」

「こっちの獣人の方は多分大丈夫だ！！気を失っているだけだ！」

皆慌てて声を掛け合い状況を確認していく。タマは力尽きて気を失っているだけだ。
しかしシーリーのキズは深く、致命傷だ。急いで神官に治療魔法をかけてもらわなければならない。

「おいアンタ、死ぬなよ！！！」

タマに殺されそうになっていた冒険者がシーリーの元で懸命に声をかけていた。そのとき、上空から劈くような雄叫びが聞こえてきた。

場所は戻ってカリスとエリアの2人。上空に2匹のワイバーンがムール街に近づいてきている。

「北側で大きな氣を感じたけど・・タマ？」

「そうみたいね・・、契約した力を使ったのでしょう。とりあえずは目の前の敵を何とかするわよ。」

（不味いわね・・。初回の《覚醒》の時は主が傍に居ないと暴走しやすいのに。）

タマとシーリーの心配をしながらも上空の敵に集中するエリア。ワイバーンはまだ街から1ｋｍほど離れている上空で止まり、口を開いて魔力を集中しだした。

「っ！！撃ってくるわよ！アナタは下がりなさい！」

エリアは警告してギルド役員を下がらせる。ワイバーンはエリアとカリスを狙っているようだ。

「ヒッ！わ・・分かりました。ご武運を！！」

そう言って北へ走り去るギルド役員。

「行ったわね・・・カリス。これから私がやることをよく見て目に焼き付けなさい。自惚れれば強大な力は自身をも滅ぼす諸刃の剣。そのことを頭に入れて・・・ね。」

エリアはカリスを真剣に見つめ話す。それにカリスは姉が何かを仕掛け、自分に大事な事を教えようとしていることを理解し、頷く。それを確認してエリアはワイバーンへと向き直った。

「行くわよ・・。」

そう言ってエリアは左手を前に、右手を後ろに引き絞る。

「我が身体、我が魂を依り代にし

世界に具現せし神の力

我が思いのままに応え出でよ!!!」

詠唱によってエリアの両手に２ｍもある蒼々とした輝きを放つ強大な弓が出現した。あたり一面が蒼一色に塗りつぶされるほどの輝きだ。

明らかにエリアには大きすぎるのだが、エリアは平然と弦を引いた姿でワイバーンに対峙する。まだ矢は架けられていない。

が、これこそが【英雄】が１人、《アーチャー》の持つ力。

神の力を自分の身体・魂を依り代にして再現し、生み出す。

生み出される弓・矢は１つとは決まってはいない。

本人の意思が具現するその姿は、その都度その都度で姿を自由に変える。

それを確認した２匹のワイバーンは雄叫びを上げ、さらに魔力を口元に集める。その威力は一撃で家が１０軒は吹き飛んでしまうだろう。もちろん人が喰らえばあたった瞬間蒸発してしまうほどの高温を持っている。

と、周囲の空気が一気にエリアの弓の中に収束、凝縮されて行く。
次第にそれは強くなり、街全体に暴風が起こるほどになった。近くに居るカリスは氣を全開にして耐えなければいけないほどだ。
もちろんその暴風で近くの家は崩壊しだした。

そのエリアに集められる暴風によってワイバーンも上空でバランスをうまく取れないのか、せわしなく翼をばたつかせている。
次第に風は止み、エリアの中には街1つ分の風・空気を凝縮した矢が作られた。
その矢に自分の氣を練りこみ、さらに凝縮させる。そうすることで小さく放電現象が発生しだす。

矢が完成したところで、風が止んで体制を立て直したワイバーン2匹は同時に火の玉をエリアとカリスに放った。

そしてエリアも矢を放つ。

「サイクロンショット!!」

エリアから放たれた矢は凝縮した力を解放し、ものすごい衝撃波を放ちつつワイバーンへと突き進んだ。
途中2発の火の玉はその矢によって吹き散らされ消滅し、矢は勢いを失わず2匹のワイバーンの元へ到達する。瞬間、

「ブレイク!!!」

轟!!!!!

エリアが叫び、矢が凝縮した空気をさらに解き放った。
氣の詰まった膨張する空気に、解き放たれるカマイタチに飲み込ま

れ2匹のワイバーンは身体を爆砕され、斬り刻まれて原型をほとんど確認できない状態になって地面に向かって撒き散らされた。

「す・・・すごい・・・。」

その光景をカリスはエリアに言われた通り、目を見開いて焼き付けるかのごとく睨み付けていた。

第３１話（後書き）

読んで頂きありがとうございます。

なかなか戦闘シーンをうまく表現できません。どうしたものか・・・。

次回もよろしくお願い致します。

第３２話（前書き）

開いて頂きありがとうございます。

第３２話

エリアが放った一撃の衝撃波が去って、周囲は恐ろしいことになっていた。南門側の外壁は吹き飛び、もちろん周辺の家々も崩壊している。街の外の木々もなぎ倒されている有様だ。

衝撃波だけでこれなのだ。この強大な力を人に、ひいては国にぶつけたらそれだけで国は滅んでしまうだろう。

まさに《殲滅》の威力である。

ワイバーンにこの技を使ったのはそれだけの脅威を持っていたともいえる。

なんせ空に居る敵だ。近づかなければ致命傷の攻撃は繰り出せない。なので竜族にダメージを与えるとなると攻撃も限られてしまうのだ。

「ふぅ、こんなところね。ちょっと周りに被害が多かったかしら。」

弓を消しながら周囲を見て一息入れるエリア。周辺のこの有様を見てちょっと、と言えるのが怖く感じつつカリスは無難に、そうだね。とだけ応えた。

「カリス、これが私の受け持つ力よ。そして今後貴方が引き継ぐ力・・・。力を使うことでの周りの影響を知っておきなさい。」

周辺に目を向けながらカリスに話す。

「こんなにも強大な力を俺が・・・？。」

驚きのまま応えるカリス。

「ええ、軽い気持ちで扱うとどうなるか、もう分かるわよね。今回は人々が避難していたから良いけれど、そうでなければ怪我人・死人が出かねない。この力にかかわらず、全ての力に言えること。行使するする時はそれを忘れないで。」

「うん・・・、覚えておくよ。」

カリスは素直に頷いた。それを見てエリアも満足そうに微笑、頷く。

「とりあえずこちらはいいわ。もう脅威も無いし避難している北門の方に向かいしましょう。」

そう言って北門に向かって2人は走り出した。街の中を走りながら周囲を確認する。

街の南側の建物は全滅に近いが、中央から北側は無傷、とまではいかないものの被害はそれほどでもなさそうだった。

「復興できるかな?ギルドも損害少なそうだし。」

「そうね。お店関係は中央から北側に集中しているから物資とかは大丈夫でしょう。」

2人は街の様子を話ながら走って北門へ到着した。

門の外には3匹のストライダーの亡骸があり、そこから離れて避難した人と冒険者達が纏まっている。

冒険者が集まっているところに2人倒れており、それを見たカリスは声を上げてその場に向かった。

「タマ！シーリー！」

倒れているのは仲間のタマとシーリーだ。シーリーの方には隣に４０才過ぎくらいの男性神官が、しゃがんで治療魔法を行っている。タマの方は容姿が元に戻っていた。腕が血まみれだが、外傷らしいものは無く気を失ってるだけのようだ。

「こっちの状況はどうなっているの？」

エリアが周りの冒険者に声をかける。それに近くに居た冒険者がここで起こったことを話した。

（やはり暴走・・・。契約により働いた力が大きすぎたわね。）

本来契約してもここまではならないはずだが、エリアとカリスは氣使いである。
しかもそんな２人と契約した為に譲渡される力も膨大なものになったのだろう。

「シーリーの様子はどう？」

「ええ、一応内臓の方の治療を優先しまして、命は取り留めていますが私の力不足な所もあり、全快までの回復は直ぐには出来ません。申し訳ありません。」

そううなだれる神官。力不足とは魔力が切れ掛かっているのだろう。骨を治すまでいたらなかったようだ。
ポーションでも有ればもっと治せるのだが、他の冒険者に今ある分は使ってしまったようだ。

「命の方は繋いだのよね。上出来よ。ありがとう。」

そう言ってエリアは神官の肩を軽く叩いた。

「タマも大丈夫なようね。」

タマの容態を確認してエリアは呟く。カリスはタマの頭を優しく撫でていた。

実際問題タマが《覚醒》して暴走しかかったことで他の冒険者が危険にあったが、敵を倒すことに成功しており、死人も出ていないので良くない事態にはならずにすんだ。

もしこれでタマが誰かを殺していたら・・・。タマは危険人物として捕らえられていた可能性が高い。獣人の《覚醒》とは他の人達からは警戒されるものでしかないのだ。

ただでさえ人間より力の強い獣人の《覚醒》である。そんなものが暴走して周囲に飛び火したら・・ということだ。

が、しかしそんなことを周りの冒険者や街人は考えていたが、街の南側の惨状を見て獣人のことなどすっぱり吹き飛んでしまうのはもうしばらくしてからのことだ。

「お・・おい、他のストライダーはどうしたんだ?それに空からすごい雄叫びの後、暴風も起こっていたが・・・。」

「あいつらならなんとか殲滅したわ。南側の外壁や家々は吹き飛ばされてしまったけれど。」

南側の状況を聞いてきた冒険者にエリアは答える。外壁や家が吹き飛んだのをさりげなくストライダーに責任を押し付けて。

それを聞いていた他の面々は少し驚きながらも、南側が静かなこともあって脅威は去ったのだと理解し、喜びの声を上げた。
エリアの話を聞いていたカリスはもちろん苦笑していたが。

ほとんどの人は安堵し、喜んだが、まだ信じられず不安な表情の人もいた。
とりあえず皆街に戻り確認することになり、念のため冒険者が先導しながら街の中へ入っていった。

「さて・・と街中では忙しく、騒がしくなるでしょうから2人は小屋に運びましょう。ワイバーンを倒したことも色々聞かれるのは今はごめんだし。」

「そうだね、とりあえず2人を休ませないと。」

そう言ってカリスはシーリーを、エリアはタマを担いで小屋へ向かった。冒険者や街人は街の中の確認に気を取られていたのでその2人の行動を知る者はいなかった。

骨折しているシーリーを優しく扱いながら小屋につき、寝室の自分のベッドに寝かせる。タマはエリアのベッドだ。
その後取り置きしている薬草を取り出して飲みやすいようにすり潰し、水に溶かす。これでシーリーの意識が戻ったらいつでも飲めるだろう。と、カリスは一息ついた。
その間にエリアはタマの血が付いている腕を拭く。それらが終わったらカリスとエリアの2人は井戸の水を汲んで身体を洗い、服を着替えた。

そろそろ昼になる頃合なので森へ狩りをしに行き、ウサギを数羽とキノコ類を採ってくる。2人で調理し、出来上がるころにシーリー

が目を覚ました。

「うっくっ・・・ここは・・？」

「シーリー！気が付いたか。ここは俺が住んでる小屋だよ。肋骨が折れているから動かない方が良い。」

シーリーの声を聞いて直ぐにカリスはシーリーの元に駆け寄った。シーリーは上半身を起こそうとしたが、胸に激痛は走ったようで直ぐに力を抜いて横になる。

「カリス、無事だったのね・・・。っタマは！？」

カリスを見て安堵したが、直ぐにタマのことを思い出してどうなったか聞く。

「大丈夫だよ。力を使い切ったみたいで今は寝てる。外傷とかも無いからシーリーより健康だよ。」

慌てるシーリーを諭すように優しく微笑みタマの容態を説明する。それを聞いてシーリーも落ち着いたようだ。

「おはようシーリー。そちらも大変だったみたいね。とりあえずご飯も出来たし食べましょう。カリス、シーリーに食べさせてあげなさい。」

エリアも寝室に来てシーリーに声をかける。カリスは頷いて寝室に今さっき出来上がったウサギ肉のスープを持ってくる。

「ねぇ、ストライダーはどうなったの？街は？」

「大丈夫。街は無事だし、怪我人は出たけど亡くなった人もいないから。まずは食事にしよう。細かいことはその後でね。」

シーリーの問いにそう答えて、カリスはシーリーの上半身を優しく起こす。そしてスープの具をスプーンで細かく食べやすくしてシーリーの口元に持っていった。シーリーは顔を赤くしながらもどこかうれしそうに口を開けて受け入れる。肋骨が時たま痛むのか苦しそうな表情をするが、ゆっくりと食べ物を飲み込んでいった。

食べれるだけ食べてもらい、食後に先ほど作った薬を飲んでもらう。かなり苦いが効果は高い。骨折なども数日すれば直せるだろう。まぁシーリーの顔を見る限り、あまり飲みたいものでは無いのだろうが。その後自分もスープを頂く。

一息ついたところで南側はどうなったかの説明をする。2人だけでストライダーを全滅させたと言った時はかなり驚いていたが、街が安全になったことにすごくシーリーは安堵した。
その後にタマに起きたことも説明した。

契約したことで力を流せるが、その強さによって《覚醒》したこと。元々氣を使えないと、獣氣は制御できないことから氣力を使い切ってしまったこと。
覚醒したことで闘争本能が肥大化したこと。それにより暴走したと。

シーリーはそれらのことを聞いて、タマもそれを知っているのかと聞くが、エリアが前に話しはした。と答えることでシーリーは溜息を付きながらタマへ心配そうな目を向けた。

（暴走すると分かっていたから私達を下がらせたのね・・・。）

自分に力が無いばかりに負担を強いてしまったことを悔やみながらシーリーは思う。ごめんなさい、ありがとう、と。

しばらく3人で話していたら寝ているタマがもぞもぞと動き出した。それに気が付き3人がタマの方を見ると、

「ん・・んん・・アタシの肉をとるにゃエリア!!!!・・・・っハ!?」

寝ぼけているのか声を上げながら上半身をバッと起こして右手を正面に突き出した。顔もマジである。

「ほほぅ・・・いい夢を見ていたようね?タマ。」

「にゃ・・?あれ・・?お肉は?」

周りをキョロキョロと見てお肉を捜すタマ。そんなタマにエリアはチョップをして再度ベッドに沈めるのだった。
それを見たカリスとシーリーは声を出して笑った。

その後肋骨を骨折していたシーリーは笑ったことで胸に激痛が走っ

て苦しんだのは言うまでも無い。

第３２話（後書き）

読んで頂きありがとうございます。

一章は４０話までになります。

次回もよろしくお願い致します。

第３３話（前書き）

開いて頂きありがとうございます。

プロローグ『始まり』の内容で幾つか修正しました。
ストーリー的には何も変わっていないので、目を通す必要はありません。

次回もよろしくお願い致します。

第３３話

脅威が去り、街へ戻った人々は南の惨状を見て息を呑んだ。
南門とその外壁、周辺の家々が吹き飛んで瓦礫の山とかし、所々にストライダーの死骸が転がっていたからだ。

ある者はこの様なことが起きたのに死人が出なかったことに喜び、ある者は自分の住まいが無くなったことに呆然とした。

冒険者ギルドはこの惨状に対し、迅速な対応をとった。それは利益を得る為でもあったが、街の復興を早めることにもつながったので街側としてもありがたいことであった。

内容としては街に瓦礫と一緒に転がっているストライダーの死骸をギルドで回収したのである。
仮にも竜族。その素材はかなり高額で取引されるモノだ。しかもその数５０以上ときている。
街の一部を復興の為、支援したとしてもお釣りなど有り余るほどだ。

が、しかしそれは裏の話で、表向きには今回の事件は冒険者が起こした事とも取れる内容なので、その尻拭いをギルド側が率先してやる。といったことになっている。

討伐したエリアやカリスもその場に居らず、異議を唱える者は居なかった。
もちろん、討伐に貢献したエリアとカリス、タマには何かしらの優遇案を考える方針である。実際に街を救ったのは彼らなのだから。

脅威が去って5日が経ち、街の中は活気に満ちていた。皆が手を取り合い南側の復興に力をそそぐ。
特に外壁は魔物から街を守る為にも一番に修復作業が行われ、既に元の形に近い位にはできている。

家を無くした人には、ギルドや街を治める貴族が資金を出して簡易テントや毛布などが配られた。
作業する人々には昼飯のみだが、ギルドから軽食を振る舞うなどしていた。

そんな中、ギルド内では撃退した本人がまったく姿を見せに来ないことでヤキモキしている人達がいた。

「まだカリスさん達は見つかりませんか・・。」

「はい・・人手も余っている訳ではないので時間を掛けて探している訳ではありませんので仕方ないかと。」

サクラと20代の男性役員だ。脅威からすっかり姿を見せなくなったカリス達を探しているのだ。

「ほとんどのストライダーをたった2人で倒した挙句、ワイバーンも発見されたと報告を受けてますから本人達から話しを聞きたいところなのですが。引き続き探索をお願いします。それとあのエルフの冒険者はまだ・・・」

「はい。精神的にやられてしまっている様でまだ寝たきりです。」

その報告に、そうですか。とサクラは返し、溜め息をついた。南の山から逃げてきた冒険者は目を覚ましても街を危機に追いやったことで詰問そして処罰が待っている。
そのまま目を覚まさない方が幸せなのかもしれない、と思いながらも目を覚まして責任を追及しなければ街人の怒りの矛先がギルドに来る可能性もある。
起きてもらわないと困る、というのがギルドとしての考えだ。

（目撃されたワイバーンも倒したのか、追い払っただけなのかが気にかかるし・・・。カリスさん達が顔を見せに来てくれれば・・・。）

そう考えながらも、今やらなければならないことを一つ一つこなしていくしかないと思い、目頭を押さえて溜息を吐いた。

そのころカリス達は

「フッ！！」

シュッドン！！！

「カハッ！！」

タマは、カリスの不意を突いた背中への蹴りで盛大に吹っ飛ばされた。

カリスは蹴りを放って直ぐに追い討ちを掛ける為に飛ぶ。
タマは何とか受身を取って蹴られた方へ顔を向けるがそこには既にカリスは居なく、上から来る気配を察した時には首裏に上からの踵（かかと）落としを喰らって意識を失った。

「そこまで！。・・やはり今のタマではこのくらいね。とりあえずタマを起こしましょう。」

そう言ってエリアはタマの上半身を起こして背中側に手を当て、氣を流すことで身体に活を入れた。

現在カリスとタマは模擬戦をしていたのである。ストライダーを撃退してシーリーとタマを小屋に連れて帰り介抱した訳だが、タマはエリアにチョップされた後2日間目を覚まさなかった。
エリアのチョップが思いのほかに強烈だった・・・というわけではなくただ単に回復し切れていないときに寝ぼけて瞬発的な行動をしたために余計無理が祟って今度こそダウンしただけだった。
その間にシーリーから事の顛末をカリスとエリアは聞いた。

大変だったのはタマが起きてから。起きてそうそうシーリーを傷つけた事を思い出し、涙を流してシーリーに謝った。それはもう見ているほうが辛くなる位に。
シーリーがいいから、大丈夫だから、と何度言っても泣き止まずカリスとシーリーで丸1日慰めることになった。エリアだけはそんな光景を微笑みながら見守っていた。

しまいにはカリスがタマをダッコして抱きしめながら頭を撫でること2時間、やっとのことで落ち着いたタマはシーリーに抱きついて、ごめんなさい。と最後に呟いた。

その後、エリアは《覚醒》についてタマに色々質問したが、タマは《覚醒》について臆病になっているふしが見受けられたのでカリスと無理やり《覚醒》しての模擬戦をさせることにした。

タマは自分の力が大きすぎて制御できず、周りの人を傷つけてしまうと思い込んでしまっている。
それなのでエリア的には、そんな『自惚れ』を壊そうと考えたのだ。
たかだかタマ1人の《覚醒》など私達が止めてあげる、と。実際相手したのはカリスだが・・。

そして始まったカリスとタマの模擬戦。もちろん場所は森の中。
《覚醒》することによってグラマーになったタマに少し驚きつつ、模擬戦は始まった。
が、始まって早々タマはカリスの動きに翻弄されるばかりでしっかりとした反撃は出来ず、手を出しても避けられ、いなされ、カウンターを受けることとなった。
これはタマは目で見ての動きに対し、カリスは目だけに頼らず氣の動きを読んでいたからだ。氣のエネルギー自体ではタマの《覚醒》時とカリスは同等くらいだろう。
しかし氣を使えるかどうかが2人の勝敗を分けた。

「っけほっけほっ。」

「大丈夫?タマ。ごめんね。」

そう言いながら咽るタマの背中を優しく撫でるカリス。気絶して《覚醒》状態から解除された為に容姿もいつもの姿に戻っている。

「やっぱりカリスは強いにゃ!《覚醒》して手も足も出ないなんて!」

息が落ち着いたタマはカリスに振り向き勢い良くまくし立てた。体力をかなり消耗しているはずだが、元気である。一度落ち着いたのにまたもや興奮して顔も赤く、目が潤んでいる。

「タマ、これで分かったでしょう?あなたの力なんて所詮その程度なの。その程度で誰かを傷つけるかも、なんておこがましいわ。むしろ弱すぎて話しにならないくらいだもの。もっと精進しなさい。」

興奮し始めたタマに活を入れるためにしゃがんだ状態から立ち上がって戒める。

「にゃう・・・。確かに自惚れてたにゃ。アタシの周りにはこんにゃにも強い人がいるんだからアタシにゃんかが考えるようにゃことじゃにゃかったかもしれにゃいにゃ・・・。ありがとうカリス。」

タマの言葉に微笑みながら頭を撫でてあげるカリス。が、しかしエリアはその物言いが気に入らなかったようだ。

「ちょっと、これを発案したのは私よ!カリスだけにお礼を言うのは間違っているでしょう!」

「身体張って教えてくれたのはカリスにゃ。エリアは突っ立って見ていただけじゃにゃいか!」

いつもの如く言い合いを始めてしまったエリアとタマを見てカリスとシーリーは笑い会った。

ちなみに、タマとシーリーが小屋で寝泊りすることになって寝床が足りない。ということで誰がベッドを使って寝るかという話でもめることになった。

が、そこは元から住んでいるエリアが独壇場で押し切り、カリスとエリア、タマとシーリーに分かれてベッドを使うようになったのはまた別のお話。

「あれは捕食者の目だったにゃ・・。」

とは被害者の猫の言葉だったとか。

第３３話（後書き）

読んで頂きありがとうございます。

次回もよろしくお願い致します。

第３４話（前書き）

開いて頂きありがとうございます。

前回継承編が４０話で終わると報告しましたが、４１話まで続くことになりました。

第３４話

「さて、それじゃあカリス。そろそろ試練を受けてもらうわ。」

そうエリアが言い放ったのは《覚醒》したタマを丸め込んだ次の日の朝食時だった。

「まだCランクになってないけれど、もうやるの？」

話を知らないタマとシーリーはエリアの言葉に首を傾げただけだったが、カリスもいきなりだったので首を傾げつつ聞く。

「ええ、今は街の方も慌しいでしょうし残りの依頼を消化して試験を受ける時間は取れないと思うからね。それにストライダーと戦闘したことで思った以上の成果もあったから良しとするわ。」

「ん・・、分かった。今日やる？」

「そうね、ご飯食べて一息ついたら始めましょうか。」

「なんの話しにゃ？試練と言うからには修行の過程での話とは思うのだけれど。」

すらすらと話しが進んで行くのについていけず、タマが質問した。

シーリーもそれに頷いている。

「まぁ免許皆伝する為の確認みたいなモノよ。一人前にする為のね。いつまでもだらだら修行してても何の為にしているのか分からなくなるし、１つの区切りよ。」

そうエリアは言う。タマとシーリーは、ふーん。と特にこれといって気にすることも無いかと思い頷くだけだった。

「それで、試練ってなにするの？」

「試練は私と本気で戦ってもらうわ。模擬戦とかただの手合わせ、では無く。まさに死合いね。」

カリスの質問に一拍空けた後、エリアは言った。その瞬間タマとシーリーはピクッとして固まってしまったが、カリスは無言でジッとエリアを見続けた。

「なぜか・・・理由を聞いても？」

「ええ、私が最後に教えることは、自分以上の強者との戦闘。鍛練としての私が手加減した状態での戦闘とは訳が違う。世の中上には上がいるモノよ。カリスもそのうち自分よりも格上の相手と戦う事も出て来るでしょう。その時にしっかり対処できなければその時が貴方の最期になりかねない。それを踏まえて自分よりも強者からの恐怖、殺意を今一度知りなさい。私も貴方を殺すつもりで相手をするわ。」

「ちょ、ちょっと！それって危ないじゃない、死ぬかもしれないのよ！」

「死んだらそれまでね。」

シーリーはエリアの説明に直ぐ様抗議するが、エリアはサラリと冷

たく言い放つ。

「そんな・・。それじゃあカリスは何の為に・・。」

怒りをあらわにしながら呟くシーリー。

「カリスはあなた達とは違うの。私がカリスに今まで与えてきたことは必要なことだからよ。それは今回のことも変わらない。それが乗り越えられないのならば、どちらにしろカリスに未来は無いのだから。」

「姉さん・・、俺は受けるよ。元々死にそうなところを助けてくれたのは姉さんだし、ここまで鍛えてくれたのも姉さんだ。それはこの先に有る俺の未来を生き抜く為に必要なことなんだと思うから。」

「カリス・・。」

受ける、と言うカリス本人の返事を悔しながらも聞くシーリー。それにエリアは静かに頷いた。その間タマは静かに話しを聴くだけで珍しく口を挟まなかった。

朝食を食べ終わって一息ついてから、エリアとカリスは小屋を出て、森の中へと入っていく。

タマとシーリーはその後姿を見つめていた。シーリーは不安そうに、タマはこの先そういう結末でも受け入れるという意思を持ちながら。

「本当になんでそんなことを・・。」

「シーリー。カリスは特別にゃ。いや、これから特別ににゃるにゃ。エリアがそうだったように。」

「？・・。タマは何か知っているの？」

「アタシは契約の話をエリアから聞いたときに大体のことは聞いているのにゃ。２人のことに関しては私達が口出しできるものではにゃいし、するものでもにゃいのにゃ。」

「特別・・。だからって！心配することが間違っている訳ないでしょう！」

どんなに大事なことがあろうとも、カリスに危険な目になんてあってほしくは無い。
初めて自分を見て、そして認めてくれた人なのだから。シーリーの中ではそれが一番大切なことだった。

「もちろんにゃ。けれどそれを押し付けてはいけにゃいにゃ。最終的にも決めたのはカリスにゃ。」

「ッッ！」

タマの言葉を聞いてシーリーは寝室に飛び込むように走っていった。
シーリーもタマの言葉は理解できる。できるが、だからと言って納得はできなかった。
それでも危険な目にあってほしくないと、そう思った。

タマもそんなシーリーの気持ちを理解できるのか寝室に飛び込んだシーリーをそっとしておいて、自分も静かにカリスとエリアが帰ってくるのを待つことにした。

「ここら辺でいいわね。」

カリスを連れて森の中を歩いていたエリアは小屋が見えなくなった所で足を止めた。

「もう薄々気がついていると思うけれど一応言っておくわ。私は【英雄】が1人《アーチャー》よ。貴方を鍛えているのは次世代の《アーチャー》が貴方だから。」

静かにエリアは向かい合うカリスに話し始めた。

「それっていつから俺が次世代だと？」

タマの話しを聞いた時から薄々そうなんじゃないかと思っていたが、いつからそうだったのか、なぜこんな森の中に住む世間知らずな自分なのかが今一カリスには分からなかった。

「貴方と最初に会ったその時、正確にはグリズリーに襲われている貴方を見た瞬間ね。すごく懐かしい感覚を感じたわ。カース神からの神託を。言葉ではない、世界の方向性と言うのかしら。貴方を見た瞬間、ああ、この子が私の継承者なんだなって。その場で確信したの。貴方を見るまでダンソンに会うこと以外は特に考えてもいなかったし、継承のことなんて全く頭に無かったのに。不思議よね。それからは貴方が体験して来た通り。」

一度口を閉じてカリスが理解する間を作り、説明を続ける。

「ダンソンが私達を引き合わせたんじゃないかって私は思ってしまうわね。
鍛練については身体を動かす基礎を一通り教えたつもりよ。氣を含めてね。《アーチャー》なのに接近戦闘ばかりだったのは戦闘が弓に囚われない様にする為よ。あくまで弓は攻撃する手段の１つでしか無いのだから。《アーチャー》としての力はまた後で説明するわ。」

エリアは《アーチャー》でありながら通常、この力は使わない。この力にこだわってしまえば攻撃する手段を減らすことになり、しいては弱点に成りかねないからだ。自分の奥の手を見せないというのもあるが。

カリスにも攻撃する手段の幅を広くさせておきたかった。一般的な弓師とは別物なのだ。どちらにしろ継承しなければ使い方なんて分からないのだから。

「それじゃあ説明もここまでにして、そろそろ始めましょうか。」

そう言ってエリアはカリスから１０ｍほどはなれて向かい合った。
カリスもそれにならって構えをとる。

「私を倒す気で来なさい。今まで習得したもの全てを使って・・ね。」

言葉を切ると同時に冷たい殺気をエリアは放ち始めた。

第３４話（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

次回もよろしくお願い致します。ｍ（＿＿）ｍ

第３５話（前書き）

開いて頂きありがとうございます。

第３５話

次の瞬間エリアの姿が目の前から消え、カリスの右側からナイフを振り抜いた。
カリスは寸前で避け、左拳を放つが再度エリアは消えてカリスの背中に回り込みそのまま蹴りを放ち、カリスは後ろを見ず、前方へ飛ぶことで回避した。

しょっぱなから、カリスはエリアの動きを目で捉える事ができなかった。
何とか氣の流れを追う事で回避しているが、エリアは攻撃のインパクトの瞬間のみ氣を一気に流し込み凝縮させ、移動時には極力氣を抑えて気配を読まれない様にしていてカリスの不意を付くような攻撃をしかけている。

カリスは神経を研ぎ澄ましてエリアの動きを感じ取ることに集中することで、直撃を受けない様にした。
受けのみに専念することで少しづつエリアの動きを認識しやすくなり、最初よりはゆとりが出来た。
それでも気を抜けば１撃でノックアウトすることになるだろうが。
次第にエリアの攻撃をいなす際、氣を当てるようになった。エリアの動きにカリスが追いついてきたのだ。

「いい読みをしているわね。この戦いの中でもどんどん成長するし。でも、攻撃しなければ相手を倒せないわ・・・よ！」

カリスの成長を喜びながらも、最後の言葉と同時にカリスへ攻撃を仕掛けるエリア。
エリアが蹴った地面が爆砕してクレーターを作る。

今度は移動時に氣を大幅に使うことで機動力任せの戦法か。
カリスは来ることは分かったがすさまじい速度で攻撃された為、避けることも出来ず腕でガードするので精一杯だった。

ドゴンッ！！

「くっ！！」

エリアの攻撃の軌道は分かったが避けるのもいなすことも間に合わないと判断して何とか両腕を身体の前に出してガードした。
喰らった瞬間氣を凝縮するが完全には間に合わずかなり腕にダメージがきた。
そして身体も後ろへ吹っ飛ばされる。後ろに生えている木で身体は止まり、このままでは直ぐ様やられると判断して全身に氣を溜める。
背中が木に当たった時には次の攻撃の為に構え終わり、その瞬間思い追撃が来た。

今度は中途半端な凝縮だが溜めている氣の量が多かった為にある程度のダメージは軽減できた。
しかし防ぎきれているわけではないので腕はしびれている。

（これはきつい・・もっともっともっと集中しなくては！防ぐのが少し遅れただけで骨ごと持っていかれる！）

全身に汗を流しながらも集中するカリスは氣の質をも研ぎ澄まして行く。
さっきまでのエリアの動きを研ぎ澄まされた一撃を放つ《静》とするならば今の動きは全てを一撃の下に破壊する《動》の動き。
なんとかエリアの動きを防ぎながらも、さらに集中し、感覚を鋭利なものにして行く。

異なる動きを何とか目、耳、鼻、肌、感じれる全てのモノを駆使して感じ取り、読み取る。
自分の身体をセンサーにして世界の情報を細かなものまで逃さず、素早く、正確に。
カリスは風の動き、温度の流れ、存在するモノの匂い。
戦闘には必要なのかと疑問視されるものまで周囲のモノを認識していった。

それはネイチャリングのプロセス。自然・世界との一体化。
世界に、周囲に存在するものをありのままに受け入れ、自分という存在もその一部とする。
世界があって自分がある、という考えではなく、世界を構成する1つとして自分がある、と認識する。

空気・温度・草・木・土・光・影・虫・動物・自分、そして・・・。
カリスはエリアの動きだけでなく、自分の周りにあるモノ、捉えられるもの全てを認識し、その動きの細かいものまでも読み取っていく。
カリスの［眼］は既にエリアだけにとどまらず、周囲にあるもの全てに向いていた。

シュッ！！パシンッ！！

「ッ！！」

ついにはエリアの壮大な攻撃を慌てることなくいなす。
いなされたエリアも今までのカリスの動きとは明らかに違い、動きを完璧に捉えられたことを瞬時に認識した。

（まさか・・・。）

瞬時にエリアは畳み掛ける。
そのこと如くが避けられ、いなされてかわされる。

（まさか本当に・・！！［眼］を開いたというの！？）

すでにカリスはエリアを見てはいない。自分の認識できる範囲全てに向いている。
周囲で動いてから認識し、それの対応を取っているわけではなく、周囲での動きと同じタイミングでカリスも同調するかのように動き、対処する。
その場所に存在するだけで今のカリスには世界の一部、１つと認識して感じ取る。

（なら・・これならどう？！）

エリアは全身に氣を張り巡らせ、凝縮させる。今までに無いほどの勢いでカリスに襲い掛かるが、カリスはその流れに逆らわず全てを見切り対処する。
カリスもネイチャリングの感覚に慣れてきたのかここで反撃に出た。ただ反撃するだけでは触れた箇所にこちらが凝縮された氣を受けるのと変わらない。
氣を拳の一点に凝縮させ、エリアの攻撃に合わせてカウンターを放った。

ドンッ！！

「「ッ！！」」

その攻撃をモロに喰らってエリアは吹っ飛ぶが、空中で体制を立て

直して着地した。
カリスの方も攻撃したのはいいが、氣を凝縮しているところに攻撃を仕掛けた為に、放った拳にも多大なダメージを被った。
一撃放っただけでカリスの腕は骨にまで衝撃が来て直ぐには次の一撃は打てない状態だ。
動きは読み取れてもさすがに氣の質の違いは否めない。

「なかなかいい一撃だったわ。それに［眼］を開眼させるなんて。」

「はぁっはぁっ、・・［眼］？」

エリアは一撃を受けた胸に手を当てて一度戦闘を中断してカリスに語りかける。

「そう、自分の周囲の世界そのものを視る［眼］よ。自分自身が自然の、世界の１つのパーツであり、世界を認め、自分の中に受け入れることで開眼するもの。」

「自分の感覚が周囲に広がっている感じがする。今までは認識していなかった草木の呼吸、大地の存在感、今まで見てきたものが視野の１つでしかない感じ。」

「そう・・けれど、カリスの技自体がまだまだで宝の持ち腐れね。がんばりなさい。」

「う・・善処します。」

（とは言ったものの［眼］を開眼するなんて・・この先が楽しみね。）

辛口なことをカリスには言ったが心の中でエリアはカリスの成長に狂喜乱舞していた。

【英雄】なら力を使った場合［眼］を使用するのと似たような状態になるけれども、実際は［眼］とはまた別物。神から授けられた力で周りを認識することが出来る。

そうなると【英雄】が［眼］を使用したらどうなるか・・・。エリアは楽しみで仕方が無かった。

「まぁそれでも開眼したばかりで早々長くは持たないでしょう。今は集中力が極限まで来ているから持っているのでしょうけれど。だからと言ってこのまま続けてても埒が空かないわね。」

このまま続けてもエリアの攻撃は読まれ避けられる。カリスの攻撃は当たるが全身を氣の凝縮で覆っているエリアに攻撃したらカリスの方がダメージがでかい。

「それじゃあ、【英雄】を継承する前の一般人である内に【英雄】という者の存在を認識しなさい。これから貴方が成るモノの力を。」

そう言ってエリアは【英雄】としての力を解放する。

「ッッ！！！」

今までのカリスには分からなかったが［眼］を開いているからだろう。

その瞬間カリスには世界が書き換えられた様に感じた。

エリアがこの場所で唯一無二の存在であるかの様に。
自分が本当に世界に散らばる1つの欠片でしかない様に。

エリアは弓を出現させてはいない。
それでもカリスにはすさまじいほどの重圧を感じていた。

「本来《アーチャー》は弓と矢を生み出し行使する。でもそれは弓という概念によって縛られているもの。ならその弓と矢の概念を覆すことが出来たらどうなるかしら?」

そう言ってエリアの周囲の大気中にいくつのもエネルギーが収束しだした。
火・水・風・土・雷・光・闇、それぞれの属性が空間を歪曲させながらいくついくつもいくつも生み出されていく。
エリアはこの空間を弓として、それぞれの属性を矢として生み出しているのだ。

(すごい・・・あのエネルギー1つでも姉さんのさっきまで放っていた一撃の数倍はある・・。)

[眼]を使用している状態のカリスはそれを視てどれほどまでのエネルギーで、防ごうとしても問答無用で吹き飛ばされてしまうほどの威力なのが分かってしまう。

「詠唱をすればそれだけイメージしやすく、高度なことが出来るけれど、詠唱をしなくても明確にイメージできるモノはそのまま形にすることができるの。こんな力、普通なら反則よね。それでも《邪

神》と呼ばれる存在を撃退するのには【英雄】を6人も必要とした。
彼はそれほどの者だったということ。
・・・では【英雄】たらしめんとするこの力、ただの人として感じるのは最初で最後になるから。しっかり受け取りなさい。」

そう言い放ち、エリアは右腕を大地と平行に上げて一指し指をカリスに向ける。
その瞬間、全てのエネルギーがカリスへ放たれた――――――――。

（貴方はすばらしい【英雄】になれるわ。他の【英雄】より、そして私なんかよりも・・・）

そしてその日、ムール街北側、封印の森の中で大爆発が起こった。

第３５話（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

次回もよろしくお願い致します。ｏｒｚ

第３６話（前書き）

開いて頂きありがとうございます。

第３６話

ッッッッ！！！！

「な・・・なに？！」

外ですごい爆音と共に大振動が起こりカリスの身を心配していたシーリーは驚いて寝室から出てきた。

「きっとエリアが力を解放したのにゃ。」

「力を解放・・？」

そうにゃ。と言ってタマはジッと窓から外を見つめていた。その先にはモウモウと煙が空に舞っていた。

「エリアは【英雄】が１人《アーチャー》にゃのにゃ。」

「【英・・・雄・・・】？・・・それって・・・あの【英雄】？！」

タマの言葉を直ぐには認識できず頭の中で何度も繰り返し確認したところで何のことだかシーリーは認識した。

「そう、《アーチャー》は継承した話は聞かにゃいからエリアは初代だと思うにゃ。そしてカリスは次世代の《アーチャー》らしいのにゃ。」

「カリスが！？・・・どういうことよ。」

「そのまんまにゃよ。カリスは《アーチャー》の継承者ににゃるんだってことにゃ。」

タマの口から出た言葉に驚きで頭が真っ白になり何度も確認するシーリーにゆっくりとタマは説明した。
それでもシーリーは信じられない思いだった。

「エリアが【英雄】・・・。カリスが継承者・・・？」

「そうにゃ。アタシは知らぬ間に恐れ多くも【英雄】と契約してたのにゃ・・。」

1人でブツブツ言い出したシーリーを横にタマは自分が置かれた境遇にポツリと呟くのだった。

爆発音がしてしばらくすると小屋へ歩いてくる足音が聞こえた。先にその音に気が付いたタマが直ぐ様小屋の扉を開けて外に出る。
すると森の中からカリスを背負ったエリアが歩いてきた。

「あら、お出迎え？悪いけど直ぐに治療の用意をして。カリスの手当てを始めるわ。」

「わ、分かったにゃ。直ぐに用意するにゃ。」

「ッッ！！カリス！！」

タマに付いて外に出たシーリーは気を失ってエリアに背負われているカリスの元へ声を上げて走っていった。
タマはエリアに言われた通り急いで小屋に戻って必要なモノの用意を始める。

「命に別状は無いわ。まぁ、あちこち骨は折れてるけどね。むしろこれくらいで済んだのだからすごいものよ。」

「なんですって!!貴方がカリスをこんなにまでしたんじゃない!!何考えてるのよ!!」

ボロボロになったカリスを心配で涙目になりながら見たシーリーにエリアが言うが、それを聞いたエリアがその言いように急激に怒りを感じて掴み掛かりそうな勢いで口を開いた。

「そうね、でも話は後。先にカリスの治療を始めるわよ。」

遅くなれば命にかかわるから。そう言ってシーリーを黙らせてエリアはカリスを背負って小屋に入っていく。
シーリーも急いでその後を付いて行った。

カリスを寝室に運んで直ぐに服を全部脱がして塗らしたタオルで汚れて傷ついた身体を綺麗に拭いていく。その後ベッドに寝かせた。
エリアのその手際はとても優しく、まるで赤子を扱うようだった。
こんなにも傷を付けたエリアに怒りを感じていたシーリーだが、その手際に深い愛情を感じ取って戸惑った。

「とりあえずこれだけ薬草をすり潰したにゃ。」

薬草を持ってきて横ですり潰していたタマがエリアに出来たものを渡す。
それをエリアは受け取って、外傷があるところに優しく塗りこんでいった。

「ありがとうタマ。もっと薬草をすり潰して。シーリー、見てないで貴方も薬草を塗るのを手伝いなさい。」

「え、ええ・・。わかったわ。」

裸のカリスの姿に頬を赤く染めながらもエリアに言われて手に薬草を取り、カリスの身体に塗るのを手伝うシーリー。

（こんなに傷ついて・・。こんなに傷つけてエリアは!!なのになんでそんなに真剣に、優しく治療をしているの?それじゃあやっていることがアベコベじゃない。）

エリアの行動に訳が分からない。と思うシーリーは、それでもまずはカリスの治療が先だと手を休まず動かした。

「これで最後にゃ。」

そう言って最後のすり潰した薬草をエリアに渡すタマ。エリアは最後に渡された薬草は水に溶かしてカリスに飲ませることにした。

「外傷はとりあえず良いとして後は中から治しましょう。」

このまま飲ませようとしてもこぼしてしまう為、エリアは二回目になる口移しで飲ませることにした。

「ちょっちょっと！なんでエリアが薬草飲むのよ！」

薬草水を口に含もうとしたエリアを見てシーリーがツッコミをいれるが、

「バカね私が飲むわけ無いじゃない。カリスに飲ませるのよ。」

「な・・なな・・！！それって口移しでってこと?！」

何を当たり前のことを・・。と言う顔をしてエリアはそのまま薬草水を口に含み自分の氣を絡ませてカリスに口移しを始めた。

「～～～～！！」

それを見てシーリーはパニくって涙目になりながらどうしたものかと見ていたが、タマは羨ましそうに静かに見つめていた。

カリスに3度に渡ってゆっくり薬草水を飲ませていくエリア。

飲ませ終わってからペロリと自分の唇を舐めるのがなんとも艶めかしく、その様子を見ていた二人は恨めしそうだった。

「さてっと後は骨折している場所に添え木をして・・薬草の効果を氣で強化したから2・3日で回復するでしょう。」

「そんなことも出来るのかにゃ。アタシも氣使えるようににゃりたいにゃあ。」

「当たり前じゃない。私達のペットなのに使えないでどうするの？むしろ使えなかったら外に放り出すわよ。」

「にゃ?！ううう・・がんばるにゃ。」

そんな2人の会話を横で聞きながらシーリーは隣で心配そうにカリスを見つめていた。

3人は場所を隣の部屋へ移り、エリアから内容を聞いていた。

「と言う流れで最後に【英雄】としての力をその身で知ってもらった訳。」

「そんな無茶なことしたんですか!!信じられない!!」

「まぁまぁ、落ち着くにゃシーリー。確かにやったことは考えられにゃいことだけど、現【英雄】のエリアからすれば知っておかなければいけにゃかったことだったんだと思うにゃ。」

話を最後まで聞いて怒りに耐えていたシーリーが爆発したのをタマがなだめる。

「そう。私は《アーチァー》では初代だから【英雄】がどういうものか分かっているからいいけれど、他の次世代継承者は【英雄】の力に頼っている傾向があって私から見れば滅多やたらと使いすぎなのよ。
本来この力は世界に影響を与えてしまうモノに対して使うのだけれど、普通に人々の争いに使われることも今じゃ当たり前だものね。
人の為に使うならまだしもこれじゃあ戦争の道具となんら変わらないわ。

国が【英雄】を抱えてる時点ですでに牽制として使われているのだし。
だからこそカリスにはこの力の脅威と影響を身をもって知ってもらいたかったのよ。」

私が旅をしていたのもそれが理由よ。と最後に付け加えて話を締めくくる。
それを聞いてシーリーは下を俯きながら黙った。

「ちなみに最後にカリスへその力を使ったようにゃけど、当ててはいにゃいよね・・？」

「もちろん当てるつもりで放ったわよ。じゃないと本当の脅威は分からないでしょう？」

タマの問いに、当たり前じゃないの。と言う風に答えるエリアに2人は絶句した。

「でもまぁ、カリスなら避けるって確信もあったけどね。一応隙も作っておいたから。」

「そうかにゃ・・。エリアってカリスに対してもスパルタにゃんだにゃ。」

甘やかすばかりかと思ってた。と付け加えてタマは呆れた。
シーリーはエリアのスパルタぶりに言葉も無いようだった。

「鍛錬の時ははじめからこんな感じよ。じゃなきゃただのじゃれ合いだもの。
そう言えば前に軍の訓練を見せてもらったけれど、あんなので本当

に強くなれると思ってるのかと不思議に思った覚えはあるわねぇ。」

そんな話を聞いてカリスの年でここまで力をつけた訳を察してタマは同情するのであった。

「ちなみにタマ、あなたも氣を使えるようにするのだから同じように鍛錬させるからね。」

「にゃ！！！・・・はふぅ。」

楽しみだわ。と口元をにやけさせてのエリアの爆弾発言にタマは目を見開いて驚き、そして諦めたのか耳をパタリと倒してうなだれた。

「シーリー、あなたはどうする？」

ジッと下を向いていたシーリーにエリアは声をかける。

今のままでいいのか？と暗に言われ、躊躇するシーリー。しばらく考えた後、エリアに答えた。

「私も強くなりたい。カリスのお荷物にならないために・・。カリスはこれから旅にでるのでしょう？今は付いて行けないけれど。私も一緒に旅したいもの・・・。」

シーリーの答えを聞いて満足そうにエリアは頷くのだった。

その後、２人の鍛錬は落ち着いたらと言うことになって、在庫の薬草を全て使った為に狩りをしながら森で薬草を採りに行ったりして過ごす３人。

カリスの看病をすること丸々二日、カリスは目を覚ました。

その間薬草を誰が飲ませるかで揉めたが、タマとシーリーは氣を薬草に錬れないことから却下されて結局エリアが口移しで飲ませることになり、満足そうな事後の顔を見て二人は必ずいつかギャフンと言わせてやる、と思ったとか思わなかったとか・・。

第３６話（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

次回もよろしくお願い致します。ｍ（＿＿）ｍ

第３７話（前書き）

開いて頂きありがとうございます。

今回話終盤から性的描写が含まれます。
ご注意ください。

第37話

「ん・・んん・・・。」

カリスはゆっくりと意識が浮上してくるのを自覚して、目をさました。

（ここは・・自分のベッドか。）

まだはっきりとしない頭を軽く左右へ振りながら上半身を起こす。

身体のあちこち痛むが動けないほどではない。

「お目覚めのようね。身体に異常はないかしら?」

そこで寝室の扉が開いてエリアが入ってきた。その後ろにタマとシーリーが続く。

カリスは一応身体に異常が無いか確認してからエリアに頷いた。

「おはよう。あれからどれくらい経った?」

「丸々2日よ。今はお昼ね、よく眠ってたわ。」

そう言ってエリアは微笑んだ。

カリスが状況を把握したところでシーリーがカリスのそばまで来て、しゃがみこんでカリスの両手を握りしめた。

「カリス・・本当に無事でよかった。もしかしたら目を覚まさないんじゃないかと心配したわ。」

「本当によく無事だったにゃ。エリアの話を聞いた時には生きているのが不思議なくらいだったにゃ。」

目を潤ませながらもカリスが無事に目を覚ました事を安堵するシーリーにタマも同意した。

「それにしても最後はしっかり避けたわね。」

「姉さんが避ける隙間を作ってくれていたからね。」

エリアの言葉に苦笑しながらカリスは答えた。
実際、隙間はある事にはあったのだが、避ける為には攻撃がくる方へ向かっていかなければ避けれない様にしていたのだ。
隙間を作っていたとはいえ、あの攻撃に即座に判断して迷いなく行動したカリスをエリアは心の底から褒めていた。
カリスの頬を優しく撫でながらエリアは続ける。

「迷いなくその隙間を活かすことは誰にでもできるという事では無いわ。貴方がしっかり成長したからよ。」

そうべた褒めするエリアにカリスは照れつつ、ありがとう。と答えた。

「さて、最終試練も無事終わった事だし明日、継承の儀をするわ。色々準備する物あるからタマ、シーリー手伝いなさい。カリスはそれまで寝て回復すること。氣を活性化すれば治りも早いはずよ。」

楽しみに待ってなさい。と言い残してタマとシーリーを連れて寝室をでる。

エリアが最後に言った時、にまにまと悪巧みをしているような笑顔を気にしつつ、カリスはまた眠りに着くのだった。

「それで、準備する物ってにゃんにゃ？」

寝室から出て扉を閉じてからタマはエリアに声をかけた。
その問いにエリアは笑顔で答えた。

「2週間分の食料よ。」

「「は？」」

エリアが言った事を詳しく聞こうとするがはぐらかされてしまい、結局3人で動物や木の実、野菜などを採りに森の中に行った。
小屋と森を往復して大量に集め、長持ちさせられるように加工した。
そんな作業を空が暗くなるまで行う。

「これだけじゃあまだ足りないわね・・。」

「え、かなりの量だと思うけれど・・。」

採った量を見て呟くエリアの声を聞いてシーリーが言った。

「通常ならね。継承の儀を行った後じゃあ少ないくらいだわ。」

「継承するとお腹が減るのかにゃ？」

タマの疑問に目線だけで答えてエリアは続ける。

「まぁいいわ。足りなくなったらタマとシーリーに用意してもらいましょう。」

「にゃ、それは問題にゃいけれど・・。」

今一要領を得ないエリアに首を傾げつつ了承するタマ。
取り合えず今ある物の残りの加工を続けることにした。

作業を一通り終え、夕食の用意をしてカリスの居る寝室に集まって食べた。
カリス自身はもう自分で食べれるほど回復していたのだが、シーリーが是非にといつに無く積極的にカリスへ迫った為シーリーがカリスに料理を食べさせていた。
シーリー自身顔を赤くしながら食べさせているのを他の2人は生暖かく見つめていた。

「一通り準備も出来たし、後はカリスの身体が治る明日まで待つだけね。
明日から私達も大変だから今日はもう休むわよ。」

そう言ってサッサとカリスを引っ張って寝室へエリアは移動していった。

「継承の儀ってそんなにかかるのかしら？」

「さぁ・・？アタシも見たことも無いし、分からにゃいにゃ。アタシ達ももう寝るにゃ。」

そうね・・。と返事をしてタマとシーリーも寝室へ移動して寝ることにした。

翌日、すでにカリスの傷は全快まで回復した。

「今日の朝食はしっかり食べておきなさい。じゃないと持たないわよ。」

朝食の準備が終わって、いつも以上の量が用意されていた。

「朝からこんにゃにお肉が食べられるのはうれしいけれど、ちょっと多すぎじゃにゃいかにゃ？」

「なんだか胸焼けしそう・・。」

料理の量を見てタマとシーリーが思ったことを言う。

カリスはそんなにも継承するのは大変なのかと真面目顔で考えていた。

「カリスだけじゃなくて私達もしっかり食べるのよ！」

エリアの言葉で2人は困惑顔だ。それでも朝食が始まり、４人でどんどん食べていった。今日の朝食は肉料理が多く、野菜系は少ない。

「俺や姉さんはともかく、タマやシーリーも多く食べる必要あるの？」

疑問に思いカリスは聞いてみる。

「ええ、私だけじゃ持たないでしょうから2人にもがんばってもらわないと。」

と、何のことかは説明せず話をする。

「まぁカリスは楽しみにしていればいいわ。」

そうはぐらかされてしまった。2人も言われたままにがんばって朝食を平らげる。

朝食を済ませた後、エリアは継承についての説明を始めた。

「これから継承の儀をするわけだけど、継承するには2通りあるの。1つ目は【英雄】が次世代を見つける前に事故死によって死んだ場合。この場合は世界のどこかに居る次世代に自動で継承されるわ。2つ目は【英雄】が次世代を見つけて受け渡した場合。

次に継承で受け継がれる物、得る物を教えるわ。

？【英雄】《アーチャー》としての能力

カース神より頂いた力。内容は既に言ったわよね。
（弓と矢を生み出し行使する能力。能力発動時、［神眼］の開眼。
瞬間身体能力の強化。）

？身体能力の強化
これについてはそのままね。私の場合はそれによって氣が少ししか使えない状態から今のカリスくらい使えるようになったの。
ここまで氣が向上したのは鍛錬の成果ね。

？身体能力の低下不変動
一度得た身体能力は衰えることが無くなるの。腕が鈍ったり、勘が鈍ったりしなくなるっていうことよ。
もちろん鍛錬すればどんどん向上していくわ。

この３つが【英雄】になった時の特典ね。これはどの【英雄】も？の内容以外は同じよ。どっちの方法でなった【英雄】でもね。
そして今回のように次世代に受け渡す場合にはもう２つ増えるわ。

？《アーチャー》能力の先代の使い方
先代の使用の仕方も大体で引き継がれるわ。
能力を受け継ぐ時には少なからず使い方も一通り知るのだけど、いろいろとアレンジしているからね。
それを知れるのは出来る幅が広がるはず。

？現【英雄】の特徴の引継ぎ
私からの場合は寿命・・・ね。さすがに約８００年も増えないでしょうが５００年くらいは増えるんじゃないかしら？ハーフエルフになるみたいなものね。

今回カリスに継承されるのは全部でこの５つよ。」

「にゃんだか話を聞くとさすが【英雄】と言う感じの強さだにゃ・・・。」

「ええ・・、体力や技が衰えないとか、上昇するだけっていうことよね。」

「身体能力の強化かぁ。これがあるから元の体力を鍛えたの？」

「そう、元が強ければ強いほど継承した際上昇するからね。今のカリスなら継承後は私を超えれるんじゃないかしら？
《アーチャー》の能力の使い方は先代の使い方も引き継がれるから、アレンジするなりオリジナルを作るなりしてみるといいわ。
寿命はおまけみたいな物ね。」

そうエリアは付け加えた。
タマとシーリーは部外者でもあるからかその内容に理不尽さを感じてあれこれと考えているが、カリスは聞き逃すまいと真面目に聞いていた。

「何か質問はある？」

「2週間分の食料準備してたけど、そんにゃに時間かかるのかにゃ？」

ここぞとばかりにタマが気になっていたことを質問した。
エリアも直ぐに分かることだからと教えてくれる。

「いえ、継承の儀はそんなに時間かからないわ。必要なのはその後ね。私達はあまり外に出れなくなるからその蓄えよ。」

が、なぜ出れなくなるかは教えてもらえずあやふやなままだった。

「継承した後、姉さんはどうなるの？力がなくなるんだよね？」

考え込んでいたカリスが不安そうにエリアを見ながら気にかかっていたことを聞く。

「そうにゃ！伝承では前の【英雄】が居なくなったら次世代に継承されるってなっていたはずにゃ！エリアは大丈夫にゃのか？」

それを聞いてタマも慌て気味に声を出した。シーリーも不安そうにエリアを見つめる。

「ああ、継承されれば私が【英雄】じゃなくなるんだからそんなの当たり前じゃない。だって【英雄】はカリスになるのだから。」

エリアが答えるが他の3人は首を捻って頭に？？？マークが浮かんだ。

「【英雄】じゃなくなるイコール死ぬ訳じゃないのよ？普通の人に戻るだけ。まぁ実力自体はそのままって聞いたからそこら辺は恩恵があるのでしょうね。」

「・・・そっか。よかった、姉さんがどうなるのか心配だったから。」

そう言ってカリスは安堵の笑みを浮かべ、それを見たエリアも微笑んだ。

他の2人は紛らわしい伝承だと呆れていた。

「それじゃあ他は良いかしら?寝室でやるから移動しましょう。」

そう言って4人は寝室へ移動する。カリスをベッドに腰掛けさせて、エリアはカリスの前に立つ。
タマとシーリーは寝室の入り口で待機した。

「それじゃあ始めるから上半身脱いで。刻印を移すから。」

カリスに上半身裸になるように促して、エリア自身も上半身を脱ぎ始めた。
エリアは脱いだことで決して小さくは無い形の良い刻印の在る胸が露になった。

「ちょ、ちょっと!ぬ・・脱ぐの?」

エリアがカリスの前で躊躇も無しに服を脱ぎだすのを見たシーリーが顔を赤くしながら声を出した。

「そうしないと刻印が移ったか分からないじゃない。」

何言ってるの?とエリアが逆に説いてきたのでシーリーは黙った。
そういう意味じゃないんだけど・・。と思いながら。
エリアの綺麗な半身を見てカリスは何度も見てはいるが、見ほれていた。

「では始めるわ。

カース神により――――――――――。

我が力――――――――――。」

エリアがカリスの右胸、心臓の部分に右掌を優しく当てて詠唱を唱え始める。

ところどころで間を置き、その都度エリアの右胸に有る刻印が白い光を帯びだした。

「汝へと――――――――――。

更なる――――――――――。」

その光はさらに増していき、寝室内を光で覆い尽くす。タマとシーリーは目を開けるのもやっとで、両手を目の前にかざしながら2人に目を向ける。

「我が名はエリア・ステイン。

カース神より与えられし力。

カリス・ステインへ継承することを世界に刻む。」

詠唱が終わったところで光の増大も高点に達したのか世界は真っ白に染め上げられた。
そしてカリスはエリアが手を当てている位置から自分自身が急速に書き換えられるような感覚になる。
その時のカリスの身体はエリアの手から全身へ刻印がびっしりと広がっていっていた。

「ッッ!!!ぐ・・・ううううう!!!」

（これは・・・きつい!!!身体が破裂しそうだ!!!）

そのつらそうな様子をエリアは全て読み取ることが出来たが、それを緩和させる統べはない。

（がんばってカリス!!貴方なら大丈夫だから!!!）

心の中でカリスを気遣いながらも存在の書き換えは続く。
全身に刻印が書き込まれ、次第にその刻印は上半身の右側へと収束していく。
それと同時に部屋を満たしている白い光も次第に収まってきた。

白い光も今や淡い光になり、カリスの身体にできた刻印の収束も収まりつつあるが、その上半身をみると、エリアに在った時とは比べ物にならないほど広く刻印が残っている。

「なんですって・・、上半身の右側の殆どが刻印じゃないの・・。」

その光景を確認したエリアはそのありえなさに目を見開いて驚きを露にする。

カリスの上半身には、高さは腰から首下まで、幅は心臓から右腕の二の腕まで背中側も同様だ。

「それってすごいことなの?」

「普通は右胸周辺なのよ。しかも背中側にまでびっしり刻印されるなんて・・・。」

シーリーの問いに、カリスに刻印されて未だに淡い光を放ち動脈する身体を触りながらエリアが答えた。

すでにエリアの右胸の刻印は消えている。無事継承したようだ。

「く・・、身体が熱い・・・。力がどんどん湧き出てくるみたいで・・・ッッ。」

動脈する刻印を触りながらエリアはハッと今の状況を思い出す。

「っとそうだったわ。とりあえず継承は無事完了よ。ここに晴れて新たな【英雄】の誕生ね。」

それを聞いたタマとシーリーは目を輝かせてカリスを見る。が、苦しそうにしているカリスの表情を見て声を出した。

「ちょっと!本当に大丈夫にゃのかにゃ?!カリスが苦しそうにゃ!」

「ええ、今膨大な力が刻印からカリスの身体に作られているからそれに耐えているのよ。私の場合は回りに魔物が数万匹と居たからそれらを殲滅するのに力を解放して凌いだけれど、この場所でそんなことしたらこの島1つ消し飛びかねないわ。」

「えええええええ!!!!それはかなり不味いじゃないの!!!!どうするのよ!」

エリアの言葉にタマとシーリーはパニックに陥りかけるが、直ぐにエリアは計画していた行動に出た。
主にカリスの服を脱がせ、自分の服も脱ぎ捨てて2人して全裸に。

「ちょ!!なにやってるのよ!!そそそ・・そんな裸になって!」

「力を出さなければ暴走するわ。ならやることといったら1つしかないじゃない。」

余計混乱するシーリーにエリアは唇をペロリと舐めながら満面の笑みで答えた。
タマはカリスの裸体を食い入るように見てじゅるり、と口元を拭っていた。
直ぐ様エリアはカリスを押し倒し、カリスの腰の部分に馬乗りになるエリア。
そのまま身体をくっ付け、両手で顔を包みながらカリスにささやく。

「カリス、話は聞いていたわよね?貴方は楽にしていれば良いわ、私が全部受け止めてあげるから。我慢せずにね。」

「ね・・姉さん。く・・っ!」

「ん・・ちゅ・・ちゅぷ・・・ん。」

優しく微笑みながらカリスの唇を舌で押し開いて熱いキスをするエリア。そのままエリアは張りの有る柔らかな乳房をカリスに押し付け、すり合わせた。

「ア・・アタシもするにゃ!!エリアだけするなんてずるいにゃ!」

その光景に我慢できなく発情したタマが目をランランに輝かせて叫んだ。

「タ・・タマ!貴方までそんな・・・!」

「もちろんよ。貴方達も手伝いなさい。1日2日で終わるわけではないのだから人手が必要だもの。あ、シーリーは少し待ってなさい。最初からだと貴方じゃ直ぐ壊れるわよ。」

「い・・頂くにゃ!!!」

「こ・・!壊れ・・・って!!」

カリスの唇から自分の唇を離して銀色の糸を垂らしつつ話すエリアの言葉を聞いて、タマは全裸になってカリスに飛びつき、シーリーは顔を真っ赤にしてうろたえた。

そしてその日から2週間、森の中の小屋ではすごく濃厚で甘々な世界が絶える事無く続いた。

第３７話（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

次回もよろしくお願い致します。ｍ（＿＿）ｍ

第３８話（前書き）

開いて頂きありがとうございます。

えー・・前回に引き続き今回は過激な性的描写が有りますので、苦手な方はご注意くだｓ

もとい、閉じることをオススメします。

第３８話

「き・・教皇様！！居られますか？！」

セイラル大陸の北にあり、聖カース教会総本山であるヒャルト山の中央に位置するカルラ神殿の色合い豊かな庭園に、透き通った鈴の音の様な可愛らしい声が響いた。

庭園に置いてある椅子に腰掛けて休憩していた７０代の人間の男性は自分を呼ぶ孫娘のような声を聞いてゆっくりと立ち上がった。

「おお、《セーラ》様そんなに慌てていかがいたしましたかな？」

庭園に入り口から入ったところで不安そうにキョロキョロと、教皇と言う人物を探している１０才くらいの女の子に老人は声をかけた。

《セーラ》と呼ばれた女の子は探していた人物を見つけると安堵の為か一息ついてから、老人が居る方へ足を進めた。

女の子はとても鮮やかで精密に神をデザインした刺繍のされた白色のフード付き神官ローブを着ており顔は見えない。身長１３５ｃｍほどだ。

オドオドとしており全体的に怯えているような雰囲気をかもし出している。

そして教皇と呼ばれた男性は太陽をデザインとした赤い神官のローブを着ており、１７０ｃｍほどの身長。歳の為か髪は白髪で前側はかなり薄くなっていてオールバックにしている。

「あ・・あの・・・じ・・実は先ほど・・・。」

「まぁ落ち着きなさい。深呼吸してー・・・はい、どうされました？」

教皇へ報告しようとしたが、つっかえてしまってなかなか先に話が進まず教皇は《セーラ》に落ち着くように深呼吸させた。

「すー・・は～・・。さ、先ほどですがだ・・大聖堂でお祈りをしていたところ、神託をう、受けました。」

「なんと!!どのような内容だったのですか？」

《セーラ》からの報告を聞いた教皇は穏やかな表情から厳しい物に変えて続きを促した。

「そ、それが・・・あ、《アーチャー》様が継承さ、されたと。」

「何!!まさか・・・いや・・。」

（まぁ待て・・、今あの女狐を倒せる程のやつはいないはず・・・となると・・。）

《アーチャー》が継承されたという報告を聞いて教皇は目を見開き驚いたが、直ぐに考え直し、気になったことを質問する。

「それは亡くなられたことによっての継承ではないのですかな？」

「う、ううん。ちゃんとけ、継承された様です。」

（ふむ、それならまだ望みは十分にある・・。）

《セーラ》の返答を聞いて溜息を付きつつ教皇は安堵した。

（あの女狐くらいにしか《セーラ》様を任せられないと考えていたから継承したと聞いて焦ったが、しっかりと継承者を育てたのであれば期待は出来るだろう。
曲がりなりにも一族から、人の世の柵（しがらみ）から出てまでも世界を旅する方だ。わざわざ人の世の柵に捉わせる様なことはしてまいて。）

報告内容から今後の事を考え、まとめると、教皇が何かを言うまでジッと不安そうに黙っていた《セーラ》に向かって小さな声で話しかける。

「よいですか《セーラ》様。今回の神託のことは内密に願います。絶対に誰にも話されぬように。知られればこの世は戦火に見舞われかねません。
逆に知られなければきっと、必ずやその方は貴方様のお力になって下さると思います。」

「だ、誰にもと言うことは、す、枢機卿の方々にもですか？」

教皇の言葉に戸惑いながら確認する《セーラ》。
それに神妙に頷き、教皇は言葉を繋げる。

「はい。特にケーニッヒ枢機卿に知られる訳には行きません。ご注意をお願いします。
本人に話さなかったとしても他の人に話してしまってもどこから話が流れるか分かりませんから、今後一切口にしない方が懸命かと思われます。」

「は、はい。分かりました。ぜ、絶対に口にしません。」

教皇のいつに無く真面目な様子にビクビクしながらも一生懸命頷きながら返事をした。

ケーニッヒ枢機卿は４０代という若い年齢ながらも枢機卿の中でもトップに立ち、外交面でのまとめ役をしている。次期教皇とも噂される人物である。

外交を担当しているだけあって人との繋がりは広いのだが、いかんせん信仰心が強すぎてカース信仰こそが世界の在り方であるべきだと考えてしまっている。

そしてその為ならば手段を選ばないことも多々あった。

彼のような人物が次の教皇になってしまったら世界はどうなるかは目に見えており、現在の《セーラ》は普通とはかけ離れた問題を抱えているので、どういう扱いをされるか分かった物ではない。

ケーニッヒ枢機卿がこの神託の内容を知れば、現在どこの国にも属していない《アーチャー》を抱え込もうとするのは目に見えている。

エリアの時は正攻法で行って失敗しているから次は手段は選ばないだろう。

（私が教皇である内にここまで来てもらえるといいのだが・・。）

「はい、よろしくお願いします。」

《セーラ》の返事を聞いて教皇は強く頷くのだった。

エリアが遠くの山の中で女狐扱いされている時、本人はカリスとの愛を育んでいた。

そして継承から15日後、力を溢れ出さんとしていたカリスは力が安定して眠っているところ、身体がくすぐったくなり目を覚ました。

「ちゅっ・・んん・・ちゅぷ・・・ちゅっ・・・ん、おはようカリス。ジッとしてて、今綺麗にしてあげるから。」

目を開けるとエリアとタマがカリスの下腹部に付いた色々な体液を舐め取っているところだった。
シーリーは隣のベッドで裸のまま気を失って眠っている。

「ん・・おはよう。んん、くすぐったいって。」

「ふふっ・・ちゅ・・・ん、我慢しなさい。」

エリアとタマの舌使いにくすぐったさで身体をよじるカリスに、エリアは言いながらカリスの下腹部を舐め上げて綺麗にした後、全身を舐めていった。
タマは疲れきってダルそうにしながらも懸命にカリスの身体を舐上げている。

継承が終わってからのこの15日間寝る時間もほぼ無く熱く滾っていた。
途中からシーリーも参加したが、氣を使ったカリスに触られた瞬間、力が抜けてしまい1時間たったときには熱いモノを何度も迸(ほとばし)らせて

気を失っていた。

タマは何とか半日持ったいたが、後ろから突かれるのに服従感を刺激されたのかカリスに気を失ってしまうまで求めすぎてしまい、１日中目を覚まさずそのまま寝ていた。２人は目を覚ましたら直ぐ食事をして参戦したが、やはり長くは持たずダウンした。

大体この繰り返しである。

しかし途中でタマは《覚醒》してなぜか闘争本能では無く、生殖本能がＭＡＸになって発情して激しい時間を過ごしたりしていた。

エリアは最初から最後まで寝ずにカリスの相手をしていた。

３人は身体と心の全てを使い、カリスの高まるモノを受け止めていった。

食事はタマ達が作ったのを交代で食べ、カリスには行為中だったので口渡しで食べさせた。

「んちゅっ・・これで綺麗になったにゃ。もうアタシも力出にゃいから一旦休むにゃ。」

カリスに重なりながら力を抜き、タマはそのまま寝ようとした。

「ん、待ってタマ。タマも身体綺麗にしないと。姉さんも。」

そう言って用意してあったタオルでタマの裸身を拭いていく。

ところどころ敏感な部分を拭いたときにピクンピクン反応するがもう動く力も無いのかされるがままの状態だった。

下腹部の前と後ろからはとめど無くカリスのモノが出てくるので時間をかけて優しく拭き取った。

タマを拭き終わり、その後エリアの身体を拭き始める。

タマは身体を拭き終わると同時に寝てしまった。

「ん・・敏感になってるから優しくね・・。」

エリアも精根尽きた感じでカリスに身体を預けて丁寧に、優しく拭いてもらう。
エリアは最初からのぶっ通しだった為にカリスのモノで全身浸かった様になってしまっていた。
タマと同様下腹部は拭いても拭いても出てくる状態だった。
下っ腹もポッコリと膨らんでいる。

「あっ・・んん、ふふっ。もうお腹一杯よ。カリスは満足できた?」

「姉さん達のおかげで落ち着いたよ。ありがとう。」

まだ下腹部から出てくるモノを拭きながら話をする。
暫くするととりあえずは止まったので、他の所も拭いていった。

「それじゃあ私も休むわ。シーリーのことお願いね。もしまたしたくなったら起こして。いつでもしてあげるから。」

全身を丁寧に拭いてもらったエリアはそう言い、最後にカリスの唇へ自分の唇を押し付けて舌を絡ませた後、唇を離してエリアも眠りについた。
カリスは2人をそのままベッドに寝かせて隣のベッドで寝ているシーリーの元までいき、上半身を起こしてあげてシーリーの裸身を優しく拭き始めた。

「ん・・あっ・・んん、ふぁ・・カリス・・?」

身体を拭いているとシーリーは目を覚まして自分の身体をカリスが拭いていることに気が付いた。

「ひゃっ、ちょ・・ちょっと待って！」

慌ててカリスから身体を隠そうとするが、カリスにやんわり止められて身体を拭かれていく。

「んん・・あ、待って！お願い！」

「ごめん、痛かった？」

シーリーの下腹部から溢れ出てくるモノを拭いているとシーリーが声を上げて止めた。

「ううん、痛かったわけじゃ無いの。敏感に成りすぎてて、その・・出ちゃいそうだったから。」

「イっていいよ。支えてあげるから。」

口すぼみに言うシーリーにカリスは答えて少し動きを強くする。

「あっあっ、そっちじゃなくてぇ。ダ・・ダメ、出ちゃう。おしっーーーー。」

シーリーは最後まで言えずに下腹部からいままで漏れ出ていたのとは別のものを漏らした。

「ひっ・・、いゃぁ・・ご、ごめんなさい。ごめんなさい。」

下半身に力が入らず止めることもできず、シーリーは震えながら涙を流して謝る。

「いいから、全部出して。大丈夫だから。」

そんなシーリーをしっかり抱きしめてあげて、カリスは出し切るまでタオルを当てて受け止めた。

「う・・うう～～。き、汚ないから自分でやる。」

「シーリーのなんだから汚なくなんかないよ。ジッとしてて。」

シーリーが自分の出したものをカリスが拭こうとした為、自分でやろうとしたが、カリスに再度抱きしめられて止められた。

「はい、拭き終わったよ。」

「ん、もうっ・・・ありがとう。」

顔を赤くしながらカリスにお礼を言って、シーリーは力を抜いてカリスに身体を預けた。

「カ、カリスぅ・・お願い・・。はむ、んちゅ・・ちゅぷ。」

シーリーは照れ隠しの行動なのか、自身の身体をカリスに擦り付けながら熱いキスを求める。

カリスはそのおねだりに応えて、暫くの間舌を絡めあった。

「ん・・はぁ。エリアとタマも寝てるのね。」

「ああ、今さっき寝たところ。ゆっくり休ませてあげよう。シーリ

ーもまだ休んだ方がいいよ。」

シーリーはカリスの唇から自分の唇を銀色な糸を引きながら離して、隣のベッドを見た。
目に入ったことをシーリーはポツリと呟き、カリスはシーリーももう一度休むように言った。

「ん・・そうさせてもらうわ。おやすみカリス。」

最後に啄むようなキスをしてシーリーはまた眠りについた。
カリスは3人が風邪引かないように布団を掛けてから外に出る。

（姉さん、タマ、シーリー、ありがとう）

心の中でカリスは3人に御礼を言った。
すでに太陽は昇っている。カリスは井戸の水をかぶることで今一度目を覚ました。
その後は森で動物を狩ったり野菜やキノコを採って来て食材を確保する。
3人が目を覚ました時に食事が出来るようにしておくためだ。

（身体が信じられないほど軽い・・。イメージしたとおりに身体が動く。それに横に振り向くのと同じ感覚で［眼］も使えるようになってる。）

継承してから初めて外で身体を動かすが、その感覚が今までとは違い予備動作無しで行動に移ることができる程で、まるで自分の身体では無いくらいにスムーズに動いた。
エリア達のおかげで程よい力抜きをしたが、それでも既に力が湧き出てくる感じがした。しかしそれは継承直後のように制御できにく

いモノではなく、心地よく感じるものだ。

食材確保をして、料理の下準備もしたが、なんだかんだで女性陣の3人は丸1日眠っていて起きたのは次の日の昼だった。

第３８話（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

次回もよろしくお願い致します。ｍ（＿＿）ｍ

第３９話（前書き）

開いて頂きありがとうございます。

感想ありがとうございます。

再三に渡り性的描写が含まれます。
苦手な方はご遠慮下さい。

第３９話

「ふにゃあ～・・・カリスぅ～。」

「あ、おはようタマ。って服着ないと服。」

３人共寝てから1日が経ち、昼過ぎになってから寝室の扉を開けてタマが目をこすりながら出てきた。
タマは生まれたままの姿で居間で座っているカリスの足の上に座って甘えてきた。

「うにゃあ～・・・ん、ちゅ・・・ちゅぱ・・・ぴちゃ。」

カリスの声が聞こえてないのか、柔らかな乳房をカリスに押し付けながら、カリスの唇に喰いつき舌を絡ませるようにキスをねだってきた。
外見２０歳くらいのタマだが、こうやって甘えているところを見ると幼く感じてカリスはタマのキスに応えながら優しく抱きしめて獣人特有の毛並みの有る背中を撫でた。

「ふぁ・・・ちゅっ・・んむ・・・カリス背中気持ち良い・・。」

そうやってタマがカリスにじゃれていると、エリアとシーリーも起きたようで寝室から出てきた。
カリス以外の３人共服は着ておらず魅力的な裸体をさらけ出していた。

「おはようカリス。・・・まったくこの猫はまだ発情しているのかしら。」

「おはよう。タマったら羨まｓ・・・じゃなくってはしたないんだから。」

エリアとシーリーは思い思いに言いながらカリスに声をかけた。

「おはよう姉さん、シーリー。身体は大丈夫？かなり無理させちゃったから。」

寝室から出てきた2人の裸体に目を細めながら挨拶するカリス。
タマはカリスが挨拶する為に唇を離されてしまったので首に顔をうずめてキスをしている。
エリアとシーリーはカリスが自分達の身体を見てくれている喜びから幸せそうに微笑んだ。シーリーは身体を赤らめ、もじもじしながら、エリアは堂々と。

「まだ身体はだるいけれど動けないほどじゃないから。それにカリスの近くに居たいし・・。」

カリスの問いに恥らいながらもシーリーが答える。
前に比べてシーリーはカリスに素直になったようだ。
カリスに対しいつも以上に優しく、女の目をするようになった。

「私の方は8割方回復したわね。とりあえずは問題無いわ。」

2人とも特に問題もなさそうなので、タマを下ろして食事の用意に取り掛かった。
その間に女性陣には服を着てもらって席についてもらった。
3人共かなりお腹を空かせていたらしく、料理したカリスがうれしいほど食べてた。

「これで継承も終わったし、どう?カリス。身体の具合は。」

食事を終えて一息ついたところでエリアが話しかける。

カリスは昨日森の中で身体を動かして感じたこと、分かったことを説明した。

「うん、違和感は無い様ね。馴染んでよかったわ。」

「なんだかカリス自身も変わったように見えるわね。優しさは元からだけど、う~ん。目に力が宿ったというか・・。」

「そうだにゃ~。カリスに見られるとこう、お腹の下辺りがもにゅもにゅと・・・。」

「タマ・・。あなたのそれはただ単に発情しているだけでしょうに。」

タマの話にエリアが突っ込みを入れた。

「ん、なんだか姉さん達との触れ合いで自信が付いたと言うかなんというか・・。」

カリスの言葉にシーリーは顔を赤らめうつむき、タマは目を輝かせてうれしそうに、エリアは笑顔で当然よ、と3者3様な反応をした。

「それで今後のことなのだけど、カリスには旅に出てもらうわ。他の【英雄】達は基本各自国に居るのだけれど、それだとどうしても価値観が自国よりになってしまうのよ。見方によってはその国が【英雄】を独占している状態になってるわね。

それでも世の中は回っていくけれど、どうしても偏りというモノが出来てしまうわ。【英雄】は影響が絶大だから。
国の指導者達の中でも【英雄】を担ぎ上げて、旗頭と考えている人も少なくないの。
分かりやすく言うと【英雄】を利用していると言う訳。
本来【英雄】とはカース世界の守護者。その守護者を一国だけが独占し、利用すると言うのは私はおかしいと思うの。
だから私は一族の里を出て旅をしていたのよ。
国と言っても所詮は人の集合体。１つのグループみたいなモノだから利用したくなるのも分かるけれどね。それでも世界を守るための力を利用して人に向けると言うのが気に入らないわ。
だからカリス、旅をする中で貴方の持つ力を知れば利用しようとする人もでてくるでしょう。
全て断れ、までは言わないけれどよく考えるようにしなさい。」

「うん、手を出すかどうかはよく考えるようにするよ。あ、もしそれで他の【英雄】と対立したらどうするの？」

「その時は相手をひっぱたいて目を覚ましてあげればいいわ。それが出きるのも【英雄】じゃないと無理でしょうしね。
まぁ、仮にも【英雄】として選ばれた人物だから最悪な事態にはならないと思うけれど。」

エリアの言葉に頷くカリス。その横でタマが、カリスに逆らう人達なんて倒せば言い。とか物騒なことを言っていた。

「まずはムール街へ行ってギルドランクを上げてもらいなさい。ストライダーを撃退したと言うことはもう知れ渡っているはずだし、その実力があるなら直ぐにでも上げてくれるでしょう。」

「サクラさんに根掘り葉掘り聞かれそうだなぁ。一応ギルドにも旅に出ること言っといていいんだよね。」

「ええ、ここのギルドには期待されてたから一言挨拶しておいた方がいいわね。」

ギルド側としてのサクラのことを考えるとちょっと気が引けるところなカリスは苦笑しつつ応えた。

カリスとしては国云々なんて言われても実はサッパリ分からなかったが話の内容だけは覚えとこうと頭に入れた。
今はそんなことよりも他の街、人々を見て周ることの期待感でいっぱいだ。
タマやシーリーに出会えた事から分かったように、人々との出会いにより出来る絆がカリスには堪らなくいとおしく思えた。

（姉さんやタマ、シーリーとは一時分かれることになって寂しくもあるけれど、きっとそれ以上の出会いもあって楽しそうだ。）

カリスは先の事を思ってワクワクしていた。
しかしタマとシーリーはそんな話を聞いて、カリスと離れ離れになってしまうことが間近に迫っていると分かり不安そうな様子でカリスを見ていた。

「ねぇカリス・・・。もう直ぐ旅だっちゃうのよね。その・・私もっとカリスと思い出がほしいの。」

その夜寝室でシーリーはカリスに詰め寄っていた。

「シーリー・・。俺もシーリー達と離れるの寂しいよ。もう家族みたいなものだし。」

カリスもそれに応えてシーリーの身体を抱き寄せる。

「ん、私何でもするかｒ・・・んん、ちゅぷ・・・ちゅっ。」

シーリーの言葉を最後まで言わせずカリスはシーリーの口をキスして塞ぐ。

「うう、アタシももっと思い出ほしいにゃ！カリスぅ・・。」

そう言ってタマも目を潤ませながら抱きついてくる。

そんなタマもカリスは受け止めてシーリーとタマの唇に交互に熱いキスを交わす。

タマとシーリーはキスをしながら服を脱いでいき、カリスの服も脱がせて3人は生まれたままの姿になってベッドに倒れた。

カリスがチラリとエリアに目を向けるとニヤニヤとしながらこちらを見ていて、カリスの視線に気が付くと頷いていた。

その間もカリスはシーリーとタマの背中や柔らかいお尻を撫でながら2人と舌を絡ませる。

「ちゅっ・・ん、チュルル・・・ふぁ・・ん、カリスぅ、」

舌を絡ませながら身体を可愛がられたことでシーリーとタマは下腹

部をカリスの太ももに、柔らかな膨らむ胸をカリスの胸に押し付けながら媚を売るような目でカリスを呼ぶ。

「チュルル・・・ちゅぷ・・・ん、もう我慢できない？」

優しく微笑みながら2人に話しかけるカリスにシーリーとタマは涙目になりながらコクコクと頷いた。

そのままシーリーとタマを強めに抱きしめて何度も愛し合った。2人とも何度もカリスの名を呼んで体力の続く限り何度も達する。

2人はいつしか力尽きてカリスの横で気を失ったかのように眠った。2人の下腹がぽっこりと膨れて下腹部からカリスからの愛がこぼれているのでカリスは優しくタオルで拭う。
拭っている時に2人の身体がピクンピクンしていたのを見てカリスはすごくいとおしく感じていた。

身体も綺麗に拭い終わり、そのまま眠らせる。
ベッドから降りてその寝顔を微笑みながら見つめていると後ろから柔らかなものに包まれた。

「ね、カリス。私も寂しいから思い出がほしいな？」

既に服を脱いで全裸になったエリアが抱きついてきたのだ。

「姉さん・・。」

「ん・・・わ！ちょっと！びっくりするじゃｎ・・んん！、ちゅっ。」

カリスは振り返って素早くエリアをお姫様ダッコで抱き上げて、抗議しようとしたところをキスで口を塞ぐ。
エリアもカリスの首に腕を巻きつけて舌を絡めた。
そのままエリアを隣のベッドの上に運んで寝かせ、カリスもベッドにあがった。

「ふふっ、カリスにダッコされるなんて・・・。カリスも大きくなったね。」

コロコロと笑いながらカリスを見つめるエリア。
そんなエリアに微笑みを返してエリアに覆いかぶさり、形の良い両の胸を愛でる。
今までカリスを抱きとめてくれていた優しく柔らかな温もりを、心を込めて。

「んん、カリスのその、あっんん、・・・氣を使っての愛撫は反そっ、則ねっ。」

「気持ち良い？」

胸の先端をも攻められながらもエリアは言う。

「氣を使える人がそんなにいるわけでは無いから、んっ、あれだけど、はぁっ、氣を使えない人がそれをやられたら、んんっ、撫でられただけで力が抜けてしまうわ、ねっ。」

シーリーやタマみたいに。と熱い吐息混じりに話すエリア。
カリスはエリアの下腹部にも手を持っていく。
そこは既に何度も達しているようでベッドが水溜りのようになっていた。

カリスとしては自分の気持ちを込めて触れる為に氣を使っているのでそれが当たり前に感じているのだ。

「あまりやらない方がいいかな？」

「ふふっ、いいのよ。カリスの愛を、んっ、すごく感じるものっ、あっんん。」

エリアは自分から腰を動かしてカリスの手に擦り当てる。

「かわいいよ、姉さん。ずっと姉さんを見ていたいくらいに。」

「ああ・・カリス。お願い、もう来てっ。」

４人で愛し合ってからカリスの腕も上がり、最初は攻めることの多かったエリアだが、今は受けに回っていた。

その後幾度と無くエリアにカリスは愛を注ぐ。前や後ろだけでなく口からも愛を注ぎ、エリアは瞳を潤ませながらお腹が膨れるまで飲み下していった。

（ああ、すごい。こんなにも濃厚で口の中や喉に絡まるなんて・・。それに量も・・・底が知れないわ。）

身体の全てでカリスの愛を受け止めるエリア。

最後にエリアがカリスの下腹部に跪き、カリスのモノを頬張り綺麗にする。

その間にカリスはエリアの頭を撫でながら話しかけた。

「姉さん・・今まで本当にありがとう。育ててくれて・・鍛えてくれて。そして多くの愛情を注いでくれて。」

その言葉を聞きながらエリアは口を動かしながらもうれしそうに微笑んだ。

カリスのモノを綺麗にして口を離し、エリアはカリスの下腹部を胸に抱いて言う。

「貴方は私の大切な弟よ。そんな弟を育てるのは当たり前。それに期待以上に逞しくなってくれたもの。」

そう言ってエリアは抱きしめる力を強くする。

「んん、それとここは貴方の帰る場所。忘れないで、カリスには私達もいるし、帰る場所もあるんだから。」

そう言ってカリスのモノにキスをする。

「ん・・うん、忘れないよ。俺は世界中を旅したら帰ってくるから。姉さんのいる、タマやシーリーの居るこの場所に。」

その返事を聞いてエリアはカリスに向かって出会ってから一番の笑顔を向けた。

「そうそうカリス、言い忘れてたわ。」

エリアの身体に付いた色々な体液をカリスが拭きとってから2人でベッドに横になり、身体を密着させている状態でエリアは話し始めた。

「旅に出るんだから帰ってくるときには愛人の２０人や３０人連れてきなさい！」

「え？・・・姉さんいきなり何言い出すの。」

「男なんだからそれくらいしないでどうするの。これは【英雄】云々以前の問題ね。私のカリスなら出来るはずよ。それに目標があった方が気合入るでしょ？」

「気合って・・・。まぁ先の事は分からないけど、善処するよ。」

ふふっ。と笑いながら言うエリアにカリスは呆れて溜息を吐くのだった。

しかしこの時エリアは夢にも思わなかった。

カリスが帰ってきた時にエリアが自分で言ったことの１０倍もの人数が一緒に来るということを。

第３９話（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

１章での４人が愛を深めるのは今回で最後です。

次回もよろしくお願い致します。ｍ（＿＿）ｍ

第４０話（前書き）

開いて頂きありがとうございます。

第４０話

次の日、カリスはエリアに呼ばれて2人だけで森の中を歩いていた。
カリスは周りの気配を探ってタマやシーリーが居ないことを確認してから話を振る。

「それで話って？」

「カリス、【英雄】になった貴方に話しておくことが有るわ。」

エリアは足を止めず、そのまま話し出した。

「それは《邪神》についてよ。伝承では彼はカース世界を滅ぼす者とされているけれど、実際は少し違うの。
彼は結果的にカース世界を滅ぼす者と見られただけで、彼本人にそんな気は無かったのよ。」

エリアの話の内容は次の通りだ。

カース世界、南の辺境には世界大樹ユグドラシルがある。
それはカース世界の魔力（マナ）を統べるモノだ。
ある時そこに1人の男が異世界よりユグドラシルの力を借りようとやってきた。
彼の世界では災厄により滅亡寸前でどうしても他から膨大な魔力を持ってこれなければ維持できなかったそうだ。
彼は異世界から選ばれてきただけあってカース世界で言うところ【英雄】と似たような者だったのだろう。
彼はユグドラシルの魔力を魔法具で装飾した自分の身に取り入れて持ち帰ろうとした。が、彼の蓄積量よりも膨大な魔力に当てられて

【英雄】としての力が暴走しだしてしまった。
その結果彼の能力《召還》が発動し、カース世界に魔物が大量発生した。
そしてその魔物の瘴気に当てられて、カース世界に居た生き物も魔物化しだしたのだ。

彼は暴走した瞬間から意識が無いにもかかわらず、能力が途切れることなく続いた。
それを危ぶんだカース神がこの世界に【英雄】を生み出したのだ。
その後は大体伝承通り。

そして最後の部分では《邪神》を追い払ったのでは無かった。
ある人物が魔力を取り入れる異次元型の魔法具を作り、それを使うことでユグドラシルの魔力を逸らし彼の暴走を止めて意識を取り戻させた。
そして膨大な魔力を蓄積した異次元型魔法具を彼に渡して異世界へ帰らせたのが実際の話と言うことだ。

なぜそれが《邪神》を撃退したことになっているのかというと、もし異世界から来たものが引き起こしたことと成ると異世界を知った人々はその世界に戦争を仕掛ける可能性があったためだ。
今回の被害は壮大なモノだ。報復を考えてもおかしくない。
もしそうなった場合、異世界までの道を作るほどの力を持つ者としたら【英雄】くらいなものだろう。
その場合確実にカース世界、異世界共に被害がでるのは目に見えている。
【英雄】達はそうならないよう穏便に済むよう、話を改変したのだ。

「じゃあ《邪神》と呼ばれる存在はいなかったってこと？」

「いいえ、彼が人々から《邪神》と呼ばれていたし【英雄】《私達》もそういう認識だったわ。さすがにそれだけの被害がカース世界にでていたから。
でもそれは彼が起こした結果で、ということよ。彼自身の心が《邪神》だったと言う訳では無いの。」

「自分の世界の為にやったことがこっちの世界に災厄をもたらしてしまったんだね。」

「ええ、だから彼を元の世界に返したのよ。あ、ちなみに異次元型魔法具を作ったのはダンソンね。彼くらいなモノよ異次元型の魔法具を開発して作れるなんて。レザーバッグやレザーSバッグも彼の作品ね。こちらは作り方をギルドに提供しているから多く存在するって訳。」

「え！・・・爺ちゃんが。そっかぁ・・・その時姉さんと知り合ったんだ？」

「そう、彼は戦闘はからきしだったけれど、魔道具製作に関しては突出していたから。」

久々にダンソンの名前を聞いて感慨ふける。爺ちゃんも色々と旅をしていたんだ、と思うカリスだった。

「これは【英雄】が心の中で引き継いでいくもの。大事なことでもあるから奥底にしまっておいてね。」

「うん・・忘れない。それが【英雄】の始まり・・・。」

エリアの話しにカリスは頷いて何度も反芻し、心に刻み込んだ。

これでエリアの話しは終わり、２人は少し狩りをしてから小屋に戻った。

「タマ、シーリー・・・。いつまでカリスにくっついているのよ。」

空を朝日が照らし出し、森の中にある草花や葉には朝露が輝いている中、カリス達４人は小屋の前に居た。

今日カリスはこれから旅立つのだが、タマとシーリーがずっとカリスの腕に抱きついて離れなかった。

旅立つカリスの格好はいつもの布の服を着ており、肩にレザーバッグを担いでいる。ナイフは装備していない。服やナイフはボロボロになっているのでムールの街で一通り買い揃える予定だ。

「ううう～折角契約したのに離れ離れにゃんて嫌だにゃー。やっぱりアタシ付いて行くにゃ！」

「今更往生際が悪いわよ。良い女って言うのは別れ際に笑顔を絶やさない者なんだから。」

タマの物言いに溜息を付きながら却下するエリア。カリスからタマを引っぺがし、エリアの近くに確保する。

「シーリー、しばらく合えないけど次会う時を楽しみにしているから。」

声をかけながら腕にしがみ付いているシーリーの頭を撫でるカリス。

「うん・・。ずっと待ってるから、絶対帰ってきてね。」

カリスの目を、潤んだ目で見つめてお願いする。
カリスはシーリーの言葉に力強く頷き、一度抱擁してから放す。

「それじゃあそろそろ出発ね。ムールの街でランクを上げたら北にあるナイルの街へ向かいなさい。あそこら辺では月見草という植物が有って夜になると綺麗な花を咲かせるのよ。あれは一度は見ておくべきね。島を出るにはさらに北へ行けば港があるからそこから船で大陸へ渡りなさい。」

「ナイルの街ね、了解。色々と見て回ってくるよ。姉さん、タマ、シーリー今までありがとう。しばらく留守にするけど元気でね。」

「大丈夫よ、タマとシーリーが色々とがんばってくれるから。」

「「えっ！！」」

エリアの言葉にタマとシーリーが反応するがスルーして話を続ける。

「カリスも身体に気をつけてね。旅でのことは自分の好きにやりなさい。それじゃあ行ってらっしゃい。・・・ちゅっ。」

言い終わると同時にカリスに飛びつき唇を触れ合わせるキスをして送り出す。

タマとシーリーがそれに続こうとしたが、2人が絡むと長くなるからエリアが首根っこ押さえて押しとめる。

「ははっ、それじゃあいってくる!!またね!!」

そうして元気良くカリスは3人に手を振って小屋から離れて行った。
その後ろでは・・。

「ちょ!!待つにゃ!!アタシはまだキスしてにゃいにゃ!!カリスー!!!」

「ま・・待って!!私もまだぁ!!」

そんな叫び声も聞こえたがじゃれあっているモノと判断してカリスは笑顔で歩いていった。

（全く往生際が悪いんだから、この2人は・・・。）

しょんぼりしている2人を見ながらエリアは呆れている。

「ほら!2人ともシャキっとする!これからカリスが帰ってくるまでにすることが大いにあるんだから!
ここはカリスのかけがえの無い私たちの居る、帰ってくる場所なのよ。そんな場所をこのままの状態にしておく訳には行かないわ。
そう、彼くらいの人物が帰ってくる場所といったら城くらいのモノじゃないと失礼なのよ!!!」

ドドーン!!と言う効果音が付きそうなほど胸を張って満面の笑みで言い切るエリア。
タマとシーリーはそんなエリアをポカンとして見つめていた。

「ふ・・・ふふふふふっ、待っていなさいカリス。貴方が帰ってきた時には一国の主に仕上げて見せるんだからね！！！」

「え・・あの・・エリアさん・・？誰がそれをするんでしょうか・・？」

あっけにとられているところから回復したシーリーが質問する。

「そんなの決まっているじゃない。貴女たちよ！！精々働きなさい。これも修行の内なんだから！！」

「にゃ・・にゃんだってー！！！にゃんでアタシ達がしにゃいといけにゃいのよ！！」

タマも復活して横暴をするエリアに食って掛かるが、

「カリスの愛人とペットなら彼の為に働くことは当たり前じゃない。そんなことも出来なくてカリスと一緒に居れるなんて思ってないでしょうね？」

「う・・ぬぬぬ・・・じゃあエリアはにゃんにゃのさ！！」

「私？そんなの決まってるじゃない。正妻よ！！」

エリアは自分のお腹を優しく抱きしめつつ言い放つ。

それを見てタマとシーリーは驚愕して目を見開いた。お腹を優しく抱くということはまさか・・・。

「ま・・まさか。お腹にカリスの・・・？」

シーリーの呟きを聞いてドヤ顔でエリアは頷いた。瞬間、

「にゃおぉぉぉぉぉ！！！」

シュバッ！！！

タマは瞬時に《覚醒》し、カリスの旅立った方に向かって飛び出す。

「！！そうはさせるもんですか！！！」

ドンッ！！ドシャァァ！！

が、すぐさまエリアに超度級の踵落としを頭に喰らって大地にめり込んだ。

「ずるいにゃ！！アタシもカリスの子がほしいにゃあああ！！！」

朝日の下で森の中にタマの魂の叫びが木霊した。

第４０話（後書き）

読んで頂きありがとうございます。

予定通り次回でカリスが旅立ち一章は終わります。

次回もよろしくお願い致します。ｍ（＿＿）ｍ

第４１話（前書き）

開いて頂きありがとうございます。

１章最終話になります。

第４１話

森の中を移動中、タマの叫び声が聞こえたカリスは苦笑しながらムール街へと向かった。

「カリス君じゃないか！！あれから姿を見せ無いから心配したんだぞ！」

街の北門に着くと門番がカリスの肩をバシバシ叩きながら話し掛けた。

「お久しぶりです。俺達は大丈夫ですよ、皆も元気にしてます。」

そうかそうか、と安堵しながら笑顔を見せる門番。

そこであっ、と何かを思い出したようで慌て気味に離しかけてきた。

「そうだった！君が来たらギルドの方へ顔を出してもらうよう言われているんだ。すまないがギルドに行ってもらえるか？」

「ええ、そのつもりです。ストライダーの時の事後も気になるので。」

門番がよろしく頼む、と言って、カリスはギルドカードを見せてから街の中へと入っていった。

街の中はストライダーの襲撃前よりにぎわっている。

街の復興作業の為に北にあるナイルの街からも人が大勢来ているのだ。

人波に沿ってギルドまで行くと、カウンターの奥でサクラが忙しそ

うに動き回っていた。

「サクラさん、ちょっといいかな。」

カリスはカウンター前まで行って、忙しそうにしているサクラに声をかける。

こちらに気が付いたサクラは目を見開いて驚き、カウンターへ走ってきた。

「カ、カリスさん！無事だったんですね！！」

カリスの頭から腰までを目でジロジロと見て安堵するサクラ。

カリス達がストライダーを撃退したという話は聞いていたが、怪我していないかサクラは心配していた。

なんせ3週間も音沙汰が無かったのである。

「今日はカリスさんだけですか？他の方々は・・？」

「ん、皆も無事だよ。それと今日は色々と話しておくことがあって来たんだ。」

「あっはい、分かりました。奥の部屋で聞きますのでこちらへ来て下さい。」

そう言ってギルドの奥へ案内するサクラについていく。

案内された部屋には真ん中に四角いテーブルがあり、左右に3人くらい座れそうなソファーが1つずつ置かれていた。

「こちらに腰掛けてお待ち下さい。今ギルドマスターを呼んできますので。」

言われた通りにソファーへ腰を下ろす。
サクラは部屋を出て行き、目当ての人を呼びに行った。
しばらくして、ドワーフ族の爺さんを連れてサクラが戻ってきた。
彼がギルドマスターなのだろう。

「おうおう、待たせてすまんな。ワシはギルドマスターのスラドだ。君はカリスでよかったかな?」

「ええ、カリスです。」

カリスはソファーから立ち上がってスラドと握手する。
その後スラドが向かい側のソファーに移動して腰を下ろしたのでカリスもソファーに座った。
サクラは部屋の扉の前で控えている。

「早速だが君とその仲間が今回ストライダーを撃退してくれたようだな。
街の方には被害が出たが、おかげで死人は出さないで済んだ。礼を言わせて貰う。
それで・・あの時にワイバーンを目撃したという情報があるんだが、何か知らんかね?」

スラドはカリスの目をジッと見て質問する。そのワイバーンが死んでいるなら問題ないが、もし逃がしていたら再度襲撃されかねないのだ。

「ワイバーンならストライダーを撃退して直ぐに2匹ほど上空に現れましたが、2匹共倒しましたよ。」

スラドの質問にカリスもしっかり目を見て答えた。

「・・・ふむ、嘘ではないようだ。飛竜を倒す術を持つ者が居たということか・・。それは幸いだった。
してその人物は一緒じゃないんか？」

カリスの答えに肩の力を抜いてその人物がどこに居るのかをたずねる。
もしこの街に滞在しているならギルド側としては懇意にしておきたい所なのだ。

「ムール街には滞在していませんね。でも近くには住んでいるので、たまにこの街にも来ることはあると思いますよ。」

「ふ～む、君の方から紹介してくれることはできんかな。」

「俺は今日旅立つ為に別れたばかりです。それとそういうのはあの人好きじゃ無いので。」

「そうか・・。まぁ仕方ない。それで、カリスがギルドに来たのも何か用事があったのだろう？」

溜息を吐いてカリスに話を促す。
カリスは一度頷いた後、話し始めた。

「ええ、今回の撃退についての報酬としてギルドランクを上げて頂けますか。」

「ふむ・・。ちなみに今のランクは・・・なんと！！。」

この時スラドはカリスは既にBもしくはAランク以上だと思っていた。仮にも竜族を倒せるほどの腕を持っているのだ。
カリスはギルドカードを見せるとスラドは目を見開いた。

「カリスはDランクだったのか！雰囲気からはもっと高いものだと思っておったんだが・・。」

「ギルド登録したのが最近だったんですよ。目標をCランクとして依頼を受けてたんです。」

「なるほどのう・・。ストライダーの襲撃があってランクを上げるのも時期が悪かったということとか。」

スラドは頻りに頷いて納得顔だ。

「まぁ問題無いだろう。サクラ、ギルドカードの更新をしてくれ。」

そう言ってサクラにカリスのギルドカードを渡す。

「はい、しばらくお待ち下さい。」

サクラはギルドカードを受け取った後、礼をして部屋から出て行った。
2人はそれを見届ける。

「一応君らの報酬としてコインも用意しているからそれも受け取ってくれ。あれだけの数を撃退し、なおかつワイバーンまでもだ。ギルドとしてもそこは貰ってもらわないと他の者に示しもつかんのでな。」

報酬の話を聞いてカリスは少し考えた後、答えた。

「ならそれは俺の仲間がムール街に来た時に渡してください。メンバーのことはサクラさんが知っていますから大丈夫だと思います。」

「ああ、君は今日旅にでるんだったか。分かった、全部渡してしまって良いんだね？」

その言葉にカリスは頷く。

エリア達はお金が必要なら依頼を受ければ直ぐ稼げるだろうが、多く有っても困るものじゃないので大丈夫だろうとカリスは考えた。

その後は街の事を話していると扉が開いてサクラが入ってきた。

ギルドカードの更新が終わったようだ。

「はい、カリスさん。おめでとうございます。更新終わりましたのでCランクになります。」

カリスは出されたギルドカードを受け取る。

「ワシとしてはCランクと言わずAランクに上げてしまっても良いんじゃないかと思っとるんだが、本当にいいのかね？」

「ええ、一歩ずつ進んで行こうと思いますので。」

「そうか・・。それなら何も言うまい。がんばりたまえ。」

カリスの答えに満足したのか笑顔で頷くスラド。どうやらカリスを気に入ったようだ。

「サクラ、例の報酬は彼の仲間が来たら渡してやってくれ。カリスもそれを望んでいる。」

「・・・分かりました。」

サクラはカリスに目を向けて確認した後、頷いた。

「もう街をでるのかね？」

ギルドの外まで見送りにスラドとサクラは来ていた。
外の道の人通りは相変わらず多く、にぎわっている。

「一度装備を整えてからになりますが今日中には出るつもりです。」

「そうか。ふむ・・ちょっと待っておれ。」

そう言ってスラドは一度ギルドの中に戻る。

「カリスさんとこれでお別れなんですね。優秀な冒険者が居なくなってしまうのは残念です。」

サクラは残念そうに笑いながらカリスに話す。

「ありがとう。でも姉さん達はムール街の近くに住んでるし、度々

来ることもあると思うから。」

「はい・・。まぁ冒険者は冒険してこそですしね、ご武運を祈っています。」

そう言ってサクラは頭を下げた。
しばらくしてスラドが戻ってきてカリスに手紙を渡した。

「ほれ、これを持っていきなさい。大陸へ行くのだろう？港街のギルドでこれを見せれば船の方も融通してくれるだろう。少ない報酬の代わりだ。」

笑いながら差し出してくる手紙をカリスは受け取って例を言う。

「それじゃあ今までお世話になりました。」

そう言ってスラドとサクラに手を振ってカリスは旅支度の為にお店へ足を運んだ。

カリスが店で選んだ物は今着ている物とは違い、丈夫な紺の旅人の服と黒い皮のブーツを買った。服の上には所々に邪魔にならないくらいの皮のプロテクターを買う。そしてこげ茶の厚手なフード付きのマントだ。
マントは買って直ぐにレザーバッグへしまう。これは雨が降ったときや外で寝るときに使用するつもりだ。
狩りのことも意識して武器はショートソードを選ぶ。ナイフと同じように腰の後ろにくくりつけた。
ナイフ以外も扱えるようにする為だ。全く別の武器から始めるよりは扱いやすいだろう。
大きめのナイフも1本買ってレザーバッグに入れておく。

その後は道具屋へ足を運び、魔道具のランプやら水筒やらを買っていく。夜でも目は良いし、気配でも認識できるが、ランプは有ったほうが何かと便利だという判断だ。

そして街中をぶらつき長持ちする食材を幾つか買う。その時に八百屋のお上さんとダンナさんにも会ったのでこれから旅に出ることを伝えると、2人は寂しがった。
今までのことをあれこれと話して判れる際、旅の気付けだと言って色々と果物や芋などをくれた。
それにカリスはお礼を言って手を振りながら北門へと向かった。

北門では馴染みの門番ががんばって仕事している。太陽が昇りきっているこの時間、街の復興の為に北から来る職人や冒険者の確認で忙しそうだ。
合間を見て声をかける。

「おうカリスどうした。」

「これから旅に出るので最後に挨拶を。」

「は!?今からか?なんだよかなり急じゃないか。」

「いえ、旅自体は前から決めていたことなので。」

旅云々の話は門番にしていなかったなと思いながら話すカリス。
門番もかなり驚いたようだ。

「そうかぁ・・。優秀な人材がいなくなるのは痛いが仕方ない。可愛いなんちゃらには旅をとも言うしな。

がんばってこいよ！」

「はい、ありがとうございます。それじゃあ！」

門番は寂しそうに話していたが、最後は男らしく気合の入った声で送り出してくれた。

カリスもその気合の入った声に強く答えてムール街から北へ足を進めた。

（皆しばらくお別れだ。次に皆と会う時は自分も成長しているといいな・・。）

内心寂しく感じながらも、この先の新たな出会いに胸をワクワクさせてこの年１８才になったカリスは旅に出るのだった。

第４１話（後書き）

これにて1章終了です。

次回投稿まで1週間前後時間を頂きます。

又、やっと書きたかった本編（2章）なのでじっくり書く為、投稿再開しても3日くらいに一度の更新スピードになるかと思います。

1章ではライト系な軽い話に仕上がったので、2章はダーク系の重い雰囲気を取り入れていきます。
読まれる方は、ご注意下さい。

それでは1章、処女作と言うことも有り、手探りで書いた読みにくい文章だったと思いますが、最後まで読んでいただきありがとうございました。

次回もよろしくお願い致します。ｍ（＿＿）ｍ

第1話（前書き）

開いて頂きありがとうございます。

お待たせしました。

ここから第二章　強欲編になります。

第1話

「うう・・・やっと入れた・・・。ここがナイリス村・・・か。恐るべし・・・。」

カリスは疲弊した様子で、村の入り口から見える村の全容を見渡した。

グリズリー討伐から2日後の昼間、カリスは今ナイル街から東に徒歩2日の位置、ナイリス山の麓（ふもと）にあるナイリス村へと来ていた。

ナイリス村は人口約８０人、村の形状は円形で東と西に村の出入り口、中央は広場になっており北と南に家が並んでいる。

東側の出入り口付近には畑が広がっているようだ。

そして村は高さ１．５ｍ、横幅５０ｃｍ程の木の丸太の柵で囲われていて、柵の所々に３０ｃｍくらいの皮袋がぶら下げられている。

魔物避けだろうか。

ナイル街で聞いたところではこの村は月見草を使った光薬（こうやく）の生成をして、それをナイル街へもっていって売っているそうだ。

光薬は魔力（マナ）を月灯りから溜めて光り輝くのだが、その特性上人が月見草を取り入れると体内の魔力を回復させる効果があるのだ。

かなり素晴らしい物なのだが、この島ではそこまで流通していない。

ナイリス山の西側にナイリス村はあるが、ナイリス山東側以外には結界が張ってあり、そこにはエルフィン族の里があると言われている。

殆どの月見草はエルフィン族が管理しており、ナイリス村の人々が扱えるのはナイリス山の西側にあるものくらいなそうだ。

彼、彼女らは精霊魔法を手足のように使う為、魔力の詰まった月見草はとても大事な物なのだ。

精霊魔法を使えるエルフィン族は穏やかな気質で容姿も良いことから、人間族の一部ではそれを自分の所有物にして愛でようとする者もいて、それを警戒する為に自分達で張った結界から出ることは少ない。
結界から出るとすれば他の場所に里を移す時か、もしくは変わり者で冒険者になろうとするものくらいだ。

カリスがこの場所にいる経緯はと言うと2日前まで遡る。
グリズリー討伐が終わって街中をぶらぶらしながら、旅の出発前にエリアが言っていた月見草について街人に聞いたところ、ナイリス山の森に生殖していると言う話を聞いたからだ。
ナイリス村まで2日、カリスなら軽く走れば1日かからず着くだろう。
急ぐ旅でもないからそんなにスピードは出さない。

出発前にギルドへ行ってナイリス村から何か依頼が無いかの確認もしておく。
依頼があるならついでに受けておこうと思ったのだ。

有った依頼は村の警備と先日こなしたグリズリー討伐依頼完了後の村への報告だ。
警備依頼はCランク、依頼完了報告依頼はDランクとなっている。
村への依頼完了報告の依頼は基本張り出されるのは1日だけだ。
それ以上はクライアントを待たせるのも憚(はばか)られるのでギルド側専属の冒険者がこなす。
ギルド専属冒険者は何か起こった時の為に常駐しているので、本来は出来るだけ動かしたくないのだ。
今回の完了報告依頼は報酬１５，０００コイン。

村への連絡だけだが普通なら2日かかる距離だからDランクでもそこそこの額なのだろう。

警備の依頼の方は定期的に依頼があるそうで、期限は1週間～になっている。
Cランクの依頼になっているが、内容にはCランクで魔物討伐依頼を1度でも完遂した者、とあった。
そして警備中に魔物と交戦した場合出来るだけ殲滅で最悪でも撃退、とある。
今回グリズリーの件も有るので警備を厚くしようと言うところだろうか。
報酬額は1日大体8，000コイン。
他の討伐依頼に比べれば安いが、魔物がこないかもしれないのにそこまでの額が出せないといったところか。
この島では人が集まる街や村に魔物が攻めてくることなど滅多に無い。人が住む土地よりも森や山の方が断然広いので魔物もわざわざ人を襲う必要が無いのだ。
だからこそ繁殖し易く、溢れた場合にギルドから魔物の討伐依頼がでるのである。

カリスはこの2つの依頼を受けることにしたのだ。
基本依頼は1つずつしか受けられないが、向かう方向が同じ場合と、連絡や配達などの依頼の場合は2つ以上受けられるのだ。

ナイリス村の門番に声を掛けて挨拶する。

「ん！君は冒険者か？！こんなところまで良く来たな。まだ若いのに。」

旅人は最近めっきり居なくて珍しいのか、門番としてずっと1人で入り口に居たから話し相手がほしかったのか目が輝いていた。

「ええ、グリズリーの討伐完了報告と警備依頼の件で来たんですよ。」

「なんと！！グリズリー討伐はもう終わったのか！！なかなかギルドも仕事が速くなったなぁ・・。
警備依頼と言うと・・・君が受けたのかい？」

首を傾げながらカリスに聞く門番に頷くことで肯定した。

「ふーむ、確かに滑らかな動きで隙が無いように見える・・・。いや、何、俺も一角の冒険者でな。
人を見る目は有るつもりだ。
俺も昔は色んな依頼をこなした物さ。最初こそ・・・・（中略）。」

「え・・・、いえ・・・、ちょっと・・・。」

「だから最近の若者は・・・（中略）。
それに比べて君は・・・（中略）。
だからこそ世界は・・・（中略）。」

「・・・。」

カリスが途中で言葉を発しようとするも、門番の話は止まらず目を

輝かせながら話を続ける。
相当時間をもてあましていたのだろうか・・・。

「と、俺は思うんだよ。
それに大陸の・・・（中略）。」

「すみません！そろそろ村の中に・・・。」

「お！おお、そうだな・・・。いやいやすまん。つい熱弁を振るってしまったようだ。
ナイリス村へようこそ！」

何とか門番の話を遮って、カリスはギルドカードを見せて村に入る事に成功したのは門番に挨拶してから2時間後のことだった・・・。

中央広場では5～10歳くらいの子供達が走り回って遊んでいる。
親らしき人達、何人かがそれを遠巻きに見ながら世間話をしているようだ。
この村にはギルドは無いので冒険者は見かけない。
住んでいる人たちは皆人間族だ。
門番に言われた通り他の人の家よりも一回り大きい2階建ての村長の家へ足を運ぶ。

「こんにちは、誰かいますか。」

「はーぃ、ちょっと待ってねぇ。」

家の扉を開けて声を掛けるカリス。

すると奥から女性の声がして、しばらくすると奥から茶色の長い髪を後ろで団子にしていて、綺麗というより可愛らしい、と言う表現の合う３０半ばほどの細身な女性が出てきた。

「あらま、冒険者の方ですね。今村長の夫は外に出ていますので私が用件を聞きましょう。」

村人だと思って居たのか顔を見せるまでパタパタと靴音をさせてタオルで手を拭きながら現れ、カリスの姿を見たところで少し驚いた後余所行きの笑顔で対応した。

「ギルドの依頼を受けて来たカリスです。」

カリスは自己紹介しながらギルドカードを見せて依頼を確認する。

「ナイル街とナイリス村の道に現れるグリズリー討伐完了報告依頼と、ナイリス村の警備依頼です。内容に間違いが無いか確認してください。」

「まぁまぁご丁寧にどうもぉ、かなりお若いですね。私は村長の妻、トルルと言います。グリズリーの討伐もう終わったんですか。依頼を出してからまだ5日しか経っていなかったのに・・・。随分早く終わったものですねぇ。
分かりました、ありがとうございます。
それと村の警備依頼ですね。こちらは基本的には村で自由にしていただいて構いません。何かがあった時に直ぐ駆けつけられるようにして頂く必要はありますが。
警備依頼もグリズリーのことがあって念の為冒険者を雇おう、と言う話になって依頼したんですよ。
なのでグリズリーを撃退できるくらいの方でないとこちらとしても

困ってしまうのですが、本当に大丈夫ですか？」

いぶかしむ、というより不安そうにカリスへ問うのでカリスはギルドカードの依頼履歴を表示してトルルへ見せた。

「あらま！グリズリー討伐してくれたのも貴方だったの？！その若さで随分と腕が立つのね。ごめんなさい、疑ってしまって。」

出されたギルドカードの表示に目を通して驚くトルル。
それにカリスは苦笑しながら首を左右へ振った。

「それじゃあ、警備をしてもらうに当たって冒険者の方が来た時に寝泊りする小屋があるのでそこを使ってもらいます。
食事の方は朝晩私達の方でご用意しますのでここまでお越し下さいな。」

トルルは家から出て小屋のある村の東へとカリスを案内し始める。
トルルの後ろを着いて歩いていると村人から多少なり視線を感じるが、興味本意なモノで不安を駆り立てるモノでは無いのでカリスとしては過ごしやすい所かもしれない、と思った。
村人からすればカリスの見た目からして冒険者と判るのだが、年が若いのでそこまで不安は無いと言ったところだろう。

畑の近くまで歩いていき、目的の小屋に着いたのかトルルは足を止めて1軒の小屋の前で止まった。
そのまま扉を開いて中を見せながらカリスに簡単な説明を始めた。

「こちらの小屋です。必要そうなものは一通りありますが、もし何かあれば連絡ください。」

その小屋は街の宿屋に比べれば質は落ちるが、かなり丈夫そうな作りで隙間風とかも無く、防音効果も高そうなくらい頑丈そうに見える。
中にはちゃんと木のベッドもあって布団が敷かれていた。

「わかりました。ありがとうございます。」

軽く中を確認したカリスはトルルにお礼を言いながら頭を下げた。

「ふふっ本当に礼儀の良い方ですね。冒険者はもっと荒々しい方ばかりだと思っていたので。」

基本冒険者は舐められない為にも強気な対応をする人が多いのは否めない。舐められれば依頼にも影響しかねないからだ。
が、カリスとしてはクライアントの要望をかなえるのが仕事と考えているのでそういうことはしなかった。
が、しかし微笑みながらもトルルのカリスを見る目は何だか品定めをしている様な、獲物を狙うような目なのは気のせいだろうか・・。

「今から村の案内役として息子を連れてきますのでちょっと待ってくださいね。」

トルルは笑みを浮かべて頭を下げた後、畑の方へ向かっていった。
カリスはそれを見送った後、これからお世話になる小屋を確認することにした。
入り口にはランプが柱に掛けてある。
中は8畳ほどで、奥の壁沿いにベッドが置かれている。その脇には荷物が置ける3段棚があり、その一段目には綺麗な桶とタオルがおいてあった。身体を拭く用だろう。
畑の入り口あたりに井戸のような物があったからそこで水を汲んで

これるか、とカリスは考える。
入って左にはもう一部屋あるが、そちらは物置になっているようだ。
台所は見当たらない。基本的に寝泊りするだけといったところか。
荷物を棚に置いて一息ついたところで外からカリスを呼ぶ声がした。

「おーぃ、カリスさん居るかい。」

「今行きます。」

外から呼ばれてカリスは外に出る。
小屋の外には身長１８０ｃｍはある我体の良い２０才くらいの茶色髪で短く刈り取った頭の青年が立っていた。

「やぁ、君がカリスさんだな。俺は村長の息子のトルパだ、よろしく。」

トルパと名乗った青年はさわやかな笑顔で挨拶して右手を差し出した。
カリスもそれによろしく、と答えて右手を出して握手する。

「いやー、母さんが言っていたが本当に若いな。俺は２１になったがカリスさんは２０近くか？」

「１８です。それと『さん』は付けないでいいですよ。そこまで人間できてませんので。」

年齢を聞いてくるトルパにカリスが答えて名前の後に『さん』を付けないでいいことを伝えると、トルパは不思議そうな目をしばらくカリスに向けていると、突然笑い出した。

「ははははっ！！いや、すまない。ククク、あんた変わってるな。本当に冒険者か？
じゃあカリス。これで良いな。俺のこともトルパって呼び捨てでいいぜ。」

カリスの肩をバシバシ叩きながらトルパはカリスに言った。
カリスが首を捻って不思議そうにしていると、トルパはそれを見て説明してくれた。

「いやぁ、最初アンタの話を母さんから聞いた時はグリズリーを倒した凄腕の冒険者って聞いてな。
俺より若いとも聞いてたんだが雰囲気も落ち着いているし、人当たりもいい。話してみると礼儀もしっかりしていて・・・。面白いなあんた。」

「そうでもないです。旅を始めたばかりで人との出会いを楽しみにしているくらいですから。」

苦笑しながらカリスは答える。
そうは見えないな、とトルパは驚いていた。

「まぁいい、そんなに大きくはないが村の案内をするよ。
あ、そうだ。これ小屋の鍵な。母さんが渡し忘れてたんだ。」

トルパはポケットから小屋の鍵を出してカリスに差し出す。
カリスはお礼を言って鍵を受け取り、早速小屋に鍵を閉めた。
そして2人は広場の方へ足を向けたのだった。

（なんだか話しやすくて良い人が多そうだ。・・・これなら今回の

依頼もやっていけるかな。）

カリスはこの村で学ぶ事になる。

最初の出会いだけじゃその人の事を知る事は出来ない・・と。

第1話（後書き）

読んで頂きありがとうございます。

明日に第2話投稿します。
その後は、ストックが有る限り2日に1話のペースで投稿します。

ストックがもし無くなったら、3～5日に1話のペースになります。

1週間の休載中、ご感想・ご指摘ありがとうございます。
ご指摘下さった箇所は一通り修正させて頂きました。

次回もよろしくお願い致します。ｍ（＿＿）ｍ

＊二章を書く上で、主人公・カリスの年齢が低すぎて、違和感バリバリになってしまうので、申し訳ありませんが修正させて頂きます。

一章の旅立つ時を１５才→１８才へ。
それに伴い、修行期間を１０ヶ月→３年と１０ヶ月へ。
一章の最初にカリスが登場した時、カリスの年齢を１３才→１４才へ

カリス自体のたった１０ヶ月であそこまで強くなるのもかなりの違和感でしたので、このようにさせて頂きます。
納得しにくい方もいるかもしれませんが、ご了承下さい。

第2話（前書き）

開いて頂きありがとうございます。

第1話の後書きでも書きましたが、旅立ちの際カリスの年齢を15才→18才と修正させて頂きます。

勝手ながらご了承下さい。

第2話

「へぇ、カリスはムール街出身なのかぁ。・・・え、それじゃあ２０日くらい前に起きた騒動の時大丈夫だったのか?!」

「ええ、街の南側は半壊状態で多少の怪我人は出ましたが、南門付近でストライダーは殲滅できて街の住民で亡くなった人も居ませんから。」

「本当か!・・・そうか、よかったぁ。」

グリズリー騒動もあってナイリス村にはムール街で起こったストライダー襲撃事件の情報は疎らにしか届いていないので、事件時にその場所に居たというカリスから話を聞いてトルパは安堵したのだ。

現在カリスは村の中をトルパに案内してもらいながらカリスの出身地であるムール街の話をしていた。

「それにしてもよくストライダーの集団を倒せるほどの冒険者が居たよな。３~４匹って訳でもなかったんだろ?」

「５０匹以上はいたかと。それに偶然Ｓランク以上の冒険者がいたので助かりました。」

「５０・・・そんなにか!しかもＳランクの冒険者?!何でそんな人がこんなところにいるんだ。Ｓランクと言ったら国にかかわる様なほどの人物じゃないか・・・。お忍び訪問か・・?」

自分の事やエリアの事は特に出さずストライダー襲撃事件のことを

話していった。

「Sランクってそんなにすごいんですか?今一分からないんですが。」

(姉さんもそういえば自分のランクを言った時胸張ってたけどそんなにすごいのかな・・。)

「おいおい・・、カリスも冒険者だろうに。Sランク冒険者からは国のお抱えになるほどの腕を持つものばかりだ。普通なら騎士が居るのにわざわざ冒険者を抱えるということは国にいる騎士よりも格段に強いと考えられる。まぁ国からすればそんな相手が国に刃を向けたら困るからお抱えするんだろうけどな。」

「へぇー・・まぁ騎士がどれくらい強いかとかもよく分からないから何とも言えないけれど・・。」

トルパの説明を聞いたカリスがやっぱり分からない、という返事をするとトルパは呆れたように肩をすくませて溜息を吐いた。

「まぁ、いいけどな・・。そんならカリスは何で冒険者なんかやってるんだ?強くなる為じゃないのか?」

「俺の場合はもちろん強くもなりたいけれど世界を見て周って色んな人と出会ってみたいんですよ。自分の知らない事ばかりだと思いますし。」

「ははっ、確かにな!旅するなら世界を見て周らないとな。しっかし強くなってギルドランク上げるのも男としてはそそられると思う

んだがなぁ。」

そう言って首を捻りつつブツブツとトルパは呟く。

「ランク上げなくても旅は出来ますから。ギルドに入ったのは身分証明みたいな物があると便利なのと、路金を稼ぐ為ですし。」

そんなもんか、とカリスに返事して案内を続けた。

ナイリス村の西、カリスが入ってきた村の出入り口へ着きトルパが門番に声を掛ける。

「ダルドさん！紹介するよ。ギルドに依頼していた警備するために来た冒険者のカリスだ。

ナイル街との道に出始めたグリズリーの討伐もした人だから腕は確かなはずだ。」

ダルドと呼ばれた門番はトルパからの説明を聞いて頷き、カリスに目を向ける。

カリス達がこちらに歩いてくるのを見ていたダルドは、先ほど熱弁を振るえた相手に満面の笑みを浮かべて待っていた。

「先ほども会ったがダルドだ。西門の番をしている。改めてよろしく、カリス。」

「き、今日からしばらくナイリス村でお世話になります。よろしくお願いします。」

そう言ってカリスは少し引き気味ながらもダルドと握手した。

「ダルドさんはこの村一番に腕が立つ人だ。ギルドにも登録してい

てCランクなんだぜ。」

「ふん、Cランクといっても下の下さ。グリズリーとかだと追い返すのがやっとだからなぁ。」

カリスはその話を聞きながらダルドの氣を確認しつつなるほど、と納得して頷いた。
カリスが街人や村人、冒険者の氣を見た場合、使えなくても腕が立つ人は何もしていない人よりも氣が多いように見受けられた。
微々たる差なので本当にそうか、と言われれば難しいところなのだがそういう傾向にあったのだ。
ダルドもトルパに比べて少し氣の量が多い気がするのだ。

「しかし複数のグリズリーを倒せるほどの腕ならかなり頼もしいな。約１０日間よろしく頼むよ。
それくらい様子見れればナイリス村周辺の脅威は無くなったと見ていいと思うからな。」

ダルドの説明に頷く事でカリスは返事をする。

「後で手合わせをお願いしたいところだ。」

笑いながらそう言ってダルドは手を振って自分の仕事に戻っていった。

「なかなか感じのいい人ですね。」

（話は長い人だけど・・。）

心の中で一言付け足しながら言う。

カリスは年が若いこともあって舐められるかとも思っていたが、そんな事は無く受け入れてくれていることが不思議に思いながらもうれしくあった。
それが表に出ていたのだろう、トルパはニヤニヤしながらカリスを見ていた。

「舐められるかもって思ったか？この村じゃそんなことは無いさ。魔物から受ける脅威の影響は身をもって知る機会が多いからな。Cランク以上で討伐依頼をこなしているのなら腕は信用されるさ。街の方なんかの人の多いところだと疑われるってこともあるかも知れないけどな。」

そうですか、と返事をして頷くカリスだった。
その後も村中をぶらぶらして警備依頼で来たことを知ってもらうために村人に挨拶して周る。
不審人物と勘違いされても困るからしっかり顔を覚えてもらうのだ。

村の中央で6人の子供達が遊んでおりその場所に行くと子供達の内、10才くらいの女の子の3人が走り寄って来てトルパの右腕、左腕、腰に抱きついて来た。

そして女の子達は目をキラキラと乙女の視線をトルパに向けて言い放った!!

「「「トルパお兄様!」」」

「おお、俺の可愛いお姫様達。今日も美人だぞ!」

「・・・・・。」

目の前で繰り広げられている光景を見たカリスは正直一歩引いた。
しかし褒められた女の子達はトルパの言葉に顔を真っ赤にして嬉しそうに照れている。

（いや・・これはちょっと犯罪な様な気が・・・。）

さわやかな好青年という印象を受けていたトルパがまさか幼女キラーだったのか、とカリスはちょっとショックを受けていた。

「トルパお兄様遊ぼう！前みたいにお医者さんごっこがしたい！私患者さんになるから！」

「「賛成！！」」

「ごめんな、今はお客さんに村の案内をしているからまた後で遊ぼう。その時はサービスして色々見てあげるから。色々とね・・。」

ええー！と、トルパの返事に不満を漏らす女の子達だったが、色々とサービスをしてくれるという言葉に嬉しさを隠しきれず目をトロンとさせつつ恥ずかしそうにしていた。

「絶対よ！トルパお兄様！！」

そう言って顔を赤らめたまま満面の笑顔で手を振って女の子達は他の子供達の元へ戻っていった。
トルパもそれを笑顔で手を振って見送る。
子供達がまた遊び始めたのを見守ってから、トルパは1歩どころか

2歩3歩引いているカリスに向き直り話しかけた。

「可愛いもんだろあの子達。いやーこの村に年齢含めて好みの子が居なくてさぁ、そこで俺は気づいた訳よ。それなら自分で好みの子を育てればいいんじゃないか・・・と!!」

ババーーン!!

と効果音がしそうなほど胸をそって言い放った!

（ダメだこいつ・・・早く何とかしないと・・・）

とカリスが思ったかは定かではない。

「そ、そうですか。まぁ、好みは人それぞれですからね。」

「おお!!分かってるじゃないかカリス!それに一夫多妻というのも禁止されている訳でも無いし。じゃなきゃ貴族なんて絶対俺は許せないね!」

貴族は2人以上の妻を自分の下に迎え入れる人が多い、とトルパは指摘しながら自分のやっている事を正当化した。

「ふふ、あの子達も後2・3年すれば結婚できる年だ。それまで色々調きょu・・・ゲフンゲフン・・・教え甲斐があるぜ。」

本音がダダ漏れであったが、カリスはあまり係わらない方が良いか、という結論に達し、気にしないことにした。

カリスも既に人数的に言うならば3人（1人ペット）が居る状態である。

強く人のことは言えなかった。（幼女に手を出してはいないが）

夕方になってトルパからウチに来るよう言われた為、村長の家に向かった。

「さてカリス君、歓迎しよう。ようこそナイリス村へ、乾杯！」

「「「「乾杯！」」」」

今は夕食時、村長の家の食卓でカリスを含む5人がテーブルを囲い杯を上げた。

カリスの他は村長のタロス、妻のトルル、長男のトルパに長女のトルクだ。

村長のタロスは５０代のダンディなおじ様で、村長をやっていても畑仕事などの肉体労働を率先してやっているからかガタイも良い。

村長として村をまとめているだけあってなかなかの男気のある人物だ。茶色い髪の毛に所々白くなっているのはご愛嬌だろう。

長女のトルクはカリスの１つ上で１９歳だそうだ。

背中まである茶色い髪を自然に流している。目はパッチリとしており顔立ちは兄に似ていて活発そうだ。

強調するほどではないが体型も出るところは出ている、といった具合か。

昼間は見かけなかったのは家の奥で母トルルの手伝いをしていたそうだ。

「夕食に招いて頂いてありがとうございます。」

乾杯して果実酒を舐める程度で口に運び、テーブルに戻してからカリスは頭を下げた。

「いやいや、そんなかしこまらなくて良いさ。複数のグリズリーを倒してもらったこちらとしては逆にお礼を言う立場だからね。さぁさぁ、食べてくれ。妻と娘が作る料理はどれも美味しいからな。」

落ち着いた態度で笑いながらタロスは顔ので左右に手を振った。
そうして食卓に着いている5人はテーブルに並ぶ料理に手を伸ばした。

「本当に君がグリズリーを倒したの?そんなに若いのに。」

そこでジッとカリスを見ていたトルクが声を掛ける。
疑っていると言うより、興味本意での言葉だろう、目がワクワクしていると物語っている。

「トルク、その言い様はカリスさんに失礼ですよ。」

「あっと、そうよね。ごめんなさい。私より若い子なのにそんな事が出来るなんてすごいじゃない。
やっぱり冒険者って強いのねぇ。」

トルルに窘められつつトルクはカリスに笑顔を向ける。

「ははっトルク、かなり機嫌がいいじゃないか。カリスに惚れたか?」

「はぁ・・・、あのね兄さん。人間そんな簡単に惚れるわけないで

しょうが！同年代くらいの人ってこの村に居ないから興味があるだけよ。」

兄の言葉に呆れながらトルクは言う。
目はトルパから逸らしていたが・・・。
カリスはどう答えたものかと苦笑していた。

「そうだなぁ同年代としたら俺くらいか、後は１０才前後と３０才前後だもんな。
そうだ！明日門番をしていたダルドさんと手合わせしてみないか？この村で一番剣を使える人でカリスの腕を疑うわけじゃないが是非見てみたいんだ。」

トルパは話を変えて本当に疑っている目ではなく、カリスの腕を見たいが為に言っていると分かる眼差しで申し出た。
しかしそこで少し前から何故か下を向いたまま、黙ってフルフルと身体を震わせていた父タロスが突然立ち上がり、目をクワっ！！っと見開いてカリスに言い放った！

「娘はやらんぞ！！！！！」

「「「「「・・・・・・。」」」」」

その瞬間和気藹々と話していた雰囲気が氷付いた。
しかしそこはさすがはタロスの妻、誰よりも素早く復帰する。

「あらあらまぁまぁこの人は。いきなり何を言っているんでしょうか。」

「え・・・いや、だってトルル。トルクが今カリスにラブラブ・・・ラブラブだとっ！。」

満面の笑みなはずのトルルから濃厚なオーラ（気迫）を感じ取りタロスは冷や汗をかきながら言う。

「誰もそんな死語なんて言っていないでしょう?ちょっとこっちでお話しましょうか。付いていらっしゃい。」

「ひっっ、ま・・待て、いや・・待ってください！！お願いし・・・アッーーー！！」

終止満面な笑みでトルルはタロスの首根っこを引っ掴み椅子から立つ事も許さず家の奥へ引きずって行き、姿が見えなくなったところでタロスの悲鳴が家の中に響き渡った。

「・・・えっと、ごめんなさいカリス。父さんって私のことになるといつもあんな感じなのよ。」

「あー・・・いや、すまん。今のは俺の失言だった。」

すごく気まずそうにトルパとトルクはカリスに謝まる。

トルクはさすがに恥ずかしかったのか顔が真っ赤だ。

「い・・いえ、なかなか賑やかな家族で良い・・・ですね？」

カリスは口元を引きつりながらも笑顔を作った。
最後が疑問系になってしまったのは致し方ないことだろう。

「と・・とりあえず手合わせの件は構いません。俺も色んな人と手合わせできれば良い経験になると思いますから。」

気を取り直してカリスは先ほどの話の返事をする。
トルパもそれに倣って雰囲気を変えるために気持ちを切り替えた。

「おっしゃ！じゃあ明日午前中にでもダルドさんの所行こうぜ。本人も手合わせしたいって言ってたしな。」

「あ！私も見たいから一緒に行くね。」

「ごめんなさいね、うちの子達が我がままを言ってしまって。」

いつの間にか食卓へ戻って来ていたトルルの言葉にカリスは首を振る。
戻ってきたトルルの肌はなぜかすごくツヤツヤしていた。
一体ナニをしたんだろうか・・。

「わざわざ依頼を受けて貰って来てくれているのになんだが、カリス君はどうしてこの依頼を受けてくれたんだい？
街にはもっと良い依頼も多いと思うんだが。」

家の奥から干からびた様な状態になりながらも何とか食卓に復帰したタロスは、食事も大体食べ終わり団欒をしている中、さっきの騒動を無かった事にしてカリスに質問した。
ちなみに夕食はカリスも美味しく頂けた様で1つの料理を食べるゴトに頷きながらゆっくりと食べた。
それを見ていたトルルとトルクは嬉しそうに微笑んでいた。

「俺は月見草っていう月の光を集めて光る花を咲かせる植物があるって聞いて一目見ようとこっちに来たんです。
依頼を受けたのは方向も同じだったので受けました。」

「なるほど、月見草かぁ。昔は月見草を見に色んな冒険者達が来た物だが、殆どがエルフィン族の管理下にある為に今じゃめっきり冒険者も来なくなったからなぁ。」

カリスの話しを聞いて相槌を打つトルパ。

「ナイリス山麓(ふもと)のくらいなら見れるんだけど、現に私達も採取して村の資金源にしているわけだし。質が落ちてほのかに光を放っているだけなのよね。兄さん案内してあげたら?」

「できれば是非お願いします。知り合いからも見ておくべきだと言われて楽しみにしていたので。」

「そうだな、じゃあ明日当たり行ってみるか。それまでに森に入る用意しておくよ。」

ありがとうございます。とカリスはお礼を言いながら頭を下げた。

夕食を食べ終わった後、色々と5人で話して夜も更けてきたのでカリスは小屋に戻る事にした。

「夕食ご馳走様でした。すごく美味しかったです。」

「そう言ってもらえると作った甲斐がありました。朝食と夕食はこちらで用意しますので明日の朝もいらしてくださいね。」

トルルの言葉に「はい。」とカリスは笑顔で返事する。

「それじゃあカリス君明日からも頼むよ。お休み。」

タロスの言葉に見送られ、カリスは村長の家から小屋に向かって歩き出す。

「この村は大丈夫なんだろうか・・・いろんな意味で。」

カリスはエリアが言っていたこの島は良い人が多いという話を思い出していた。

（確かに良い人ではあるんだろうけれど・・・。不安だ。）

昼間感じていた事を撤回しなければならないかどうか悩む。

一度小屋に戻ってから外に出てカリスは軽く鍛錬を始めた。身体の動き、バランスを氣を用いながらゆっくりと確認していく。

【英雄】の力で腕が鈍る事は無いが、より精密で無駄の無い動きを出来るように常に腕を磨いていくカリス。

その後3時間ほど続け、井戸から汲んできた水を使ってタオルで身

体を拭き、瞑想する事で氣の流れを整えてその日は眠りについた。

第2話（後書き）

読んで頂きありがとうございます。

次回から2日に1回更新です。

よろしくお願い致します。m（＿＿）m

第3話（前書き）

開いて頂きありがとうございます。

この話からダークな事柄がポツポツ出てきます。

過激な文も含まれますのでご注意下さい。

第3話

「う・・・んん、ちゅるる・・・ちゅぷ・・。」

暗い部屋の中で悩ましげな女性の声と水音が小さく響いている。

「うんん・・・ちゅぱ・・・ちゅ・・・。」

それは1つの大きなベッドに1人の男が腰掛けておりベッドの下、男の股の間に1人の女性が跪き、口で男のモノを咥えていた。

男は全裸、女性は全裸に所々皮のベルトで身体を拘束され、両の手もそのベルトで後ろに固定されていた。

男の容姿は金髪を肩口で切りそろえていており、肥満気味で腹が出ている40才中ば程の人間だ。細く釣りあがった目つきを今はいやらしくニヤ付き、跪いている女性に向けている。

女性の方はスッした鼻立ちに切れ長の目、薄いながらもぷっくらとした唇で顔のバランスも整っておりかなりの美女だ。

真紅に染まった背中まである髪を後ろで縛っていて、暗闇の中でも一層際立つ暗さを帯びている褐色肌。

一際大きく溢れんばかりな張りのある胸がベルトで縛られる事でさらに際立ち、腰の括れは胸が大きいことからかなり細く見える。実際に無駄な肉は腰については居ない。

お尻も胸同様男好きするほどにムッチリとした質量を持っており、こちらもベルトで縛られている分存在を強調している。肌も褐色ながら瑞々しさが分かり、見た目は20半ば程だろう。耳は横に細く伸びているところを見るとエルフの中でも少数なダークエルフだと伺える。

人間族以外は見た目で実年齢は判りにくいので本来はもっと上の年

なのかもしれないが。
首には青紫な淡い光を放つ刻印がびっしりとある首輪が付けられている。
そして息苦しくも男のモノを咥え、本来彼女の目は凛々しいのだが、今は悲しみに歪み涙にぬれていた。
全身に光沢のある液体が塗られており部屋の中全体に甘い香りが漂っていた。
女性は液体の作用で身体が疼くのか腰をもじもじさせている。

「ふん、もっと絡みつくようにできんのか。未だに言われた事も出来んとは。」

「ぶ・・んん!!・・ふぉ・・もうふぃはへごはいはへん（申し訳ございません）」

男は忌々しそうに女を頭を抑え付けて喉の奥まで突く。
女性は苦しそうにしながら男に謝った。

（うう・・気持ち悪い。こんな首輪さえ無ければ・・。）

「いい、続けろ・・。」

「ふぁい・・んん。ちゅぱ、ちゅるる。」

（いゃぁ・・。したくないのに・・逆らえない。）

男の言葉に従って女性はまた目を潤ませながら奉仕を再開した。
跪いている女性の名はミリア。Cランクの冒険者である。
ダークエルフというエルフ族の中でも少数しか存在しない種族だ。

時は数日遡る。ミリアは依頼をこなした帰り道、薄暗い街の外れを走っていた。
ギルドを出てからいつからか尾行されていたのに気が付き、撒くために路地の角を過ぎた後、走り出したのだ。

「まったく・・・しつこい！」

ミリアはCランクといえどもエルフ族である。身体能力は高めだ。
しかし全く追っ手をまくことが出来ずに、街外れまで来る事になってしまった。

「どこかに隠れなければ・・・。っあそこに！」

薄暗い中でもさらに奥待ったところのボロ家にミリアは滑り込み、闇の精霊を用い、周囲より暗くすることで自分の存在を分からなくする。
その後、ミリアを追う足音が幾つか聞こえてくる。

（これは・・・2人・・いえ、3人ね。ここで旨く撒ければ・・・。）

ジッと身を隠しながらミリアは考える。

追っての3人は3手に分かれてバラバラに走っていった。

（ふぅ・・。もう少ししたら戻りましょう・・。）

ミリアには自分が追われている訳は薄々だが感じている。
希少なダークエルフだからだ。エルフ族の中でもダークエルフは身体能力は高く、賢こく冷静だ。
付き従わせる事が出来れば大きな力にもなるだろう。
が、本来エルフは人に従う事などめったに無い。
従わせるとなると自ずと手段は限られる。そう、隷属させるのだ。
『隷従の首輪』を付けられて契約させられると、契約した人を主として従わなければならなくなるのだ。

『隷従の首輪』には3つの種類があり、一般的に使われるのが青紫の刻印された首輪で、主の命令を従わせ、逆らえなくするもの。『隷従の首輪・青』

2つ目は赤紫の刻印をされている首輪で従わせるのは同じだが、首輪を付けられた人物は物事を考えられなくして人形のようにしてしまう物。『隷従の首輪・赤』

3つ目は黒紫の刻印された首輪で、従わせるのはこちらも同じだが、どんなに嫌な主だったとしても、首輪を付けられると次第に主のことを1番に考え、主の為に行動するようになっていく物。強制的に好意を植付けるともいえる。『隷従の首輪・黒』

『隷属の首輪・黒』だけは首輪を解除したとしても心を書き換えられてしまうために、以後も自ら隷属してしまう強力な物だ。
又、心の書き換えが終了すると、力を失い唯の首輪になる。
効果は絶大だが、使えるのは首輪1つに付き1人だ。

この為『隷属の首輪・黒』は闇市でも中々世に出回らない。
出回ったとしても豪邸が建てられるほどの額が付くのだ。

どの首輪も着けている者から微々たる量だが、魔力を奪う。
正規の外し方をせず魔力供給が損なわれた場合、首輪をしていた者に呪いが掛かる様になっている。
やがてその呪いは心を侵食し、死に追いやるのだ。

（そろそろいいかしら・・。）

ガシッ、ドゴン！！！

「カハッ！！うぐぐっ。」

周囲を伺いつつ隠れた場所からミリアは出ようとしたところで後ろから首を捕まれ引きずり倒され頭を強打する。

「ふん、そんなんで隠れたつもりだったのか？」

「う・・うう・・ど・・どうして・・？」

ミリアを組み敷く男の声を聞いて思わず呟く。
仮にもエルフ。ミリアは気配を消していたのに気づかれたことに戸惑った。

「闇魔法を使って気配を消したところでお前の匂いは直ぐに分かる。」

男はミリアの首をつかんだ腕をそのまま目の高さまで持ち上げる。
ミリアは空中で吊るされる状態になりながらも相手を見て、なぜ自分が見つかったのかを理解した。

「ぐ・・ぐぐ、狼人・・・獣人族・・！！」

「メスの匂いをそれだけプンプンさせていれば１ｋｍ離れても分かるさ。」

つまらなそうにミリアを見て男は言った。
その男の容姿は１９０ｃｍもあるかと言うほど大柄で全身狼毛に覆われている。
顔も狼そのものだ。獣人族は女性の場合は人間に近い形状をしているが、男性の場合は獣よりの形状をしている。
何とか男の手から逃げようとミリアは抵抗するが男の手はびくともせず、しだいにミリアの抵抗は弱まっていく。

「クライアントの要望でな、エルフをご所望なんだとよ。男好きする身体でダークエルフときた。
なかなかの獲物を捕らえられたな。」

そうしているうちに他の追っても集まってくる足音を聞きながらミリアは意識を失った。
次に目が覚めた時には全裸にベルトで身体を縛られ、首には『隷従の首輪・青』が付けられている状態でベッドに寝かされていた。
身体には頭以外に媚薬が塗られ、身体は火照り疼いている。

そして目の前の男の言う事に逆らえず、奉仕することを強制されていた。

しばらくすると部屋の扉がノックされ、男の声が聞こえた。

「サタリア卿いるかね。」

その声にサタリア卿と呼ばれた男が短く入れ、と指示する。
扉を開けて入ってきたのは茶色のマントで全身を覆ったガタイの良い男だ。
入ってきた男は部屋の匂いに一瞬目元を歪ませるが直ぐに表情を戻す。

「やっと来たか。連絡してからどれだけ待たせるのだ。ヴァラズ」

「それは申し訳有りませんね。こちらも色々と忙しいもので。」

足元に跪くミリアに奉仕を続けるように目で指示し、サタリア卿と呼ばれた男は入ってきた男に不機嫌さを隠さず言い放つ。
ヴァラズと呼ばれた男はサラリア卿の下に跪いているミリアにチラっと目を向け、低くくぐもった声で受け流す。
その声の主はミリアを捕まえた人物と同じ声だったが、ミリアには声を聞いている余裕は無かった。

「先に伝えた件は問題無いな？侵入にはこの女を使う。」

「うぐっ・・・んん・・。」

またもや喉の奥まで突かれてミリアは苦しくて呻く。

「まぁそれなら滞り無くできるでしょうな。こちらも例のモノを5体導入する予定だ。あれを使わなければさすがの我々も唯では済まんだろうからな。」

「やり方は任せる。この女も好きに使って良いが、・・・壊すなよ。今回の要だ。」

鋭い目つきをヴァラズに向けてサタリア卿は言った。

「要なのは重々承知している。精々楽しませてもらいますよ。」

「一通りの準備が出来たら決行だ。言われずとも分かっているだろうが・・・。」

「もちろん誰にも悟られず、やって見せましょう。」

サタリア卿の視線を受け流して答えた後、ヴァラズは部屋を出て行った。

「ふん、野良犬が・・。」

出て行ったヴァラズに対して悪態をついた後、ミリアの頭を両手で押さえて逃げられない様にする。

「そろそろ出すから溢さず飲み下せ。」

そう言いミリアの口の中に濃く、熱いものを放った。

「んん！！んくっんくっ・・んんん・・っけほっけほ、う・・うう。」

（うう・・ニガイ・・こんなにもおぞましいものを飲ませるなんて・・。）

ミリアは口や喉に絡みつく液体を何とか飲み込み咳き込んだ。

口の中で唾液と混ざって濁った液が垂れて、卑猥に胸元を伝って落ちていく。

相当辛かったのかミリアは息も荒く涙を流した。

その後、ベッドの下に跪いていたミリアをベッドの上に抱え上げ、四つんばいにさせる。

ミリアは後ろで両の手をベルトで縛られている為に豊満な胸はベッドで形を崩して広がり、肉付きの良いお尻を突き上げている格好になった。

「う・・・くっううう・・・あ、あああ」

（あ、アソコが熱い。ダメ！！我慢、我慢するのよ・・。）

ミリアは悔しそうにしながらも逆らえず目に涙を貯めながらも疼く下腹部に、腰を揺らす。

「そんなにほしいのか。まるで発情したメスだな・・・。」

そうヴァラズは言いながらミリアの洪水の様に足元まで伝う体液を流している下腹部を触れるか触れないかの位置で撫で上げた。

「自分からおねだりすればくれてやらんでもないが？」

「そ・・そんな・・・こと・・。」

（媚薬のせいで身体が疼いてまう・・。嫌なのに！！ああっっ。）

「素直になれば良いものを・・・。」

下腹部に息を吹きかけながらサタリア卿は声を出して焦らす。

（ああ・・、も・・もう我慢出来ない！！）

「ひっ・・・あああ・・・、く・・・・ううう・・・お、お願いします。ど・・どうか私の――――――――。」

「ふふん、はじめからそうしていれば良いものを。」

ミリアは身体の芯から疼くような感覚に我慢できなくなりサタリア卿に懇願する言葉を口にする。

サタリア卿は気分を高揚させて自分の下腹部をミリアに当てがる。

そうしてミリアは夜遅くまでサタリア卿に全身を弄ばれていった。

「それで、予定通り準備出来次第決行ですかい？」

「ああ、準備急がせろ。万が一っていうこともあるからな。」

（協力者もいるから大丈夫だとは思うがな・・。）

ヴァラズはサタリア卿の居る場所から離れ、隠れ家である酒場の地下で部下と話していた。

「船と例の5体は用意できてまさぁ。後は首輪がどれだけ準備できるかです。
今回はデカイ山、出来るだけの数をそろえて見せますよ。」

「くれぐれも外に漏れぬようにな。」

へぃ、と部下は返事をして地下から出て行った。

「・・・まったく。場合によっては種族間での戦争が始まるな。」

1人残った地下でヴァラズは暗く笑うのだった。

これは――――――

エリアとカリスがムール街でストライダーの襲撃を撃退した日

ムール街がある島とセイラル大陸を繋ぐ、アルストロメリア領土のアルト港のあるアルート街でのお話。

第3話（後書き）

読んで頂きありがとうございます。

次回もよろしくお願い致します。m（＿＿）m

第４話（前書き）

開いて頂きありがとうございます。

第４話

――――――時間を遡って、始まりはアルト港の視察をしていたサタリア・バルド子爵が１人の女性を見つけた事だった。

サタリア卿はアルート街を納める伯爵の補佐としてアルート街にあるアルト港に屋敷を構えている。
セイラル大陸アルストロメリア王国領土の一部、アルート街は大きく、アルト港はその一部でしかないが、アルストロメリア王国領土の玄関口でもある為、多くの人が行きかい、道沿いには出店もあることから盛大ににぎわっている。
それは人間族以外もエルフ族やドワーフ族、獣人族らが多く見受けられた。

サタリア卿はアルト港を取り仕切っている貴族だ。
彼は１０日に一度行うことにしている港の視察を馬車に揺られながら行っていた。
港の現状を知るための視察、というのは表向きの名目で実際は自分好みの女性を品定めする為に行っているのだ。
前回の視察では港から裏通りに入ったところにある闇市場で幼い獣人の女の子をペットとして買ったが、まだ契約が出来るほど成長しておらず、今ではストレスの捌け口に甚振っていた。

奴隷を持つのは法で禁止はされていない。
が、同じ種族間ならばいざ知らず、別種族での奴隷となると種族間の仲に亀裂を生むこともある。特に隷属する側が無理やりされている場合とかだ。
お金が無くて生きていけず奴隷に、戦争で負けた側が奴隷に、等なら大事にはならない。

それは生きて行く為の働き場として、命を掛けた行いとみなされていた。

しかし世の中には深い闇がある。
道端で子供や女性をさらって、場合によっは村などを襲って村人を奴隷とするのだ。
その場合は大抵闇市場で捌かれる。もちろん人間族に比べて他種族は多種多様な為、値段は跳ね上がる。
だからこそ、金ほしさに盗賊行為はなくなることは無かった。

「まったく・・最近はいいのがいないな。」

馬車に揺られながら市場を見渡す。
闇市でも奴隷は手に入るが、港はこすぶる人が多い。特に冒険者が。
彼、彼女らが1・2人居なくなったとしても誰も気づきはしない。

「ふん、まぁ今は平時ですからな。祭りなんかが近ければまた違いましょうが。」

サタリア卿と共に腕を組みながら馬車に揺られている大柄なマントを被った男がくぐもった声で答えた。
獣人族の狼人でヴァラズだ。

「お前のところでもいいのは入ってないのか。」

「最近はとんと変わらんな。手当たりしだい手を出せばそうでもないが、それではこちらが生きて行けん。」

闇での商売が有るということはそれを取り仕切る者もいる。
闇を占めているのは闇ギルドだ。

闇ギルドは冒険者ギルドとは違い、表には出ない。
分かりやすく言うと犯罪者ギルドなのだ。
窃盗から暗殺、法では禁止されている事を行うギルドである。
もちろん各国は闇ギルドを認めては居ない。
しかしどの国にも裏を持つ人物はいる。
それは国を動かす王族しかり、貴族しかり、彼らも一部では手を出している為に裏では国から保護され、存在していた。
表に出ないので冒険者ギルドのような登録は無い。
闇ギルドのメンバーは主に犯罪者か孤児を訓練して育てて使えるようにした人材がほとんどだ。

ヴァラズはアルト港で闇ギルドのギルドマスターの役割をしている人物である。

「ふん、そんなこと・・・ん?おい、あれは・・。」

「ん?何か見つけたか?・・・ほう、あれはエルフィン族か。珍しいな。」

表市場でマントを羽織った1人のエルフィン族の女性が歩いていたのだ。
旅慣れているのだろう、周囲の人々の視線を集めながらも気にせずにいる。

「なんと、あそこまで美しいモノなのか!話しで聞く以上ではないか!あの容姿なら一国の姫と言われても通じるだろう・・。」

「各種族の中でも突出して整った顔立ちをしているそうだからな。
俺には理解できないが・・・。
性格も温厚で基本的に争いを好かないらしい。まぁ、メスとして機

能するなら俺は構わんよ。」

「これだから獣人族は・・。まぁいい、お前の好みなど聞いてはおらん。
あれを何とかモノにできんものか・・。」

馬車の中からサタリア卿は目を血走らせてエルフィン族の女性を睨みつけていた。

「まず・・無理でしょうな。エルフィン族は温厚だが弱い訳ではない。
寧ろ種族の中でも上位に入るほどの能力を持っている。
旅をしている変わり者ならなお更だ。かなりの腕だろう。」

「む・・やってみなければ分からんではないか!」

否定的なことを言われたサタリア卿はヴァラズに唾を飛ばしながらくってかかる。
自分の思い通りにすることが当たり前だと言う欲望の塊な考えが目に見えるようだ。
だがヴァラズはそれを指摘したりはせず、現状でのことを話していく。

「まぁ全く無理と言う話ではない。が、今は無理だ。あれを捕まえるには相応の準備が必要になる。」

「それではあの女に逃げられてしまうではないか!冒険者なんぞ直ぐに移動してしまうぞ!」

「でしょうな・・。・・・なら、居ると分かっている場所を襲えば

良い。」

ヴァラズはしばらく考えた後、何かを思いついたのかニヤリ、と牙の生えた口を歪ませて言い出した。

「居ると分かっている場所だと・・？そのような場所など・・・まさか！」

「しっかり準備すれば可能でしょう。問題があるとすればその規模だが・・。まぁこちらも対応は打てる。」

ヴァリスの言葉に思い当たる事があったのかサタリア卿は驚きを示す。

「しかしあそこは・・。」

「ふん、そんなモノばれなければどうとでもなる。今までのように。その為の我々でしょう。」

ヴァラズは悪魔の囁きとも言えることをサタリア卿に吹き込む。サタリア卿はすでにエルフィン族の美貌に心酔してどうしても手に入れたくて悩んだ後、決断した。

「いいだろう・・・本当にやれるんだな?失敗は許されんぞ。」

「それはいつもの事。あの里を攻めるとなると必要なモノも多い。準備期間は長く取らせてもらう。」

（ククク・・。公になれば種族間の戦争になることが思い浮かばんのか。それともこの国には英雄が居るから大丈夫だと思っているのか。

・・・まぁ実際は何も考えてなんか居ないのだろうが・・。）

ヴァラズとしてはアルト港で活動しているが、何かあれば移動してしまえば良いだけである。それにエルフィン族を奴隷にする事が出来ればかなりの額を稼ぐ事が出来のだ。悪い話ではない。

「構わん。それとあの美貌ならば『隷従の首輪・青』だけではもったいないな・・。
『隷従の首輪・黒』を用意しろ。金はいくらかかっても構わん。」

「ほう。大きく出たな・・。まぁいい、用意しよう。しかしその分準備期間は延びるぞ。」

「分かっている。折角の仕入れだ。準備を怠って失敗しました、じゃ話しにならんからな。
『隷従の首輪・青』もできるだけ用意しておけよ。」

「ああ、それとエルフ族が1人必要になるだろうからそれも用意しておこう。結界を破れなくては攻めるも何もないからな。」

「任せる。」

そうしてヴァラズは路地の角で馬車から降りて路地裏へと消えて行き、その姿を見もせずサタルア卿は港の視察を再開した。

欲にまみれて自分の事しか考えられない貴族の行いが後の騒動を引き起こした。

時と場所を戻りナイリス村。
トルパとトルク、それと村の子供達に囲まれながらカリスはダルドと対峙していた。
今は眩しい太陽の下、昼時を終えてダルドとの手合わせをするのだ。
集まった子供達もこんな小さな村では手合わせを見るのはお祭りなのだろう、どっちが勝つかしきりに言い合い騒いでいる。
カリスとダルドの獲物は木剣だ。ダルドは正眼に構え、カリスは持った剣をそのままぶら下げて力を抜いた自然な姿勢だ。

「さすがカリス、全く気負ってねぇな。まぁダルドさんもいつも通りに見えるが目がマジだ。」

「どっちが勝つかな?ダルドさんの強さは知っているつもりだけど、グリズリー5匹を1人で相手しちゃうほどだもんね。」

ギャラリーはワクワクしながら今か今かと胸を躍らせていた。

「では、行かせて貰うぞ!」

カリスと対峙して自分が放つ気迫を受け流されている事を見て取ったダルドは、これは中々にいい鍛錬になりそうだ、と内心笑いながらもそんな相手と対峙できる事を喜んでいた。
仮にもCランク冒険者である。威嚇することくらいはダルドにも出来る。

そしてダルドはカリスに向かって踏み込んでいった。
カリスはダルドの攻撃を武器を使って次々に襲ってくる攻撃を余裕

を持っていなす。
足捌きもゆっくりとしたもので周りで見ていたギャラリーは、ダルドに比べてカリスの動きはスロモーションに感じて居たほどだ。
それなのに素早く動いているダルドの攻撃はカリスに当たらず流されていく。

（おいおい、こちらの攻撃全て見切られているのか・・！）

ダルドはカリスの神業に瞠目しながらも責め続ける。
2人を見ていた子供達にはダルドが押しているように見えるのかしきりに声を張り上げている。
その中にはカリスを応援するものもあった。

「な、なんだか良く分からないけど、ダルドさんの攻撃はカリスに当たっているわけではないの？」

「ああ、当たってはいない。全部カリスに防がれている。
それでいてカリスは余裕そうだ。」

頻繁に動く2人を見てあまり事態を認識出来なかったトルクがトルパに聞いた。
木剣のぶつかる音が先ほどから響いていて何度も攻撃が当たっているような印象を与えていたのだ。
ダルドは息が続くまで攻撃を繰り返していたが、息を整える為に一度引いてカリスと再度対峙した。

「さ、さすがだな、グリズリーを倒すというのは伊達ではないようだ。まさか全ていなされるなんてな。
それに動きに無駄が全然ないから隙を突こうにも見当たらん。」

汗を流しながらカリスと打ち合ったことで思った事をダルドは言った。

「ありがとうございます。生きる為に必死に身に着けましたから。」

カリスの返事にふっ、と笑ってダルドは口元をほころばせた。
全く持ってダルドを寄せ付けない強さを持ちながらも本人は全く鼻に掛けず、同じ目線で対等に話すカリスにダルドはカリスという人物の成りを実感した。
冒険者でこれほどの若さで他者を寄せ付けない腕があれば天狗になってもおかしくは無い。
しかしそんな様子はダルドには見受けられなかったのだ。

「それじゃあカリス、こちらの実力も分かっただろう。君の攻めを見せてもらおうか。」

対峙して息が整った後、ダルドはカリスに今度は君の番だ、と言葉を投げた。
カリスはそれに頷き、ダルドにでもギリギリ対応できる速度と力で今度は打ち込んだ。

「ぐっ？！」

思った以上の1撃の速さと力にダルドは押し負けながら驚愕した。
そしてダルドが攻撃を受け止めたと見た瞬間には次の攻撃を仕掛けており、ダルドはカリスの攻撃を受け止める事に全力で対応する。
となれば慌てて対応している為隙もできる。カリスは速さを1段階上げてその隙を縫うように心臓の上へと木剣を押し当てるところで手を止めた。

「く・・っ、参った！」

カリスの攻めを見ていた子供達は実際どのような動きだったのかは理解していなかったが、その無駄の無い動きはあたかも舞を踊っているようにも見えて歓声を上げていた。

「す・・すごいな、これほどとは。俺だったら最初の1撃で吹き飛ばされていそうだ。」

「動きがすっごい綺麗・・・。まるで踊っているみたいだったわ・・。あ！兄さんだったら全く相手にならないよね。」

見とれていた2人はカリスとダルドが止まったことで言葉をもらした。今までカリスの動きを息を止めて見ていたようで大きく息を吐いた。

「かなりのモノだなカリス、俺なんかじゃ全然相手にならない。まだまだ余裕もあったようだしな、ありがとう。」

カリスが木剣を下ろしてからダルドは全身汗を掻き息を荒げながらカリスに話す。

「ダルドさんも良い動きしてました。俺はあまり色んな人と手合わせをした事がなかったのでとても参考になりましたよ。ありがとうございます。」

汗も掻いた風でなく、息も全く乱れずカリスが返事したのを見てダルドは苦笑した。

微笑みながらの言葉だったが、その目は嘘を言っているようでもなかったのでダルドは素直に聞いていた。

「お疲れ様、ダルドさんにカリス。かっこよかったよ！まるで踊っているみたいに綺麗な動きだったし！」

そんなカリスとダルドに近づいて話しかけるトルク。
他の皆もワイワイと2人に近づいて行く。
子供達ははしゃぎながらカリスに飛びついて行った。

「んなっっ！！」

飛びついて行った子供達の中にトルパの事をお兄様と慕っている子達も混ざっているのを見てトルパは愕然とした！！
今回の手合わせでカリスは村の子供達の心をつかんだ様だ。
逆にトルパの心を我知らず踏みにじっていた！

子供達は満面の笑顔でしきりにすげー！とかかっこいい！とかを連呼してカリスに群がる。
カリスも微笑みながら子供達の頭を撫でていった。

「ありがとうトルクさん。そう言われたのは初めてだよ。」

トルクにも笑顔でカリスは応答した。
その笑顔を向けられたトルクは頬を少し赤らめて照れている。
目の前で妹が照れているのを見ていつもなら妹のトルクをからかうはずのトルパは、ショックから立ち直れず金魚の如く口をパクパクとさせて暫く固まっていたのだった。

第４話（後書き）

読んで頂きありがとうございます。

次回もよろしくお願い致します。ｍ（＿＿）ｍ

第5話（前書き）

開いて頂きありがとうございます。

第5話

「良いものを見せてもらったよカリス。あれならグリズリーを討伐したのも頷ける。」

「本当ね！ダルドさんはあんなに息切らせていたのにカリスは平然としているんだもの。」

カリスとダルドとの手合わせを終えた後、トルパはショックが大きすぎて脳が拒否したのか、子供達がカリスに飛びついた事は記憶から抹消されたようだ。
村中を歩きながらトルパとトルクはしきりにカリスを持ち上げる。
そんな2人にカリスは苦笑しながらも、こういうのは新鮮だと内心楽しんでいた。

「それじゃあ俺はそろそろ夜の準備を始めるわ。カリス、夕食後に月見草探索に行こう。」

「今夜ですね。楽しみにしています。」

「それじゃあ私も母さんの手伝いに戻るわ。またね、カリス。」

村長の家の前まで来たところで兄妹はカリスに言ってから家の中に入っていった。
カリスとしても特にする事があるわけでも無いが、一応警備として村に滞在しているので村中を巡回することにした。

カリスの向かった先は村の東側にある畑だ。
そこには村の男気溢れる人たちが太陽の日差しの中作物と戯れてい

た。

「おや、巡回かね。ご苦労様。」

「こんにちわ。これは・・イモですか？」

頭にタオルを巻いて畑仕事をしている村人がカリスに気が付き声をかけた。

昨日の今日だが、村の人口も少ない事から警備依頼で来たカリスのことは既に周知のことなのだろう。

「そうそう、イモは長持ちするからね。こういう村にはあると便利なのさ。まぁ他にもトマトや白菜などの野菜も多く作っているけどね。」

笑顔で説明してくれた。

村人が言ったとおりこの畑では所狭しと色んな野菜が数多く作られている。

そして畑の隅っこには小さいながらも家畜所がもうけられていた。

中には鶏や豚が居るようだ。

「この村近辺までくれば東側はエルフィン族が居るから魔物の数も減って狩りもし安くなるんだが、

全く魔物が居ない訳ではないからね。安全に肉を食べられるにこした事は無いのさ。」

家畜所の方に目を向けているとそう説明してくれた。

「エルフィン族かぁ。この村に来たりはしないんですか？」

「とぉんでもない！彼らは結界から出る事なんて稀さ。それこそ何らかの事が起きなければそんな事はないよ。」

村人の話を聞くにエルフィン族はかなり内向的なのだなと思うカリスだった。

カリスは少し畑仕事を手伝ったりして時間を潰す。

そんなカリスを見ていた他の村人達からも声を掛けられ親しくなっていった。

夕方になってカリスは村長の家にお邪魔して食卓に着いた。

「いやぁカリス君昼間は畑仕事を手伝ってくれたそうじゃないか。ありがとう、皆もうれしそうにしていたよ。

今まで警備で来てくれた冒険者はそういうことはしないし、する必要も無かったんだがね。

それでも手伝ってくれると仲間意識も出来るから良いことだ。」

「自分も畑仕事というのはした事無かったので良い経験になりました。それと食べ物を作るというのも実感できましたから。」

昼間の事を村人から聞いた村長こと タロスは満面の笑顔でカリスにお礼をいう。

あの後もカリスは夕方まで手伝っていた。

森で暮らしていた時は森の中になっている植物を採ったり狩りをしたりというくらいで土を耕すなど今まですることが無かったことなので新鮮だったのだ。

「カリスったらダルドさんとの手合わせもしたのだけどすごい腕だったわ！まるで踊っているかのように。

ダルドさんなんて手も足もでなかったんだから！」

村長の娘のトルクも少し興奮気味にタロスへ昼間、カリスとダルドが手合わせした事を話しする。
未だに興奮が収まらないようだ。
兄のトルパもそれに加わる。

「あれだけの力があるならギルドランクもトントン拍子で上がっていくんじゃないか。」

「なんと・・。ダルドを寄せ付けぬか！この村一番の腕なんだがなぁ。
いやはやカリス君にそこまでの腕が有るならずっとこの村に居てほしいくらいだ。
だが、娘にｔ・・ゴホン！・・・トルル、お茶を入れていただけますか。」

夕食を摂りながらさりげなく村へ勧誘し出すタロス。
その後に続けようとした言葉は濃厚なオーラを隣から感じ取り、タロスは終えた。
そんなタロスの話をカリスは苦笑しながら聞いていた。

「本当に！カリスなら大歓迎よ！きっと皆受け入れてくれるわ！」

「ふふん、トルクの場合はそれだけじゃないんじゃねぇの？」

頬を赤らめながらも父に賛成するトルクに兄のトルパはニヤニヤしながら思わせぶりな事を言った。

「な・・何言ってるのよ兄さん！カリスが人気有るのは本当の事でしょ！」

「ほらほら、カリス君も困ってるじゃない。それに食事中なのだからもう少し落ち着きなさい。」

トルパの言い様に狼狽しながら叫んだトルクに母であるトルルに窘められた。

「うぐ・・・。ま・・まぁカリスが村に滞在するのは私は賛成だってだけよ。」

「あらあらまぁまぁ。まだナイリス村に来て2日だというのにもう村人達の心を掴んでしまうなんて。トルクもウカウカしてられないわね？」

「ちょっと！・・もうっ。」

トルルの言葉にトルクは頬を赤らめながらそっぽを向いた。
父タロスのこめかみには血管が浮き出ていたが、隣に座るトルルに射すくめられて大人しくしている。

「本当にこの村は暖かくて、賑やかで良いところですね。」

（まぁ・・自分が住むとなったら大変かもしれないけれど・・・。）

トルクに微笑んでからカリスはタロスに言った。
カリスも旅を始めたばかり。出発場所からそう離れれても居ないところで旅を終えるつもりは毛頭ない。
もちろんタロスはそれを分かってて言っているのであろう。
娘の好意を向ける相手が現れ、しかもそれがカリスのような出来た

人物ならば応援したいと父親ながら思うところだ。
が、しかし。しかしだ。たとえ相手が良く出来た人物だとしても我が娘を嫁がせるというのには我慢ならないのだ。

カリスは依頼が完了したら旅に出る。そうすれトルクは悲しむか旅に付いていくかしてしまうだろう。
娘の悲しむ姿を見たくは無いし、もし旅についていくとしてもカリスの足手まといになるのは明らかだ。
トルクが旅に出たら自分も悲しい。いや、自分が悲しい！！（ここ大事）
そんな思いを抱きながらタロスは自分の娘をどうしたものかと眉間にシワを寄せて見つめていた。

「それじゃあそろそろいくぞカリス。」

夕食も終わり食後のお茶でを飲みながら5人で団欒して一息ついたところでトルパが席を立ちながらカリスに言った。

「うむ、日も沈んでいるしそろそろよかろう。気をつけて行って来なさい。
まぁカリス君が居れば大丈夫だと思うがな。」

カリスも頷いて立ち上がった時にタロスは2人を送り出す言葉を言った。

「ううう、私も行きたかったなぁ。・・・ダメ？」

「今日は遠慮しておけ。それに男同士の話しもしたいしな！」

トルクもカリス達に付いて行きたそうにしていたが、夕食の片付けやらなんやらで母の手伝いをすることもあり家に残るのだが、それでもまだ諦めきれずに聞いてきた。
カリスとしてはどちらでも問題は無かったのだが、トルパがカリスと2人で話したいと含ませて断った。

「しっかり家事が出来ないと良いお嫁さんになれませんよ。貴女はこっちです。」

「え！あ、ちょっと母さん！」

トルクは母トルルに腕を引っ張られて奥へと連行されていった。
残った男3人はその光景を見て笑っていた。
トルパはトルクの思いを察して、タロスはカリスに付いていかずに済んでの安堵からだが。
トルパとカリスは並んで村長の家を出てナイリス山方面、村の東に向かって足を進める。
トルパは畑前の井戸で水筒に水を汲んでレザーバッグにしまった。
カリスの格好はいつもの旅の服に所どころに皮のプロテクター、腰の後ろにはショートソードだ。その上からマントを被っている。
トルパの格好はカリスに似た旅のしやすい服に茶色のマントを被っていて皮のブーツを履いている。
山に入るわけだが、大体が森の中を進むので身体を保護できる格好だ。

「カリスは夜の森の中は大丈夫か？」

これから夜の森の中に入るに当たってトルパはカリスに注意が必要か尋ねる。

普通、Cランクあたりの冒険者なら魔物も少ない夜の森はランプがあれば問題無く移動できるが、
カリスの若さから気を使ってトルパは聞いたのだ。

「ええ、森育ちなのでランプが無くても大丈夫なくらいです。」

カリスの良い返事にトルパは微笑みながら頷いて足を進めた。
東の簡易門に居る夜番に挨拶して月見草を見に行く事を伝えて通してもらう。
特に訝しがらずに通してくれたと言う事は村人もたまに採取などで足を運ぶからだろうか。

森には舗装された道は無いが、人2人くらい通れるくらいの幅の道があるそうだ。
その道をトルパが少し先を行く感じに歩いていく。

「この森を進んで直ぐに山に入るんだが、少し入った所から月見草は自生しているんだ。」

トルパは歩きながら付いてくるカリスに大体の場所を説明する。
辺りは月明かりだけでは森の中までは照らす事は出来ずに真っ暗でトルパが持っているランプの周り5mくらいしか照らされて居ない。
それでもトルパは慣れたものでずんずん進んでいった。
カリスも目には見えていないが周りに気を配って木の位置、周囲に生息している生き物を感じながら付いていく。

「俺達が行けるのはナイリス山の西側だけでそれ以外は結界に覆われていていけないようになってる。
話ではその結界内に多くの月見草があるってことらしいけれど、どうなんだろうな。」

その結界と言うのが前から話に出て着ているエルフィン族の里の結界だろうな、とカリスは納得しながらトルパの話しを聞く。

「それでも結界外でも月見草はあるようですし、物自体変わらないのでは？」

「ま、そうなんだよな。同じ山の下にあるわけだし話しも実際見た人が言っている訳ではないから。
隣の芝生は青く見えるってことさ。」

言いながらトルパは笑い飛ばした。
人は欲深き存在だ。自分の手の出せないところにあれがある、これがある、といわれれば自分の物より良い物と思えてしまう人も出てくるだろう。

「そっかぁ・・。ちょっと悲しいですが、そういうものなのかもしれませんね。」

カリスの相槌にそう言う事、とトルパは頷いた。
村から1時間ほど歩いて山を上っていると、カリスは周囲に微かにだがポツポツと魔力（マナ）を放つモノがあることに気が付いた。
同じタイミングでトルパはカリスに振り返り口を開く。

「ここら辺からだな。周囲を見れば見つけられるはずだ。まぁ、ほんのり光を放つ程度だから近づかないと分からないが。」

「ん・・なら間違い無いかな・・・。多分こっちです。」

「お、おいどうしたんだ？」

トルパの話しを聞いたカリスは頷いて直ぐに道からそれて光の殆ど届いていない森へと入っていったのを見て、トルパは慌てて着いて行った。

カリスは感じ取れる魔力（マナ）の方に向かって行き、目的の場所まで足を進めるとそこには高さ２０ｃｍほどの、話で聞いていた通り淡い白い光を放つ４枚の花びらの花が咲いていた。

「で、どうなのよトルク。」

「え？何が？」

「何が？じゃないでしょう！カリスの事が気になるのでしょう？押し倒す覚悟は出来たの？」

「ちょっ！！な、何言い出すのよ母さん！！」

母トルルと娘トルクは台所で食器を片付けながら話しをしていた。

トルルの言葉に手を滑らせてトルクは拭いている食器を落としそうになったのを何とか持ち直す。

「あら、まったく・・そんなだと嫁き送れるわよ。私の時なんか12才の時に初めて父さんと出会ったその日に決めたのよ?」

「~~~~!!!。」

トルルは右手をグーにして指を少し絡ませた、変わったジェスチャーをしてトルクに言う。

母の爆弾発言に言葉も無くトルクは顔を真っ赤にした。

「まったくこれだから今の若い子は・・。それにカリスはもう既に経験済みね。あの風格を見るに間違いないわ。一目見たときにピピ!と来たものピピ!っと。」

トルクはそんな母の話に一体母にはどんなセンサーが搭載されているんだと頭を悩ませた。

「ああ、私も後10年・・・いえ、5年若ければアタックしたのに。」

残念ね。と食器を洗うのを中断して頬に手を当てて溜息を付く。

「母さん!!怖いこと言わないでよ・・・。それに私は「ストップ!!」うっ・・。」

何かを言おうとしたトルクの言葉をトルルは途中で遮った。

それにトルクもうろたえる。

「言い訳はいいわ。トルク、貴女はカリスの事好き?それとも嫌い?」

急に真面目な顔をしてトルクはトルクに問う。
トルクは母の問いに顔を真っ赤にして目をそらしながら小さな声で答えた。

「う～～・・・それは・・・好き・・・だけど・・・。でもでもそれは・・・!」

「いいの。恋に必要なのはそれよ!好きにならなければ愛も実らないわ!
いい、トルク。今から母さんが男女が付き合う為に一番大事なことを教えるわ。
よく聞きなさい・・・。」

「!!・・・ゴクッ。」

先ほどから真面目な顔をしたトルルだったが、さらに濃厚なオーラ(気迫)までも出し始めたのを感じてトルクは緊張のあまり唾を飲み込んだ。

そして母トルルは

娘のトルクに胸を張って自信満々に言い放った!!

「既成事実を作るのよ！！！」

「ぶっっっ！！！！！」

母の言葉を聞いた瞬間トルクは噴いたのだった。

第5話（後書き）

読んで頂きありがとうございます。

次回もよろしくお願い致します。m（＿＿）m

第6話（前書き）

開いて頂きありがとうございます。

第6話

「綺麗・・・。これが、月見草なんですね。」

そう言ってカリスは見つけた月見草の下にしゃがんでそっと花びらに触れる。

月見草は極わずかの淡い光を帯びて咲いていた。

「そう、それが月見草だ。・・・しかしよくここに咲いているなんて判ったな。」

「ええ、極わずかですが魔力(マナ)を感じましたから。」

「う～む・・。俺には分からん。さすがは冒険者と言ったところか。あれ?でもダルドさんはそんな事言って無かったような・・・。」

トルパがブツブツ言っていたがカリスはそれを聞き流して月見草から溢れる魔力(マナ)を感じていた。

(本当に植物に魔力(マナ)が宿るんだ・・・。でもすごく少ない。月の光が殆ど届いていないからなのかな?)

初めの淡い光を放つ月見草に見とれながらカリスは思いに耽る。

「この程度の淡い光だと殆ど魔力(マナ)を内包していないから魔力回復薬としては効果が薄いんだ。

もっと多くの光を取り込ませられれば良いんだけどな。」

カリスが考えていた事は当たっていたようでトルパの説明に頷く。

だからと言って周りの木を切るわけにもいかないそうだ。
この辺まではエルフィン族の結界は無いが、仮にもエルフィン族が住んでいる山であり、森である。
ナイリス村の人々は山の森にダメージを与えるほどの事はしないようにしているんだとか。

「ままならないですね、なかなか。」

「全くだ・・・。木を切って多くの月見草を栽培出来れば良いんだけどな。
村近辺で一度育てようとしたらしいんだけど、何故かそれだと直ぐに枯れてしまうんだ。
ちょっとした環境の違いなんだろうなぁ。」

トルパは肩をすくめながら溜息を吐く。

「ここからもう少し先に行くと直ぐに結界に阻まれてしまうからな。この辺の月見草の質は見ての通りこんなもんなんだ。」

トルパの説明を受けてカリスは［眼］を開き、意識を広げた。
ナイリス山の西側までは探れないが、山の半分くらいは感じ取る事はできる。
それでも遠くなればなるだけ感覚も薄くなっているが。

その結界は確かに感じ取れた。
それは他者を拒むモノ。しかしカリス自身拒否されている感覚があるものの、何か違和感がある。

（どういうことだろう・・。俺が住んでいたところの結界は氣が使えれば入れるようなものだったけれど。・・・これは種族別の結界

？）

もしかしたらエリアから受け継いだエルフとしての部分がそう感じさせるのかもしれないと、カリスは思った。
とりあえず今はトルパも居るので結界の方は気にしないでおくことにした。

（ちょっと気になるし後で行ってみようかな。）

エルフィン族に会えるかもと内心ワクワクしながら・・・。

「ごくっ・・ごくっ・・。ふぅ、それじゃあどうする?他も探してみるか?」

カリスが周りを見ている（トルパにはそう見えた）うちにトルパはレザーバッグから魔法具の水筒を出して水を飲んでからカリスに聞いた。

「はい、近くにもまだ在る様なのでそれも見たいです。」

トルパはカリスの返事を聞いて頷いてから、カリスに先導してもらって進む。

「はぁ・・本当にもったいねぇよなぁ。これじゃあ宝の持ち腐れだよ。」

月見草は本来高級品である。それが村から歩いて行ける距離に生殖しているにもかかわらず、質が悪くて大したお金になっていないのでトルパが漏らす言葉も頷けるものだ。

（月明かり・・・か。ちょっと試してみようか。）

トルパが言ったことで、という訳でもなかったがカリスは１つ思いついた。

近くに咲いている月見草まで行く。

こちらも極わずかな淡い光を帯びているだけの物だ。

「カリス・・本当に見つけるの早いな。」

呟くトルパに振り返ってカリスは言った。

「ちょっと試したいことが有るので少し待っていて下さい。」

そうしてカリスは目を瞑り、自分の中へと意識を向ける。

（こんなところで初の力を使うのはどうかと思うけど、戦争なんかで使うより全然いいよね？）

心の中で言い訳しながらカリスは左手を前に出してイメージする。

イメージが纏まったところでカリスは開放した。

《アーチャー》としての力を

するとそこには３０ｃｍほどの小さな弓が出現した。

「っ！！お・・おいなんだ？手品か？」

いきなり現れた弓にトルパは驚いた。

が、カリスは目でもう少し待ってもらうように言い、弓の弦にもう片方の手を掛ける。

するとそこには月と同様の光が生まれて集まっていった。

カリスはその生まれた光の矢を頭上に放つ。

放たれた光は上空３ｍほどのところで止まり、月と同様の光を放つ球体となって停滞したのだ。

本当は弓を生み出さなくても出来たのだろうが、初めて能力を使うということもあって弓を生み出して試してみた。

使用を終えた弓は消す。

それを横で見ていたトルパはもう声も出ない状態で口をパクパクさせながら呆気にとられていた。

「月と同じ様な光を作ってみました。もしかしたらこれで月見草の光の取り込む量を増やせるかも知れません。」

「な・・なな・・え？何やったんだ？」

「魔法みたいな物ですよ。でも詳しくは秘密です。」

「魔法みたいな・・・て。魔法・・。そうか魔法！！その手が有ったか！！」

カリスの話で何かが閃いた様にトルパは叫んだ。

「そうだよ！魔法で月明かりを作り出せばいいんだ！そうすればその光を取り込んで月見草の質を上げられる！！」

「あー、一応今試し始めたばかりなのでそう結論を急ぐのは早いと思います。」

「あ・・ああ、そうだな。もう少し様子見てからにしよう。」

興奮しだしたトルパにカリスは冷静になるように諌める。
もしこれで失敗したらその喜びが全く逆なものになるのは目に見えているからだ。

しかしそれも杞憂に終わったようだ。土の上に腰を下ろして2人で雑談しながら1時間ほど待っていると、月見草の光が次第に強くなってきていた。

「これは・・いける、いけるぞ!カリス!!お前ってすごいやつだな!!」

月見草の光を確認したトルパは舞い上がってカリスを褒めた。
カリスも自分で考えたことが当たっていてほっとしていた。

「成功したみたいですね。この方法なら月見草も光を得られる・・・と。」

「早速帰ったら父さんに報告してみよう!きっと驚くぞ!そうだ、証拠品としてこれを持って帰ろうか。」

そう言ってトルパは月見草の周りの土を手で掻き分けて、根が傷つかないように土ごと取り出す。

「カリス、その光は移動させられるか?」

「ん・・ちょっと待っててください。・・・・・はい、大丈夫です。」

トルパに言われたことを試してみると、その光はカリスの思い描くように移動したのでトルパに頷いた。

（放った矢は自分の好きなように動かせるんだ・・・そういえば姉さんの使い方のメモリーには誘導もあったっけ。）

トルパの言葉からカリスは《アーチャー》としての使い方をあれこれ考え始めた。

「よっしゃ。それじゃあこれは持って帰ろう。家に着くころには一段と光は強くなるだろうしな。」

嬉しそうに手元の月見草を見ながらトルパは喋る。
カリスの生み出した光は月見草の上をふよふよ浮いていた。

カリスはトルパが持っていたランプを代わりに持つ。
そうして2人は月見草の探索を終えてナイリス村へ帰り始めた。

「それにしても魔法かぁ・・。月見草を用いて作る光薬は魔力（マナ）を回復させる物だから、その魔力を消費して育てるなんて盲点だった。栽培するのに魔力回復は必要ないもんな。飯食って寝れば回復するんだし。」

言葉を聞くだけではなんだか無駄な作業にも聞こえるが、回復するのは基本的に非常時や、枯渇した時くらいなのだ。
なら普段余っている魔力を用い月見草を育てれば・・・。

「回復が必要なのは非常時とかだろうから問題無いでしょうね。」

トルパはカリスの言葉に笑顔で頷いた。
トルパは気分が良いようで足運びも軽く、今にもスキップをしそうな勢いだ。
それを見てカリスは微笑んでいた。

山を下りカリスとトルパはナイリス村を目指して森の中を歩いている。
山を下るまで機嫌良くしていたトルパは真面目な表情で考え事をしていた。

（トルパがこんなに真剣に悩むなんて・・・あ、まさかあの女の子達のこと、とか言う事は無いよね？）

少し冷や汗を流しながらトルパの様子を伺うカリス。
しかしカリスの考えとは異なる表面上は常識的だと思える事をトルパは口にした。

「なぁカリス・・・。お前は俺の妹、まだ会って日が浅いがどう思う？」

それはいかにも妹の思いを認識しての発言だった。
カリスはトルパの妹トクルとの会話した内容、その時の表情を思い浮かべる。
トルクは兄に似て明るく分け隔て無く人と接する事が出来る人物だろう。
話し方もテンポ良くて聞いているだけでも気持ちが明るくなるほど

だ。
表情もコロコロ変わるが、それでいて笑顔も多い。
カリスからすればトルクは年上だが、そんな事を感じさせずにまるで同年代の様に接してくれる。

「トルクは明るくて、表情も豊かな女性だと思います。
トルルさんの手伝いもしていることから家事全般も出来るんでしょうし。」

「んー・・まぁそうだな。母さんの手伝いをしているから一通りこなせるだろう。
兄の俺から見てもどこに出しても恥ずかしくないほどにな。父さんは何て言うか知らないが・・・。
まぁそんな事よりだ。
カリス、お前の気持ちを聞きたいんだわ。
トルクがどんな娘だかというのを理解してくれているのは嬉しいが、どうだ?」

トルクの良いところを上げたカリスにトルパはモヤモヤとした雰囲気でカリスに問う。

「正直お前を見る限り、女との経験は既にあるだろ。もしかしたら特定の相手もいるのかもしれない。
しかし、昨日俺が言った通り多妻持ちなんかざらに居るし、俺が思うにカリスになら妹を任せられる。
カリスは旅を始めたばかりらしいから一緒に連れて行く・・というのは難しいかもしれないが、トルクの思いも何となく分かっているんだろ?」

紳士な目をカリスに向けてゆっくりと語りかける。

「俺は・・・。」

カリスはエリアやタマ、シーリーの事を思い浮かべながらも考える。

（姉さんは愛人を一杯連れて来いって言っていたけれど誰にでも手を出すのはやっぱ違うよね・・。）

「まぁまだ会って2日だ。俺も急ぎすぎているとは自分でも理解している。
でもトルクが誰かに恋をするなんて今まで無かったからな。つい力が入っちまった。
すまん。」

直ぐに答えなかったカリスにトルパは直ぐには答えなくていい、と謝った。
カリスは無言でそれに頷きながらトルパもちゃんと兄をしているんだなと感心するのであった。
だがこの時、トルクの兄としての顔を見せていたトルパの心の中は違う事を考えていた。

（チッ・・。さっさとトルクを追い出せれば俺のハーレム計画がやりやすくなったんだが、ちょっと焦りすぎか。もう少し落ちつかなければ。
ハーレム王に（幼女の）俺はなる！！）

目の前にいるカリスが既にハーレムを作っている事など露知らず、トルパは心の中で力説した！！

第6話（後書き）

読んで頂きありがとうございます。

次回もよろしくお願い致します。

第7話（前書き）

開いて頂きありがとうございます。

第7話

ゆっくりと揺れる薄暗い狭い部屋。そこでは1つのランプが天井の柱から吊るされ、いくつも重なり合い動く全裸の人の影を浮き出していた。

それは1人の寝そべる男の上に女性が重なり、その又上に男が・・。そして女性の顔にも1人の男が下半身を突き出して水音を出している。

褐色肌に真紅の髪のミリアはその豊満な胸とお尻を撫で回されながら3人の男に弄ばれていた。

張りのある褐色肌には色々な液によりテカテカとぬめりを帯びて光を反射していた。

周りには5人の服を脱いだ男達が、その光景を下品に口元をニヤけさせながら見ている。

ミリアは身体をビクンッ！とビクつかせた後、口の中に放たれた物をそのまま飲み下していく。

3人はミリアの身体を起こし、男達は離れる。

「ひぅ・・・っく・・ふぁ・・・ぁぁぁ・・・。」

すでに声にならない喘ぎ声を出すミリア。

「おい、一旦休憩にするぞ。そのまま続けて壊れたら今回の仕事に関わる。」

部屋の中で4人の行為を見ていたヴァラズは周りに居る部下達へ、グルリと視線を投げて指示を出した。

ミリアが捕まってから２０日と少し。常に媚薬漬けにされてサタリア卿にさまざまな事を行われ、躾けられる日々を余儀なくされていた。
最初の内こそ何とか逃げられないものかと考えていたのだが、次第に身体の中から突き上げる快楽の衝撃に纏まった思考が出来なくなっていた。
今では身体の感覚が敏感になりすぎて肌を触られただけで、身体が火照って力が抜けてしまうほどだ。
男と身体を重ね始めたら常に達しっぱなしの状態になってしまっている。

「くふぅ・・はぁ・・はぁ・・ぁっ・・ぁぁ。」

息も絶え絶えに男が離れた後も身体をビクつかせてミリアは、下腹部から男達に放たれた以外の熱いしぶきを放つ。

この場所は現在アルト港からカリス達の居る島、その名もバノス島の港であるバーノ港へ向かう途中の海の上。船室の一角だ。
船がアルト港を発ってから丸1日、ミリアはその間ずっと闇ギルドの相手をさせられている。

「明後日にはバーノ港へ着くか・・。お前ら内容をしっかり頭に入れてあるだろうな？」

ヴァラズは休憩をしながらニヤニヤと、床で横になっても形の崩れずなんともしがたいほどの大きな胸をぷるぷると揺らしながら痙攣するミリアを視姦していた部下達に言う。

「もちろんでさぁ。バノス島での準備も滞りなく終わってるんで後は楽なものですぜ。」

「ふん・・。その油断がお前を殺すのだ。」

軽口でヴァラズの言葉に返事をした1人の部下は、威圧的な目を向けられてヒッっと身体を硬直させた。
それによりさっきまでの緩い雰囲気は緊張感のあるモノに変わる。

「ふん・・、手を抜かなくても気を抜けばそれは失敗に繋がる。俺に噛み殺されたくなかったら覚えておくんだな。」

ヴァリスの周りに居る部下達は、その言葉を聞いて皆一斉に血の気が引いた。
もちろん全裸になって露になっている男特有のアレも。

「ま・・任せてくだせぇ。やる事はしっかりこなしまさぁ！そうだよな、皆！！」

「お、おうっ！」

そんなやり取りをしながら闇ギルドメンバーを乗せた船は海の上を東に進んでいった。

カリスとトルパは月見草を持って暗い森の中を歩き、日付が変わる前に村へ到着した。
東門の番人が2人を見つけて手を振って向かい入れたが、トルパの持つ月見草を見て驚いた。

「そ！それどうしたんだ?！こんなに光を放っている月見草を見るのは初めてだ！！」

「ふふん、俺とカリスの成果さ。詳しい事は明日辺りには公開するからそれまで待っててくれ。」

もちろん秘密でな。と、門番の問いに答えるトルパ。
門番は詳しく聞こうとしてきたが、トルパは相手にせずカリスを連れて村長の家へと向かう。

「見たかカリス。あいつの顔！いや～爽快だな！！さーって父さん達の反応も楽しみだ。」

トルパはニヤニヤと悪巧みをする子供のような顔をさせていた。
あれから約1時間かけて村へ戻ってきた2人が持ってきた月見草の放つ光は、カリスが出した光を吸って見つけた当初の１０倍もの光を放っていた。
光の大きさ的にはランプより少し小さいくらいである。
近づかなければ分からないほどの淡い光に比べればどれくらい増えたかも分かるほどだ。
空中を移動させていた光は村に着く前にカリスが消している。

「ただいまぁ。父さん！土産があるよ！」

大きな声を出して家に上がるトルパ。カリスはその後に続く。

「おお、帰ったか。おかえｒ・・・な！！なんだそれは？！」

食卓でお茶を飲んでいたタロスはトルパが帰ってきたことを知り出迎えたが、トルパの持っている尋常ではないほどの光を放つ月見草を見て驚きの声を上げながら腰を抜かしそうになった。
タロスの大声に台所での家事を終わらせた後、トルクの寝室で密会をしていたトルクとトルルも出てきた。

「お、おかえりカリス、兄さん。父さん何大声出しているのよ。」

タロスの身体が壁になって月見草には気づかずトルクとトルルは出迎える。
そんなトルクの頬は恥ずかしそうに赤らんでいた。
それをトルルは生暖かく見つめている。

「ただいま。遅くなってしまってすみません。少し試したいことが出来たので。」

カリスの言葉に首を傾げるトルク。
その様子を見てトルパはニヤリッと口元を歪ませなる。
直ぐにトルパは口元のニヤ付きを消し、爽やかな好青年の笑顔を張り付かせてタロスをズイッと押しのけながら前に出て言い放った！！

「トルク、この月見草はカリスからのプレゼントだ。」

「「「んなっ！！」」」

トルパは溢れんばかりに光を放つ月見草を差し出しながらトルクに

言う。
それにトルパとトルルを除いた3人が変な声を上げて驚いた。

（ちょ！！ちょっとトルパ！！そんなの聞いてないですよ！！）

と、目線でカリスはトルパに抗議するが涼しげに流される。
タロスはトルパの言葉を聞いてから目を見開いて放心中だ。
そんなタロスをこれ幸いと、トルルは家の奥へと引っ張って行った。
ナイスな家族プレーである。

トルクも驚いて固まっていたが直ぐに気を取り直し、トルパが持つ月見草に触れれば壊れてしまうのではないかという様な手つきで手をかざす。
トルクの目は次第に潤み、赤くしていた顔が熟したトマトの如くさらに赤くなっていった。

「えっと・・・、本当に・・・私に・・・？」

トルクは震えるような小さな声で、カリスに潤んだ目を向けて問う。
トルパが勝手に言い出したことだが、それによって感極まっているトルクを見てカリスは心を決めて頷いた。

「・・・カリス、ありがとう・・・。」

横でトルパがニヤニヤと含み笑いをしていることを認識ながらカリスはトルクに微笑むのだった。

（なんだか流された感じでモヤモヤするけれど・・・それにトルクに罪は無い。）

「あっ、植木鉢に入れてくるね！」

嬉しそうに月見草を受け取って家の奥に行くトルクを見届けた後、カリスは一矢報いる為に目に氣を宿してこちらを見ているトルパを睨みつけた。
睨まれたトルパは身体をビクっ！！とさせて固まり、冷や汗をダラダラと流すのは自業自得だろう。

「それにしてもカリスから渡してくれればいいのに・・。」

「いやぁ、カ・・カリスが自分からは言いにくいってんで俺が代わってやったんだよ。」

トルクは気持ちが大分落ち着いてからカリスを上目遣いで睨むように照れながら言う。
トルクの言葉に横で固まっていたトルパが焦りながらも説明した。
それにカリスは苦笑する事で答えた。

「んもう・・良いわ。今の私は寛大だから！」

満面の笑みをトルクはカリスに向けた。
明るいトルクの声を聞いて奥に移動していたトルルとタロスが戻ってきた。

「あらあら機嫌がよさそうねトルク。」

トルルの後ろでは父タロスがこの世の終わりの様に落ち込み、泣い

ていたとかいなかったとか・・・。

「そう・・・月見草の光を増やすにはそんなやり方があったのね・・・。」

「ああ！これなら月見草の栽培もできるさ！実際にここまでのモノが出来ているんだ！」

5人は食卓に着いて月見草について話し合っていた。
トルパはテンションを上げてテーブルの上の植木へ移した、淡く強い光を放っている月見草を指す。

「そうね、明日村人達を集めて集会を開きましょう。そこでこの事を村に公開するわ。
明日から忙しくなるわよ！」

トルルは自分を奮い立たせるかのごとく言葉を大にして言った。
ちなみに先ほどから静かにしているタロスは今でも沈んでいる。
カリスの隣に座るトルクの距離が普通に座るよりも近く、明らかにトルクの機嫌が良かったというのが原因になっているのかもしれない。

「それじゃあ今日はもう遅いし後は明日にしましょう。」

最後にトルルの一言で今日の話し合いはお開きになった。
タロスを除く3人はカリスを見送る為に家の外まで出る。

「カリスさん、貴方が発見してくれたことはこの村にとって、明るい未来をもたらすモノだわ。
本当にありがとう。」

「はい、思いつきでしたが、うまくいって俺もほっとしてますから。」

微笑みながらカリスはトルルのお礼に頷いた。

「まったくだ。もしかしたらカリスはこの為にナイリス村に来たのかもしれないな。
俺からも礼を言うよ、ありがとうカリス。」

爽やかにトルパもお礼を言った。
その後トルルとトルパはススススーっと家の中に下がって行く。
その代わりにトルクが一歩前に出てカリスを見つめた。

「本当ね。母さんが言った通り・・・。カリスはこの村にとって【英雄】よ。
きっとこの村はこれから大きくなっていくと思う。ありがとうカリス。」

そう言って頬をピンクに染めながら微笑むトルクは無意識にカリスの存在を言い当てていたが本人は当然ながら気づかない。

「ちょっと大げさな感じもするけど、そうだったら嬉しいな。俺がナイリス村に来たことも無駄じゃなかったっと言うことになるし。」

謙遜していると思ったトルパ達はそんな事無い、と笑顔で首を横に

振った。

「それじゃあ風引かないようにそろそろ家に入らないと、おやすみなさい。」

「おやすみ、カリス・・。」

トルクの見送る言葉に微笑んでからカリスは借り受けている小屋へ足を運ぶのだった。

そのカリスの後姿を見送り、見えなくなってからトルクは家の中に入る為振り返って1歩踏み出した瞬間、

バダンッガチャ!!

「えっっ?!」

トルクの目の前で扉が閉まって鍵をかけられた!!

「ちょ、ちょっと!!何で閉めるのよ!開けて!」

扉をドンドン音をさせて叩くが中から開けてくれる気配は無い。

それどころかトルクにとっては残酷とも言える言葉が中から聞こえてきた。

「母さんの話しをもう忘れたの?

そんなダメ娘に育てた覚えはありません!!

そしてそんな娘はウチの子でも無いわ!!

出直してらっしゃい。」

「えええぇぇぇぇ!!!」

中から聞こえた母の言葉にトルクは呆然と外で立ち尽くすのだった。

第7話（後書き）

読んで頂きありがとうございます。

ここまで書いて何ですが、次の話が中々うまくまとまらないので暫く時間頂きます。

あまり書く時間が取れない状況でもあるので、気長にお待ちください。

第8話（前書き）

開いて頂きありがとうございます。

第8話

「ど・・・どうしよう・・・。」

トルクは家から閉め出されたまま外でどうしたら良いか分からず立ち尽くしていた。
まさか家に入れてもらえないなんてことが起こるなどと思ってもみなかったのだ。

「このままここに居ても仕方ないし、うう～～。
さっきカリスと良い感じで分かれたのに、今からカリスの下に行くのはすごく気まずいし・・・。」

でもでも・・。と、暫く考えていたがトルクは観念してカリスの小屋へ足を向けるのだった。

トントンッ

「カ、カリス・・？。ちょっといいかしら。」

「ああ、ちょっと待ってて。」

小屋の中で身体を拭いていたカリスは扉の外に先ほど別れたトルクが来ていることを認識して返事をする。
シャツとズボンを身に着けてから扉を開けた。
そこには先ほどと同じ格好のトルクが立っていた。
さっき別れた時とは雰囲気を変えて。
トルクは先ほど綺麗に別れたのにカリスを頼ってしまったのが悔しいやら、恥ずかしいやら、気まずいやらで俯いていた。

「どうしたの?トルク。・・・とりあえず入って。」

話しかけてもトルクは神妙な表情でジッと俯いていたのでカリスは小屋の中へと促した。

小屋の中はランプの明かりで薄暗くはあるモノの部屋の中を照らし出している。

トルクにベッドの上に腰掛けてもらい、カリスもその横に腰を下ろした。

「トルク?」

ベッドに腰掛けたものの、ずっと俯いたままもじもじしているトルク。

暫くカリスはトルクが言葉を発するのを待ってみたが何も言いそうに無い、というよりも何を言ったらいいか悩んでいるようにカリスには見えた。

そんなトルクの手に自分の手を重ねる。

「っ!!」

「無理して言う事は無いよ。誰かと居られればそれで落ち着く事もあるから。」

突然カリスに手を握られたことで身体をビクリとさせながらカリスへ顔を向けるトルク。

その顔は不安そうな表情から驚きへと変わっていた。

「う・・・うん、そうよね・・・、暫らく良いかな。」

カリスは優しくトルクの手を撫でてあげながら焦らさずリラックスするのを待つ。
トルクはカリスの気遣いもあり、次第に落ち着いていった。

「カリスは・・・、どうして冒険者になったの？」

「ん・・・俺？そうだなぁ、俺を育ててくれた人が元々冒険者で、それでかな。
その人に憧れて・・・という訳でもないけれど、色々と話ししてくれたことを聞いてるとすごく胸がわくわくしたのを覚えてる。
それまで森の中で生活していたからね。
だから森の外、島の外の世界を見てみたいと思うんだ。」

「島の外かぁ・・遠いね。」

「そうだね。
でもそこにはきっと自分では想像も出来ないような事が一杯在るんだ。
それを見るのが楽しみだよ。」

「ふふっ。カリスも男の子なんだって実感しちゃう。
やっぱりそれは憧れてるんだよ。この村に２０才前後の若い人が居ないのもそう。前までは何人か居たんだけどね、外の世界が見たいって言って村から出て行っちゃった・・・。
この村にはこれといった特別な事は無いから余計外の世界に憧れちゃったのかしらね。」

少し寂しそうに語るトルク。カリスは励ますように手を包み、摩っていた。

「きっと兄さんもそう・・・子供達に優しく付き合ってあげているのはこの村を好きでいてもらう為だと思うの・・・。そうしないと伝統とかも引き継げて行けないから。」

（い・・いぁあ・・・あれはどう見ても自分の欲望の為に生きているようにしか見えないんだけど・・・。）

トルクの言葉に真っ向から否定なんてしないがカリスは苦笑してトルクの話しを聞くのだった。

「皆求めるものが違うから村に無いモノを求めて出て行ったけれど、でもこれからは違うわ。
カリスのおかげで月見草も質の良いものが出来るようになるかもしれないもの。
きっとナイリス村は発展する。
そうすれば今度は色んな人がこの村に来てくれるようになるものね。」

「そうだね、人が増えれば賑わうし、更なる発展に繋がるもんね。」

トルクはナイリス村には明るい未来が待っているということを話しながら自分の中で形になってきたのか段々と明るさを取り戻していった。
――様に見えた。
カリスも空元気とまでは行かないまでも少し大げさに明るくしているのは感じ取れたが、あえて気づかぬフリをした。

（未来のナイリス村にカリスが居るわけではない・・・それが残念・・・。）

ここまでナイリス村にも打ち解けているカリスには村に居てほしいと思いながらも、それは叶わぬことだと分かっていることだ。
あえてそれにはトルクが触れる事は無かった。

その後もトルクとカリスはゆっくりと話しを続け、夜も更けていくのだった。

「ん～・・・んん・・・、ふぁ・・。」

「おはよう、トルク。」

「うぅ～ん・・・あ、おはよう・・・カリｓ・・・っっ！？」

翌朝トルクがベッドの上で目を覚ますと、目の前に居るカリスからの挨拶に返事をしているところで、トルクはバネ仕掛けの人形のような勢いで上半身を勢い良く起こした。

「か、カカカカリス・・・どうして私のベッドに！？」

「いや・・・ここ俺の部屋だから・・・トルク落ち着いて。」

トルクは周りをキョロキョロと見渡してカリスに言われた事を確かめる。

頭の中も次第に起きてきて昨夜の事がぼんやりと思い出されてきた。

「あ・・・そういえば昨夜カリスと遅くまで話ししてて・・。」

「思い出した?すごく眠そうにしてたからこの部屋で寝てもらったんだよ。」

一応自分の服装が乱れていないかさり気なく確認しつつ顔をほのかに赤くしながらトルクは今の現状に至った経緯を思い出していた。

「なんだかごめんねカリス・・お邪魔しちゃって。」

「ははっ、全然構わないよ。俺もトルクと色々話できて楽しかったし。」

「う・・・うん。・・・わ、私も楽ｓ」

バタンッ!!

「おーぃ!おはようカリス!!って、おお!!我が妹がカリスと共にベッドに居るなんてもしかして昨夜はお楽しみだったかぁ?」

トルクが何かを言おうとしたところで行き成り小屋の扉が開いてトルパが入ってきた事でトルクは身体をビクッとさせて扉の方へ勢い良く振り向いた。

「ちょっっ、そそそそんなこと・・・！！！」

「おはようトルパ・・・それ分かってて言ってるでしょ・・・。」

トルクは顔を真っ赤にして否定しようとするがうまく言葉にならず、代わりにカリスが声を出した。

「ははははっ！まぁそういうなって、俺には分かっているから！！（違う意味で）
熱く濃厚な行為！そして貪る様にお互いを求める心！！カリス・・・今日から俺のことは『お義兄様』と呼ぶべｈらｚゃ！？」

「そんなわけ無いでしょっっっ、この変態っっ！！！」

熱く語っていたトルパの顔にトルクの投げた枕がクリーンヒットしてトルパは吹き飛んだ。

（あ・・あれ？枕ってそんなに硬くも無いし重くないよな・・？）

その光景にカリスは内心驚きながらもトルクの行動に苦笑していた。

「はぁ、はぁ、まったく・・・この変態は何を言い出すかと思えば・・。」

「まぁまぁ、取り合えず起きよう。トルパも起こしに来たんだろうしね。」

そうね、と息を切らせながらも返事をして2人はベッドから出るのだった。
小屋の外で倒れているトルパをトルクは当たり前のように踏み付け

ながら外へ出る。
その瞬間鶏の首を絞めたようなうめき声が上がったがトルクは全く気にしなかった。
外は今日もいい天気である。

「ただいまぁ・・・。うわっ、人が大勢いるね・・・。」

トルクは村長の家に入るなりあちらこちらで作業をしている人達を見て少し驚いた。

「おかえりなさい。朝食の用意は出来てるから食べちゃって。
トルクにも色々と手伝ってもらわなくちゃいけないから急いでね。
それとごめんなさいカリスさん。騒がしいけれど我慢してね。」

家の中を動き回っていたトルルはいうことだけ言うと直ぐに作業に戻っていった。

「朝から忙しそうだね。邪魔にならないように隅っこで食べた方が良さそうかな。」

「そ・・・そうね、朝食持ってくるから待っててカリス。」

家の奥へと行くトルクを見送ってカリスは周囲で作業している村人達を観察した。
大体はいくつかのグループに分かれて話し合いしていて、光の魔法も何人か微弱ながらも使って何かを確認しているようだった。

「ねぇトルク・・・。」

ビクッ！

「な・・・なんだ母さん・・・。びっくりさせないでよ。」

用意されている朝食を取りに来たトルクは後ろからちょっぴり低い声で呼びかけられた事で驚いて身体をびくつかせた。

「何だ、じゃないでしょう・・・。昨夜は折角送り出してあげたのに貴女何もしなかったでしょう。」

「なななな何のこと・・？私はカリスと楽しい一時を過ごしただけよ。」

まったく・・と溜息を付きながら呆れるトルル。

帰ってきたトルクの様子を見る限りあまり進展が無かった事を早々に察したトルルは遅々として進まない娘の行動が気に入らなかったのだ。

「あそこまでお膳立てをしたのに何で何もしないのよ・・・そんなんじゃ女が廃るわよ?!」

「そ・・そんなことで女は廃りません!!」

「いい?トルク、カリスはハッキリ行って中々の物件よ。それこそこの島で一番と言えるかもしれないほどの・・・。」

「そ・・それは言い過ぎなんじゃあ・・・。」

「はぁ・・・そんなだから・・・。私が生きてきた中で彼程の男はお目にかかったことは無いわ。
私が言うのだから間違いないわね。
それと・・そんな良い男がずっと女を持たずにいると思っているの？
絶対に年若い子がカリスを見たらお近づきになろうとする人は出てくるわ。
チャンスは今しか無いのよ？もうちょっと危機感を持ちなさい。」

「そんなこと言われても・・・。」

「まあいいわ、でもこれだけは忘れないで・・・。
私はトルク、貴女の事を思って言っているんですからね。」

「母さん・・。」

最後はトルクを優しく抱擁しながらトルルは話しを締めくくった。

（ここまでしてもアタックしないなんて計算外ね・・・。
周りに恋愛対象になるような男の子が居ないからカリスにがっつくかと思ったのに・・。
トルパには色々と吹き込んだら何故だかロリペドに走っちゃったし・・・それでも村の子の心は掴んでいるからまだマシね。
まったく・・・この村の未来の為とはいえうまく行かないものねぇ・・・。）

などと溜息を吐きながら、かなり腹黒いことを考える村長の妻だった・・・。

第8話（後書き）

読んで頂きありがとうございます。

あまり時間がとれないので暫く不定期更新とさせて頂きます。

次回もよろしくお願い致します。m（＿＿）m

第9話（前書き）

開いて頂きありがとうございます。

第9話

「お待たせカリス。スープ温めてたから時間かかっちゃった。」

「ううん、ありがとう。いつも作ってもらっている立場だからね。待つのなんて当たり前だよ。」

トルクからスープやパン、サラダを受け取ってカリスは二人で食べ始めた。

パンは今朝焼いた物なのかモッチリとしていてそのまま食べても良い舌触り、そしてスープにつけて食べても美味しく食べられたのでカリスとしても満足のいく朝食だった。

食後にお茶を飲んでいるとトルクの元にトルルがやってきた。

「朝食は食べ終わった?トルク、昨日カリスさんが月見草について発見したことから、見ての通り皆忙しく作業をしているの。だから貴女にも昼、夜の食事の準備のお手伝いをお願いするわね。」

「うん、いいよ。それにしても本当に皆生き生きしてるね。年に一度のお祭りの時みたい。ううん、それ以上かも。」

「そうね、それだけすごい事ということよ。これもカリスさんのおかげだわ。」

にっこりと笑みをカリスに浮かべるトルル。

その笑みはさすがは村を取り仕切る長の妻といったところか・・・かなりの優しさをかもし出していた。

（ふふっ出来るだけカリスさんにナイリス村は良いところだと認識していただかないと・・・。）

理由は分からずカリスは少し寒気を感じながらもその優しげな笑みに頭をさげる。

殺気や憎悪などの負の気配は敏感に感じられるカリスだが、好意から来る不穏な気配にはまだまだ疎いのだった。

「それじゃあトルク、がんばって！」

村の手伝いをするトルクに声をかけてカリスは村長の家を出て村を巡回する事にした。

どこもかしこも光魔法をどのように使うかや、今夜にでも山へ行くのだろう、出かける準備をしている人達でにぎわっている。

一通り見て周り、特にすることもなくなったカリスは自分に宛がわれた小屋の裏の外壁を乗り越えて森へと入った。

鍛錬する為である。

村から余り離れてはいない所、いつでも村にいける距離の場所でカリスは氣を身体に纏わせて体を動かす。

手、腕、肩、腹、足、頭、色んな部位で氣の凝縮をすることで扱うことを促進させようと考えて実行した。

もちろん全身凝縮も

「ふぅ・・さすがに凝縮させるのは息が切れる。

それでも継承前は数秒だったから格段に上がっているんだけど。」

今では1分弱まで維持できるようになっている。エリア並みだ。

その後も休憩を挟みながらカリスは鍛錬を続けた。

暫らくしてから今度は《アーチャー》としての能力を考える。
【英雄】としての記録を読み取る限り、エリアは《アーチャー》としての能力は1つの武器そのものとした使い方をしていたようだ。
ある時は数万の敵を相手に同じ数だけの矢を生み出し殲滅し、ある時は強大な相手にワイバーンを倒した様な一撃必殺の攻撃をしかける。
使い方はあくまで敵を殲滅させる事。これに尽きていた。

が、しかしカリスとしては昨夜試した事からも、戦いだけに使用を限る必要は無いのではと思っている。
【英雄】の能力は壮大だ。その力が戦の事だけにしか使われないのは危うい。
それが人を守るためだとしても、やっている事は相手を殺す事なのだから。

カリスは自分の周囲に光の矢を3個ほど生み出す。
今度は弓は空間そのモノだ。
空間そのモノを弓として、弦とするなんてカリス自身では考え付かない事だっただろう。
あくまでもこの使い方は先代の【英雄】であるエリアの記録だ。
生み出した光の矢をカリスは放ち、自分を中心にその周囲をクルクルと回らせる。

（姉さんはこういう使い方はしていなかったけれど、こうする事で補助的な役割を果たせるかもしれない。
相手からの攻撃を防いだり、カウンターの一撃を放ったり・・。）

カリスもそうだが、実際エリアにはこういう小細工的な戦法は必要無いのだ。元々の身体能力がずば抜けて高いので《アーチャー》と

しての能力を使用してわざわざ防ぐ何てことは滅多に無かった。
だが、これを自分にでは無く、味方に付けられたならなかなかの効果になるのではないかとカリスは思う。
そうできれば、シーリーのように大怪我をする可能性を減らす事も出来るだろう、と。
続いてカリスは〔眼〕を開く。
それによってナイリス村の全容、動き回る人々や、森の中に生きる木や動物、虫達の生命・気、そして自分自身が世界を作っているパーツの一部と認識する。

世界には因果性というものが有る。原因と、それに対しての結果だ。
何かを起こした場合、それにはどういう形かは限らないが、結果として発生する。
例えば、誰かが木を切ったとしよう。
切られた木はどうなるか。普通に考えてもちろん倒れる。
もし倒れた先に人が居たら?その人が避けられなければ怪我をする、もしくは死に至る事も有るだろう。
怪我をしたのなら薬が必要になる。もしくは死者を弔う必要が。
人に限らず自然の中なら虫も居るだろう。木が倒れればその衝撃で死ぬ虫は1匹や2匹という数ではない。

人が死に至るというのは大げさだが、有り得ないことではない。唯一本の木を切っただけでそれだけの結果を発生させることもある、ということだ。
逆に木を切らなければならない結果になった原因もまたあるだろう。
家を建てるために木材が必要になった、木が病にかかり他の木に伝染しないようにする必要があった等。
世界はそのように小さなことが繋がって出来ているとも考えられる。
それこそが世界の流れ、そして連鎖。

カリスは〔眼〕を開くことでその流れを読み取り、自分もその流れの1つだと認識するのだ。
するとカリス自身が動いた事を原因としてもたらされる結果というモノを捉える事が出来る。
逆にカリス自身が動く事になった結果の原因さえも同様だ。
分かりやすく言えば遠くない過去、そして未来を認識できるという事だ。
あくまでも世界の方向性、流れが、だが。

〔眼〕を開いたまま《アーチャー》の能力で生み出した光の矢を確認する。

（やはり【英雄】の能力は自然な流れのものではなくて、世界を作り変える力。
強いては未来を変えるような力が働いているみたいだ。
明らかにこの光の矢は自然の中から浮いている・・・。）

カリスの周りの光の矢は〔眼〕で見る限り周囲の連鎖から断ち切られて新しい連鎖を作り出しているのだ。
《カース神》により6人の【英雄】に与えられた力はそれこそ未来を変えるような力なのである。

「ふぅ・・・、力を使う時は十分注意しないとな・・・。それこそ世界を滅ぼしかねないや。」

光の矢を消してカリスは〔眼〕を閉て一息入れる。
実際に【英雄】としての力を使う時は世界のバランスが崩れかねない時、何かを守る時だろう。
人の欲の為に使うなんて事は論外だ。
しかしそれ以外では一方的な重圧から助けになる事や、救いになる

事が出来たらと思う。
エリアはこの力を利用されないようにする為に1人、旅に出ていたのだ。
その思いをカリスは大事にして行きたいと思っている。

日も陰ってきてカリスは村長に家に向かった。
扉を開けて中へ入るとそれに気が付いたトルクがやってきた。

「お疲れカリス。昼間にカリスに会いに行っても見あたらなかったけどどこに居たの？」

「村の裏で鍛錬だよ。時間あるときに鍛えないとね。」

エプロン姿のトルクに眼を細めて笑顔を向ける。
エプロンを付けたトルクも中々に様になっていて違和感無くカリスの目に映っていた。

「いらっしゃいカリスさん。夕飯の用意はもう直ぐ出来ますからそちらに腰掛けて待っていてください。」

奥から顔を出してトルルはカリスに笑顔を向けながら言葉を掛けた。
それに頷いてカリスは食卓の椅子につく。

「タロスさんとトルパを見ないけど2人はどうしたの？」

「兄さんは外で村の人達と動き回っているわ。村の発展の為にかなり張り切っちゃって。」

トルクもそんな兄の姿を見て嬉しそうに話す。
余談だが、そのトルパの後ろには女の子3人組みがちょこちょこくっついていたそうな。
彼は夢に向かってがんばっていた。

「それで父さんは・・・あ～、私とカリスが一夜一緒にいた事を話したら倒れちゃった。」

呆れながら肩を竦ませるトルク。

「それは悪い事したかな・・・。」

「いいのよ・・・。少しは娘離れしないとね。」

「ほらほら、トルクも手伝って。後は運ぶだけだから。」

「は～い。」と返事してトルクは料理を取りに家の奥へと向かっていった。

「ただいまぁ！・・・ふ～、やっとひと段落ついた。
お、カリス、来てたんだな。」

「お疲れ様です。なかなかに忙しいようですね。」

丁度夕食が出来たであろうこの時間にタイミング良くトルパが帰ってきた。
あちこち動き回っていたのだろう。村長で有るタロスが動けない今、その分トルパががんばっているようだ。

「まぁ飯食ったら何人かで山へ出かけるんだがな。その時はカリス、お前にも護衛で来て貰いたい。」

トルパの話しにうなずくカリス。
2人で話していると食卓に料理が運ばれてきて、4人で食べ始めた。
ちなみにタロスの姿はなかった・・・。

「様子はどう?今夜山へ行くんでしょう?」

食事しながらトルルがトルパへ聞く。
トルパは口に含んだ物を租借して飲み込んでから答えた。

「ん・・ごくん。そう、いくつか光の種類を作ってみたからそれを試しに行ってくる。
微調整とかもするし、効果を確認する為にも作業は2~3時間くらいかかるだろうな。」

遅くなる、ということをトルパは伝える。

「それにしても俺は魔法のことは何もしなくていいんです?」

「ああ、それなんだが・・・方針を見つけてくれたのはカリスだ。
そのことはすごく感謝している。
だからと言って他の事までカリスに手伝ってもらう、と言うのは俺達ナイリス村の人間として自分達が許せなくなる。
やはり自分達の村は自分達で発展させていきたいからな。
もちろんカリスが村の恩人だと言う事は変わらない。」

トルパの話を聞いてカリスは納得したように大きく頷いた。
その考えは素晴らしいモノだと思えたのだ。

村長のタロスは寝込んでいるが・・・。

「カリス、どこかに纏まって咲いている月見草は周りにあるか分かるか？」

「ちょっと待っててください。・・・・５ｍ間隔くらいで咲いているところならありますね。」

「おっし、じゃあそこでやろう。案内よろしく。」

トルパに頷いてカリスは山の暗い森の中足を進めた。
今カリス達村人含めて１２人は月見草の実験の為にナイリス山へ来ている。
カリスの後ろを付いていき、比較的纏まって咲いている場所を目指す。
これから５つのグループに分かれて行うのだ。

「ここに２ヶ所ですね。近くに咲いているのはあちらと向こうに２ヶ所在ります。」

「ふむ、大丈夫そうだな。これなら連絡も取りやすいだろう。」

「じゃあ皆、ここで行うから各自準備して始めてくれ。」

実験内容は昼間に話し合って既に決めている。後はそのいくつもあ

る実験を行い、結果を確認するのだ。
付いてきた村人は2人一組になって散り散りに分かれる。

「それじゃあ俺も暫らくは周りの見回りしてきます。
ついでに結界というのも見てみたいので行ってきますね。
ここからなら遠くも無いので何かあれば直ぐ来ますから。」

「はは、あいよ。一応余裕を持って3時間と考えているからその前には戻ってきてくれ。」

カリスの言葉に苦笑しながら了承するトルパ。
なんだかんだでカリスも冒険者なんだな、と思うのであった。

（それじゃあ行ってみようかな。エルフィン族の人と会えるかもしれないと思うとワクワクするなぁ）

まだあったことの無い種族との交流を頭に思い浮かべ、心を弾ませながらカリスは東へと足を向けたのだった。
暫らく歩くと暗い森の中に魔力の膜があった。カリスは膜に触れるとプルプルと震え、まるでシャボンのようだと思う。

「なんだかいつまでも遊んでいたくなるような結界だな・・・。それにしても拒まれているような、迎えられているような・・・良く判らないところだ。」

本来この結界は触ると硬く、人を全く寄せ付けないのだがエルフ族とエルフィン族だけはそのまま膜は作用せず通り抜けられるのだ。
しかしカリスが触れるとふるふる震える。
ここで遊んでいても仕様が無いので、そのまま足を踏み出す。
するとカリスの身体に引っ張られるように結界も内側に延びた後、

カリスの身体は結界の中へと滑り込んだ。

「やっぱり通れた。それじゃあ探索だ！
誰か居ないかなぁ。」

周りの気配を感じながら道無き道を歩いて行く。
星々の光があまり届かぬ森の中、カリスは周囲の木々を感じ取りながら進む。
２ｋｍほど東へ進んだ辺りから木や草などの植物は先ほどまでより大きく感じだした。

「木々が大きい・・？生命もかなり豊富みたいだ。
こんなにも成長しているなんて初めて見るな・・・。」

手の届く範囲でも大きな葉があり、それを撫でながらカリスは生命エネルギーに満ち溢れた植物を観察しながら足を進める。
暫らく周りの風景を楽しみながら進んで行くと更に先に人の気配を感じ取った。

（やった、この感じた事の無い雰囲気はきっとエルフィン族だよね？）

心の中で誰にと言うわけでも無く問いかける。
警戒されないように自分の気配を自然の中に溶け込ませてカリスは人の気配がした方へ向かう。

「・・・――――――♪」

（歌声・・・かな？）

近づくに連れて先方が明るくなっているのが見てとれ、透き通るいつまでも聞いていたくなるほどに綺麗な女性の歌声が聞こえてきた。

「――――――――――♪」

（心にスーッと入ってくる様なとても綺麗な声・・・。）

そして森を抜けたその先には、白く溢れんばかりに光を放つ月見草が一面に広がっており、

その光にライトアップされて1人の女神が歌を紡いでいた。

第9話（後書き）

読んで頂きありがとうございます。

次回もよろしくお願い致します。m（＿＿）m

第１０話（前書き）

開いて頂きありがとうございます。

第２章の１０話にしてやっと・・・やっと！！

第１０話

森が開けているこの場所の広さは直径２０ｍほどで、円状だ。
その月見草の光に照らされて１人の女性が歌を歌っている。

女性の背はカリスよりやや低い程度、見た目の年は２０代半ばほど。
淡いピンク色のふんわりと柔らかそうな髪が腰まで伸びている。
耳が長いのはエルフ族と同じだが、エルフ族に比べて垂れ下がっているようだ。
耳元を流れる両サイドの髪には白く長いリボンを網目状につけていた。
長めのゆったりとした白いワンピースを着ていてその裾が風にはためきなびく。

ゆったりとしたワンピースなのにも関わらず、その胸の膨らみは押さえきれず実をみっしりと詰めたかのように盛り上がり、腰とのバランスを取る為に胸の下に帯を胴回りに巻きつけている。
その巻きつけていることでさらに胸が強調されていた。
帯を巻く事で現れているその腰はすごくほっそりとしている。
そしてお尻にはその腰の括れからは創造も出来ないほどムッチリとした質感を持っていると見て取れる肉付きをしていた。
そのお尻の肉はそこでとどまり、足は細くスラっとしているようだ。

「――――――――――――♪」

カリスは女性の歌を邪魔しないよう木に寄りかかり、歌を聴き続けた。

「――――――――――――♪」

（すごく綺麗な声・・・この歌でまるで風が踊っているかのようだ。）

女性の周りには風が渦巻いている。
しかしそれは激しい物ではなく、そよ風にも等しいほどだが法則があるかのように見えた。

「――――――♪～・・・。」

暫らくすると最後は静かに溶け込むように歌い終えた。
それと同時に風も静まる。
歌い終えた女性は微笑みを称えて夜空を見上げた。

パチパチパチ

「ひゃっ！」

女性が夜空を見上げているところでカリスは小さく拍手を送る。
誰も居ないと思っていた女性はその音に驚いて可愛い悲鳴を上げながら一瞬跳ねた。

「ど・・どちら様でしょうか？」

（風の精霊からは何も連絡受けて無いのに・・・。）

誰かが近づけば風の精霊が教えてくれるはずだったのに、カリスが来ても風の精霊は何も反応しなかったことについて不安を覚えたのだ。

「ごめん、驚かすつもりは無かったんだ。あまりにも綺麗な歌声だったから邪魔したく無くて。」

「あなたは・・・。」

不安そうにしている女性にカリスは優しく話す。
女性は垂れ目がちな目に金色の瞳。
スっと形の良い鼻にプルっとした可愛らしい唇をしており、全体的にオットリとした雰囲気をかもし出していた。
今は不安そうな表情をして、両手を胸の前で組んでその大きな胸に押し付けている。
そのせいではちきれんばかりの胸は形を変えて今にも零れ落ちそうだ。

（綺麗・・・。なんだかすごくドキドキするな・・。）

「俺の名はカリス。少し話し相手してもらってもいいかな?」

女性は最初は驚き不安に思ったものの、ジッとカリスを見ると彼が人間族だということが見て取れてさらに驚いた。

「まぁ!貴方人間族の方ですね。この森には結界が張って有ったはずですが・・・。」

（それにまだ子供・・・迷い込んだのかしら?）

カリスを見て悪意を感じず、逆に多少の緊張感はあるが好意を感じたので女性は興味を持ち、カリスと話しをしてみる事にした。

「確かに結界はあったけれど・・・普通に通れたから。」

「あら?そんなはずは・・・あら?あらら?そう言われれば貴方は少なからずエルフ族の雰囲気をお持ちですね。
『ハーフ』の方ですか。」

「ハーフ・・多分同じ感じなモノだと思う。」

(姉さんから継承した際にエルフ族という種族も多少なりとも受け継いでるんだな。)

可愛く首を傾げつつ女性はカリスを観察して1つの答えに辿り着いた。
『ハーフ』とはこの場合『ハーフエルフ』のことを指す。人とエルフから生まれた子のことだ。

「やはりそうなのですね。普通の人間族にはこの森には入れませんから・・・。
それじゃあカリスさんはこの里に用が有って来られたのですか?」

「エルフィン族の方々がどのような人達なのか会ってみたくてね。」

「なるほど・・・、確かに私達エルフィン族はあまり外交的ではありませんから外の世界で会う事も少ないでしょう。
そういうことでしたら歓迎致します、と言いたい所ですが里の人達は『ハーフ』の方をも好きではない方が居ます。
申し訳ないのですが里へはご遠慮下さい・・。その代わりここで会ったのも何かの縁、私がお相手致しますので。」

申し訳なさそうな笑顔をカリスに向けて女性は頭を下げた。
この様な対応をしたのもカリスからは依然として好意以外感じなか

ったことと女性自身、『ハーフ』とはいえ外の世界の他種族の方と会うことが始めてで、かなり興味を引かれたからだった。

「ううん、全然構わないよ。誰かと話が出来ればって思っていただけだから。」

「ふふっ、そうですか。
あ、申し送れました私はフィリアリスと申します。
よろしくお願いしますね。」

（含みの無い可愛らしいお方・・・そんな事を言ってしまっては失礼でしょうけれど。）

嬉しそうに笑顔で答えるカリスを見てフィリアリスと名乗った女性も楽しそうに笑う。
フィリアリスもエルフィン族、人間族の見た目と実年齢は全く違うと言って良い。
長寿の種族から見る人間族２０代前後の容姿ではまだまだ子供なのだ。

カリスとフィリアリスは揃って月見草畑の隅っこに向かい合って腰を下ろした。
カリスは胡坐、フィリアリスは両足をたたんで右に流して。
お互いにその座る動きを見て驚く。
カリスの無駄の無い動きに、そしてフィリアリスの優雅さに。

「結界の中にこんなにもの月見草が咲いていて光を放っているなんて・・・すごく幻想的なところだね。」

「ふふっ、この辺りの月見草は精霊魔法を用いて育てていますから。

そうすると見ての通り、とても綺麗に花が咲くのです。」

「森が開けてこの場所を見たとき、フィリアリスさんの歌声とその周りを舞う風で別の世界に来たのかと思ったんだ。それくらい劇的だった。」

「まぁ・・ありがとうございます。それに風が舞うと言うのはやはり精霊が見えていらっしゃるのですね。」

素直な賞賛にフィリアリスも嬉しいようで優しく微笑んでいる。
フィリアリスが思った通り、カリスが精霊を見えていたことに納得して頷いた。

「カリスさんは冒険者の方ですか?とても若いのにそれに似合わないほどの静けさをお持ちのようですので不思議です。もしくは実年齢は本当は高いとか・・?」

先ほどの腰を下ろす動きがとても滑らかなことで驚いたので実際聞いてみることにした。とても若く見えるが、フィリアリスには心にぶれない芯を持っているかのような雰囲気を感じているのだ

「冒険者というのは当たり。年はまだ１８才だから。
旅に出たのも最近でね、それまではずっと姉さんに鍛えられてたんだ。」

「まだ１８才なのにそこまで滑らかに動く事ができるなんて、よほどそのお姉さまの教えが良かったのですね。」

「ははっそうだね、鍛錬についてはすごく厳しい人だけど、とても良くしてくれたんだ。

自慢の姉だよ。」

（こんなにも笑顔で自分のお姉さまのことを言えるなんて余程の方なのでしょうね・・・。
少し羨ましいくらいに。）

自分のことを同じ様に思ってくれる人は居るのだろうかと少しばかり考えが浮かんだが、フィリアリスはその考えを頭から追い出してカリスに頷く。

「きっとお姉さまもカリスさんのことを自慢の弟だとお思いだと思いますよ。」

「ん、そうであると良いんだけど。」

「ふふっ、私が見る限りカリスさんは今の年に似合わずとても立派です。」

「年に似合わずと言われると困っちゃうけど・・・ありがとう。」

フィリアリスの冗談のような言い回しに2人は声を出して笑いあうのだった。

「さて・・と、そろそろ時間だから今日は戻るね。」

「あら、かなり夜も深くなって来ていますね。お話が弾んで時間が

経つのがすごく早く感じていて気が付きませんでした。」

帰る旨を伝えてカリスは立ち上がり、フィリアリスも続いて立ち上がる。

「また来てもいいかな。フィリアリスさんと話しするのもすごく楽しかったし、この幻想のような場所もとても綺麗でずっとここに居たいくらいだ。」

「ふふっ、そう言っていただけると私も嬉しいです。もちろんまたおいで下さい、お待ちしています。
それと・・・私の事はフィーアとお呼び下さい。
親しい方からはそう呼ばれていますので。」

（不思議とこの方とは心を開いてお話しすることができるわ・・・。
ずっとお話をしていたいくらいに。カリスさんになら私の事を愛称で呼んでほしい・・・この縁は大事なモノになる予感があるんだもの。）

「フィーア、フィーア・・・分かった、そう呼ばせてもらうね。
それじゃあまた来るね。おやすみ、フィーア。」

カリスはフィーアの気持ちを知ってか知らずか、手を振りながら笑顔を向けて元来た森の中へと帰って行った。

「カリスさん・・・また会う時を楽しみにしています・・・。」

フィーアはカリスの消えて行った方向をジッと見つめながら誰にも聞こえない声で呟く。
その姿は一面の月見草の光を受けて淡く照らし出され、とても儚く

映っていた・・・。

フィーアも里へと戻り、自分の家の前に来た時に扉の前に1人のエルフィン族の男が立っていることに気が付いたが、そのまま扉へと向かう。

「フィリアリス・・・こんな遅くまでどこへ行っていたんだい？あまり夜風に当たるのは身体にもよくない。」

「クレイツ・・・申し訳ありません。歌を歌っていたら時間を忘れてしまっていました。」

クレイツと呼ばれた男は細い目をさらに細くして心配を含んだ微笑を浮かべてフィーアを嗜めた。
クレイツは金髪にエルフィン族特有の整った顔に痩身の男だ。細い目はいつも優しげな微笑を浮かべているようにも見える。
が、フィーアは目を伏せてクレイツに目線を合わせず言葉を発してその場で足を止めるのみ。

「まぁいい。さぁ、家へ入ろう。これ以上身体を冷やすのもよくは無いからね。」

「はい・・・。」

（カリスさん・・・。）

クレイツはフィーアの腰に手を回して家の扉を開けて誘導するように中へと入って行く。
その時フィーアが考えていた事は、目の前にいるクレイツの事ではなく先ほど月見草畑で出会った『ハーフ』であろう彼、カリスのことだった。

「どうですかトルパさん。実験の様子は。」

「ああカリス、戻ったか。用意した種類の内、1つの特徴が当たっているみたいでな、微々たる物だが月見草の光は増したんだ。
次はこの魔法からまた改良して実験だ。」

実験は上々の様だ。
今日はこれで帰るらしく、皆片付け始めている。

「それで、そっちはどうだったよ。面白いもんでもあったか?」

「ん、エルフィン族の人に会えましたよ。とても優しそうな人でした。」

「本当か!結界の外に居たってことか?」

周りで片付けている人もカリスの話を聞いていたのか、驚いた目をカリスに向ける。

「んーと・・・結界の向こう側。傍にいまして、少し話ししてたんです。」

（ギリギリ嘘じゃないよね・・？）

スゲー！とかトルパは叫びながらはしゃぐ。それをカリスは苦笑しながら見ていた。

「片付け終わったぞー。」

「こっちもＯＫだ。」

「おし！それじゃあ戻るぞ皆！」

皆片付けが終わって全員集まったのでナイリス村へ歩き出す。
良い結果が出たからか皆の足取りは軽い。
村人全員の期待を受けているのだ。
出来るものなら良い結果を持って帰って笑顔で報告したい。
そんな思いがひしひしとカリスには伝わっていた。

「ち・・ちなみにカリス。エルフィン族と会ったのは男か？それとも女か？」

隣で歩くカリスに小声でトルパは話しかける。
それにカリスは満面の笑みで答えた。

「絶世の美女♪」

「ナ・・・ナンダッテーーーーー！！」

夜の森にトルパの叫び声が響き渡った。

第１０話（後書き）

この作品を書くにあたり出したかったヒロインがとうとう登場しました。
１ヶ月と半月、ここまで無駄に長かった気がします（汗
彼女こそが真のヒロインに・・・！！
（ナレタライイナ）
読んで頂きありがとうございます。
次回もよろしくお願い致します。ｍ（＿＿）ｍ

あ、ちなみに
２５５万ＰＶ
２１万ユニーク

ありがとうございます。久々にアクセスを確認したらかなり多くの方が読んでくれていたようで驚きました。

第１１話（前書き）

開いて頂きありがとうございます。

第１１話

彼は自分が居る里に飽き飽きしていた。

里の周りには結界を張ることで外界からの接触を拒み、その内側はまさしく平穏と呼べるほどの日々が続く。

里に住む人数は約６０人、男女の比率は大体半々だ。

極稀に他の里からエルフィン族がやってくる事もある。

そういう場合は他の里が別種族に荒らされて逃げてくる事が多い。

彼は要領もよく、やる事なすこと卒が無くこなす事ができる。

その為に周りからは頼られる事も多かった。

しかし平穏と呼べる同じ事を繰り返すだけの日々に彼はいつしか不満を抱くようになった。

それでもその里の中でも１つだけ彼が興味を持てる事が有った。

この里の長の娘であるフィリアリス、その母であるファリアだ。

母娘だけあってその容姿はとても似ていて、エルフィン族の特徴から老いも遅いので、この２人は姉妹と言っても誰もが疑わないだろう。

ファリアは娘フィリアリスと同じく髪の色は淡いピンク、容姿もほぼ同じだが目元は切れ長、までは言わないが、しっかりとした目つきをしている。

しかしいつも微笑みを絶やさないその顔は本人の優しい心を表していた。

年の見た目は２０台後半の美しい女性だ。

体格はフィリアリスの方が育ちは良かったようで、胸やお尻に関しての肉つきは少ない。
それでも、あくまでフィリアリスと比べたら、のことだ。
さすがにフィリアリスと比べるのは相手が悪い。
そう考えれば十分魅力的な体型だろう。

本来なら娘との年の差が１２０才もあるとは思えない。
ファリアの年は１９６才、フィリアリスは７６才だ。
寿命が長いので一人前とされるのは１００歳から。その為基本的にエルフィン族は１００歳前後から結婚する。

彼、クレイツは里での評判も良い事から里の長、フィリアリスの父親公認のフィリアリスの婚約者だった。
クレイツの年は既に１１０才。フィリアリスの年が８０才になったら早めの結婚祝いをする予定になっている。

フィリアリスが自分の妻となることはクレイツにとっても喜ばしい事だ。
しかし、だからと言って今の平穏な日々が変わるわけではない。
だから彼は刺激を求めた。
自分の心を揺さぶる様な刺激を・・・。

クレイツは度々自分の容姿を隠して里を抜け、バーノ港まで道無き森の中を進んで訪れていた。
ある時バーノ港から帰る森の中、３人の柄の悪い人間族が結界付近でコソコソしているのを見つけた。

「何をしている、人間。」

「「「っっ！」」」

フィリアリスに掛けるのとは全く違う質の声を出す。
その目は無機物を見る目だ。
男達3人は行きなり掛けられた声に驚き振り返った。

「い・・いや、こういう結界も珍しいと思ってな、観光がてら見に来ただけさ。」

（何故エルフィン族が結界の外にいる?!）

男達の薄汚れた容姿からは全く喪って信用できない言い訳を口にする。
これでも男達は真面目に言っているのだろう。嘘はばればれだが。

「ふぅん?その手に持つ魔法具もその類か?」

クレイツの冷たい目は男達の持つ魔力検知の魔法具へ向けていた。
魔力検知とは魔力が使われている何か、その魔力構造などを調べる為のものだ。

「ちっ、おらぁ!!」

男達の行動は迅速だった。
行っていた事を悟られたと見るや、すぐさま懐からナイフを出してクレイツに襲い掛かる。
その判断は正しい。
エルフィン族に魔法で対抗しようなど全くの無駄なのだ。
しかしクレイツは慌てる風でもなく、右手を襲い掛かる男達へと向

けて小さく言葉を呟く。
行動自体はそれで終わった。

するとクレイツの言葉に従い、周りの木から勢い良く蔓が伸びてきて男達の身体を縛り上げたのだ。

「な・・何だこれはっ、クソっ！」

「まさか今の一瞬で魔法を!?」

「ぐ・・・ぎぎぎぎ・・・。」

「それで、お前達は何をしていた?」

目の前の光景は当然の結果として受け入れているクレイツは再度質問する。

「へっ、そんな簡単に・・「ヒギャッッ!!!」なっ!?。」

1人の男が返答を拒もうとした瞬間、ブシャッ!!という音と共に縛られて苦しがっていた1人の男の身体が蔓に握り潰された。
蔓の下には肉解となった頭、手、足、指や臓物が血まみれになって落ちる。
それを目のあたりにした男は顔面蒼白になり震えた。

「もう一度質問が必要か?」

「い・・言うから!!言わせてくれ!!だ・・だから許ｓ「ギャァ!!!」?!」

何とか許しを請おうと言葉を続けようとしたところで再度ブシャッ!!と鈍い音をさせてもう1人の男も握り潰された。
こちらも1人目の男と同じ運命をたどった。
クレイツが聞きたいのは許しを請う言葉ではなく、何をしていたかだ。

「ひっ!!お・・俺達はこのけ、結界を破るにはどうするかをち、調査してたんだ!!」

「何の為に?」

「そ・・それは・・・、うっ!!ぐぐぐっ。エ、エルフィン族の女を捕まえる為だ!!!」

男が口をもごもごとさせた瞬間、縛っている強さを増したので男は苦しみ、そのまま叫んだ。
男の話しから大体の事を読み取ったクレイツは暫らく考え込む。

(く・・クソ!聞いてねーぞ!!エルフィン族っていうのはもっと穏やかな気質なやつらばかりなんじゃなかったのかよ!!!
目の色1つ変えずに殺しやがった!!
このままじゃ俺も・・!)

無言な時間が続き、男はその時間が何時間にも感じられた。
クレイツは考えが纏まったのか口元に不適な笑みを浮かべた。

「いいだろう。手を貸してやる。」

「・・・は?」

（な・・何を言っているんだこいつ・・？）

「結果的にあの里は滅びるだろうが、このままの暮らしを続けるよりよっぽど面白そうだ。」

男が呆気に取られているウチに身体に巻きついていた蔓は縛るのをやめてするすると離れていく。

「な・・どういうこｔ・・ぎゃあぁぁぁ！！」

「お前に質問する権利は無い。・・・それでいつ行うのだ？」

「う・・・ううう、まだ・・決まっていない・・。結界の調査と準備はこれからだ・・。早くても２０日はかかるだろ・・うっ。」

質問をしようとしたところで男の左腕に再度蔓が巻きつき握りつぶされた。

その痛みに耐えながらも話を続ける。

「では３日置きにバーノ港まで足を運ぶからその時にでも連絡を聞こう。」

「わ、分かった・・・。アンタの名前は・・？」

「名前など必要なかろう？結界内に協力者が居る。それさえ分かっていれば十分だろうからな。」

（これで当分面白くなるな。しかしフィリアリスとファリアは惜しい。あの２人は私が頂くとしよう・・・。）

こうして闇ギルドはエルフィン族の中に協力者を作る事が出来、クレイツは自分の心を刺激するものが出来たのだった。

「ん～♪・・・んん～～♪」

フィーアは昼間から日の光が優しく降り注ぐ家のテラスで、両の手を組んで太ももの上にのせて椅子に座り、目を閉じながら歌を口ずさんでいた。

「あらあら、今日は珍しく機嫌がよさそうね、フィーア。」

「お母様・・・。ふふっ、昨日楽しい事がありましたので。」

そんなフィーアの元へ家の中から出てきた女性、フィーアから母と呼ばれた女性がトレイに2人分のお茶の用意を乗せてやってきた。
その女性の名はファリア。フィリアリスの母親である。
そのファリアとフィーアは親子だけあって容姿はとてもよく似ていた。
淡いピンクのウエーブのかかった髪が腰まで伸びており、フィーアよりしっかりとした意思を持った瞳、しかしいつも優しく微笑んでいる事からとても穏やかな人なのだと伺える。
プロポーションも胸はかなりの大きさで存在を主張しており、その下のこしまわりはほっそりしている。

ヒップに関しては母親とは思えないほどに綺麗なラインをかもし出していた。

服装は淡いピンク色のワンピースで、肩から腰まではピッチリと身体にフィットした作りで、腰から下はふんわりとしたスカートになっている。

どちらかといえばドレスに似た服ともいえる。

そんな親子が一緒に居ると、とても綺麗な姉妹が仲良さそうに話をしているように見もえた。

「最近はずっと思い悩んでいるような感じだったけれど、貴女のそういう表情が見れて私も安心です。」

「それは・・・、申し訳有りません。」

「ううん・・・、攻めているわけでは無いの。フィーアの気持ちが分からないわけでも無いし。

あの人はそういうこと思わないようですけれど・・・。」

ファリアは夫である人物を思い、苦笑気味に微笑みながら付け足す。

「それは仕方の無いことかもしれません。クレイツはこの里でも有望な方なのは間違いありませんから。」

「そうね・・・、だからこそ今のあの方は危うく感じてしまうのね。」

クレイツとは昨夜家の前でフィーアを待っていたエルフィン族の男性で、彼女の婚約者でもある。

そんな彼をフィーアは信用できずにいる。

いつも微笑みを浮かべているクレイツだが、彼はどこか危ういところがある、とフィーアはみていた。
ファリアに相談したところ彼女も同意見だ。しかし父には話していない。
父はクレイツを気に入っているからだ。彼女の婚約者としたのもその為。
しかし今更婚約を破棄には出来ない。
微笑みの合間に時々今居る世の中がつまらない物でもあるかのような乾いた目を見せる時があり、最近では何かを企んでいる様な含み笑いをしていることもある。
しかし何の証拠があるわけではない。

「ふふっフィーア、そんな事よりも何か楽しい事があったのでしょう？良ければその楽しかった事を私にも共有させて頂けないかしら。」

「お母様・・・、はい。実は昨日――」

暗くなりそうな雰囲気を変えるためにファリアは話を戻してフィーアが楽しそうにしていた理由を聞くのだった。

「――という事があったのです。」

「まぁ・・・、お客様がいらしたのですか。それも『ハーフ』の方が・・・。」

フィーアの話を聞いて驚きの様子を見せるファリア。しかし見た目は少し目をいつも以上に開いただけで、本当に驚いているのかは分からない。ただ、珍しいとは感じているようだ。

「前のお客様が来てから４年、ここ最近は尋ねてこられる方が多い様ですね。」

「はい、４年前のエリア様の訪問には驚かされました。」

「ふふっ、【英雄】の中でも『ジェノサイドプリンセス』と呼ばれる御方、敵と認識したモノは例外無く殲滅されると言われているものね。
でも実際に会って見て１つ分かった事があるわ。
あの御方はこの世界を誰よりも愛している、ということ。
確かに見た感じや雰囲気からはとても冷たい印象を受けるのだけど、話しの節々にそれだけでは無いと感じ取れたわ。」

「それでは冷たい印象を与えているのはポーズなのでしょうか・・・。」

「そうねぇ・・・、他の【英雄】達はそれぞれの国に所属しているけれど、エリア様はそれが気に入らない様な発言をされてましたからそれが原因かもしれませんね。」

「エリア様は何処にも所属せず、１人で旅をされていましたね。」

「ええ、最近では『ガード』という存在を作り同行される【英雄】も居るそうですが、それすら居ないご様子でしたし。エリア様なりに考えがお有りなのでしょう。」

「・・・そういえば、カリスさんも今思えばお母様がお話下さったエリア様と同じ様に世界を愛している方なのかもしれません。
生きる事を楽しまれているように感じましたので。」

フィーアはカリスのことを思い出してやさしく微笑えんだ。

「形は違えど似た部分があるのかもしれないわね。
あ～あ・・・私もその子に会ってみたいわ。フィーアの興味を引き立てるような子なのですもの。」

「ふふっ、とても良い子でした。私はああいう方が好きです。」

「あらあら、今の発言は夫やクレイツには聞かせられないわね。」

2人はお茶を飲みながら冗談のような言葉に笑い会い、話しに花をさかせるのだった。

第１１話（後書き）

読んで頂きありがとうございます。

今年も後わずか。

年内では後１、２話くらいの投稿になると思います。

年末年始の休みに多く書ける事を祈りつつ・・・。

次回もよろしくお願い致します。ｍ（＿＿）ｍ

第１２話（前書き）

開いて頂きありがとうございます。

第12話

「「「トルパお兄様ー！！」」」

街中を動き回っていたトルパは自分を呼ぶ声がした方を振り向くとトルパのハーレムの女の子達3人組（仮）が、子供が持つには大きすぎるバスケットを持って走り寄って来た。

「走ると危ないぞー！「あっ！」うおぉっっ！！・・・・ふぅ、言わんこっちゃない。大丈夫か？」

バスケットを抱えるように持っていた女の子が足元を躓かせて前のめりに倒れそうになったのをトルパは慌てて抱きかかえた。

「ふぁ・・・えへへ、躓いちゃった。ありがとうトルパお兄様。」

「まぁ怪我は無いようだし、そんなに急がなくても俺は逃げないよ。」

足を捻ったりしていないかをトルパは確認してからトルパは転びそうになった女の子の頭に右手を乗せて撫でてあげる。
微笑むトルパのその顔はとても優しく、愛に満ちていた。

（可愛すぎる！この子達は絶対に俺が育てて・・・ゲフンゲフン、守ってあげるんだ！）

まぁ、愛の形は人それぞれである。

「ああーっずるい！私も撫でてー！！」

「わかったわかった、順番な。」

頭を撫でられた女の子を見た残りの2人は自分達も撫でてもらう為にピョンピョン跳ねながら自己主張した。
トルパも満更でもなく優しく2人も頭を撫でてあげる。

「それで、そのバスケットはお弁当かな?」

「うん!私達が愛情を一杯込めて作ったの!!食べて食べて!!」

女の子の持っている大きめのバスケットに視線を向けながら確認すると、自分達の目的が何だったのかを思い出して元気良くトルパにバスケットを差し出した。

「どれどれ・・・おお!うまそうなサンドウィッチだな!!量も一杯作ってくれたみたいだし、皆で食べようか。」

「「「「食べるー!!」」」」

トルパは女の子3人組を連れて広場の隅っこにある木の下まで移動して腰を下ろす。女の子3人組もトルパの左右と正面に腰を下ろして4人の真ん中にバスケットを置いた。

「それじゃあまずは~・・・はい!これで手を拭いてね!」

トルパの正面に座った子がバスケットを開けて中からお絞りを出して皆に配る。

「おお、準備いいなぁ。えらいぞ!」

「えへへへ。」

褒められた子は照れくさそうに笑いながらトルパにお絞りを渡した。

「それじゃあ頂きます！どれから食べるかなー。」

「あ！トルパお兄様待って！」

トルパが手を出してバスケットの中にびっしりと詰まったサンドウィッチでどれから食べようかと気合を入れたところで右側に座っている子から『待った』が掛かった。

「ど・・・どうした？」

「トルパお兄様には私達が食べさせてあげるの！！」

「「うんうん！！」」

女の子3人組は勢い良くトルパに申し出た。

『待った』を掛けられたトルパはちょっと戸惑ったが、その後の申し出に目をクワッと見開き、

（いいいいいやっっはぁぁーーーーーーーっっっ！！！！）

心の中で狂喜乱舞した！！

（とうとう俺にも春が！！今までの俺の行いが報われ・・・

否！！

断じて否!!!

これは必然!!

神から与えられた俺への愛!!

フフフフフフフフフフフフフフ・・・・・

これはもう・・・俺に【英雄】になれという事か・・・（注：違います）

いいだろう!!!その愛、しかと受け取った!!）

「それじゃあまずは私が作ったサンドウィッチからね!・・・はい、あー・・・ん。」

右側に座る女の子がバスケットから取り出したのは今朝収穫したと思われる瑞々しい野菜を挟んだサンドウィッチだ。

「っっっ!!!あー・・・ん。もぐもぐ・・。うっ!!!」

「ど・・・どう・・？」

「うまっはぁぃ!!!とても美味しいぞ!!バターの塗られたパンにこの柔らかくも瑞々しい野菜達に程よい量の塩の効いた味付け!これぞ愛だ!!!愛を感じる!!!」

「やったぁっ!!うふふっ、いっぱい愛情込めたんだもん!じゃあ次はねぇ・・。」

「ずるい！！次は私よ！」

次のを選び始めた子を制してトルパの左側に居る女の子が声を上げた。

そうしてトルパは目に涙を溜めて女の子達からサンドウィッチを食べさせてもらうという夢の世界を実現したのであった。

「それにしてもさすがはトルパお兄様よね！」

「もしゃもしゃ・・・ん？」

至福を味わいながら食べさせてもらっているサンドウィッチを租借するトルパに、正面に座る女の子が話しを振る。

「だって今まで出来なかった月見草の光を大きくする事に成功させたんでしょ？」

「っっっ！！！」

「パパもママもそれを聞いてすごく驚いてたもん。きっとトルパお兄様はこの村の救世主ね！！」

「「うんうん！！」」

トルパは女の子の話す内容に口の中で租借していた物を吹きそうになるのを何とか堪えるのに成功した。

（ぬ・・・ぬかったーーー！！

ま・・まさかこの待遇はその為か！？

集会で発表したのが俺だったから皆俺が発見したと思っているんだ・・・。

いや・・・待て待て・・・。

ここはカリスには悪いが俺の夢の為・・・。

俺が成した事としておけば・・・。）

「ふ・・・ふふふっ、と・・・当然じゃないか！皆の為、そして君達の為にもこの村をもっと豊にしたいからな！！」

「「「さすがトルパお兄様！！」」」

トルパは背中に冷や汗を掻きながらも見えを張った！！

「じゃあ次は私のね！はい、あー・・・ん。」

そうして女の子3人組は和気藹々と『救世主トルパ』（注：村の女の子3人組談）にサンドウィッチを食べさせる。

（あー・・・一応後でカリスにも一言言っておかないとな・・・。

カリスなら分かってくれるだろうが・・・。）

そう思いつつもトルパは次々に口の前に差し出されるサンドウィッチを美味しく頂いた。

近くを通り過ぎる村人達はその光景を目にして生暖かく微笑みを浮かべて通り過ぎて行くのであった。

「それじゃあカリス、昨日と同じ感じで頼む。」

「はい、では周りを確認しに行きます。」

夜の山の中、昨日と同じ間所に来ているカリス達は実験の続きを開始した。

今日もカリスは別行動だ。

昨日フィーアと出会った場所に足を向ける。

相変わらず森の中にある結界はプルプルしていてカリスはそのまま通り抜ける。

月見草畑に向かって足を進めていくと、段々と周囲の木々、は大きなモノが多くなってきた。

（昨日の話しを聞いた感じだとここら辺の大きな木々も魔力（マナ）が使われているのかもしれないなぁ。）

特に結界の中は空気も他よりとても澄んでいる。

カリスが住んでいた場所よりも澄み渡っているのではないだろうかと思うほどだ。

そして更に進んだ先に月見草の光により幻想世界をかもし出している場所へと足を踏み入れる。

そしてそこには昨日と同じ様に女神と見紛うほどの１人の女性が優しく歌を紡いでいた。

「♪――――・・・。」

「こんばんわ、フィーア。」

今回は気配を消さずゆっくりと月見草畑に入り、フィーアの歌が歌い終わるまで待ってから声を掛けた。

「はい、こんばんわカリスさん。」

歌の途中からカリスの存在に気づいていたフィーアは歌い終わった後、カリスの方へ素晴らしい笑顔をもって振り返った。

「本当に綺麗な歌だね・・・ずっと聞いていたくなっちゃうよ。」

「ふふっありがとうございます。それに今日も来てくださったのですね。」

「うん、この場所はすごく心が洗われる感じがするんだ。スーっとね。」

「そう言っていただけると嬉しいです。きっとカリスさんもエルフ族やエルフィン族と似た感性なのでしょうね。」

「そうかもしれないね。」

そう2人は挨拶をしてから月見草畑の隅へ向かい、腰を下ろす。
その際フィーアの大きく素晴らしい胸が揺れるのについついカリスは目を向けてしまう。
その視線にフィーアも気づいたのか口元に手を添えてクスクス笑う。

「あー・・ごめん。」

「いえ・・・胸が大きいというのも考え物です。動きづらいですし、みっともないですから。」

フィーアは自分の豊満な胸に右手の平を当てながら言う。

「そんなことは・・・、とても素敵だと思うよ。」

「あら・・・ふふっ、ありがとうございます。」

カリスの言った事が本心から出た言葉と分かったのか、フィーアは嬉しそうに目を細めた。

（やっぱりカリスさんと話しする時は自分を偽らないでいることができる・・・とてもリラックスしていられるし、どうしてでしょう・・？）

「カリスさんは魔法を使われないのですか？精霊は見えていたようですけれど、使っているようなことはおっしゃらなかったと思うので。」

「ん・・・、魔法の使い方は知らないんだ。姉さんからも教えてもらってなかったしね。
なんでも魔法より先に身体を鍛えろって事らしいけれど。」

「ふふっエルフ族の方であればそうかもしれませんね。エルフ族の方々も精霊魔法を使えますが滅多に使いませんし。
大体は自分の力でこなされますから。」

「うーん、まぁ今まで使えないと困るっていうことは無かったから、

そこまで気にしてもいないけどね。」

「魔法は魔法でとても便利なんですよ?でも確かにエルフィン族は魔法に頼っていますので体力などの面では他種族より圧倒的に劣っているようですから、一概に良いとも言えないかもしれません。」

「一番良いのは両立といったところだろうね。魔法かぁ・・・俺も覚えてみようかなぁ。」

「もしよろしければ精霊魔法初歩の使い方くらいなら教えて差し上げられますが一度やってみませんか?
精霊を感じ取れているのであれば直ぐにでも出来ると思います。」

「本当に?それなら是非やってみたい!お願いするよフィーア!!」

「うふふっはい、任せてください。」

目を輝かせて勢い良くお願いするカリスにフィーアはとても楽しそうに了承するのだった。

「まずは精霊を認識して語りかける事からです。カリスさんの場合は既に一度認識しているので意識すれば分かると思いますがどうでしょうか?」

「ん・・・うーん、風の流れや木々、草花の生命は分かるんだけど実際にどれが精霊なのかが良く判らない。」

「まぁ・・・木や花などの生命が分かるというのが驚きですが、そうですねぇ。それでは私が小さく精霊魔法を使いますのでそれを認識して下さい。」

フィーアはカリスの前に手の平を上に向けて両手をお椀の形にして出す。

「――風よ。」

ふわっ

小さくフィーアが言葉を紡ぐと前に出している手の平の上にとても小さく、そしてゆっくりな風の渦が発生した。
その風により月見草の光にライトアップされているフィーアは、髪を柔らかくはためかさせてとても美しく見える。

「・・・どうでしょうか。自分の魔力で風を起こすのでは無く、精霊が風を起こして舞っているのが分かりますか?」

「・・・うん、分かる。こうやってじっくり感じ取れればなんとかね。」

「それではこの風にカリスさんが自分の魔力を使って語りかけてください。
本来他の人が使っている精霊に干渉するのは難しいのですが、私の方でそこら辺は制御しますのでどうぞ。」

「やってみるよ。」

カリスは小さな風の渦を左右から挟むように両手を出して意識を集中する。

(と言っても魔力で語りかけるという事自体が良く判らないけれど

も、実際にやってみないと判らないか）

カリスはフィーアの手の平の上で舞っている風の精霊をしっかりと認識して精霊に向かって語りかける。

「――――我が手に。」

ふわっしゅるしゅるっ

「あらっ・・・ふふふっ、成功ですよ。それにしてもとても可愛らしい風になってしまいましたね。」

フィーアの言うとおりフィーアの手の平の上で横回転していた風の渦はカリスの両手の間に縦回転して移動した。

が、その大きさはフィーアの手の平の上に有った時よりも半分くらいの大きさになっていた。

フィーアの手の平の上に有った時でさえ小さかった風は、本当に気持ち程度の風の渦になっている。

「確かに成功したのは嬉しいけど・・・ちっちゃいね。」

「精霊の認識はしっかり出来ていたので魔法は成功したけれど、渦を作るイメージが明確なものになっていなかったのでしょう。

それを含めて相性もありますから。

取り合えずはこれでカリスさんも精霊魔法のコツは分かったと思います。

？精霊の認識

？発現イメージ

？精霊へ？の伝達

この３つです。
基本的に精霊を認識出来なければ精霊魔法は扱えません。
そしてイメージが曖昧な場合は小規模発現するか、全く発現しないかになります。
最後に伝達もしっかり出来なければ小規模発現、もしくは全く発現しないかになります。
？の伝達に関しては場所に因りますので注意が必要です。
例えば水の中では火の精霊が居ないので伝達する事は出来ません。
まぁ、精霊を認識する段階で既に居ないことが分かると思いますので、その時点で火の精霊魔法は使えない、ということになりますね。
又は精霊の数が少なくても伝達はうまく行きません。」

フィーアはまるで生徒へ教えるかの様に優しく丁寧に話す。
それをカリスは聞き漏らすまいと集中して耳を傾けた。

「認識・イメージ・伝達・・・かぁ。」

（なんだか《アーチャー》の能力を使う時と似ている・・・？）

「それと語りかける際に言葉を用いると伝達もしやすくなりますね。
大体はそれが魔法名になったりしています。
良く使われる魔法名はそれだけイメージもしやすく、伝達力も上がりますので。
それと毎回違う言葉でも発現はしますが、１つの魔法に１つの言葉を割り当てた方が安定して発現しますよ。」

「なるほど・・・魔法名にはそういう意味があったんだ。確かに名称があればイメージし易いもんね。」

「はい、その為特定の魔法には名称があるんです。
ただ、人魔法と精霊魔法で名称が同じモノがありますが、発現威力は精霊魔法の方が断然大きくなりますね。それなので私達エルフィン族は精霊魔法を主に使っているのです。」

しっかりと聞いて理解していくカリスを見てフィーアは満足げに微笑みながら頷く。
そんな素直なカリスを、フィーアは弟が出来たような気持ちで見つめるのだった。

「俺に大事なのはイメージかな～。身体を動かすイメージとかは今までもしてきたけれど、魔法とかを使うのはまた別物だね。」

「そうですね、自分で考えるのも大事ですが、他の人の魔法を見るのもとても参考になると思います。」

「ん・・・そうだね、これからも色んな人と出会うだろうから参考にしてみるよ。」

「うふふっはい、がんばってみてください。」

カリスの良い返事にフィーアは口元を綻ばせて花のような笑顔を見せるのだった。

「あ・・・誰かがこっちに来るみたいだ。」

カリスはエルフィン族の里が在るであろう方向から1人、誰かが近づいてくる気配を感じた

「あら・・・風の精霊からは何も感じていませんが・・・。」

「ははっまだ距離があるからじゃないかな。取り合えず俺は戻った方がいいよね。」

「そう・・ですね、申し訳ありませんがその方がいいかもしれません。」

「いいよ、色々と教えてくれてありがとうフィーア。また遊びに来るね。」

申し訳無さそうに俯くフィーアに、カリスは少し大げさに明るくする。

フィーアはそんなカリスの気遣いに微笑みを浮かべて返した。

「はい、楽しみにしています。おやすみなさい、カリスさん。」

腰を上げて手を振りながら森の中へと入っていくカリスをじっと見つめていた。

暫らくすると風の精霊が1人の人物を感知してフィーアに知らせる。

（本当に人が来ました・・・。風の精霊より先に感知できるなんてカリスさんはどれ程の方なのでしょうか・・・。）

ますますカリスに興味を持つフィーアは近づいてくる人の事など気にせずに思いに耽っていた。

「やはりここに居たのかいフィリアリス。昨日注意したばかりだというのに・・・。」

近づいてきたのは彼女の婚約者であるクレイツ。
今は少し呆れ気味な微笑みを浮かべている。
フィーアが何かを言うのを待っていたが、何も言わず俯いて物思いに耽っているのを見て苦笑した。

「まぁいいさ、戻ろう。もう夜も更けてきた。」

「・・・はい。」

クレイツが差し出す手を取って立ち上がるフィーア。
2人はそのまま里へと足を向ける。

（フィリアリスの隣に誰かが座っていた様な後があった・・・誰かと会っていたのか？
もうそろそろアレが起こる頃合だ・・・あまり変わった行動を取られると困るのだがな。）

クレイツはフィーアが何かを隠している様に感じられて思案するのだった。

第１２話（後書き）

読んで頂きありがとうございます。

何だか二章を少し読み返していたら、全然話が先に進んでいない事に気がつきました・・・。
と言う事で更新します。

次回もよろしくお願い致します。ｍ（＿＿）ｍ

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1834x/

英雄と呼ばれる者

2011年12月24日08時23分発行